松崎地区内陸工業用地造成整備事業
埋蔵文化財調査報告書5

― 印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡 ―

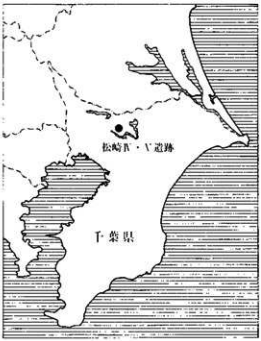
平成18年3月

千　葉　県　企　業　庁

財団法人　千葉県教育振興財団

松崎地区内陸工業用地造成整備事業
埋蔵文化財調査報告書 5

— 印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡 —



序　文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年９月１日付で名称変更）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第548集として，千葉県企業庁の松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴って実施した印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代の石器や弥生時代の集落が検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年３月

財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　　佐　藤　健太郎

凡　例

1　本書は，千葉県企業庁による松崎地区整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第５集である。平成16年度より事業名が変更となったが，報告書の書名についてはシリーズであることを考慮し，旧事業名である松崎地区内陸工業用地造成整備事業の名称を生かした。

2　本書に収録した遺跡は，以下の２遺跡である。

松崎Ⅳ遺跡　千葉県印西市松崎字高野1,189－3ほか（遺跡コード327－011）

松崎Ⅴ遺跡　千葉県印西市松崎字高野台1,259－1ほか（遺跡コード231－017）

3　発掘調査から報告書に至る業務は，千葉県企業庁の委託を受け，財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年９月１日付で名称変更）が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の経緯及び担当者は，第１部に記した。

5　本書の執筆・編集は以下のとおりである。

第１部　岡田誠造

第２部第２章第１節・第５章第１節（旧石器時代）　新田浩三

第２部第４章第１節１の土器記載（弥生土器）　古内　茂

第３部第２章（旧石器時代）　古内　茂

第３部第３章第１節・第４章第１節２～４・第２節１　森本和男

第４部　岡田誠造

上記以外の部分の執筆及び編集は，大内千年が担当した。

なお，編者の責任において各担当部分の原稿を修正した場合がある。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，印西市教育員会，千葉県企業庁の御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，以下のとおりである。

第３図　国土地理院発行　1/25,000地形図「小林」（NI－54－19－14－1）

1/25,000地形図「白井」（NI－54－19－14－3）

8　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標値は，すべて日本測地系に基づく平面直角座標で，図面の方位はすべて座標北である。

本文目次

第1部　事業の概要 ……1
第1章　調査の概要 ……3
第1節　調査に至る経緯と経過 ……3
第2節　調査の方法 ……6
第2章　遺跡の位置と環境 ……8
第1節　遺跡の位置と環境 ……8
第2節　松崎遺跡群と周辺の遺跡 ……8
第2部　松崎Ⅳ遺跡……13
第1章　松崎Ⅳ遺跡の概要……15
第2章　旧石器時代……19
第1節　平成15年度までの調査……19
1　基本層序……19
2　文化層の概要……20
3　文化層各節……25
第2節　平成16年度の調査及び上層遺構出土の石器……67
1　平成16年度の調査……67
2　上層遺構出土の石器……72
第3章　縄文時代……74
第1節　遺構と出土遺物……74
1　陥穴状遺構……74
2　土坑・ピット……74
第2節　グリッド出土遺物……80
1　土器……80
2　土製品……87
3　石器……88
第4章　弥生時代以降……89
第1節　遺構と出土遺物……89
1　竪穴住居跡……89
2　竪穴状遺構 ……104
3　土坑 ……107
4　溝状遺構 ……112
第2節　グリッド出土遺物 ……120
1　土師器・陶器 ……120
2　銭貨 ……120

3　鉄滓 ……123
第5章　まとめ ……124
第1節　旧石器時代 ……124
第2節　縄文時代以降 ……128
1　松崎Ⅳ遺跡検出の遺構と遺物 ……128
2　弥生時代遺構の遺構間接合関係等について ……128
第3部　松崎Ⅴ遺跡 ……131
第1章　松崎Ⅴ遺跡の概要 ……133
第2章　旧石器時代 ……137
第1節　概要 ……137
第2節　層序 ……137
第3節　出土石器 ……139
第4節　石器群の位置と石材 ……146
第3章　縄文時代 ……151
第1節　遺構と出土遺物 ……151
1　炉穴 ……151
2　陥穴状遺構 ……155
第2節　グリッド出土遺物 ……156
1　土器 ……156
2　土製品 ……168
3　石器 ……170
第4章　古墳時代以降 ……174
第1節　遺構と出土遺物 ……174
1　竪穴住居跡（古墳時代）……174
2　竪穴住居跡（奈良・平安時代）……175
3　土坑 ……181
4　溝状遺構 ……181
第2節　グリッド出土遺物 ……182
1　土師器 ……182
2　須恵器 ……183
3　中世陶器 ……183
4　石器 ……183
5　その他 ……185
第5章　まとめ ……186
第4部　松崎遺跡群・調査の総括 ……189
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1部

第1図　松崎遺跡群全体図……5
第2図　松崎遺跡群におけるグリッド名称と分割方法……7
第3図　松崎Ⅳ・Ⅴ遺跡の位置と周辺の遺跡……9

第2部　松崎Ⅳ遺跡

第4図　年度別調査区及び上層確認トレンチ配置図……16
第5図　松崎Ⅳ遺跡遺構配置図……17
第6図　基本層序……19
第7図　旧石器時代確認グリッド……22
第8図　旧石器時代本調査範囲とブロックの位置……23
第9図　第Ⅰ文化層　第1ブロック器種別分布図……26
第10図　第Ⅰ文化層　第1ブロック母岩別分布図……27
第11図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器(1)……30
第12図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器(2)……31
第13図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器(3)……32
第14図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器(4)……33
第15図　第Ⅱ文化層　第2ブロック器種別分布図……36
第16図　第Ⅱ文化層　第2ブロック母岩別分布図……37
第17図　第Ⅱ文化層　第2ブロック出土石器(1)……39
第18図　第Ⅱ文化層　第2ブロック出土石器(2)……40
第19図　第Ⅱ文化層　第2ブロック出土石器(3)……41
第20図　第Ⅲ文化層　遺物分布図……43
第21図　第Ⅲ文化層　第3ブロック器種別分布図……45
第22図　第Ⅲ文化層　第3ブロック母岩別分布図……46
第23図　第Ⅲ文化層　第3ブロック出土石器……47
第24図　第Ⅲ文化層　第4ブロック遺物分布図……49
第25図　第Ⅲ文化層　第4ブロック出土石器……50
第26図　第Ⅲ文化層　第5ブロック遺物分布図……52
第27図　第Ⅲ文化層　第5ブロック出土石器……53
第28図　第Ⅲ文化層　第6ブロック遺物分布図……55
第29図　第Ⅲ文化層　第6ブロック出土石器……56
第30図　第Ⅲ文化層　第7ブロック出土石器……57
第31図　第Ⅲ文化層　第7ブロック器種別分布図……57
第32図　第Ⅲ文化層　ブロック外出土石器……58
第33図　第Ⅳ文化層　第8ブロック遺物分布図……61
第34図　第Ⅳ文化層　第8ブロック出土石器……62
第35図　単独出土石器……63
第36図　単独出土石器器種別分布図……63
第37図　平成16年度　旧石器時代確認グリッド及び本調査範囲……67
第38図　第Ⅲ文化層（追加）　第9ブロック器種別分布図……68
第39図　第Ⅲ文化層（追加）　第9ブロック母岩別分布図……69
第40図　第Ⅲ文化層（追加）　第9ブロック出土石器……70
第41図　上層遺構中出土の石器……72

第42図　陥穴状遺構……75
第43図　24Wグリッド北東　縄文時代土坑配置図……76
第44図　24W・25Wグリッド　縄文時代土坑配置図……77
第45図　縄文時代土坑（1）……78
第46図　縄文時代土坑（2）……79
第47図　土坑出土土器……80
第48図　グリッド出土縄文土器（1）……82
第49図　グリッド出土縄文土器（2）……84
第50図　グリッド出土縄文土器（3）……85
第51図　グリッド出土縄文時代土製品……87
第52図　グリッド出土縄文時代石器……88
第53図　第1号住居跡（1）……90
第54図　第1号住居跡（2）……91
第55図　第2号住居跡……92
第56図　第3号住居跡（1）……94
第57図　第3号住居跡（2）……95
第58図　第3号住居跡（3）……96
第59図　第4号住居跡（1）……98
第60図　第4号住居跡（2）……99
第61図　第5号住居跡……101
第62図　第6号住居跡（1）……103
第63図　第6号住居跡（2）……104
第64図　（3）SX001竪穴状遺構……105
第65図　26Uグリッド南東　弥生時代以降土坑配置図……107
第66図　27T・27Uグリッド　弥生時代以降土坑配置図……108
第67図　弥生時代以降の土坑（1）……109
第68図　弥生時代以降の土坑（2）……110
第69図　弥生時代以降の土坑（3）……111
第70図　弥生時代以降の土坑（4）及び出土遺物……112
第71図　溝1（1）……114
第72図　溝1（2）・溝6（1）・溝7……115
第73図　溝2・溝3・溝4……116
第74図　溝5・溝6（2）・溝8・溝11……117
第75図　溝6（3）……118
第76図　溝9・溝10……119
第77図　グリッド出土遺物……120
第78図　グリッド出土銭貨及び磁器……121
第79図　文化層別主要石器（1）……125
第80図　文化層別主要石器（2）……126
第81図　弥生時代後期遺構　遺構間接合関係等模式図……129

第3部　松崎V遺跡

第82図　下層確認グリッド・下層本調査区配置図……133
第83図　調査区周辺地形及び上層確認トレンチ・上層本調査区配置図……134
第84図　松崎V遺跡　遺構配置図……135
第85図　基本土層図……137
第86図　石器出土状況図……138
第87図　出土石器実測図（1）……141
第88図　出土石器実測図（2）……143
第89図　出土石器実測図（3）……144
第90図　出土石器実測図（4）……145
第91図　出土石器実測図（5）……147
第92図　炉穴（1）……152
第93図　炉穴（2）……153
第94図　陥穴状遺構（SK002）……154
第95図　炉穴（SK011）・陥穴状遺構（SK002）出土遺物……155
第96図　グリッド出土縄文土器（1）……157
第97図　グリッド出土縄文土器（2）……159
第98図　グリッド出土縄文土器（3）……160
第99図　グリッド出土縄文土器（4）……161
第100図　グリッド出土縄文土器（5）……163
第101図　グリッド出土縄文土器（6）……164
第102図　グリッド出土縄文土器（7）……166
第103図　グリッド出土縄文土器（8）……167
第104図　グリッド出土縄文時代土製品……169
第105図　縄文時代石器（1）……170

第106図　縄文時代石器（2）……171
第107図　縄文時代石器（3）……172
第108図　SI003 ……175
第109図　SI001（1）……176
第110図　SI001（2）……177
第111図　SI001（3）……178
第112図　SI001（4）……180
第113図　SI002・SD001 ……181
第114図　SK010・SK014……182
第115図　グリッド出土遺物……184

表目次

第2部　松崎Ⅳ遺跡
第1表　松崎Ⅳ遺跡遺構一覧表……18
第2表　文化層別石器群概要一覧表……21
第3表　文化層別石材器種組成表……24
第4表　第Ⅰ文化層　第1ブロック母岩器種組成表……25
第5表　第Ⅱ文化層　第2ブロック母岩器種組成表……35
第6表　第Ⅲ文化層　石材器種組成表……42
第7表　第Ⅲ文化層　第3ブロック母岩器種組成表……44
第8表　第Ⅲ文化層　第4ブロック母岩器種組成表……48
第9表　第Ⅲ文化層　第5ブロック母岩器種組成表……53
第10表　第Ⅲ文化層　第6ブロック母岩器種組成表……54
第11表　第Ⅲ文化層　第7ブロック母岩器種組成表……58
第12表　第Ⅳ文化層　第8ブロック母岩器種組成表……59
第13表　単独出土　石器器種組成表……63
第14表　旧石器時代　石器属性表（1）……64
第15表　旧石器時代　石器属性表（2）……65
第16表　旧石器時代　石器属性表（3）……66
第17表　文化層別組成表（追加）……71
第18表　第Ⅲ文化層（追加）第9ブロック母岩器種組成表……71
第19表　旧石器時代　石器属性表（4）・追加 …73
第20表　縄文時代土坑計測表……81
第21表　縄文時代土製品計測表……87
第22表　（3）SX001関連石器計測表 ……106
第23表　弥生時代以降の土坑計測表 ……113
第24表　溝状遺構一覧表 ……119
第25表　銭貨計測表 ……122
第26表　鉄滓計測表 ……123
第27表　縄文時代以降石器属性表 ……123
第3部　松崎Ⅴ遺跡
第28表　松崎Ⅴ遺跡遺構一覧表 ……136
第29表　旧石器時代石器属性表 ……149
第30表　縄文時代土製品計測表 ……169
第31表　縄文時代以降石器属性表 ……173
第4部
第32表　松崎遺跡群で検出した遺構 ……193

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真（Ｓ＝約1/10,000）
図版２　遺跡遠景
松崎Ⅳ遺跡
図版３　調査状況
図版４　旧石器時代遺物出土状況（１）
図版５　旧石器時代遺物出土状況（２）
図版６　旧石器時代遺物出土状況（３）
図版７　第９ブロック遺物出土状況，陥穴状遺構
図版８　縄文時代土坑（１）
図版９　縄文時代土坑（２）
図版10　弥生時代竪穴住居跡（１）
図版11　弥生時代竪穴住居跡（２）
図版12　竪穴状遺構，弥生時代以降の土坑
図版13　溝状遺構
図版14　旧石器時代石器（１）
図版15　旧石器時代石器（２）
図版16　旧石器時代石器（３）
図版17　縄文時代土坑出土土器，縄文時代土製品，グリッド出土縄文土器（１）
図版18　グリッド出土縄文土器（２）
図版19　グリッド出土縄文土器（３），縄文時代以降の石器
図版20　第１号・第２号住居跡出土土器，第３号住居跡出土土製品・土器（１）
図版21　第３号住居跡出土土器（２）
図版22　第４号住居跡出土土製品・土器
図版23　第５号住居跡出土土器，第６号住居跡出土土器，グリッド出土遺物
図版24　（３）SX001出土剥片，銭貨
松崎Ⅴ遺跡
図版25　調査状況
図版26　炉穴，陥穴状遺構，土坑
図版27　古墳時代以降の遺構
図版28　旧石器時代石器（１）
図版29　旧石器時代石器（２）
図版30　旧石器時代石器（３）
図版31　旧石器時代石器（４）接合資料，炉穴・陥穴状遺構出土土器
図版32　グリッド出土縄文土器（１）
図版33　グリッド出土縄文土器（２）
図版34　グリッド出土縄文土器（３）
図版35　グリッド出土縄文土器（４），縄文時代土製品
図版36　縄文時代以降の石器
図版37　SI003出土土器，SI001出土土器（１）
図版38　SI001出土土器（２）・グリッド出土遺物（１）
図版39　グリッド出土遺物（２）

第　1　部

事業の概要

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と経過

松崎地区内陸工業団地（松崎工業団地）は，都心から約35km，成田空港から約20km，千葉市から約20kmの距離にある千葉ニュータウンの市街地に隣接している。千葉ニュータウンは，北総広域都市圏における中核都市として昭和44年から整備が進められてきた。船橋市・印西市・白井市・本埜村及び印旛村の３市２村にまたがり，各種機能の複合した総合的都市づくりを目指しており，近接地には工場や研究所などの関連施設用地の整備も計画されている。昭和61年に新住宅市街地開発法の改正により区域内にも整備が可能となり，準工業地域の指定が可能となった。

千葉県の「ふるさと５か年計画」「千葉県工業振興立地ビジョン」において，松崎工業団地は中核的な工業団地として位置づけられ，千葉県と千葉県企業庁によって整備が進められてきた経緯がある。

千葉県企業庁は，開発に先立って千葉県教育委員会に対して埋蔵文化財の所在の有無を照会した。これに対し，千葉県教育庁生涯学習部文化課（現教育振興部文化財課）では，事業地内の遺跡の所在を確認し，予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて，やむを得ず記録保存することとし，財団法人千葉県文化財センター（現財団法人千葉県教育振興財団）が発掘調査を実施することとなった。遺跡は広大な面積に亘るため，既存の道路や地形から７遺跡に分けられ，それぞれに松崎Ⅰ遺跡～Ⅶ遺跡と呼称することになった（第１図）。発掘調査は平成５年７月から開始され，平成17年９月に実施した調査で終了した。この間，断続的ではあるが調査は11年次に及ぶものであった。本報告書ではこの内，松崎Ⅳ遺跡及びⅤ遺跡の２遺跡を扱う。なお，本報告により松崎遺跡群の報告書が終了するため刊末に遺跡群の総括を設けた。

松崎Ⅳ遺跡は，遺跡規模43,568㎡を対象とし，上層確認調査5,004㎡，下層確認調査2,038㎡を調査し，そのうち上層本調査11,535㎡，下層本調査504㎡の調査を実施した。調査は平成９年度から開始され，平成17年度まで実施された。調査の結果，旧石器時代の遺物集中地点，弥生時代後期の集落，中・近世の溝などを検出した。整理作業は，平成14年度から着手した。平成14年度の整理作業は水洗注記の一部から開始した。

松崎Ⅴ遺跡については，平成14年度に調査が行われ，16年度から整理作業に着手した。松崎Ⅴ遺跡は遺跡規模3,290㎡を対象とし，上層確認調査329㎡，下層確認調査136㎡，上層本調査949㎡，下層本調査120㎡の調査を実施し，旧石器遺物集中地点，縄文時代早期の炉穴，古墳時代前期及び奈良・平安時代の住居跡などを検出した。整理作業は，平成16年度から実施した。調査成果は本書中に収録したとおりである。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織，担当者及び作業内容は，下記のとおりである。

（発掘調査）　※遺跡名の後の括弧内の数字は第２章中の第４図の地点に対応する。

平成９年度　発掘調査・松崎Ⅳ（１）

期　間　　平成10年12日～平成10年３月27日

調査面積　3,600㎡　（上層）確認調査　360㎡／3,600㎡　　本調査　345㎡

　　（下層）確認調査　192㎡／3,600㎡　　本調査　　0㎡

組　織　　北部調査事務所長　　折原　繁

担当者　　主任技師　石田清彦，技師　田井知二，大内千年

平成10年度　発掘調査・松崎Ⅳ（2）

期　間　平成10年10月1日～平成11年3月26日

調査面積　6,100㎡（上層）確認調査　610㎡／6,100㎡　本調査　2,950㎡

（下層）確認調査　248㎡／6,100㎡　本調査　—

組　織　北部調査事務所長　折原　繁

担当者　研究員　猪股昭喜，鈴木弘幸，竹田良男，主任技師　落合章雄，福田誠，技師　大内千年

平成11年度　発掘調査・松崎Ⅳ（2）（3）

期　間（2）平成11年9月1日～平成11年9月30日

調査面積　232㎡（下層）本調査　232㎡　（前年度調査区内）

組　織　北部調査事務所長　折原　繁

担当者　主任技師　石田清彦

期　間（3）平成11年11月1日～平成12年3月29日

調査面積　22,664㎡（上層）確認調査　2,300㎡／22,664㎡　本調査　7,890㎡

（下層）確認調査　1,000㎡／22,664㎡　本調査　200㎡

組　織　北部調査事務所長　折原　繁

担当者　副所長　岡田誠造，研究員　小原邦夫，高橋　覚，竹田良男，萩原恭一，石田清彦，井上哲朗，織田良昭

平成12年度　発掘調査・松崎Ⅳ（4）

期　間　平成12年7月1日～平成12年8月23日

調査面積　1,395㎡（上層）確認調査　140㎡／1,395㎡　本調査　305㎡

（下層）確認調査　52㎡／1,395㎡　本調査　72㎡

組　織　北部調査事務所長　石田廣美

担当者　主席研究員　池田大助，上席研究員　川端保夫，森本和男，技師　城田義友

平成14年度　発掘調査・松崎Ⅴ（1）

期　間　平成14年10月7日～平成15年3月26日

調査面積　3,290㎡（上層）確認調査　329㎡／3,290㎡　本調査　949㎡

（下層）確認調査　136㎡／3,290㎡　本調査　120㎡

組　織　調査部副部長兼北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　池田大助，上席研究員　川端保夫

平成15年度　発掘調査・松崎Ⅳ（5）

期　間　平成15年5月1日～平成15年6月9日，平成15年9月5日～平成15年9月30日

調査面積　4,350㎡（上層）確認調査　448㎡／4,350㎡　本調査　0㎡

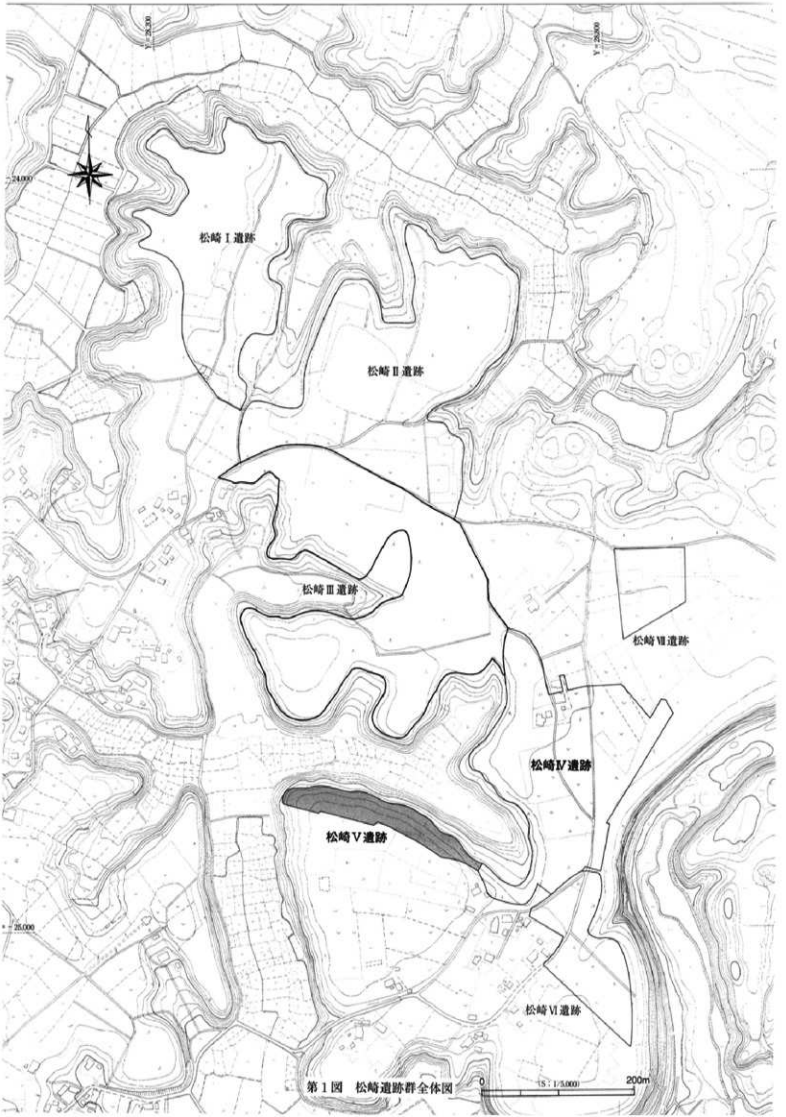
（下層）確認調査　238㎡／4,350㎡　本調査　0㎡

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　北総調査室長　郡　淳一

平成16年度　発掘調査・松崎Ⅳ（6）

期　間　平成16年7月1日～平成16年8月27日



第１図　松崎遺跡群全体図

調査面積　5,414㎡　（上層）確認調査　1,146㎡／5,414㎡　本調査　0㎡
（下層）確認調査　308㎡／5,414㎡　本調査　0㎡

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　上席研究員　森本和男

平成17年度　発掘調査・松崎Ⅳ（7）

期　間　平成17年9月26日～平成17年9月27日

調査面積　45㎡（上層）本調査　45㎡（平成9年度本調査範囲決定，調査未了部分）

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　研究員　大内千年

（整理作業）

平成14年度　整理作業・松崎Ⅳ（1）～（4）

期　間　平成14年4月1日～平成14年7月31日，平成15年1月4日～平成15年3月31日

作業内容　水洗注記の一部から挿図作成まで

組　織　調査部副部長兼北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　池田大助，北総調査室長　蔀　淳一，上席研究員　安川正行，大澤一美，矢本節夫，横山昌彦，西野雅人，研究員　小笠原永隆

平成15年度　整理作業・松崎Ⅳ（1）～（4）

期　間　平成15年11月1日～平成15年12月27日，平成16年2月1日～平成17年3月31日

作業内容　原稿執筆の一部から編集まで

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　北総調査室長　蔀　淳一，研究員　立和名明美，小笠原永隆

平成16年度　整理作業・松崎Ⅳ（1）～（6），松崎Ⅴ（1）

期　間　平成16年11月1日～平成17年3月31日

作業内容　水洗注記から原稿執筆の一部まで

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　副所長　岡田誠造，北総調査室長　雨宮龍太郎，上席研究員　渡邊高弘

平成17年度　整理作業・松崎Ⅳ（1）～（7），松崎Ⅴ（1）

期　間　平成17年6月1日～平成17年6月30日・平成17年9月28日～平成17年9月30日

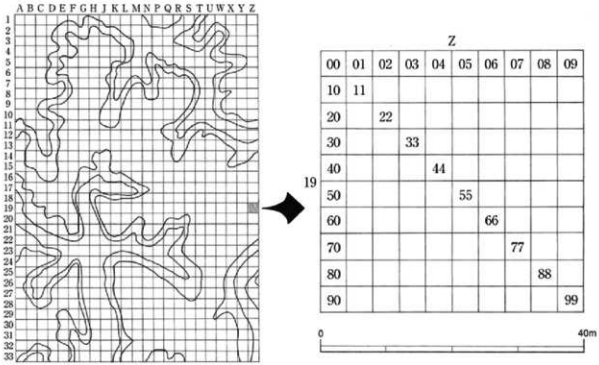
作業内容　水洗注記から刊行

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　副所長　岡田誠造，研究員　大内千年

第2節　調査の方法

松崎遺跡群（松崎Ⅰ～Ⅶ遺跡）は，広範な面積に亘り，多年度に及ぶ調査が予定されていたことから，遺跡群全体を対象として旧公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく40m×40mの方眼網を設定し，大グリッドとした。大グリッドは，北西を基点として，西から東へ向かってA，B，C…，北から南へ向かって1，2，3…とした。ただし，数字と紛らわしいI，O，Vは使用しなかった。大グリッドはさら



第２図　松崎遺跡群におけるグリッド名称と分割方法

に４ｍ×４ｍ方眼の小グリッドに100分割し，西から東へ00，01，02…，北から南へ10，20，30…とした。したがって，各小グリッドは19Z00，19Z99のように呼称する。（第２図）

発掘調査は，まず縄文時代以降の上層遺構確認のために，調査対象面積の10％を基本としてトレンチを設定した。遺構や遺物の検出を目安として，本調査を要する範囲を確定し，上層本調査を実施した。旧石器時代を対象とした下層確認調査は，調査対象範囲に２ｍ×２ｍの確認グリッドを，調査対象面積の４％を基本として設定した。石器が出土した地点については周囲を拡張し，遺物集中の在否と広がりを確認した上で，本調査を要する範囲を確定し，下層本調査をおこなった。

遺構番号については，基本的には遺構種別を示す記号（SI・SKなど）と001からの３桁の番号を組み合わせて表記する方針であったが，多年度にわたる調査であったために，徹底しなかった。また，松崎Ⅳ遺跡では，遺構番号の重複などもあったため，整理作業の際には遺構番号の最初に調査年度を示す括弧内の数字を付して整理を進めた。遺物の注記はこの方針でおこなわれている。報告に際しては，調査時に付けられた遺構番号を基本的には踏襲するが，一部の遺構でやむを得ず遺構番号を変更した場合がある。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と環境

松崎遺跡群は，千葉県北西部の印西市に所在する（第３図）。印西市は千葉県北部に広がる北総台地の北端に位置し，北に利根川，東から南にかけて印旛沼，西側が手賀沼にそれぞれ面している。第３図中の１～７が，それぞれ松崎Ⅰ遺跡～Ⅶ遺跡に対応する。本書で報告をおこなう松崎Ⅳ遺跡（第３図４）および松崎Ⅴ遺跡（５）付近は，印西市の南西部の印西市松崎字高野台及び草深字松崎前にあたる。

遺跡は，印旛沼の西端に繋がる新川の小支流によって解析された松崎付近の谷（松崎谷）の最奥部近くの台地上に位置する。台地の標高は24m～26mで，現水田面との比高差は約15mである。

第２節　松崎遺跡群と周辺の遺跡

松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡周辺では，旧石器時代から中・近世にかけて多くの遺跡が所在している（第３図）。特に千葉ニュータウン開発に伴って実施された発掘調査により，印西市周辺の遺跡の様相の一端が徐々に解明されてきている。以下では，それらの成果をもとに，周辺の主な遺跡の状況を概観する。

旧石器時代の遺跡は，松崎遺跡群の中では松崎Ⅰ遺跡（第３図１），松崎Ⅱ遺跡（２），松崎Ⅲ遺跡（３），松崎Ⅳ遺跡（４），松崎Ⅴ遺跡（５），松崎Ⅵ遺跡（６）で検出され，複数の文化層が確認されている。特に松崎Ⅱ遺跡（２）のⅨ層で検出された石器群は，環状ブロックを呈する可能性がある。松崎遺跡群と支谷を挟んだ西側の台地上に所在する船尾白幡遺跡（21）では，細石刃のブロックを初め，Ⅳ層下部・Ⅴ層の石器群が検出された。船尾白幡遺跡の西側に位置する向新田遺跡（26）では，第２黒色帯上部からブロックが検出されている。さらに北西に目を向ければ，手賀沼水系と印旛沼水系の分水界には，木刈峠遺跡（29）や一本桜南遺跡（28）などが所在する。木刈峠遺跡では３枚の文化層から25ブロック，6,200点に及ぶ石器群が検出されている。一本桜南遺跡では，10層に及ぶ文化層から31ブロックの石器群が出土している。他には，泉北側第３遺跡（30）では環状ブロックが検出され，南西ヶ作遺跡（27）や六角遺跡（33）でも石器の出土が確認されている。一方，松崎遺跡群より南側の，新川を挟んだ八千代市側の遺跡である，おおびた遺跡（43）では有舌尖頭器やナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると，比較的多くの遺跡が確認されている。松崎遺跡群の中では，松崎Ⅰ～Ⅶ遺跡で早期から晩期にわたる遺構・遺物が検出されている。隣接する松崎Ⅲ遺跡（３）では早期の竪穴住居跡や炉穴が検出され，松崎Ⅴ遺跡（５）・松崎Ⅵ遺跡（６）からも早期撚糸文系土器や条痕文系土器とともに，炉穴などの遺構が検出されている。周辺を見渡しても，炉穴群と貝層が確認された船尾貝塚（20）をはじめ，早期後葉の遺跡が多く確認されている。一本桜南遺跡（28）では竪穴住居跡３軒の他に炉穴などが調査されている。船尾町田遺跡（23）では，条痕文系の土器が出土した。南に目をむけると，新川を挟んだ台地上では栗谷遺跡（41）で炉穴が22基，上谷遺跡（43）で炉穴31基が検出され，境堀遺跡（39），向境遺跡（40）などからも炉穴が検出されている。これらの遺跡群が位置する台地と新川を挟んだ西側の対岸には，条痕文期の貝層を伴い，住居跡と炉穴がセットで検出された間見穴遺跡（45）が存在する。松崎遺跡群の東側では，印旛村トヶ前遺跡（14）で，条痕文系土器を主体とした遺物包含層がみられる。

第3図　松崎Ⅳ・Ⅴ遺跡の位置と周辺の遺跡

前期の遺跡は少ないが，八千代市中ノ台遺跡（37）で黒浜式期の竪穴住居跡10軒，宗甫北遺跡（32）では関山式期の炉が検出されている。中期以降については，それほど遺跡数は多くはみられない。松崎遺跡群の中では，松崎Ⅲ遺跡（３）から加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡が１軒検出されている。他には，阿玉台式期の土器を含む佐山貝塚（34），加曽利ＥⅠ式～ＥⅢ式の土器が検出された別所大山遺跡（31），晩期と思われる土坑が確認された南西ヶ作遺跡（27）などがある。また，西側に谷を２つ越えた戸神谷を流れる小河川の河床から発見された西根遺跡（22）からは，大量の加曽利Ｂ式土器が出土している。

弥生時代から古墳時代前期では，弥生時代後期の遺跡が多く所在する。本報告の松崎Ⅳ遺跡（４）からも弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。弥生時代中期の遺跡としては田原窪遺跡（35）が挙げられる。田原窪遺跡は40数軒の竪穴住居跡を伴う環濠集落である。弥生時代後期以降になると，松崎Ⅰ遺跡（１）のように，弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続する遺跡が多くなるとともに，集落規模も大きくなる。松崎Ⅴ遺跡（５）では当該期の住居が検出されている。向新田遺跡（26）では，竪穴住居跡が83軒検出され，北関東系や東海系の土器がみられる。船尾町田遺跡（23）でも21軒の竪穴住居跡とともに，Ｓ字口縁や北陸系の土器が出土している。一本桜南遺跡（28）では古墳時代前期の竪穴住居跡が60軒検出されている。他にも鳴神山遺跡（24），船尾白幡遺跡（21）や八千代市道地遺跡（36），栗谷遺跡（41），上谷遺跡（43），境堀遺跡（39）など多くの遺跡でこの時期の遺構が確認されている。また，間見穴遺跡（45）では前期古墳が検出されている。

古墳時代中期の遺跡はほとんど知られていないが，古墳時代後期になると集落や古墳などが点在するようになる。集落については調査例が少なく言及できないが，松崎Ⅰ遺跡（１）と松崎Ⅱ遺跡（２）では竪穴住居跡が検出されている。古墳の調査例では，30m級の前方後円墳を含む３基の古墳が調査された船尾町田遺跡（23）がある。いずれも箱式石棺を埋葬施設とした古墳で，７世紀中頃の終末期古墳と想定される。その他，印旛沼低地西半には群集墳が点在して存在するが，いずれも大きな群を形成せず，大きな古墳を含まないのが特徴である。

奈良・平安時代になると，大規模な集落が形成される例が多い。松崎Ⅴ遺跡（５）では該期の竪穴住居を検出した。また，松崎Ⅰ遺跡（１）・松崎Ⅱ遺跡（２）・松崎Ⅲ遺跡（３）・松崎Ⅵ遺跡（６）からも遺構・遺物を検出している。松崎遺跡群の西側に位置する鳴神山遺跡（24）では，竪穴住居跡205軒，掘立柱建物跡43棟などが調査されている。鳴神山遺跡の集落は８世紀初頭に形成され，10世紀前半には衰退するが，「弘仁九年・・」の紀年銘墨書土器やムラの祭祀を示す長文墨書土器などを含む1,000点に及ぶ墨書・刻書土器が注目される。松崎遺跡群の近くに所在する大規模な集落としては，多量の墨書土器が検出された船尾白幡遺跡（21）もあって，この辺りが古代の船尾郷の中心的な集落を形成していたと思われる。印旛沼を挟んだ南岸の台地上にも，栗谷遺跡（41）や上谷遺跡（43）など大規模な集落が所在する。

中・近世では，松崎Ⅱ遺跡（２），松崎Ⅲ遺跡（３），松崎Ⅳ遺跡（４），松崎Ⅴ遺跡（５）で遺構・遺物が検出されている。松崎Ⅲ遺跡では，土塁・溝・地下式坑・掘立柱建物跡・野馬土手・土坑・台地整形区画・墓域などが検出された。同時代の周辺遺跡では，土塁・空堀とともに中世陶磁器類が出土し，白井城に付随する城あるいは砦とされる船尾城址（19）がある。また，白井谷奥遺跡（25）からも墓域や地下式坑などが検出されている。その他にも題目板碑が出土した間見穴遺跡（45），江戸時代中期頃の供養塔や庚申塔を伴う結縁寺塚群（46），近世庚申塔列や土手・溝・道路を検出した向新田遺跡（26），中世土坑墓・天目茶碗・水瓶などが出土した仲内遺跡（15），塚３基を検出した神野貝塚（37）内の塚群などがある。

参考文献

喜多裕明ほか　1992 『トヶ前遺跡発掘報告書』（財）印旛郡市文化財センター

古内　茂ほか　1980 『吉田馬場台遺跡縄文早期炉穴址群の調査』 印旛村教育委員会

大野康夫　1991 『八千代市白幡前遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』（財）千葉県文化財センター

増田誠蔵ほか　1975 『おおびた遺跡－八千代市少年自然の家建設地内遺跡』 おおびた遺跡調査団

小高春雄　1995 「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『研究紀要16』（財）千葉県文化財センター

加藤修司ほか　1984 『八千代市権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター

阪田正一・藤岡孝司　1986 『八千代市ヲサル山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』（財）千葉県文化財センター

佐藤克己　1978 『船尾城遺跡』 八千代市遺跡調査会

佐藤克己ほか　1980 『阿蘇中学校東側遺跡』 八千代市遺跡調査会

都　淳一　1998 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書１－八千代市島田込ノ内遺跡－』（財）千葉県文化財センター

鈴木道之助　1975 「木刈峠」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ』 千葉県都市公社

千葉県教育委員会　1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図（１）－東葛・印旛地区（改訂版）－』

千葉県教育委員会　1990 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』

千葉県文化財センター　1989 『房総考古学ライブラリー４　弥生時代』

千葉県文化財センター　1992 『房総考古学ライブラリー６　古墳時代（２）』

野村幸希・古内茂　1976 『船尾白幡遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ』（財）千葉県文化財センター

藤岡孝司　1986 「印旛沼南部地域における後期弥生時代集落の一形態－八千代市権現後・ヲサル山遺跡の分析－」『研究紀要10』（財）千葉県文化財センター

藤岡孝司　1986 『八千代市井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター

藤岡孝司　1987 『八千代市白幡前遺跡』（財）千葉県文化財センター

藤原均他　1984 『阿蘇中学校東側遺跡』（財）八千代市遺跡調査会

古内　茂　1984 「船尾町田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅷ』（財）千葉県文化財センター

八千代市史編纂委員会　1974 「八千代の歴史」『八千代市史』

八千代市教育委員会　1987 『八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書』

八千代市教育委員会　1988 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和62年度』

八千代市教育委員会　1995 『市内遺跡発掘調査報告　平成７年度』

八千代市教育委員会　1994 『八千代市埋蔵文化財調査年報』

廉　茂美　2001 『栗谷遺跡』 八千代市遺跡調査会

糸川道行ほか　2004 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅥ－印西市船尾白幡遺跡－』（財）千葉県文化財センター

田中　裕ほか　2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書２－八千代市道地遺跡－』（財）千葉県文化財センター

田中　裕ほか　2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書３－八千代市間見穴遺跡－』（財）千葉県文化財センター

第　2　部

松崎Ⅳ遺跡

第１章　松崎Ⅳ遺跡の概要

松崎Ⅳ遺跡は，第１部で触れたように，平成９年度から平成17年度にわたって，断続的に発掘調査がおこなわれた。結果的に遺跡のほぼ全域を調査するに至った。

各年度ごとの調査地点については，第４図左に示した。調査が可能となった地点から，順次発掘調査をおこなった。調査は各年度ごとに，上層（縄文時代以降）の確認調査を実施し，遺構が認められた範囲に関して上層本調査をおこなった。その後引き続き，下層（旧石器時代）の確認調査を実施し，遺物の広がりが認められた範囲について，下層本調査を実施した。上層の確認トレンチと本調査範囲については，第４図右に示した。なお，下層確認のための試掘坑の配置は，第２章中の第７図及び第37図に示した。

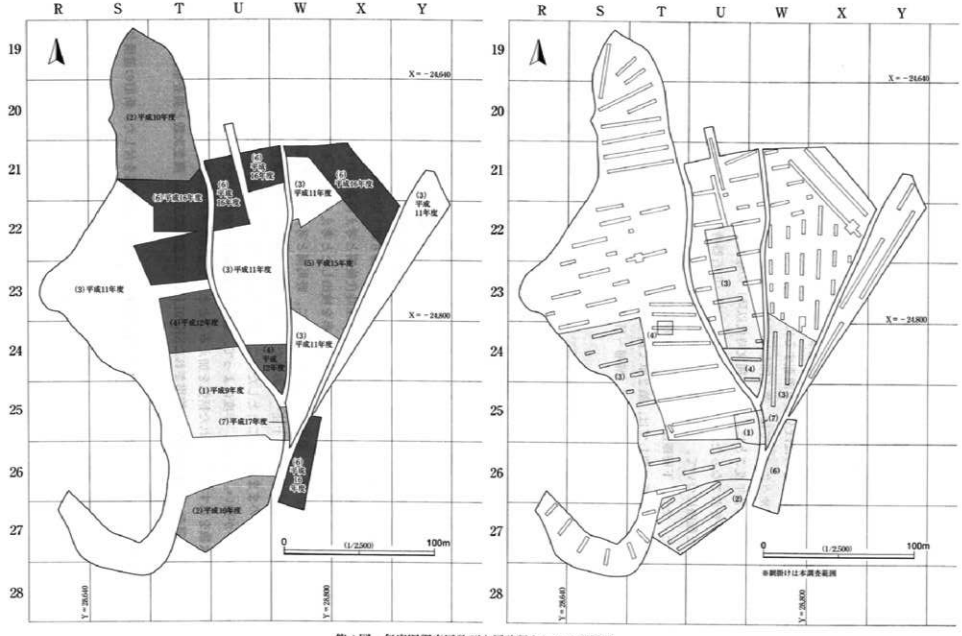
旧石器時代の調査成果に関しては，第２章で扱った。Ⅸ層下部からⅢ層にわたる４つの文化層で，合計９か所の石器集中地点を検出した。特に，Ⅶ層～Ⅵ層に生活面を持つと推定される，第Ⅲ文化層が質・量とも充実している。

整理作業の工程上の問題から，第２章第１節では平成15年度までの成果を扱い，第２節では平成16年度の調査成果を扱うこととした。これは，当初平成15年度までの成果で報告書を刊行する予定であったものが，平成16年度調査分も追加して報告書を刊行することとなったためである。よって，第１節中の第７図・第８図・第20図，第２表・第３表については，平成16年度の調査成果が反映されていないことをお断りしておきたい。また，第５章第１節の旧石器時代のまとめについても，平成16年度の調査成果は反映されていない。遺跡全体における総数などについては，第２節の平成16年度調査成果を加わえて頂きたい。

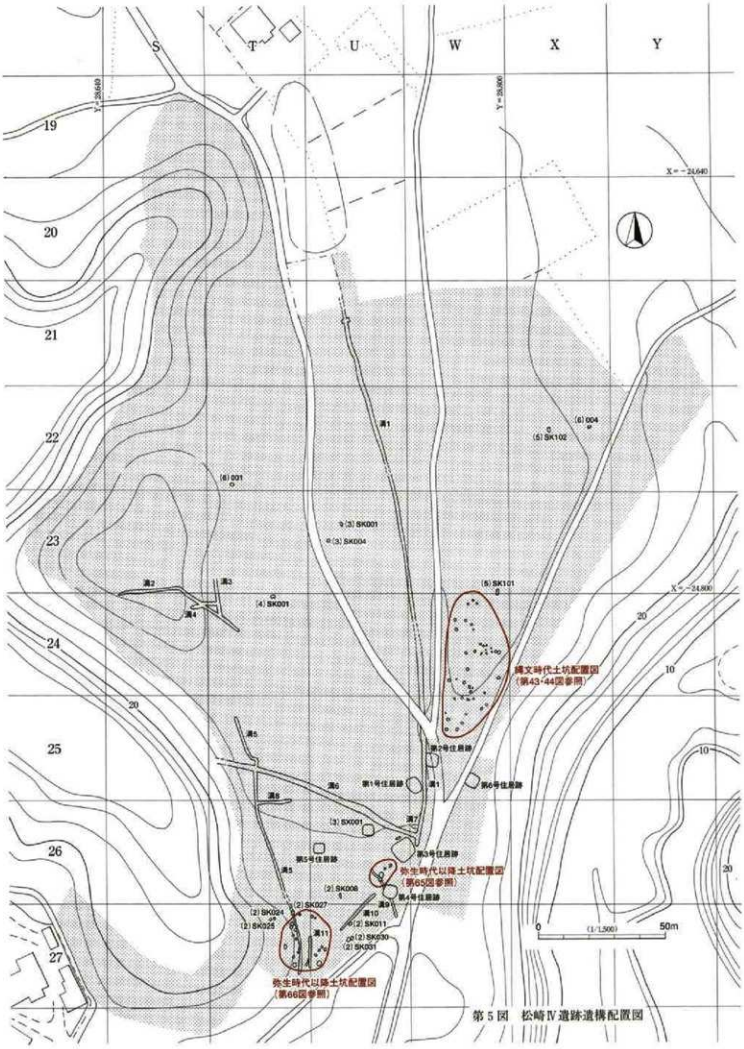
縄文時代以降の調査成果は第３章・第４章で扱った。検出された遺構については，第５図に遺構配置図を示し，第１表に遺構一覧表を示した。検出された遺構の内訳は，縄文時代の遺構として陥穴状遺構５基・土坑36基・ピット10基，弥生時代以降の遺構として竪穴住居跡６軒・竪穴状遺構１基・土坑32基・溝状遺構11条である。竪穴住居跡・竪穴状遺構はすべて弥生時代後期と考え得るものである。遺構間接合資料の存在などから，弥生時代後期の比較的短期的な集落を検出したと考えられる。石器製作跡や大型砥石状石製品は注目されよう。また，遺跡内を縦断するように，野馬堀と考え得る溝状遺構を検出した。

なお，遺構の名称について若干述べておきたい。基本的な方針としては，調査時に用いた遺構の名称を，報告に際してもそのまま用いることとした。これは，注記その他がこの名称でなされているため，混乱を避ける意味合いが強い。ただし，年度によって，遺構名の重複などがあったため，すべての遺構名の先頭には，調査次数を示す数字を入れた括弧を加えることとして整理作業を進めた。よって（2）SK001という名称は，「２次調査（平成10年度）で検出されたSK001」という意味である。調査次数と調査年度の対象は，第４図左を参照して頂きたい。

なお，竪穴住居跡及び溝状遺構については，報告の便宜上，新たな遺構名を付した。新旧の遺構名の対照は第１表を参照して頂きたい。



第4図　年度別調査区及び上層確認トレンチ配置図



第５図　松崎Ⅳ遺跡遺構配置図

第1表　松崎Ⅳ遺跡遺構一覧表

新遺構名	調査時遺構名	種　類	時期	調査年度	備　考
第1号住居跡	(1)SI001	竪穴住居跡	弥生後期	H9	
第2号住居跡	(1)SI002	竪穴住居跡	弥生後期	H9・H17	
第3号住居跡	(2)SI003・(3)SI001	竪穴住居跡	弥生後期	H10・H11	
第4号住居跡	(2)SI004	竪穴住居跡	弥生後期	H10	
第5号住居跡	(3)SI002	竪穴住居跡	弥生後期	H11	
第6号住居跡	(6)003	竪穴住居跡	弥生後期	H16	
	(3)SX001	竪穴状遺構	弥生後期	H11	調片多量出土
	(2)SK001	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK002	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK003	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK004	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK005	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK006	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK007	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK008	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK009	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK010	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK011	陥穴状遺構	縄文	H10	
	(2)SK012	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK013	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK014	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK015	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK016	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK017	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK018	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK019	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK020	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK021	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK022	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK023	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK024	土坑	縄文	H10	
	(2)SK025	土坑	縄文	H10	
	(2)SK026	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK027	陥穴状遺構	縄文	H10	
	(2)SK028	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK029	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK030	土坑	弥生以降	H10	
	(2)SK031	土坑	弥生以降	H10	
	(3)SK001	陥穴状遺構	縄文	H11	
	(3)SK002	土坑	弥生以降	H11	
	(3)SK003	土坑	弥生以降	H11	
	(3)SK004	土坑	弥生以降	H11	
	(3)SK005	土坑	弥生以降	H11	
	(3)SK006	土坑	縄文	H11	
	(3)SK007	土坑	縄文	H11	
	(3)SK008	土坑	縄文	H11	
	(3)SK009	土坑	縄文	H11	
	(3)SK010	土坑	縄文	H11	
	(3)SK011	土坑	縄文	H11	
	(3)SK012	土坑	縄文	H11	
	(3)SK013	ピット	縄文	H11	
	(3)SK014	ピット	縄文	H11	
	(3)SK015	土坑	縄文	H11	
	(3)SK016	土坑	縄文	H11	
	(3)SK017	土坑	縄文	H11	
	(3)SK018	土坑	縄文	H11	
	(3)SK019	土坑	縄文	H11	
	(3)SK020	土坑	縄文	H11	
	(3)SK021	土坑	縄文	H11	
	(3)SK022	土坑	縄文	H11	
	(3)SK023	土坑	縄文	H11	
	(3)SK024	土坑	縄文	H11	
	(3)SK025	土坑	縄文	H11	
	(3)SK026	土坑	縄文	H11	
	(3)SK027	土坑	縄文	H11	
	(3)SK028	土坑	縄文	H11	
	(3)SK029	土坑	縄文	H11	
	(3)SK030	土坑	縄文	H11	
	(3)SK031	土坑	縄文	H11	
	(3)SK032	ピット	縄文	H11	
	(3)SK033	ピット	縄文	H11	
	(3)SK034	土坑	縄文	H11	
	(3)SK035	ピット	縄文	H11	
	(3)SK036	ピット	縄文	H11	
	(3)SK037	ピット	縄文	H11	
	(3)SK038	土坑	縄文	H11	
	(3)SK039	ピット	縄文	H11	
	(3)SK040	ピット	縄文	H11	
	(3)SK041	土坑	縄文	H11	
	(3)SK042	土坑	縄文	H11	
	(3)SK043	土坑	縄文	H11	
	(3)SK044	土坑	縄文	H11	
	(3)SK045	土坑	縄文	H11	
	(3)SK046	土坑	縄文	H11	
	(3)SK047	ピット	縄文	H11	
	(4)SK001	土坑	弥生以降	H12	
	(5)SK101	陥穴状遺構	縄文	H15	
	(5)SK102	土坑	縄文	H15	
	(6)001	土坑	縄文	H16	
	(6)004	陥穴状遺構	縄文	H16	
溝1	(1)SD003	溝状遺構	近世	H9	野馬堀か
溝1	(3)SD002	溝状遺構	近世	H11	野馬堀か
溝1	(3)SD012	溝状遺構	近世	H11	野馬堀か
溝1	(4)SD001	溝状遺構	近世	H12	野馬堀か
溝1	(6)002	溝状遺構	近世	H16	野馬堀か
溝2	(3)SD006	溝状遺構	古代以降	H11	
溝3	(3)SD004	溝状遺構	古代以降	H11	
溝4	(3)SD005	溝状遺構	古代以降	H11	
溝5	(2)SD007	溝状遺構	古代以降	H10	
溝5	(3)SD007	溝状遺構	古代以降	H11	
溝5	(3)SD008	溝状遺構	古代以降	H11	
溝5	(3)SD010	溝状遺構	古代以降	H11	
溝6	(1)SD002	溝状遺構	古代以降	H9	
溝6	(3)SD003	溝状遺構	古代以降	H11	
溝7	(3)SD001	溝状遺構	古代以降	H11	
溝8	(3)SD009	溝状遺構	古代以降	H11	
溝9	(2)SD004	溝状遺構	古代以降	H10	
溝10	(2)SD005	溝状遺構	古代以降	H10	
溝11	(2)SD006	溝状遺構	古代以降	H10	

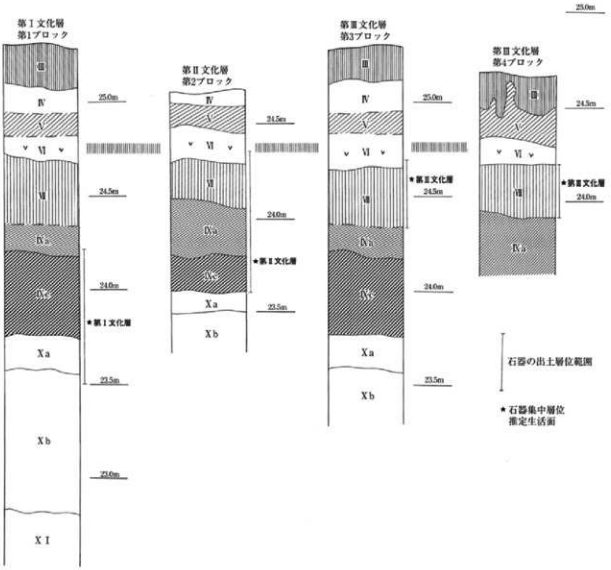
第２章　旧石器時代

第１節　　平成15年度までの調査

１　基本層序（第６図）

基本層序は第６図のとおりである。調査範囲は，南北360m，東西300mの広い範囲の調査を行った。全ての調査区において，土層の堆積状況が均等ではない。調査区域の中央部と南部の二つの代表的な層序を図示した。併せて，各ブロックにおける石器の出土層位範囲と石器集中層位（推定生活面）を図示した。

これらの区域の共通した特徴は，第１黒色帯に相当するⅤ層を明確にとらえることができ，第２黒色帯下部のⅨa層とⅨc層の間層にⅨb層を識別できなかったことである。



第６図　基本層序

相違点は，第１～３ブロックの位置する調査区中央部においては，いわゆる「ソフトローム層」であるⅢ層が，下部に向かってソフト化が進んでおらず，Ⅳ層を識別できたが，第４ブロックの位置する調査区南部においては，Ⅴ層までソフト化が進んでおり，Ⅳ層を識別できなかった。

Ⅲ　層（明褐色土）　本層が立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。色調は均質ではない。下部に向かってソフト化がみられるが，本遺跡では，それほど著しく下部にソフト化が及んでおらず，ほとんどがⅣ層まで及んでいる程度で，調査区南部において，Ⅴ層に及んでいる。

Ⅳ　層（明褐色土）　硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。特徴的な赤色スコリアを含み，全体に赤みを帯びて明色。

Ⅴ　層（暗灰褐色土）　第１黒色帯に相当する。全体に黒ずんでいる。本地域周辺では，比較的，第１黒色帯を識別することが容易である。

Ⅵ　層（暗灰黄白色土）　ＡＴ（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される。黒色スコリアを含み，赤色スコリアも少量含む。

Ⅶ　層（暗灰褐色土）　第２黒色帯上部に相当する。全体に黒ずんでいる。黒色スコリアを含み，赤色スコリアも少量含む。ATブロックが若干混在する。

Ⅸａ層（濃暗灰褐色土）　第２黒色帯下部の上半である。Ⅶ層よりも黒ずんでいる。黒色スコリアを多く含み，赤色スコリアも含む。

Ⅸｂ層（濃暗灰褐色土）　第２黒色帯下部の間層。本遺跡においては，識別できなかった。

Ⅸｃ層（淡黒褐色土）　第２黒色帯下部の下半である。黒色スコリアを多く含む。大小の赤色スコリアを含む。白色スコリアを微量含む。

Ｘａ層（暗灰褐色土）　黒色スコリアを含み，赤色スコリアを微量含む。

Ｘｂ層（暗灰褐色土）　Ｘａ層よりも若干暗く，上下の層に比べて，スコリアの量が少なくなる。黒色スコリアを微量含む。立川ローム最下層に相当する。

Ⅺ　層（灰褐色土）　武蔵野ローム最上層である。粘性を帯びた灰褐色ロームである。

2　文化層の概要（第７・８図，第２・３表）

文化層別の石器群の概要は，第２表のとおりである。出土総点数は121点である。旧石器時代の文化層は，第Ⅰ文化層～第Ⅳ文化層の４文化層に分離できた。第Ⅲ文化層は，第３～７ブロックの５か所のブロックと，３か所からブロック外出土石器が単独で検出されている。そのほかの文化層は，集中地点を示すブロックは１か所で構成される。文化層に所属しないものは，単独出土石器として取り扱った。

文化層別の出土分布とブロックの位置は，第８図のとおりである。各文化層とも出土層位に上下の幅をもつが，各文化層の出土層位と出土集中層位から生活面を推定すると以下のとおりとなる。

（１）　第Ⅰ文化層：調査区中央部の台地の平坦面に分布する。第１ブロックが相当する。第１ブロックの中央部に，第Ⅲ文化層の第３ブロックが平面的に重複して出土しているが，出土層位から第１ブロックと第３ブロックを分離することができた。出土層位は，Ｘｂ層上部～Ⅸａ層下部にかけて出土している。Ⅸｃ層下部に集中していており，Ⅸｃ層下部に生活面をもつ文化層と推定できる。

（２）　第Ⅱ文化層：調査区中央部のやや東側に分布しており，南東に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第２ブロックが相当する。出土層位は，Ⅸｃ層下部～Ⅵ層下部にかけて出土している。遺物が比較的上下

幅をもって出土しているが，石器の集中する層位は，Ⅸc層上部であることから，Ⅸc層上部に生活面をもつ文化層と推定できる。

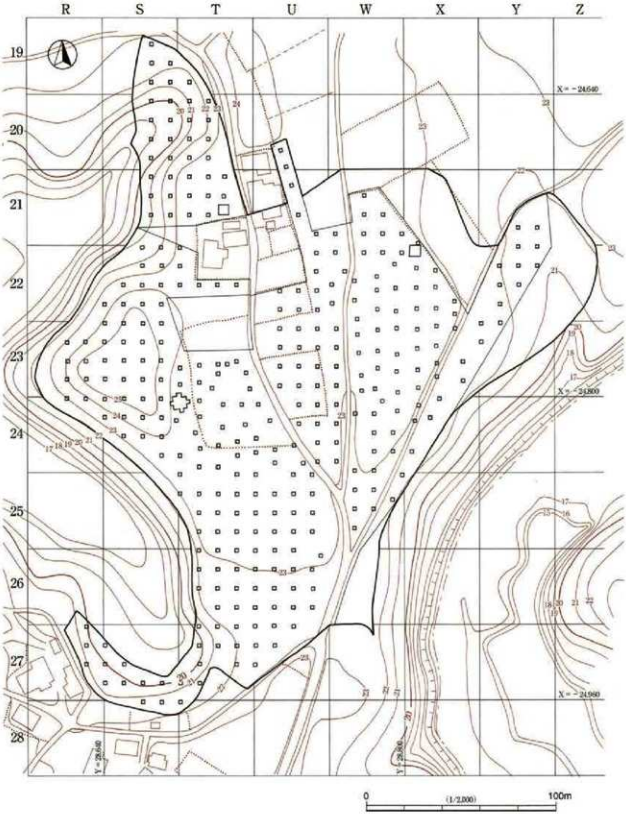
（3） **第Ⅲ文化層**：第3～7ブロックの5か所のブロックとブロック外出土石器1～3が相当する。調査区中央部の台地平坦面から第3・5・6ブロックの3か所のブロックがまとまって出土している。調査区南部の南東に緩やかに傾斜する斜面に第4ブロックが分布し，調査区北東部の南東に緩やかに傾斜する斜面に第7ブロックが分布する。ブロック外出土石器1～3は，第3・5・6ブロックの周辺に分布している。出土層位は，各ブロックにおいて，集中する層位が若干異なるが，Ⅸa層～Ⅴ層にかけて出土しており，Ⅶ層～Ⅵ層に集中することから，Ⅶ層～Ⅵ層に生活面を持つと推定される。ブロック間接合はみられないことから，同一時期の所産のものではなく，同一段階の石器群と考えられる。

（4） **第Ⅳ文化層**：調査区北側に分布しており，南西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第8ブロックが相当する。出土層位は，上層の調査時に継続して調査したときに，Ⅲ層から出土している。Ⅲ層に生活面をもつ文化層と推定できる。

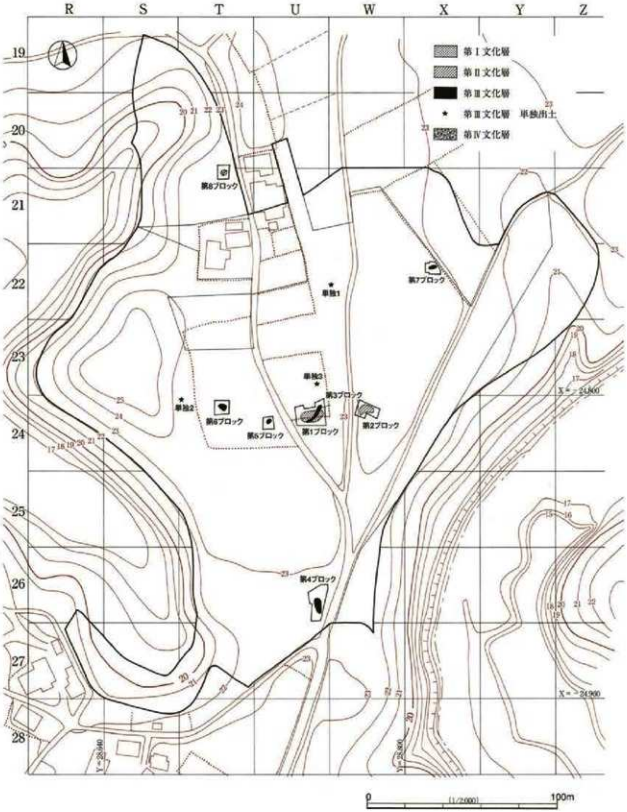
（5） **単独出土石器**：第Ⅰ～Ⅳ文化層に帰属しないものを単独出土石器として取り扱った。出土点数は，6点出土しており，剥片5点，礫片1点である。

第2表　文化層別石器群概要一覧表

文化層	ブロック	出土層位	推定生活面	出土点数	器種組成の特徴	石材組成の特徴
Ⅰ	1	Ⅹb層上部～Ⅸa層下部	Ⅸc層下部	47	局部磨製石斧が2個体（7点の接合資料と2点の接合資料）。局部磨製石斧の再生剥片が接合。	局部磨製石斧は砂岩7点，頁岩2点で構成される。トロトロ石（安山岩），流紋岩，玉髄（メノウを含む），頁岩で構成される。
Ⅱ	2	Ⅸc層下部～Ⅵ層下部	Ⅸc層上部	34	台形様石器が7点で非常に高い割合を占める。	台形様石器は，ガラス質黒色安山岩・流紋岩・ホルンフェルスで構成される。剥片・砕片は砂岩が主体を占める。
Ⅲ	3	Ⅶ層下部～Ⅵ層下部	Ⅶ層	7	ナイフ形石器1点，彫器1点。	ナイフ形石器，彫器は硬質頁岩を用いている。硬質頁岩と頁岩を主体とする。
	4	Ⅶ層下部～Ⅶ層上部	Ⅶ層	9	ナイフ形石器4点，彫器1点で製品の占める割合が高い。	硬質頁岩でほとんど構成される。黒曜石が1点出土しており，彫器が製作されている。
	5	Ⅶ層上部	Ⅶ層上部	2	ナイフ形石器2点で，すべてナイフ形石器で構成されている。	すべて硬質頁岩を用いている。
	6	Ⅶ層上部～Ⅵ層下部	Ⅵ層下部	4	彫器1点，二次加工のある剥片1点，微細剥離痕のある剥片1点。	すべて黒曜石を用いている。
	7	Ⅸa層～Ⅴ層	Ⅶ層～Ⅵ層	4	楔形石器3点，剥片1点。	流紋岩，玉髄（メノウ含む），安山岩，頁岩で構成されている。
	単独	Ⅶ層とⅥ層	Ⅶ層とⅥ層	3	ナイフ形石器1点，敲石1点，二次加工のある剥片1点。	黒曜石，硬質頁岩，石英岩で構成されている。
Ⅳ	8	Ⅲ層	Ⅲ層	6	ナイフ形石器1点，二次加工のある剥片1点。	頁岩，黒曜石，ガラス質黒色安山岩，トロトロ石（安山岩）が少量ずつで構成される。
単独	単独	－	－	6	製品は出土していない。	



第７図　旧石器時代確認グリッド



第8図　旧石器時代本調査範囲とブロックの位置

第3表　文化層別石材器種組成表

文化層	ブロック	器種名	ナイフ形石器	台形様石器	槍形石器	彫器	礫石	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	石核	剥片	砕片	微片	礫	総計	組成比（%）
I	1	トロトロ石（安山岩）									1	4			5	0.79
		流紋岩									0.26	0.89			1.15	0.12
		頁岩								1	2	2			5	4.13
										10.89	2.26	8.43			13.71	1.45
		頁岩						2							2	2.48
								26.24		13.91					40.15	4.24
		珪質頁岩							1		4	1			6	4.96
		玉髄（メノウ含む）							0.7		3.81	0.94			5.45	0.69
								1	1		3	1			6	4.96
		砂岩						1.4	1.87		1.92	6.1			4.89	0.52
											8	4		1	13	16.53
								49.58			21.27	11.52		339.34	411.69	13.96
	1 点数合計							5	1	2	18	14		1	41	33.94
	1 重量合計							76.1	1.4	4.87	29.32	9.98		339.34	478.51	50.53
I	1 点数合計							5	1	2	18	14		1	41	33.94
	1 重量合計							76.1	1.4	4.87	29.32	9.98		339.34	478.51	50.53
II	2	黒曜石									1				1	1.69
									3.31		0.26				3.57	9.37
		ガラス質黒色安山岩		4							1				5	8.47
				49.17							1.37				50.54	5.34
		トロトロ石（安山岩）										2			2	3.39
												0.15			0.15	0.05
		ホルンフェルス		1											1	1.69
				2.66											2.66	0.28
		流紋岩		2									1		3	5.08
				12.02									0.75		12.77	1.35
		頁岩									2				2	3.39
											1.36				1.36	0.14
		玉髄（メノウ含む）									1				1	1.69
											0.79				0.79	0.08
		砂岩									13				13	22.03
											87.24	0.21			87.45	9.23
		石英ペン岩										2			2	3.39
												0.68	6.33		7.01	0.74
	2 点数合計										19	2	2		23	38.98
	2 重量合計			63.87					3.31		90.54	1.04	7.1		165.78	17.51
II 点数合計				2							19				23	38.98
II 重量合計				63.87					3.31		90.54	1.04	7.1		165.78	17.51
無	3	頁岩							2						2	2.48
									20.9		2.41				23.32	2.46
		珪質頁岩	1			1									2	2.48
			2.19			23.56			9.51						35.25	3.72
		砂岩										1			1	1.24
												1.12			1.12	0.12
	3 点数合計		1			1				3					5	6.21
	3 重量合計		2.19			23.56			30.42		2.41	1.12			59.69	6.29
	4	黒曜石				1									1	1.24
						11.6									11.6	1.21
		珪質頁岩	4								3	1			8	9.91
			16.49								9.52	5.62			31.62	3.34
	4 点数合計					1									1	1.24
	4 重量合計		16.49			11.6					9.52	5.62			43.12	4.55
	5	珪質頁岩	3												3	3.73
			7.42												7.42	0.78
	5 点数合計		3												3	3.73
	5 重量合計		7.42												7.42	0.78
	6	黒曜石				1		1	1		1				4	5.14
						15.85		13.03	1.31		0.72				30.71	3.24
	6 点数合計					1		1	1		1				4	5.14
	6 重量合計					15.85		13.03	1.31		0.72				30.71	3.24
	7	流紋岩													1	0.83
					2.87										2.87	0.30
		玉髄（メノウ含む）													1	0.83
					9.78										9.78	0.98
		安山岩									1				1	0.83
											1.32				1.32	0.14
		頁岩													1	0.83
					3.53										3.53	0.37
	7 点数合計				2						1				4	3.31
	7 重量合計				9.18						1.32				10.50	1.11
	早	黒曜石													1	0.83
								6.41							6.41	0.68
		硬質頁岩	1												1	0.83
			5												5	0.53
		石英岩					1								1	0.83
							41.56								41.56	4.39
	早 点数合計		1				1		1						3	2.48
	早 重量合計		5				41.56	6.41							52.97	5.59
III 点数合計			6		3	3	1	2	4		8	2			29	23.97
III 重量合計			31.09		9.18	59.7	41.56	19.44	31.73		13.97	6.74			204.11	21.59
IV	8	黒曜石													1	0.83
								4.61							4.61	0.49
		ガラス質黒色安山岩									1				1	0.83
											6.3				6.3	0.67
		トロトロ石（安山岩）								1					1	0.83
										45.74					45.74	4.83
		頁岩	2								3				5	4.13
			5.67								12.1				17.77	1.88
	8 点数合計							1		1					3	2.48
	8 重量合計		5.67					4.61		45.74	18.4				74.42	7.86
IV 点数合計			2					1		1	3				7	5.79
IV 重量合計			5.67					4.61		45.74	18.4				74.42	7.86
早	早	黒曜石									1				1	0.83
											2.26				2.26	0.24
		流紋岩											1		1	0.83
													12.51		12.51	1.32
		頁岩									1				1	0.83
											9.08				9.08	0.96
	早 点数合計										3		1		4	3.13
	早 重量合計										11.34		12.51		23.85	2.52
早 点数合計											4		1		5	4.13
早 重量合計											11.34		12.51		23.85	2.52
全体の点数合計			9	4	5	4	3	9	5	3	50	21	4		121	100.00
全体の重量合計			36.76	63.87	9.18	59.7	41.56	76.1	35.45	29.51	70.54	163.34	19.75	19.63	339.34	947.60	100.00
点数組成比(%)			7.44	3.31	2.48	2.48	0.83	7.44	3.31	2.48	41.32	17.36	3.31	0.83		100.00	
重量組成比(%)			3.88	6.74	0.97	6.30	4.39	8.04	3.74	4.17	7.45	17.27	2.08	2.07	35.81	100.00	

（上段：点数，下段：重量（g））

3　文化層各節

（1）第Ⅰ文化層

Ⅸc層下部に生活面をもつと推定される。第１ブロックが相当する。

①第１ブロック（第９～14図，第３・４・14・15表，図版４・14）

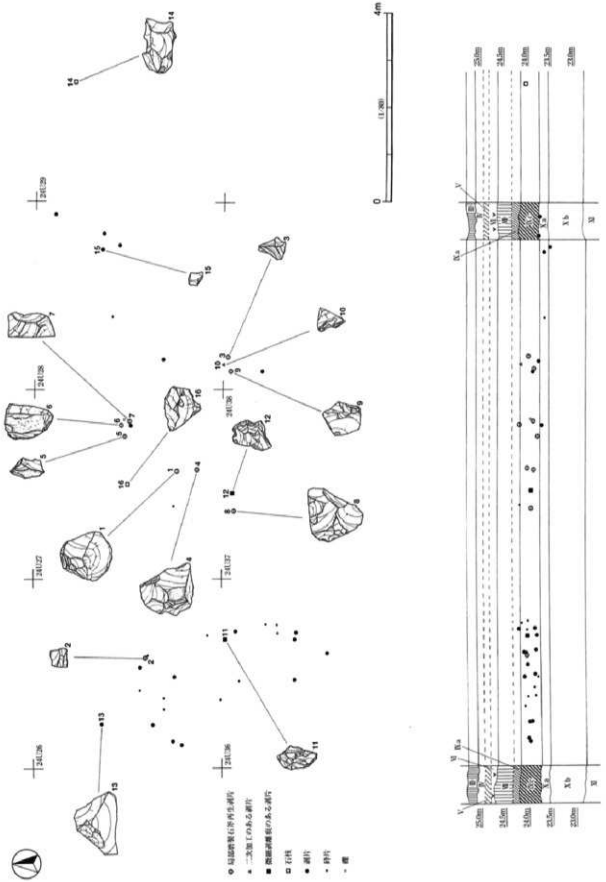
出土状況　平面分布は，約14m×５mの長楕円形の範囲にやや密集して分布している。分布状況を詳しくみると，西部と中央部と東部の３か所の集中地点がみられる。出土層位は，Ⅹb層上部～Ⅸa層下部にかけて出土している。Ⅸc層下部に集中しており，Ⅸc層下部に生活面をもつ文化層と推定できる。

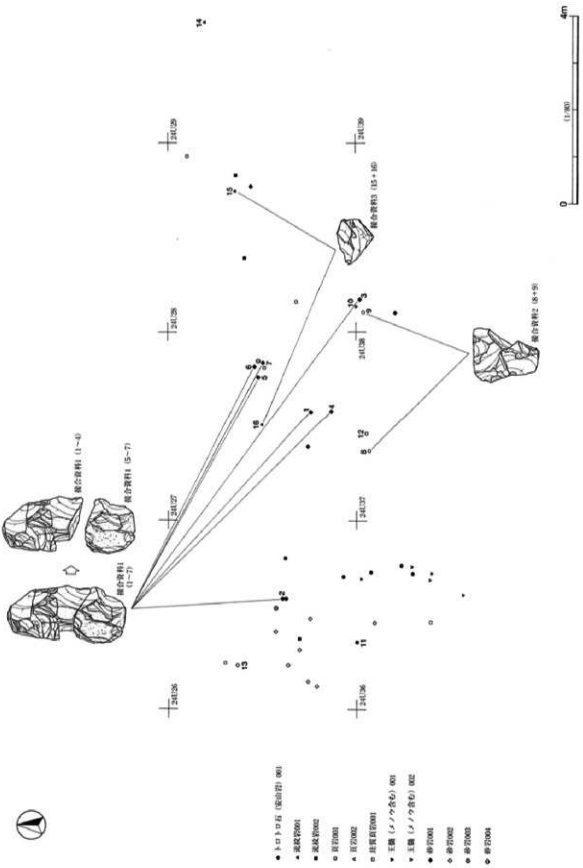
器種別分布（第９図）の特徴として３か所の集中地点の傾向をみると次のことがあげられる。西部においては，剥片・砕片が密集しており，中央部に近い西側に局部磨製石斧再生剥片１点，微細剥離痕のある剥片１点が出土している。中央部においては，局部磨製石斧再生剥片が８点まとまって出土していることが特筆される特徴である。そのほかに，二次加工のある剥片１点，微細剥離痕のある剥片１点が出土して

第４表　第Ⅰ文化層　第１ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	局部磨製石斧再生剥片	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	石核	剥片	砕片	礫	総計	組成比（%）
Ⅰ	1	トロトロ石(安山岩)	001					1 0.26	6 0.89		7 1.15	14.89 0.24
		トロトロ石(安山岩) 点数合計 トロトロ石(安山岩) 重量合計						1 0.26	6 0.89		7 1.15	14.89 0.24
		流紋岩	001				1 10.89	1 0.24			2 11.13	4.26 2.33
			002					1 2.15	2 0.43		3 2.58	6.38 0.54
		流紋岩 点数合計 流紋岩 重量合計					1 10.89	2 2.39	2 0.43		5 13.71	10.64 2.87
		頁岩	001	2 26.24							2 26.24	4.26 5.48
			002				1 13.91				1 13.91	2.13 2.91
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計		2 26.24			1 13.91				3 40.15	6.38 8.39
		珪質頁岩	001			1 2.7		4 3.81	1 0.04		6 6.55	12.77 1.37
		珪質頁岩 点数合計 珪質頁岩 重量合計				1 2.7		4 3.81	1 0.04		6 6.55	12.77 1.37
		玉髄(メノウ含む)	001			1 1.87					1 1.87	2.13 0.39
			002		1 1.4			3 1.59	1 0.1		5 3.09	10.64 0.65
		玉髄(メノウ含む) 点数合計 玉髄(メノウ含む) 重量合計			1 1.4	1 1.87		3 1.59	1 0.1		6 4.96	12.77 1.04
		砂岩	001	7 49.86				2 2.4	1 0.9		10 53.16	21.28 11.11
			002					5 16.68	3 0.62		8 17.302	17.02 3.62
			003					1 2.19			1 2.19	2.13 0.46
			004							1 339.34	1 339.34	2.13 70.92
		砂岩 点数合計 砂岩 重量合計		7 49.86				8 21.272	4 1.52	1 339.34	20 411.992	42.55 86.10
Ⅰ 点数合計				9	1	2	2	18	14	1	47	100.00
Ⅰ 重量合計				76.1	1.4	4.57	24.8	29.32	2.98	339.34	478.51	100.00
点数組成比(%)				19.15	2.13	4.26	4.26	38.30	29.79	2.13	100.00	
重量組成比(%)				15.90	0.29	0.96	5.18	6.13	0.62	70.92	100.00	

［上段：点数、下段：重量(g)］


241129
241128
241127
241126
241136
241137
241138
0
(1:30)
4m
25.0m
24.5m
24.0m
23.5m
23.0m
Ⅴ
Ⅳ
Ⅲ
Ⅱ
Ⅰ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ
Ⅲ-a
Ⅲ-b
Ⅲ-c
Ⅲ-d
Ⅲ-e
Ⅲ-f
Ⅲ-g
Ⅲ-h
Ⅲ-i
Ⅲ-j
Ⅲ-k
Ⅲ-l
Ⅲ-m
Ⅲ-n
Ⅲ-o
Ⅲ-p
Ⅲ-q
Ⅲ-r
Ⅲ-s
Ⅲ-t
Ⅲ-u
Ⅲ-v
Ⅲ-w
Ⅲ-x
Ⅲ-y
Ⅲ-z
Ⅲ-aa
Ⅲ-ab
Ⅲ-ac
Ⅲ-ad
Ⅲ-ae
Ⅲ-af
Ⅲ-ag
Ⅲ-ah
Ⅲ-ai
Ⅲ-aj
Ⅲ-ak
Ⅲ-al
Ⅲ-am
Ⅲ-an
Ⅲ-ao
Ⅲ-ap
Ⅲ-aq
Ⅲ-ar
Ⅲ-as
Ⅲ-at
Ⅲ-au
Ⅲ-av
Ⅲ-aw
Ⅲ-ax
Ⅲ-ay
Ⅲ-az
Ⅲ-ba
Ⅲ-bb
Ⅲ-bc
Ⅲ-bd
Ⅲ-be
Ⅲ-bf
Ⅲ-bg
Ⅲ-bh
Ⅲ-bi
Ⅲ-bj
Ⅲ-bk
Ⅲ-bl
Ⅲ-bm
Ⅲ-bn
Ⅲ-bo
Ⅲ-bp
Ⅲ-bq
Ⅲ-br
Ⅲ-bs
Ⅲ-bt
Ⅲ-bu
Ⅲ-bv
Ⅲ-bw
Ⅲ-bx
Ⅲ-by
Ⅲ-bz
Ⅲ-ca
Ⅲ-cb
Ⅲ-cc
Ⅲ-cd
Ⅲ-ce
Ⅲ-cf
Ⅲ-cg
Ⅲ-ch
Ⅲ-ci
Ⅲ-cj
Ⅲ-ck
Ⅲ-cl
Ⅲ-cm
Ⅲ-cn
Ⅲ-co
Ⅲ-cp
Ⅲ-cq
Ⅲ-cr
Ⅲ-cs
Ⅲ-ct
Ⅲ-cu
Ⅲ-cv
Ⅲ-cw
Ⅲ-cx
Ⅲ-cy
Ⅲ-cz
Ⅲ-da
Ⅲ-db
Ⅲ-dc
Ⅲ-dd
Ⅲ-de
Ⅲ-df
Ⅲ-dg
Ⅲ-dh
Ⅲ-di
Ⅲ-dj
Ⅲ-dk
Ⅲ-dl
Ⅲ-dm
Ⅲ-dn
Ⅲ-do
Ⅲ-dp
Ⅲ-dq
Ⅲ-dr
Ⅲ-ds
Ⅲ-dt
Ⅲ-du
Ⅲ-dv
Ⅲ-dw
Ⅲ-dx
Ⅲ-dy
Ⅲ-dz
Ⅲ-ea
Ⅲ-eb
Ⅲ-ec
Ⅲ-ed
Ⅲ-ee
Ⅲ-ef
Ⅲ-eg
Ⅲ-eh
Ⅲ-ei
Ⅲ-ej
Ⅲ-ek
Ⅲ-el
Ⅲ-em
Ⅲ-en
Ⅲ-eo
Ⅲ-ep
Ⅲ-eq
Ⅲ-er
Ⅲ-es
Ⅲ-et
Ⅲ-eu
Ⅲ-ev
Ⅲ-ew
Ⅲ-ex
Ⅲ-ey
Ⅲ-ez
Ⅲ-fa
Ⅲ-fb
Ⅲ-fc
Ⅲ-fd
Ⅲ-fe
Ⅲ-ff
Ⅲ-fg
Ⅲ-fh
Ⅲ-fi
Ⅲ-fj
Ⅲ-fk
Ⅲ-fl
Ⅲ-fm
Ⅲ-fn
Ⅲ-fo
Ⅲ-fp
Ⅲ-fq
Ⅲ-fr
Ⅲ-fs
Ⅲ-ft
Ⅲ-fu
Ⅲ-fv
Ⅲ-fw
Ⅲ-fx
Ⅲ-fy
Ⅲ-fz
Ⅲ-ga
Ⅲ-gb
Ⅲ-gc
Ⅲ-gd
Ⅲ-ge
Ⅲ-gf
Ⅲ-gg
Ⅲ-gh
Ⅲ-gi
Ⅲ-gj
Ⅲ-gk
Ⅲ-gl
Ⅲ-gm
Ⅲ-gn
Ⅲ-go
Ⅲ-gp
Ⅲ-gq
Ⅲ-gr
Ⅲ-gs
Ⅲ-gt
Ⅲ-gu
Ⅲ-gv
Ⅲ-gw
Ⅲ-gx
Ⅲ-gy
Ⅲ-gz
Ⅲ-ha
Ⅲ-hb
Ⅲ-hc
Ⅲ-hd
Ⅲ-he
Ⅲ-hf
Ⅲ-hg
Ⅲ-hh
Ⅲ-hi
Ⅲ-hj
Ⅲ-hk
Ⅲ-hl
Ⅲ-hm
Ⅲ-hn
Ⅲ-ho
Ⅲ-hp
Ⅲ-hq
Ⅲ-hr
Ⅲ-hs
Ⅲ-ht
Ⅲ-hu
Ⅲ-hv
Ⅲ-hw
Ⅲ-hx
Ⅲ-hy
Ⅲ-hz
Ⅲ-ia
Ⅲ-ib
Ⅲ-ic
Ⅲ-id
Ⅲ-ie
Ⅲ-if
Ⅲ-ig
Ⅲ-ih
Ⅲ-ii
Ⅲ-ij
Ⅲ-ik
Ⅲ-il
Ⅲ-im
Ⅲ-in
Ⅲ-io
Ⅲ-ip
Ⅲ-iq
Ⅲ-ir
Ⅲ-is
Ⅲ-it
Ⅲ-iu
Ⅲ-iv
Ⅲ-iw
Ⅲ-ix
Ⅲ-iy
Ⅲ-iz
Ⅲ-ja
Ⅲ-jb
Ⅲ-jc
Ⅲ-jd
Ⅲ-je
Ⅲ-jf
Ⅲ-jg
Ⅲ-jh
Ⅲ-ji
Ⅲ-jj
Ⅲ-jk
Ⅲ-jl
Ⅲ-jm
Ⅲ-jn
Ⅲ-jo
Ⅲ-jp
Ⅲ-jq
Ⅲ-jr
Ⅲ-js
Ⅲ-jt
Ⅲ-ju
Ⅲ-jv
Ⅲ-jw
Ⅲ-jx
Ⅲ-jy
Ⅲ-jz
Ⅲ-ka
Ⅲ-kb
Ⅲ-kc
Ⅲ-kd
Ⅲ-ke
Ⅲ-kf
Ⅲ-kg
Ⅲ-kh
Ⅲ-ki
Ⅲ-kj
Ⅲ-kk
Ⅲ-kl
Ⅲ-km
Ⅲ-kn
Ⅲ-ko
Ⅲ-kp
Ⅲ-kq
Ⅲ-kr
Ⅲ-ks
Ⅲ-kt
Ⅲ-ku
Ⅲ-kv
Ⅲ-kw
Ⅲ-kx
Ⅲ-ky
Ⅲ-kz
Ⅲ-la
Ⅲ-lb
Ⅲ-lc
Ⅲ-ld
Ⅲ-le
Ⅲ-lf
Ⅲ-lg
Ⅲ-lh
Ⅲ-li
Ⅲ-lj
Ⅲ-lk
Ⅲ-ll
Ⅲ-lm
Ⅲ-ln
Ⅲ-lo
Ⅲ-lp
Ⅲ-lq
Ⅲ-lr
Ⅲ-ls
Ⅲ-lt
Ⅲ-lu
Ⅲ-lv
Ⅲ-lw
Ⅲ-lx
Ⅲ-ly
Ⅲ-lz
Ⅲ-ma
Ⅲ-mb
Ⅲ-mc
Ⅲ-md
Ⅲ-me
Ⅲ-mf
Ⅲ-mg
Ⅲ-mh
Ⅲ-mi
Ⅲ-mj
Ⅲ-mk
Ⅲ-ml
Ⅲ-mm
Ⅲ-mn
Ⅲ-mo
Ⅲ-mp
Ⅲ-mq
Ⅲ-mr
Ⅲ-ms
Ⅲ-mt
Ⅲ-mu
Ⅲ-mv
Ⅲ-mw
Ⅲ-mx
Ⅲ-my
Ⅲ-mz
Ⅲ-na
Ⅲ-nb
Ⅲ-nc
Ⅲ-nd
Ⅲ-ne
Ⅲ-nf
Ⅲ-ng
Ⅲ-nh
Ⅲ-ni
Ⅲ-nj
Ⅲ-nk
Ⅲ-nl
Ⅲ-nm
Ⅲ-nn
Ⅲ-no
Ⅲ-np
Ⅲ-nq
Ⅲ-nr
Ⅲ-ns
Ⅲ-nt
Ⅲ-nu
Ⅲ-nv
Ⅲ-nw
Ⅲ-nx
Ⅲ-ny
Ⅲ-nz
Ⅲ-oa
Ⅲ-ob
Ⅲ-oc
Ⅲ-od
Ⅲ-oe
Ⅲ-of
Ⅲ-og
Ⅲ-oh
Ⅲ-oi
Ⅲ-oj
Ⅲ-ok
Ⅲ-ol
Ⅲ-om
Ⅲ-on
Ⅲ-oo
Ⅲ-op
Ⅲ-oq
Ⅲ-or
Ⅲ-os
Ⅲ-ot
Ⅲ-ou
Ⅲ-ov
Ⅲ-ow
Ⅲ-ox
Ⅲ-oy
Ⅲ-oz
Ⅲ-pa
Ⅲ-pb
Ⅲ-pc
Ⅲ-pd
Ⅲ-pe
Ⅲ-pf
Ⅲ-pg
Ⅲ-ph
Ⅲ-pi
Ⅲ-pj
Ⅲ-pk
Ⅲ-pl
Ⅲ-pm
Ⅲ-pn
Ⅲ-po
Ⅲ-pp
Ⅲ-pq
Ⅲ-pr
Ⅲ-ps
Ⅲ-pt
Ⅲ-pu
Ⅲ-pv
Ⅲ-pw
Ⅲ-px
Ⅲ-py
Ⅲ-pz
Ⅲ-qa
Ⅲ-qb
Ⅲ-qc
Ⅲ-qd
Ⅲ-qe
Ⅲ-qf
Ⅲ-qg
Ⅲ-qh
Ⅲ-qi
Ⅲ-qj
Ⅲ-qk
Ⅲ-ql
Ⅲ-qm
Ⅲ-qn
Ⅲ-qo
Ⅲ-qp
Ⅲ-qq
Ⅲ-qr
Ⅲ-qs
Ⅲ-qt
Ⅲ-qu
Ⅲ-qv
Ⅲ-qw
Ⅲ-qx
Ⅲ-qy
Ⅲ-qz
Ⅲ-ra
Ⅲ-rb
Ⅲ-rc
Ⅲ-rd
Ⅲ-re
Ⅲ-rf
Ⅲ-rg
Ⅲ-rh
Ⅲ-ri
Ⅲ-rj
Ⅲ-rk
Ⅲ-rl
Ⅲ-rm
Ⅲ-rn
Ⅲ-ro
Ⅲ-rp
Ⅲ-rq
Ⅲ-rr
Ⅲ-rs
Ⅲ-rt
Ⅲ-ru
Ⅲ-rv
Ⅲ-rw
Ⅲ-rx
Ⅲ-ry
Ⅲ-rz
Ⅲ-sa
Ⅲ-sb
Ⅲ-sc
Ⅲ-sd
Ⅲ-se
Ⅲ-sf
Ⅲ-sg
Ⅲ-sh
Ⅲ-si
Ⅲ-sj
Ⅲ-sk
Ⅲ-sl
Ⅲ-sm
Ⅲ-sn
Ⅲ-so
Ⅲ-sp
Ⅲ-sq
Ⅲ-sr
Ⅲ-ss
Ⅲ-st
Ⅲ-su
Ⅲ-sv
Ⅲ-sw
Ⅲ-sx
Ⅲ-sy
Ⅲ-sz
Ⅲ-ta
Ⅲ-tb
Ⅲ-tc
Ⅲ-td
Ⅲ-te
Ⅲ-tf
Ⅲ-tg
Ⅲ-th
Ⅲ-ti
Ⅲ-tj
Ⅲ-tk
Ⅲ-tl
Ⅲ-tm
Ⅲ-tn
Ⅲ-to
Ⅲ-tp
Ⅲ-tq
Ⅲ-tr
Ⅲ-ts
Ⅲ-tt
Ⅲ-tu
Ⅲ-tv
Ⅲ-tw
Ⅲ-tx
Ⅲ-ty
Ⅲ-tz
Ⅲ-ua
Ⅲ-ub
Ⅲ-uc
Ⅲ-ud
Ⅲ-ue
Ⅲ-uf
Ⅲ-ug
Ⅲ-uh
Ⅲ-ui
Ⅲ-uj
Ⅲ-uk
Ⅲ-ul
Ⅲ-um
Ⅲ-un
Ⅲ-uo
Ⅲ-up
Ⅲ-uq
Ⅲ-ur
Ⅲ-us
Ⅲ-ut
Ⅲ-uu
Ⅲ-uv
Ⅲ-uw
Ⅲ-ux
Ⅲ-uy
Ⅲ-uz
Ⅲ-va
Ⅲ-vb
Ⅲ-vc
Ⅲ-vd
Ⅲ-ve
Ⅲ-vf
Ⅲ-vg
Ⅲ-vh
Ⅲ-vi
Ⅲ-vj
Ⅲ-vk
Ⅲ-vl
Ⅲ-vm
Ⅲ-vn
Ⅲ-vo
Ⅲ-vp
Ⅲ-vq
Ⅲ-vr
Ⅲ-vs
Ⅲ-vt
Ⅲ-vu
Ⅲ-vv
Ⅲ-vw
Ⅲ-vx
Ⅲ-vy
Ⅲ-vz
Ⅲ-wa
Ⅲ-wb
Ⅲ-wc
Ⅲ-wd
Ⅲ-we
Ⅲ-wf
Ⅲ-wg
Ⅲ-wh
Ⅲ-wi
Ⅲ-wj
Ⅲ-wk
Ⅲ-wl
Ⅲ-wm
Ⅲ-wn
Ⅲ-wo
Ⅲ-wp
Ⅲ-wq
Ⅲ-wr
Ⅲ-ws
Ⅲ-wt
Ⅲ-wu
Ⅲ-wv
Ⅲ-ww
Ⅲ-wx
Ⅲ-wy
Ⅲ-wz
Ⅲ-xa
Ⅲ-xb
Ⅲ-xc
Ⅲ-xd
Ⅲ-xe
Ⅲ-xf
Ⅲ-xg
Ⅲ-xh
Ⅲ-xi
Ⅲ-xj
Ⅲ-xk
Ⅲ-xl
Ⅲ-xm
Ⅲ-xn
Ⅲ-xo
Ⅲ-xp
Ⅲ-xq
Ⅲ-xr
Ⅲ-xs
Ⅲ-xt
Ⅲ-xu
Ⅲ-xv
Ⅲ-xw
Ⅲ-xx
Ⅲ-xy
Ⅲ-xz
Ⅲ-ya
Ⅲ-yb
Ⅲ-yc
Ⅲ-yd
Ⅲ-ye
Ⅲ-yf
Ⅲ-yg
Ⅲ-yh
Ⅲ-yi
Ⅲ-yj
Ⅲ-yk
Ⅲ-yl
Ⅲ-ym
Ⅲ-yn
Ⅲ-yo
Ⅲ-yp
Ⅲ-yq
Ⅲ-yr
Ⅲ-ys
Ⅲ-yt
Ⅲ-yu
Ⅲ-yv
Ⅲ-yw
Ⅲ-yx
Ⅲ-yy
Ⅲ-yz
Ⅲ-za
Ⅲ-zb
Ⅲ-zc
Ⅲ-zd
Ⅲ-ze
Ⅲ-zf
Ⅲ-zg
Ⅲ-zh
Ⅲ-zi
Ⅲ-zj
Ⅲ-zk
Ⅲ-zl
Ⅲ-zm
Ⅲ-zn
Ⅲ-zo
Ⅲ-zp
Ⅲ-zq
Ⅲ-zr
Ⅲ-zs
Ⅲ-zt
Ⅲ-zu
Ⅲ-zv
Ⅲ-zw
Ⅲ-zx
Ⅲ-zy
Ⅲ-zz
Ⅲ-aaa
Ⅲ-aab
Ⅲ-aac
Ⅲ-aad
Ⅲ-aae
Ⅲ-aaf
Ⅲ-aag
Ⅲ-aah
Ⅲ-aai
Ⅲ-aaj
Ⅲ-aak
Ⅲ-aal
Ⅲ-aam
Ⅲ-aan
Ⅲ-aao
Ⅲ-aap
Ⅲ-aaq
Ⅲ-aar
Ⅲ-aas
Ⅲ-aat
Ⅲ-aau
Ⅲ-aav
Ⅲ-aaw
Ⅲ-aax
Ⅲ-aay
Ⅲ-aaz
Ⅲ-aba
Ⅲ-abb
Ⅲ-abc
Ⅲ-abd
Ⅲ-abe
Ⅲ-abf
Ⅲ-abg
Ⅲ-abh
Ⅲ-abi
Ⅲ-abj
Ⅲ-abk
Ⅲ-abl
Ⅲ-abm
Ⅲ-abn
Ⅲ-abo
Ⅲ-abp
Ⅲ-abq
Ⅲ-abr
Ⅲ-abs
Ⅲ-abt
Ⅲ-abu
Ⅲ-abv
Ⅲ-abw
Ⅲ-abx
Ⅲ-aby
Ⅲ-abz
Ⅲ-aca
Ⅲ-acb
Ⅲ-acc
Ⅲ-acd
Ⅲ-ace
Ⅲ-acf
Ⅲ-acg
Ⅲ-ach
Ⅲ-aci
Ⅲ-acj
Ⅲ-ack
Ⅲ-acl
Ⅲ-acm
Ⅲ-acn
Ⅲ-aco
Ⅲ-acp
Ⅲ-acq
Ⅲ-acr
Ⅲ-acs
Ⅲ-act
Ⅲ-acu
Ⅲ-acv
Ⅲ-acw
Ⅲ-acx
Ⅲ-acy
Ⅲ-acz
Ⅲ-ada
Ⅲ-adb
Ⅲ-adc
Ⅲ-add
Ⅲ-ade
Ⅲ-adf
Ⅲ-adg
Ⅲ-adh
Ⅲ-adi
Ⅲ-adj
Ⅲ-adk
Ⅲ-adl
Ⅲ-adm
Ⅲ-adn
Ⅲ-ado
Ⅲ-adp
Ⅲ-adq
Ⅲ-adr
Ⅲ-ads
Ⅲ-adt
Ⅲ-adu
Ⅲ-adv
Ⅲ-adw
Ⅲ-adx
Ⅲ-ady
Ⅲ-adz
Ⅲ-aea
Ⅲ-aeb
Ⅲ-aec
Ⅲ-aed
Ⅲ-aee
Ⅲ-aef
Ⅲ-aeg
Ⅲ-aeh
Ⅲ-aei
Ⅲ-aej
Ⅲ-aek
Ⅲ-ael
Ⅲ-aem
Ⅲ-aen
Ⅲ-aeo
Ⅲ-aep
Ⅲ-aeq
Ⅲ-aer
Ⅲ-aes
Ⅲ-aet
Ⅲ-aeu
Ⅲ-aev
Ⅲ-aew
Ⅲ-aex
Ⅲ-aey
Ⅲ-aez
Ⅲ-afa
Ⅲ-afb
Ⅲ-afc
Ⅲ-afd
Ⅲ-afe
Ⅲ-aff
Ⅲ-afg
Ⅲ-afh
Ⅲ-afi
Ⅲ-afj
Ⅲ-afk
Ⅲ-afl
Ⅲ-afm
Ⅲ-afn
Ⅲ-afo
Ⅲ-afp
Ⅲ-afq
Ⅲ-afr
Ⅲ-afs
Ⅲ-aft
Ⅲ-afu
Ⅲ-afv
Ⅲ-afw
Ⅲ-afx
Ⅲ-afy
Ⅲ-afz
Ⅲ-aga
Ⅲ-agb
Ⅲ-agc
Ⅲ-agd
Ⅲ-age
Ⅲ-agf
Ⅲ-agg
Ⅲ-agh
Ⅲ-agi
Ⅲ-agj
Ⅲ-agk
Ⅲ-agl
Ⅲ-agm
Ⅲ-agn
Ⅲ-ago
Ⅲ-agp
Ⅲ-agq
Ⅲ-agr
Ⅲ-ags
Ⅲ-agt
Ⅲ-agu
Ⅲ-agv
Ⅲ-agw
Ⅲ-agx
Ⅲ-agy
Ⅲ-agz
Ⅲ-aha
Ⅲ-ahb
Ⅲ-ahc
Ⅲ-ahd
Ⅲ-ahe
Ⅲ-ahf
Ⅲ-ahg
Ⅲ-ahh
Ⅲ-ahi
Ⅲ-ahj
Ⅲ-ahk
Ⅲ-ahl
Ⅲ-ahm
Ⅲ-ahn
Ⅲ-aho
Ⅲ-ahp
Ⅲ-ahq
Ⅲ-ahr
Ⅲ-ahs
Ⅲ-aht
Ⅲ-ahu
Ⅲ-ahv
Ⅲ-ahw
Ⅲ-ahx
Ⅲ-ahy
Ⅲ-ahz
Ⅲ-aia
Ⅲ-aib
Ⅲ-aic
Ⅲ-aid
Ⅲ-aie
Ⅲ-aif
Ⅲ-aig
Ⅲ-aih
Ⅲ-aii
Ⅲ-aij
Ⅲ-aik
Ⅲ-ail
Ⅲ-aim
Ⅲ-ain
Ⅲ-aio
Ⅲ-aip
Ⅲ-aiq
Ⅲ-air
Ⅲ-ais
Ⅲ-ait
Ⅲ-aiu
Ⅲ-aiv
Ⅲ-aiw
Ⅲ-aix
Ⅲ-aiy
Ⅲ-aiz
Ⅲ-aja
Ⅲ-ajb
Ⅲ-ajc
Ⅲ-ajd
Ⅲ-aje
Ⅲ-ajf
Ⅲ-ajg
Ⅲ-ajh
Ⅲ-aji
Ⅲ-ajj
Ⅲ-ajk
Ⅲ-ajl
Ⅲ-ajm
Ⅲ-ajn
Ⅲ-ajo
Ⅲ-ajp
Ⅲ-ajq
Ⅲ-ajr
Ⅲ-ajs
Ⅲ-ajt
Ⅲ-aju
Ⅲ-ajv
Ⅲ-ajw
Ⅲ-ajx
Ⅲ-ajy
Ⅲ-ajz
Ⅲ-aka
Ⅲ-akb
Ⅲ-akc
Ⅲ-akd
Ⅲ-ake
Ⅲ-akf
Ⅲ-akg
Ⅲ-akh
Ⅲ-aki
Ⅲ-akj
Ⅲ-akk
Ⅲ-akl
Ⅲ-akm
Ⅲ-akn
Ⅲ-ako
Ⅲ-akp
Ⅲ-akq
Ⅲ-akr
Ⅲ-aks
Ⅲ-akt
Ⅲ-aku
Ⅲ-akv
Ⅲ-akw
Ⅲ-akx
Ⅲ-aky
Ⅲ-akz
Ⅲ-ala
Ⅲ-alb
Ⅲ-alc
Ⅲ-ald
Ⅲ-ale
Ⅲ-alf
Ⅲ-alg
Ⅲ-alh
Ⅲ-ali
Ⅲ-alj
Ⅲ-alk
Ⅲ-all
Ⅲ-alm
Ⅲ-aln
Ⅲ-alo
Ⅲ-alp
Ⅲ-alq
Ⅲ-alr
Ⅲ-als
Ⅲ-alt
Ⅲ-alu
Ⅲ-alv
Ⅲ-alw
Ⅲ-alx
Ⅲ-aly
Ⅲ-alz
Ⅲ-ama
Ⅲ-amb
Ⅲ-amc
Ⅲ-amd
Ⅲ-ame
Ⅲ-amf
Ⅲ-amg
Ⅲ-amh
Ⅲ-ami
Ⅲ-amj
Ⅲ-amk
Ⅲ-aml
Ⅲ-amm
Ⅲ-amn
Ⅲ-amo
Ⅲ-amp
Ⅲ-amq
Ⅲ-amr
Ⅲ-ams
Ⅲ-amt
Ⅲ-amu
Ⅲ-amv
Ⅲ-amw
Ⅲ-amx
Ⅲ-amy
Ⅲ-amz
Ⅲ-ana
Ⅲ-anb
Ⅲ-anc
Ⅲ-and
Ⅲ-ane
Ⅲ-anf
Ⅲ-ang
Ⅲ-anh
Ⅲ-ani
Ⅲ-anj
Ⅲ-ank
Ⅲ-anl
Ⅲ-anm
Ⅲ-ann
Ⅲ-ano
Ⅲ-anp
Ⅲ-anq
Ⅲ-anr
Ⅲ-ans
Ⅲ-ant
Ⅲ-anu
Ⅲ-anv
Ⅲ-anw
Ⅲ-anx
Ⅲ-any
Ⅲ-anz
Ⅲ-aoa
Ⅲ-aob
Ⅲ-aoc
Ⅲ-aod
Ⅲ-aoe
Ⅲ-aof
Ⅲ-aog
Ⅲ-aoh
Ⅲ-aoi
Ⅲ-aoj
Ⅲ-aok
Ⅲ-aol
Ⅲ-aom
Ⅲ-aon
Ⅲ-aoo
Ⅲ-aop
Ⅲ-aoq
Ⅲ-aor
Ⅲ-aos
Ⅲ-aot
Ⅲ-aou
Ⅲ-aov
Ⅲ-aow
Ⅲ-aox
Ⅲ-aoy
Ⅲ-aoz
Ⅲ-apa
Ⅲ-apb
Ⅲ-apc
Ⅲ-apd
Ⅲ-ape
Ⅲ-apf
Ⅲ-apg
Ⅲ-aph
Ⅲ-api
Ⅲ-apj
Ⅲ-apk
Ⅲ-apl
Ⅲ-apm
Ⅲ-apn
Ⅲ-apo
Ⅲ-app
Ⅲ-apq
Ⅲ-apr
Ⅲ-aps
Ⅲ-apt
Ⅲ-apu
Ⅲ-apv
Ⅲ-apw
Ⅲ-apx
Ⅲ-apy
Ⅲ-apz
Ⅲ-aqa
Ⅲ-aqb
Ⅲ-aqc
Ⅲ-aqd
Ⅲ-aqe
Ⅲ-aqf
Ⅲ-aqg
Ⅲ-aqh
Ⅲ-aqi
Ⅲ-aqj
Ⅲ-aqk
Ⅲ-aql
Ⅲ-aqm
Ⅲ-aqn
Ⅲ-aqo
Ⅲ-aqp
Ⅲ-aqq
Ⅲ-aqr
Ⅲ-aqs
Ⅲ-aqt
Ⅲ-aqu
Ⅲ-aqv
Ⅲ-aqw
Ⅲ-aqx
Ⅲ-aqy
Ⅲ-aqz
Ⅲ-ara
Ⅲ-arb
Ⅲ-arc
Ⅲ-ard
Ⅲ-are
Ⅲ-arf
Ⅲ-arg
Ⅲ-arh
Ⅲ-ari
Ⅲ-arj
Ⅲ-ark
Ⅲ-arl
Ⅲ-arm
Ⅲ-arn
Ⅲ-aro
Ⅲ-arp
Ⅲ-arq
Ⅲ-arr
Ⅲ-ars
Ⅲ-art
Ⅲ-aru
Ⅲ-arv
Ⅲ-arw
Ⅲ-arx
Ⅲ-ary
Ⅲ-arz
Ⅲ-asa
Ⅲ-asb
Ⅲ-asc
Ⅲ-asd
Ⅲ-ase
Ⅲ-asf
Ⅲ-asg
Ⅲ-ash
Ⅲ-asi
Ⅲ-asj
Ⅲ-ask
Ⅲ-asl
Ⅲ-asm
Ⅲ-asn
Ⅲ-aso
Ⅲ-asp
Ⅲ-asq
Ⅲ-asr
Ⅲ-ass
Ⅲ-ast
Ⅲ-asu
Ⅲ-asv
Ⅲ-asw
Ⅲ-asx
Ⅲ-asy
Ⅲ-asz
Ⅲ-ata
Ⅲ-atb
Ⅲ-atc
Ⅲ-atd
Ⅲ-ate
Ⅲ-atf
Ⅲ-atg
Ⅲ-ath
Ⅲ-ati
Ⅲ-atj
Ⅲ-atk
Ⅲ-atl
Ⅲ-atm
Ⅲ-atn
Ⅲ-ato
Ⅲ-atp
Ⅲ-atq
Ⅲ-atr
Ⅲ-ats
Ⅲ-att
Ⅲ-atu
Ⅲ-atv
Ⅲ-atw
Ⅲ-atx
Ⅲ-aty
Ⅲ-atz
Ⅲ-aua
Ⅲ-aub
Ⅲ-auc
Ⅲ-aud
Ⅲ-aue
Ⅲ-auf
Ⅲ-aug
Ⅲ-auh
Ⅲ-aui
Ⅲ-auj
Ⅲ-auk
Ⅲ-aul
Ⅲ-aum
Ⅲ-aun
Ⅲ-auo
Ⅲ-aup
Ⅲ-auq
Ⅲ-aur
Ⅲ-aus
Ⅲ-aut
Ⅲ-auu
Ⅲ-auv
Ⅲ-auw
Ⅲ-aux
Ⅲ-auy
Ⅲ-auz
Ⅲ-ava
Ⅲ-avb
Ⅲ-avc
Ⅲ-avd
Ⅲ-ave
Ⅲ-avf
Ⅲ-avg
Ⅲ-avh
Ⅲ-avi
Ⅲ-avj
Ⅲ-avk
Ⅲ-avl
Ⅲ-avm
Ⅲ-avn
Ⅲ-avo
Ⅲ-avp
Ⅲ-avq
Ⅲ-avr
Ⅲ-avs
Ⅲ-avt
Ⅲ-avu
Ⅲ-avv
Ⅲ-avw
Ⅲ-avx
Ⅲ-avy
Ⅲ-avz
Ⅲ-awa
Ⅲ-awb
Ⅲ-awc
Ⅲ-awd
Ⅲ-awe
Ⅲ-awf
Ⅲ-awg
Ⅲ-awh
Ⅲ-awi
Ⅲ-awj
Ⅲ-awk
Ⅲ-awl
Ⅲ-awm
Ⅲ-awn
Ⅲ-awo
Ⅲ-awp
Ⅲ-awq
Ⅲ-awr
Ⅲ-aws
Ⅲ-awt
Ⅲ-awu
Ⅲ-awv
Ⅲ-aww
Ⅲ-awx
Ⅲ-awy
Ⅲ-awz
Ⅲ-axa
Ⅲ-axb
Ⅲ-axc
Ⅲ-axd
Ⅲ-axe
Ⅲ-axf
Ⅲ-axg
Ⅲ-axh
Ⅲ-axi
Ⅲ-axj
Ⅲ-axk
Ⅲ-axl
Ⅲ-axm
Ⅲ-axn
Ⅲ-axo
Ⅲ-axp
Ⅲ-axq
Ⅲ-axr
Ⅲ-axs
Ⅲ-axt
Ⅲ-axu
Ⅲ-axv
Ⅲ-axw
Ⅲ-axx
Ⅲ-axy
Ⅲ-axz
Ⅲ-aya
Ⅲ-ayb
Ⅲ-ayc
Ⅲ-ayd
Ⅲ-aye
Ⅲ-ayf
Ⅲ-ayg
Ⅲ-ayh
Ⅲ-ayi
Ⅲ-ayj
Ⅲ-ayk
Ⅲ-ayl
Ⅲ-aym
Ⅲ-ayn
Ⅲ-ayo
Ⅲ-ayp
Ⅲ-ayq
Ⅲ-ayr
Ⅲ-ays
Ⅲ-ayt
Ⅲ-ayu
Ⅲ-ayv
Ⅲ-ayw
Ⅲ-ayx
Ⅲ-ayy
Ⅲ-ayz
Ⅲ-aza
Ⅲ-azb
Ⅲ-azc
Ⅲ-azd
Ⅲ-aze
Ⅲ-azf
Ⅲ-azg
Ⅲ-azh
Ⅲ-azi
Ⅲ-azj
Ⅲ-azk
Ⅲ-azl
Ⅲ-azm
Ⅲ-azn
Ⅲ-azo
Ⅲ-azp
Ⅲ-azq
Ⅲ-azr
Ⅲ-azs
Ⅲ-azt
Ⅲ-azu
Ⅲ-azv
Ⅲ-azw
Ⅲ-azx
Ⅲ-azy
Ⅲ-azz
Ⅲ-baa
Ⅲ-bab
Ⅲ-bac
Ⅲ-bad
Ⅲ-bae
Ⅲ-baf
Ⅲ-bag
Ⅲ-bah
Ⅲ-bai
Ⅲ-baj
Ⅲ-bak
Ⅲ-bal
Ⅲ-bam
Ⅲ-ban
Ⅲ-bao
Ⅲ-bap
Ⅲ-baq
Ⅲ-bar
Ⅲ-bas
Ⅲ-bat
Ⅲ-bau
Ⅲ-bav
Ⅲ-baw
Ⅲ-bax
Ⅲ-bay
Ⅲ-baz
Ⅲ-bba
Ⅲ-bbb
Ⅲ-bbc
Ⅲ-bbd
Ⅲ-bbe
Ⅲ-bbf
Ⅲ-bbg
Ⅲ-bbh
Ⅲ-bbi
Ⅲ-bbj
Ⅲ-bbk
Ⅲ-bbl
Ⅲ-bbm
Ⅲ-bbn
Ⅲ-bbo
Ⅲ-bbp
Ⅲ-bbq
Ⅲ-bbr
Ⅲ-bbs
Ⅲ-bbt
Ⅲ-bbu
Ⅲ-bbv
Ⅲ-bbw
Ⅲ-bbx
Ⅲ-bby
Ⅲ-bbz
Ⅲ-bca
Ⅲ-bcb
Ⅲ-bcc
Ⅲ-bcd
Ⅲ-bce
Ⅲ-bcf
Ⅲ-bcg
Ⅲ-bch
Ⅲ-bci
Ⅲ-bcj
Ⅲ-bck
Ⅲ-bcl
Ⅲ-bcm
Ⅲ-bcn
Ⅲ-bco
Ⅲ-bcp
Ⅲ-bcq
Ⅲ-bcr
Ⅲ-bcs
Ⅲ-bct
Ⅲ-bcu
Ⅲ-bcv
Ⅲ-bcw
Ⅲ-bcx
Ⅲ-bcy
Ⅲ-bcz
Ⅲ-bda
Ⅲ-bdb
Ⅲ-bdc
Ⅲ-bdd
Ⅲ-bde
Ⅲ-bdf
Ⅲ-bdg
Ⅲ-bdh
Ⅲ-bdi
Ⅲ-bdj
Ⅲ-bdk
Ⅲ-bdl
Ⅲ-bdm
Ⅲ-bdn
Ⅲ-bdo
Ⅲ-bdp
Ⅲ-bdq
Ⅲ-bdr
Ⅲ-bds
Ⅲ-bdt
Ⅲ-bdu
Ⅲ-bdv
Ⅲ-bdw
Ⅲ-bdx
Ⅲ-bdy
Ⅲ-bdz
Ⅲ-bea
Ⅲ-beb
Ⅲ-bec
Ⅲ-bed
Ⅲ-bee
Ⅲ-bef
Ⅲ-beg
Ⅲ-beh
Ⅲ-bei
Ⅲ-bej
Ⅲ-bek
Ⅲ-bel
Ⅲ-bem
Ⅲ-ben
Ⅲ-beo
Ⅲ-bep
Ⅲ-beq
Ⅲ-ber
Ⅲ-bes
Ⅲ-bet
Ⅲ-beu
Ⅲ-bev
Ⅲ-bew
Ⅲ-bex
Ⅲ-bey
Ⅲ-bez
Ⅲ-bfa
Ⅲ-bfb
Ⅲ-bfc
Ⅲ-bfd
Ⅲ-bfe
Ⅲ-bff
Ⅲ-bfg
Ⅲ-bfh
Ⅲ-bfi
Ⅲ-bfj
Ⅲ-bfk
Ⅲ-bfl
Ⅲ-bfm
Ⅲ-bfn
Ⅲ-bfo
Ⅲ-bfp
Ⅲ-bfq
Ⅲ-bfr
Ⅲ-bfs
Ⅲ-bft
Ⅲ-bfu
Ⅲ-bfv
Ⅲ-bfw
Ⅲ-bfx
Ⅲ-bfy
Ⅲ-bfz
Ⅲ-bga
Ⅲ-bgb
Ⅲ-bgc
Ⅲ-bgd
Ⅲ-bge
Ⅲ-bgf
Ⅲ-bgg
Ⅲ-bgh
Ⅲ-bgi
Ⅲ-bgj
Ⅲ-bgk
Ⅲ-bgl
Ⅲ-bgm
Ⅲ-bgn
Ⅲ-bgo
Ⅲ-bgp
Ⅲ-bgq
Ⅲ-bgr
Ⅲ-bgs
Ⅲ-bgt
Ⅲ-bgu
Ⅲ-bgv
Ⅲ-bgw
Ⅲ-bgx
Ⅲ-bgy
Ⅲ-bgz
Ⅲ-bha
Ⅲ-bhb
Ⅲ-bhc
Ⅲ-bhd
Ⅲ-bhe
Ⅲ-bhf



第10図　第Ⅰ文化層　第1ブロック母岩別分布図

おり，剥片・砕片が少数出土している。西部・東部に比べて，製品の出土する割合が非常に高い集中地点といえる。東部においては，石核１点と剥片４点が出土しており，製品は出土していない。このように，３か所の集中地点において，器種別分布にそれぞれ様相が異なることがあげられる。

母岩別分布（第10図）の特徴は，３か所の集中地点がみられるが，接合資料が３資料検出されており，接合資料１は西部と中央部で接合関係があり，接合資料２・３は中央部と東部で接合資料がある。これらのことから，比較的広い長楕円形の範囲に石器集中か所が，３か所みられるが，これらは同時期に形成されたといえる。ただし，集中地点ごとに，主体となる母岩がかなり明確に分かれる傾向がある。西部は，玉髄（メノウ含む）001・002，砂岩002が多くみられる。中央部は，砂岩001が多くみられる。東部は，流紋岩002が多くみられる。

出土遺物　総計47点出土した。母岩器種組成は，第４表のとおりである。

器種組成の特徴は，主要な器種が，接合した状態で局部磨製石斧が２個体（接合資料１と接合資料２）あり，局部磨製石斧を再生したものと思われるものが，接合資料１が７点，接合資料２が２点出土している。特に，接合資料１の資料は，１～７の７点が接合した状態で，ほぼ完形に近い状態まで復元できる資料である。本文化層を特徴付ける資料といえよう。

母岩組成の特徴は，５点以上の点数で構成されている母岩が，トロトロ石（安山岩）001，頁岩001，珪質頁岩001，玉髄（メノウ含む）002，砂岩001・002である。このように，比較的多くの点数で構成される母岩が，他の文化層に比べて多いことが特徴といえよう。特に，砂岩001は10点出土しているが，そのうち７点が接合しており，局部磨製石斧の完形に近い形にまで復元されている。残りの３点についても，接合はしていないが，局部磨製石斧の再生加工に関する資料と考えられる。

１～７は接合資料１である。接合した状態で，ほぼ完形の局部磨製石斧となっている。母岩は砂岩001であり，第４表のとおり10点で構成されており，その内７点が接合している。母岩構成点数が少ない割には，きわめて高い接合を示す。出土状況も，中央部の集中地点から大半が出土しており，西部の集中地点から２点出土している。これらのことから，本ブロックに，局部磨製石斧を完形品として持ち込み，目的は明確ではないが，再生加工，あるいは，目的的な剥片を剥離するために分割したものと思われる。このような接合資料であることから，１～７の接合した局部磨製石斧の状況の段階と１～７に再生(あるいは分割)した段階の２段階について詳細にみていくことにする。

まず，１～７の接合した状態は，自然面が表面下部と裏面左側面にみられ，自然面の研磨は非常に顕著である。残存している自然面の状況から，比較的厚みのない扁平な楕円形礫を素材としていることが観察される。調整加工や研磨痕や再生加工（分割剥離）の順序を順番に記載すると以下のとおりとなる。

①最初の段階の調整加工は，裏面右側から器体の約半分近くまで及ぶ大きな剥離と裏面左上部から幅広の平坦な剥離が行われている。

②裏面は，①の右側縁と左側縁からの調整加工と自然面は，平坦であり，研磨が非常に顕著である。剥離面と自然面の境界は研磨痕が顕著であり，剥離面の稜線が研磨によって丸まっている。

③下端部の表裏両面に非常に顕著に入念に研磨が施されており，刃部が形成されている。

④表面は，中央平坦面の下部の自然面が顕著に研磨されている。

⑤これらの調整加工・研磨の後に，裏面上部から階段状の剥離が施されている。

⑥表面右側縁は，右上部→中間部→下部の順番に調整加工が施されている。

⑦表面上端部に急角度の調整加工が施されている。

⑧表面左側縁は，再生加工が施されているので，局部磨製石斧の調整加工が明確ではないが，左側縁下部に急角度の調整加工が施されている。

以上①～⑧の順番に調整加工と研磨が行われている。ただし，①～④においては，研磨による調整がみられ，比較的大きな剥離面で構成されていることから，①～④の調整加工や研磨によって，局部磨製石斧が完成されたと思われる。その後の⑤～⑧においては，研磨による調整がみられず，調整加工も急角度で細かい加工が施されていることから，局部磨製石斧の再生加工が行われたものである可能性が高い。

これらをまとめると，①～④の段階を局部磨製石斧の製作段階。⑤～⑧を局部磨製石斧の再生加工段階。というように，二段階の工程に分かれると観察される。

次に，1～7の接合した状況の局部磨製石斧が，7個の局部磨製石斧再生剥片に剥離，あるいは，分割された順序を順番に記載すると以下のとおりとなる。

⑨表面左側縁上部は，裏面から剥離して，2が剥離されている。その際に，接合はしていないが，左側縁中間部が大きく剥離されている。

⑩続けて，表面左側縁下部からの調整加工の際に，1・3・4と5～7の二分割されている。

⑪2と5～7は，赤褐色に変色しており，火熱を受けた可能性が高い。1・3・4は火熱を受けた痕跡がみられない。5～7の接合した状態で，火熱を受けたものと思われる。

⑫1・3・4は，表面平坦面の上部から加撃を受けて，1と3・4に分割されている。

⑬3・4は左側縁から加撃され，3が剥離されている。

⑭5～7は刃部の中央部から加撃を受けて，6と5・7に分割されている。

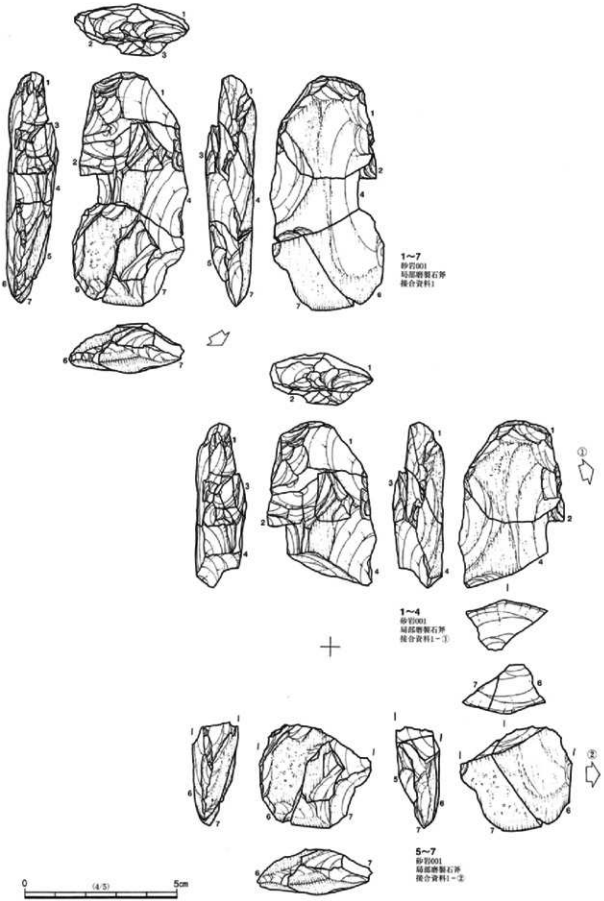
⑮5・7は右側縁から5が剥離されている。⑪～⑬の剥離と⑭・⑮の剥離は分割後の剥離なので，剥離順序の先後関係については，不明である。

以上⑨～⑮が，局部磨製石斧を再生・分割した剥離順序である。ここで注目されるものは，⑪で記載したように，被熱痕の有無がみられることである。2と5～7は被熱痕が有り，1・3・4は被熱痕が無い。特に，5～7は局部磨製石斧の刃部にあたる部位であり，被熱後においても，一時的に，刃部が機能していた可能性が推定される。

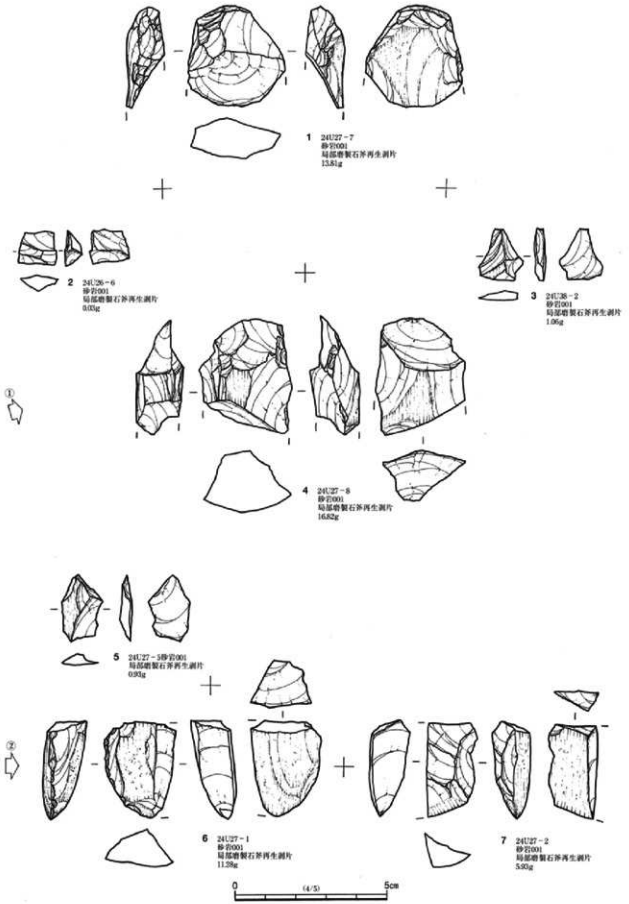
次に，1～7を個別に観察し，上述の⑨～⑮の剥離順序に対応させて記載することにする。

1は⑫の剥離に対応する。局部磨製石斧の頭部にあたる部位である。分割後には調整加工がみられない。2は再生・分割の初期段階の⑨の剥離に対応する。横長の小型剥片が剥離されている。火熱を受けている。3は⑬の剥離に対応する。不定形な小型の剥片である。4は⑫・⑬の剥離に対応する。1・3・4に分割された後に，1と4が剥離されており，残核として分類することも可能である。5は⑮の剥離に対応する。小型の不定形な剥片である。6は⑭の剥離に対応する。下端部に，局部磨製石斧の刃部が残存している。7は⑭・⑮の剥離に対応する。6と同様に，下端部に，局部磨製石斧の刃部が残存している。

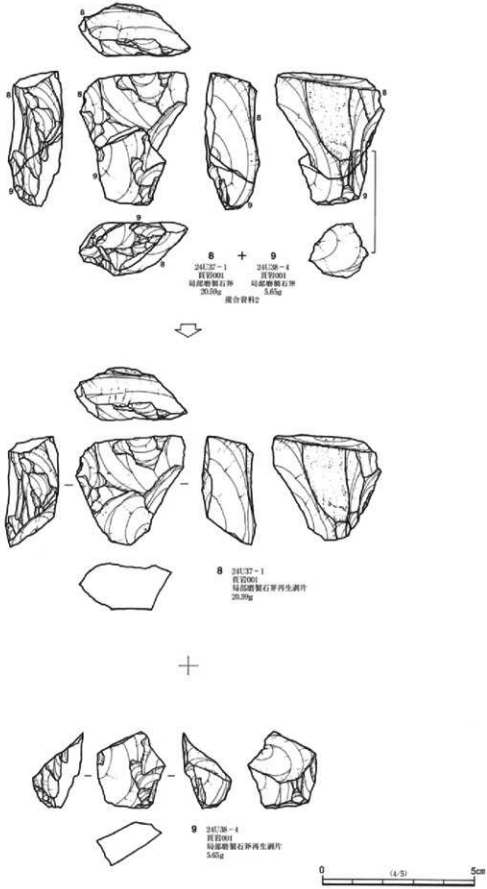
1～7は，いずれも，再生・分割後に，調整加工が施されていないことが特徴としてあげられる。これらの要因によれば，再生・分割された剥片であり，製品として機能したかどうかは明確で無い。ただし，局部磨製石斧として機能していた石器を再生・分割している目的については，分割された石器のいずれかの部位に，局部磨製石斧として機能していた刃部を持つ石器がみられることから，分割した状況でも，以前の刃部を保持していることに注目すると，分割された1～7は調整加工が無いものの，それ自体が石器



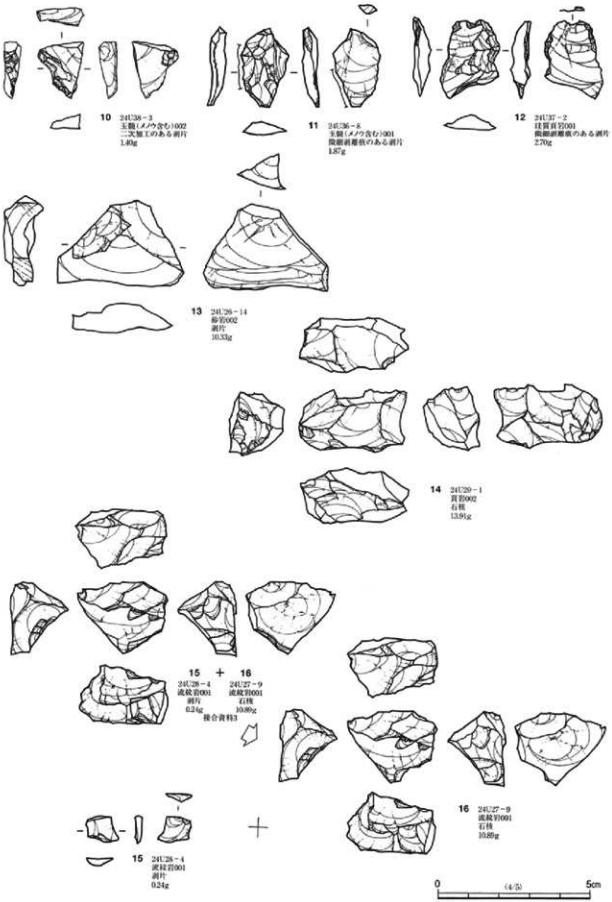
第11図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器（1）



第12図　第Ⅰ文化層　第１ブロック出土石器（２）



第13図　第Ⅰ文化層　第１ブロック出土石器（３）



第14図　第Ⅰ文化層　第1ブロック出土石器（4）

として機能していた可能性が高いことが推定される。特に，分割された剥片自体が石器である可能性が高いものは，1・4・6・7があげられよう。

8＋9は接合資料2である。8＋9の状態で，局部磨製石斧の基部の部位が残存したものであると考えられる。裏面中央部は，顕著に研磨されている。剥離面を研磨したものと思われるが，自然面の可能性もある。表面の凸面は明確ではないが，やや光沢があり，研磨によるものである可能性がある。局部磨製石斧の再生加工と思われるものが，裏面右側縁に，表裏両面から階段状の粗い調整加工が施されている。その後，上端部裏面から大きく分割され，8＋9に分割されている。分割後，裏面左側縁下部から，大きく剥離した際に，8と9に分割されている。8と9に分割された後には，調整加工が施されていない。

10は二次加工のある剥片である。幅広の剥片を素材として，右側縁を折断した後に，打面部側を折断している。その後，左側縁に粗い調整加工が階段状に施され，裏面右側縁上部に折断面から細かい加工が施されている。

11・12は微細剥離痕のある剥片である。11は背面中央部にポジティヴ面をもつ縦長剥片を素材として，表面左側縁と腹面左側縁下部に微細剥離痕がみられる。12は線状打面から剥離された縦長剥片を素材としている。背面左側にポジティヴ面をもつ。表面左側縁上部と腹面左側縁に微細剥離痕がみられる。

13は剥片である。平坦打面から剥離された横長剥片である。背面左側縁に頭部調整がみられる。

14は石核である。分割した厚みのある剥片を素材としているものと思われる。裏面左下端部と右下端部から貝殻状の小型の剥片を剥離した後に，裏面左上端部と右上端部から貝殻状の小型の剥片が剥離されている。次に，表面上端部を打面として固定して，4枚程度の小型の剥片を剥離した後に，表面下端部から幅広の剥片を剥離している。

15＋16は接合資料3である。分割した厚みのある剥片を素材として，表面上面左側から3枚程度の小型の剥片を剥離した後に，表面上面を打面として，幅広の剥片が剥離されている。その後頭部調整を数回行っているが，剥片は剥離されていない。最後に，表面右下端部から貝殻状の小型の剥片である15が剥離されている。16は石核である。

（2）第Ⅱ文化層

Ⅸc層上部に生活面をもつと推定される。調査区中央部のやや東側に分布しており，南東に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第2ブロックが相当する。

①第2ブロック（第15～19図，第3・5・15表，図版4・14）

出土状況　平面分布は，約8m×6mの楕円形の範囲から散漫に分布している。分布状況を詳しくみると，南東部と北西部と南西部の3か所の集中地点がみられる。出土層位は，Ⅸc層下部～Ⅵ層下部にかけて出土している。遺物が比較的上下幅をもって出土しているが，石器の集中する層位は，Ⅸc層上部であることから，Ⅸc層上部に生活面をもつ文化層と推定できる。

器種別分布（第15図）の特徴を集中地点ごとにみると次のような傾向がみられる。南東部においては，台形様石器が2点近接して出土しており，剥片が5点南西部にみられる。北西部においては，北側では剥片がまとまって出土しており，南西部の集中地点に近接して，台形様石器が2点出土している。南西部においては，台形様石器が2点，砕片が4点出土しており，他の集中地点に比べて砕片の割合が高い傾向にある。3か所の集中地点においては，台形様石器が2点ずつ出土しているが，形態的にはそれぞれ異なる

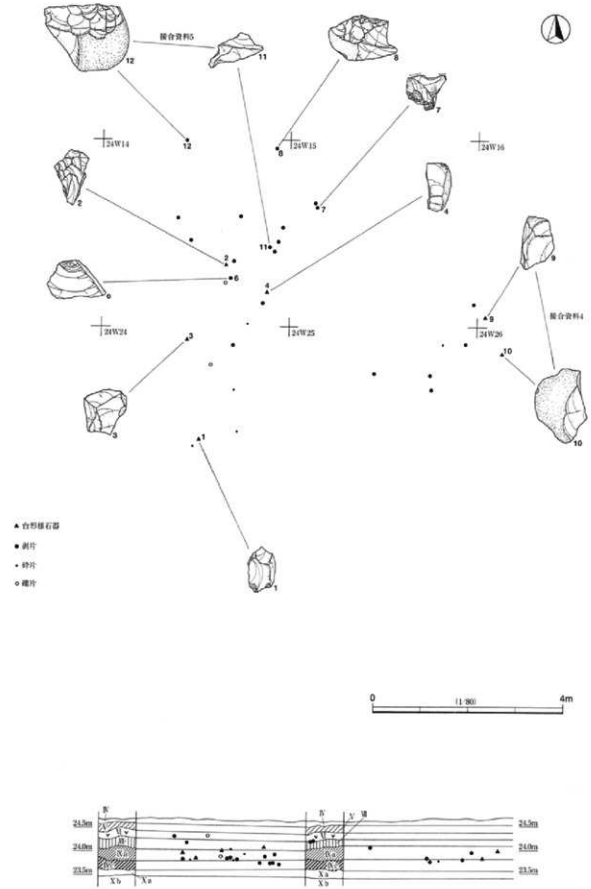
傾向がある。

母岩別分布（第16図）の特徴を集中地点ごとにみると次のような傾向がみられる。南東部においては，ガラス質黒色安山岩001が２点出土しているが，２点とも台形様石器であり接合している（接合資料４）。

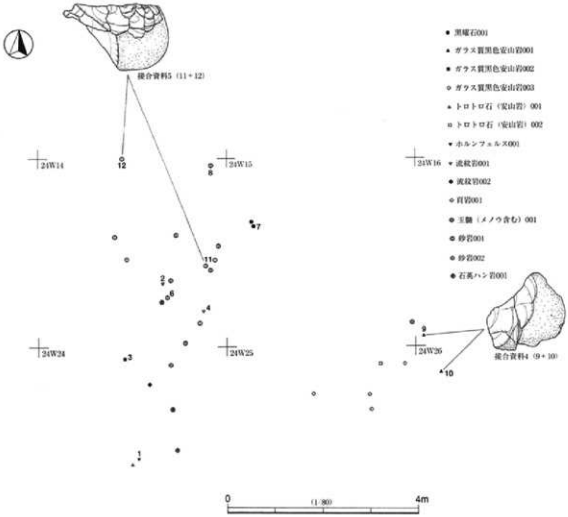
第５表　第Ⅱ文化層　第２ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	台形様石器	微細剥離ある剥片・板のあ	剥片	砕片	礫片	総計	組成比（%）
Ⅱ	2	黒曜石	001		1 3.23	1 0.28			2 3.51	5.88 2.12
		黒曜石 点数合計 黒曜石 重量合計			1 3.23	1 0.28			2 3.51	5.88 2.12
		ガラス質黒色安山岩	001	3 40.86					3 40.86	8.82 24.65
			002	1 8.31					1 8.31	2.94 5.01
			003			1 1.37			1 1.37	2.94 0.83
		ガラス質黒色安山岩 点数合計 ガラス質黒色安山岩 重量合計		4 49.17		1 1.37			5 50.54	14.71 30.49
		トロトロ石（安山岩）	001				1 0.1		1 0.1	2.94 0.06
			002				1 0.05		1 0.05	2.94 0.03
		トロトロ石（安山岩）点数合計 トロトロ石（安山岩）重量合計					2 0.15		2 0.15	5.88 0.09
		ホルンフェルス	001	1 2.68					1 2.68	2.94 1.62
		ホルンフェルス 点数合計 ホルンフェルス 重量合計		1 2.68					1 2.68	2.94 1.62
		流紋岩	001	2 12.02					2 12.02	5.88 7.25
			002					1 0.75	1 0.75	2.94 0.45
		流紋岩 点数合計 流紋岩 重量合計		2 12.02				1 0.75	3 12.77	8.82 7.70
		頁岩	001			3 1.36			3 1.36	8.82 0.82
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計				3 1.36			3 1.36	8.82 0.82
		玉髄（メノウ含む）	001			1 0.29			1 0.29	2.94 0.17
		玉髄（メノウ含む）点数合計 玉髄（メノウ含む）重量合計				1 0.29			1 0.29	2.94 0.17
		砂岩	001			12 86.6	1 0.21		13 86.81	38.24 52.36
			002			1 0.64			1 0.64	2.94 0.39
		砂岩 点数合計 砂岩 重量合計				13 87.24	1 0.21		14 87.45	41.18 52.75
		石英ハン岩	001				2 0.68	1 6.35	3 7.03	8.82 4.24
		石英ハン岩 点数合計 石英ハン岩 重量合計					2 0.68	1 6.35	3 7.03	8.82 4.24
Ⅱ 点数合計				7	1	19	5	2	34	100.00
Ⅱ 重量合計				63.87	3.23	90.54	1.04	7.1	165.78	100.00
点数組成比（%）				20.59	2.94	55.88	14.71	5.88	100.00	
重量組成比（%）				38.53	1.95	54.61	0.63	4.28	100.00	

［上段：点数、下段：重量（g）］



第15図　第Ⅱ文化層　第2ブロック器種別分布図



第16図　第Ⅱ文化層　第２ブロック母岩別分布図

頁岩001が西側に分布している。北西部においては，砂岩001が本集中地点において，大半を占め，２点接合している接合資料５がこの母岩で構成されている。これらのことから，砂岩001を持ち込んで，北西部において石器製作を行った可能性が高い。南西部においては，砂岩001が北側にややまとまって出土しており，石英ハン岩が全体に広がっている。台形様石器は，２点出土しているが，いずれも単独母岩であることから，製品として搬入されたものと思われる。接合資料がみられない。

出土遺物　総計34点出土した。母岩器種組成は，第５表のとおりである。

器種組成の特徴は，台形様石器７点，微細剥離痕のある剥片１点，剥片19点，砕片５点，礫片２点で構成されている。台形様石器の占める割合が高いことが，特徴としてあげられる。剥片・砕片の占める割合が高いが，石核は本ブロックでは出土していない。

母岩組成の特徴は，砂岩001が13点で構成されており，北西部の集中地点にまとまって出土している。このほかに，複数で構成されている母岩は黒曜石001，ガラス質黒色安山岩001，流紋岩001，頁岩001，石英

ハン岩001であるが，いずれも2・3点の少量で構成されるものである。これ以外の大半の母岩は，単独母岩であり，搬入品であると思われる。これらのことから，砂岩001は，本ブロックにおいて，石器製作をした可能性が高い。これ以外の母岩は，本ブロックにおいては石器製作を行った可能性が低く，搬入されたものと思われる。

1～5は台形様石器である。全体形状は，素材がそれぞれ異なることから，バラエティーに富む。調整加工の特徴は，片側縁を折断し，基部に調整加工が施されるという共通した点がみられる。

1は厚みのない横長の剥片を素材としている。背面右側にポジティヴ面を有する。素材の打面部側にあたる背面左側縁に背面側から，粗い調整加工が連続的に施されている。表面下部には腹面側から細かい調整加工が施されている。2は厚みのある幅広の剥片を素材として，右側縁と左側縁を折断により成形加工している。その後，左側縁の折断面を打面として，粗い階段状の剥離を数回行っている。裏面左側縁上部と右側縁上部には，平坦な調整加工が施されている。3は幅広の剥片を素材としている。背面右側にポジティヴ面を有する。表面左側縁に折断し，裏面右上部から器体の奥まで入るような折断によって成形している。その後，右側縁には腹面から粗い調整加工が連続的に施されており，腹面下端部に腹面側から加工が施されている。4は厚みのある剥片を素材としている。背面右側に自然面を残している。背面左側縁を急角度に折断して成形している。その後，腹面下端部から打瘤部を除去するような調整加工が施されている。表面上端部には，微細剥離痕が連続的にみられる。5は背面に自然面を大きく残した幅広の剥片を素材としている。背面右側縁を背面側から急角度に折断して成形している。素材の打面部にあたる腹面下端部は，打瘤部を除去するようなやや平坦な調整加工が施された後に，背面左側縁下部に腹面側から急角度の粗い調整加工が階段状に施されている。

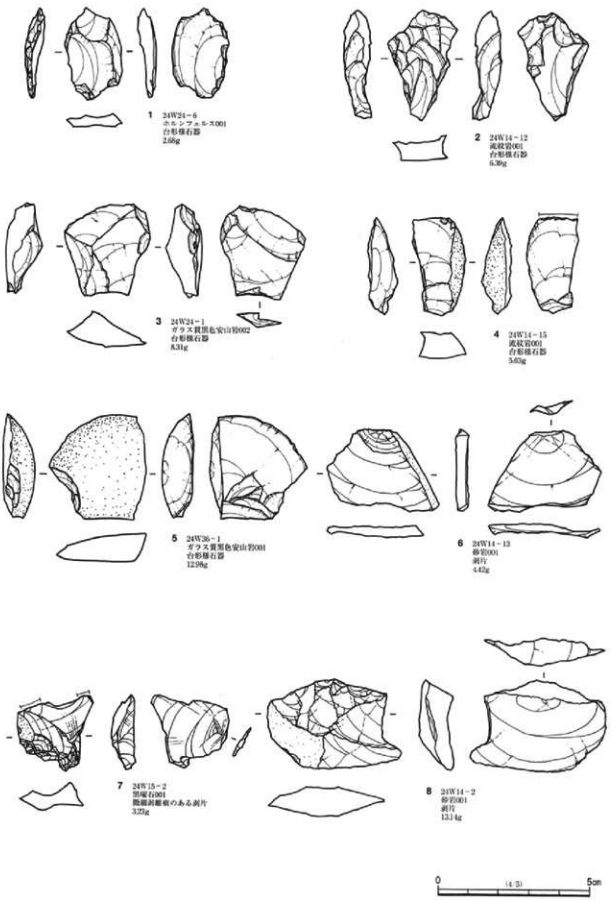
6は幅の狭い平坦打面から剥離された横長剥片である。末端部は折断されている。

7は微細剥離痕のある剥片である。良質の黒曜石を用いている。頭部調整が顕著に行われており，幅の狭い打面から不定形な剥片が剥離されている。背面上部はポジティヴ面を有する。ポジティヴ面と腹面末端部とで形成された鋭角な縁辺部に微細剥離痕がみられる。

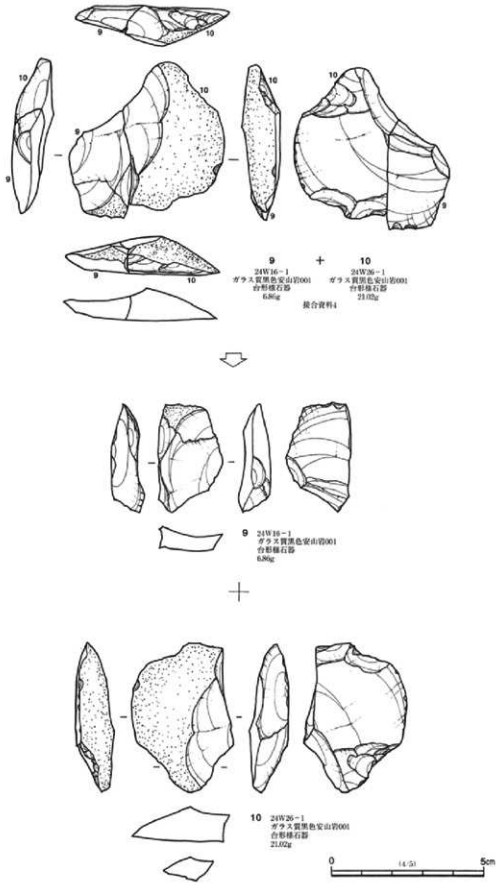
8は頭部調整を顕著に行い，幅広の平坦打面から剥離された横長剥片である。右側縁は折断されている。

9＋10は接合資料4である。台形様石器が2点接合した資料であり，台形様石器の製作過程をうかがえる良好な接合資料である。9＋10の状態において，背面に自然面を残した横長剥片を素材としている。腹面左上部から平坦な剥離を行った後に，腹面右側面上部から幅広の剥片を剥離した際に，9と10が分割されている。分割後に，9と10はさらに調整加工が施されており，台形様石器が製作されている。9は腹面左側縁に部分加工が施されている。上部には微細剥離痕がみられる。10は腹面上部に粗い調整加工が施され，腹面右側面下部に平坦な細かい調整加工が施されている。腹面右側縁には，微細剥離痕がみられる。

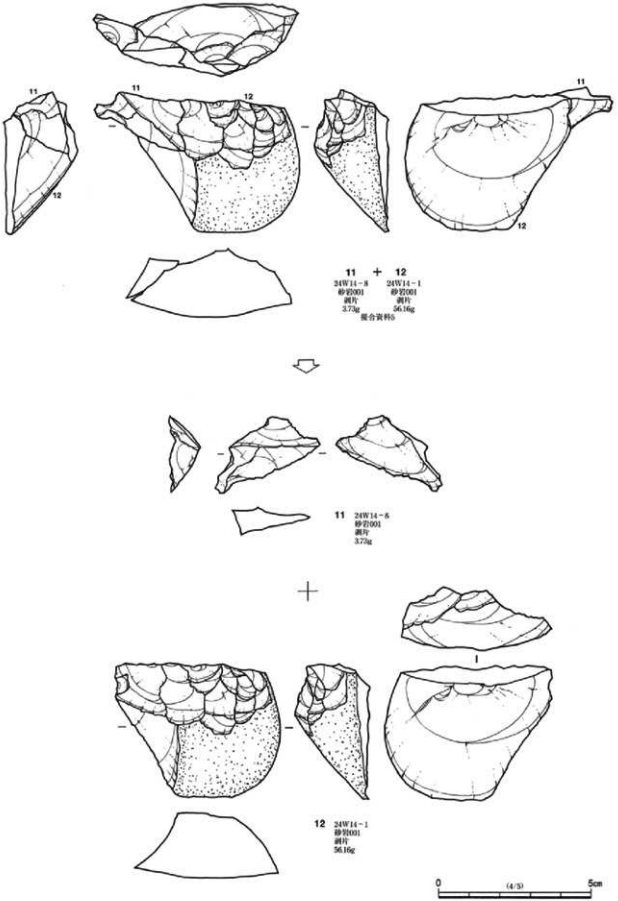
11＋12は接合資料5である。分割面と思われる大きな剥離面を打面として，3回程度の粗い打面調整を行った後に，頭部調整を頻繁に行っている。11は頭部調整の際に剥離された剥片である。12は背面右下に自然面を大きく残した厚みのある横長剥片である。



第17図　第Ⅱ文化層　第2ブロック出土石器（1）



第18図　第Ⅱ文化層　第２ブロック出土石器（２）



第19図　第Ⅱ文化層　第２ブロック出土石器（３）

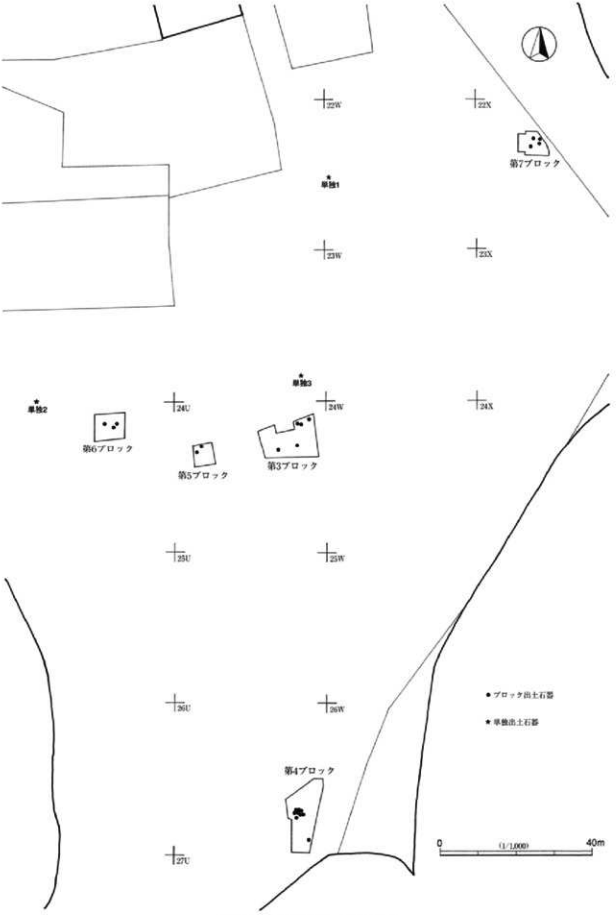
（3）第Ⅲ文化層

Ⅶ層～Ⅵ層に生活面を持つと推定される。ただし，出土層位は，各ブロックにおいて，集中する層位が若干異なる。第３～６ブロックの４か所のブロックと単独出土１～３が相当する。第Ⅲ文化層の遺物出土状況は，第20図のとおりである。調査区中央部の台地平坦面から第３・５・６ブロックが近接して分布している。単独出土１～３は，第３・５・６ブロックの周辺に分布している。調査区南部の南東に緩やかに傾斜する斜面に第４ブロックが，他のブロックから離れた地点に分布する。第３・５・６ブロックは散漫

第６表　第Ⅲ文化層　石材器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	ナイフ形石器	楔形石器	彫器	敲石	一次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅲ	3	頁岩						1			1	3.45
								19.45			19.45	9.52
									1		1	3.45
									2.41		2.41	1.18
								1			1	3.45
		頁岩 点数合計						1.36			1.46	0.71
		頁岩 重量合計						2	1		3	10.34
								20.91	2.41		23.32	11.41
		硬質頁岩	1								1	3.45
			2.19								2.19	1.07
								1			1	3.45
								9.51			9.51	4.65
					1						1	3.45
					23.55						23.55	11.52
		硬質頁岩 点数合計	1		1			1			3	10.34
		硬質頁岩 重量合計	2.19		23.55			9.51			35.25	17.24
		砂岩								1	1	3.45
										1.12	1.12	0.55
	3 点数合計		1		1			3	1	1	7	24.14
	3 重量合計		2.19		23.55			30.42	2.41	1.12	59.69	29.20
	4	黒曜石			1						1	3.45
					11.5						11.5	5.63
		硬質頁岩	2						1		3	10.34
			10.98						0.91		11.89	5.82
			2						2	1	5	17.24
			5.5						8.61	5.62	19.73	9.65
		硬質頁岩 点数合計	4						3	1	8	27.59
		硬質頁岩 重量合計	16.48						9.52	5.62	31.62	15.47
	4 点数合計		4		1				3	1	9	31.03
	4 重量合計		16.48		11.5				9.52	5.62	43.12	21.09
	5	硬質頁岩	1								1	3.45
			6.53								6.53	3.19
			1								1	3.45
			0.89								0.89	0.44
		硬質頁岩 点数合計	2								2	6.90
		硬質頁岩 重量合計	7.42								7.42	3.63
	5 点数合計		2								2	6.90
	5 重量合計		7.42								7.42	3.63
	6	黒曜石			1		1	1	1		4	13.79
					15.65		13.03	1.31	0.72		30.71	15.02
	6 点数合計				1		1	1	1		4	13.79
	6 重量合計				15.65		13.03	1.31	0.72		30.71	15.02
	7	流紋岩		1							1	3.45
				2.87							2.87	1.40
		玉髄（メノウ含む）		1							1	3.45
				2.78							2.78	1.36
		安山岩							1		1	3.45
									1.32		1.32	0.65
		頁岩		1							1	3.45
				3.53							3.53	1.73
	7 点数合計			3					1		4	13.79
	7 重量合計			9.18					1.32		10.50	5.14
	単	黒曜石					1				1	3.45
							6.41				6.41	3.14
		硬質頁岩	1								1	3.45
			5								5	2.45
		石英岩				1					1	3.45
						41.56					41.56	20.33
	単 点数合計		1			1	1				3	10.34
	単 重量合計		5			41.56	6.41				52.97	25.91
Ⅲ 点数合計			8	3	3	1	2	4	6	2	29	100.00
Ⅲ 重量合計			31.09	9.18	50.7	41.56	19.44	31.73	13.97	6.74	204.41	100.00
点数組成比（%）			27.59	10.34	10.34	3.45	6.90	13.79	20.69	6.90	100.00	
重量組成比（%）			15.21	4.49	24.80	20.33	9.51	15.52	6.83	3.30	100.00	

［上段：点数，下段：重量（g）］



第20図　第Ⅲ文化層　遺物分布図

に分布しており，第４ブロックはやや密集して分布している。第Ⅲ文化層をブロック別に分布状況をみると，比較的小範囲に散漫に分布するという傾向がある。

第Ⅲ文化層の石材器種組成は第６表のとおりである。第Ⅲ文化層全体で，29点出土している。第３ブロックが７点，第４ブロックが９点，第５ブロックが２点，第６ブロックが４点，第７ブロックが４点であり，各ブロックともに少量で構成されることが特徴としてあげられる。器種組成は，ナイフ形石器８点，楔形石器３点，彫器３点，敲石１点，二次加工のある剥片２点，微細剥離痕のある剥片４点，剥片６点，砕片２点である。出土点数が少ないが，ナイフ形石器（28%），楔形石器（10%），彫器（10%）の製品の占める割合が高い。石材組成は，チョコレート色をした硬質頁岩14点（48%），頁岩３点（10%），黒曜石６点（21%）で，これらの良質な石材が23点（79%）で構成されるという特徴がある。第２表でみられるように，他の文化層と比較すると，本文化層は，製品と良質の石材の割合が極めて高いことが大きな特徴となっている。

①第３ブロック（第21～23図，第３・６・７・16表，図版４・14）

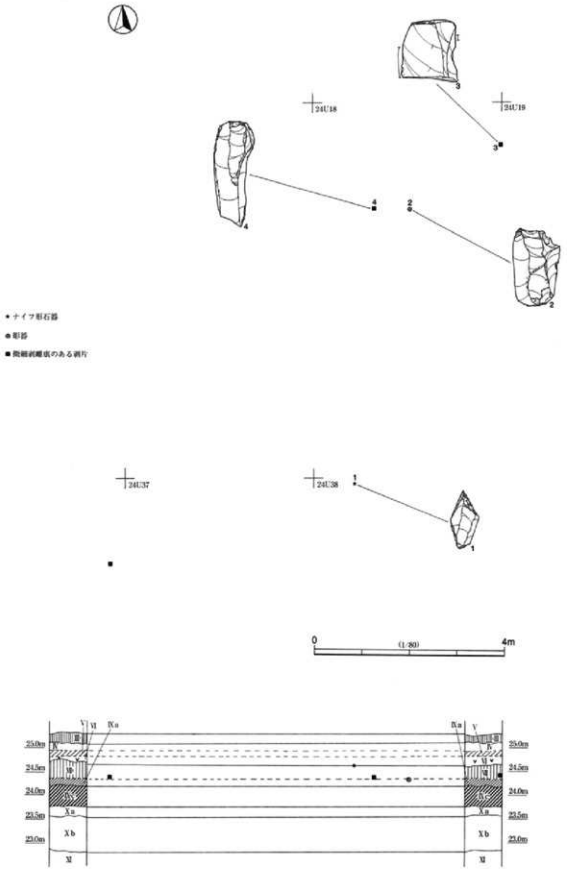
出土状況　平面分布は，約12m×２mの楕円形の範囲から散漫に分布している。分布状況を詳細にみると，北東部と南西部に２か所の集中地点がみられる。出土層位は，Ⅶ層下部～Ⅵ層下部にかけて出土しており，Ⅶ層に集中する。Ⅶ層に生活面があると推定される。

器種別分布（第21図）の特徴は，北東部においては，彫器１点，微細剥離痕のある剥片２点出土している。南西部においては，ナイフ形石器１点，微細剥離痕のある剥片１点が出土している。

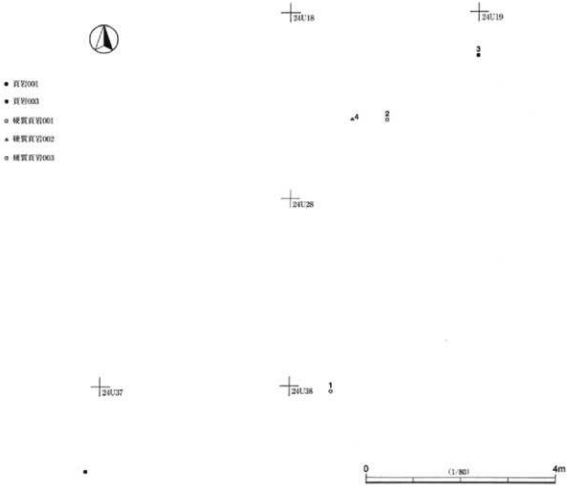
第７表　第Ⅲ文化層　第３ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	彫器	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅲ	3	頁岩	001			1 19.45			1 19.45	14.29 32.59
			002				1 2.41		1 2.41	14.29 4.04
			003			1 1.46			1 1.46	14.29 2.45
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計				2 20.91	1 2.41		3 23.32	42.86 39.07
		硬質頁岩	001	1 2.19					1 2.19	14.29 3.67
			002			1 9.51			1 9.51	14.29 15.93
			003		1 23.55				1 23.55	14.29 39.45
		硬質頁岩 点数合計 硬質頁岩 重量合計		1 2.19	1 23.55	1 9.51			3 35.25	42.86 59.06
		砂岩	001					1 1.12	1 1.12	14.29 1.88
		砂岩 点数合計 砂岩 重量合計						1 1.12	1 1.12	14.29 1.88
全体の点数合計				1	1	3	1	1	7	100.00
全体の重量合計				2.19	23.55	30.42	2.41	1.12	59.69	100.00
点数組成比(%)				14.29	14.29	42.86	14.29	14.29	100.00	
重量組成比(%)				3.67	39.45	50.96	4.04	1.88	100.00	

[上段:点数、下段:重量(g)]



第21図　第Ⅲ文化層　第３ブロック器種別分布図



第22図　第Ⅲ文化層　第３ブロック母岩別分布図

母岩別分布（第22図）の特徴は，総計７点出土しているが，すべて単独母岩であり，製品であることから，本ブロックに，搬入されたものと思われる。

出土遺物　総計７点出土した。母岩器種組成は，第７表のとおりである。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器１点，彫器１点，微細剥離痕のある剥片３点，剥片１点，砕片１点である。製品の占める割合が高い。

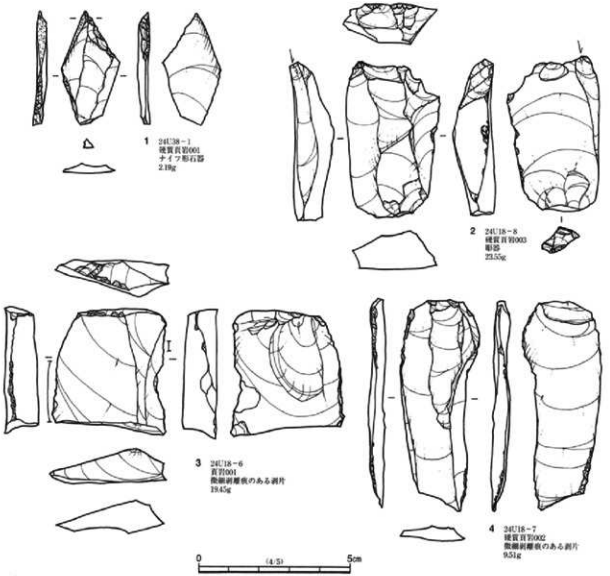
母岩組成の特徴は，すべて単独母岩であることが特徴としてあげられる。石材は，頁岩３点，チョコレート色した硬質頁岩３点，砂岩１点である。頁岩や硬質頁岩の良質な石材が大半を占めている。

１は単設打面から剥離されたと思われえる石刃を素材としている。素材をやや斜めに用いており，打面部側は折断されている。右側縁上部と左側縁下部に急角度のブランティング加工が施されている。特に先端部のブランティング加工は入念に施されている。素材の縁辺は，左側縁上部と右側縁下部に残されている。全体形状は菱形の形状を呈する。

2はチョコレート色した良質の硬質頁岩を用いている。頭部調整と打面調整が頻繁に行われた大型の石刃を素材としている。背面構成から，石刃は両設打面の石核から剥離されたものであることが観察できる。石核の大きさは，かなり大きいと推定され，石刃が量産されたことがうかがえる。右側縁に大型の石刃のときに機能したときの痕跡と思われる微細剥離痕が連続的にみられる。剥片の末端部に鋸歯状の急角度の調整加工が施されており，縁辺部には細かい調整加工が施されている。この調整加工に注目して，石刃の端部に調整加工が施された掻器として識別することも可能である。これらの調整加工の後に，最終調整として，裏面右側縁上部の一条の樋状剥離が施されている。樋状剥離が施された打面付近には，さらに微細剥離痕がみられる。この樋状剥離が最終剥離であることから，器種認定を彫器として捉えた。

2は上述のとおり，リダクションが行われていることがうかがえ，いわゆる「下総型石刃再生技法」によるものである。もう一度，リダクションの過程をまとめると以下のとおりとなる。

①両設打面の石刃石核から剥離された大型の石刃を刃器として使用して，素材の縁辺部に連続的な微細剥離痕が形成される段階。



第23図　第Ⅲ文化層　第3ブロック出土石器

②石刃の末端部を急角度の鋸歯状の加工を施し，縁辺部においては細かい調整加工を施して掻器が製作されている。

③掻器として製作された石刃の縁辺部に調整加工された部位から樋状剥離が行われて，最終的には彫器として機能している。

3・4は微細剥離痕のある剥片。3は幅広で平坦剥離面で，打面調整が行われた打面から剥離された幅広の石刃を素材として，左側縁中部と右側縁上部に微細剥離痕がみられる。その後，中間部から大きく折断されている。折断後に，腹面左下端部に微細剥離痕が形成されている。

4はチョコレート色した良質の硬質頁岩を用いている。厚みのない比較的細長の石刃を素材としている。頭部調整が行われており，石刃を剥離した際に，打面部が同時割れしている。背面構成に下端部からの剥離面もみられることから，両設打面の石刃石核から剥離されたものと思われる。石核の大きさはかなり大きかったことが推定される。背面左側面上部・下部と腹面上部・下部に連続的な微細剥離痕がみられる。微細な剥離ではあるが，比較的平坦な剥離であることから，調整加工として捉えることも可能で，ナイフ形石器として識別することもできる。

1～4はいずれも良質の硬質頁岩・頁岩を用いており，石刃を素材としているという共通した特徴がみられる。また，2・4は大型の両設打面の石刃石核から剥離された石刃を素材として用いている。特に，2の石器は，いわゆる「下総型石刃再生技法」によるものであり，本ブロックの石器群を位置づける上で重要な石器である。

②第4ブロック（第24・25図，第3・6・8・16表，図版4・15）

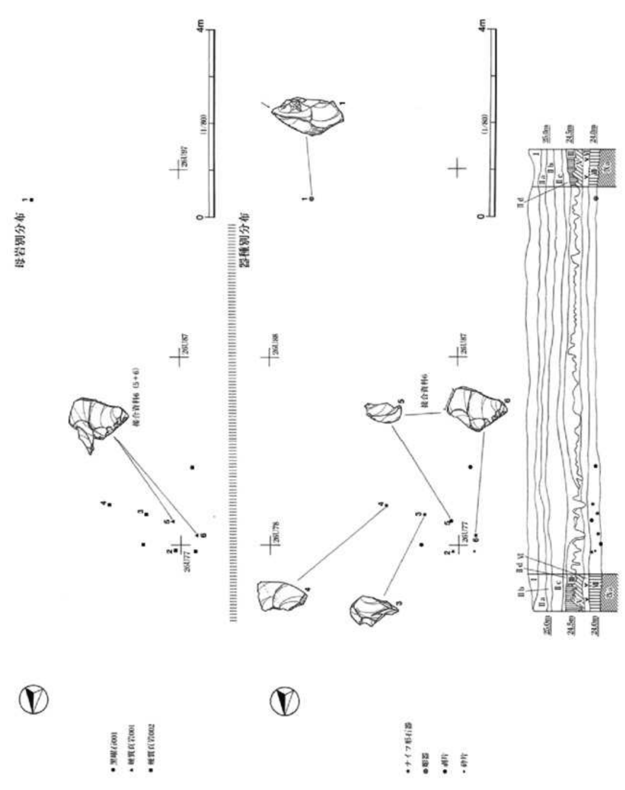
出土状況　平面分布は，約3m×2mの楕円形の範囲からやや集中して散漫に分布している。分布状況を詳細にみると，集中地点の南側に約6m離れた地点から彫器が1点単独で出土している。出土層位は，Ⅶ層下部～Ⅷ層上部にかけて出土しており，Ⅷ層に集中する。Ⅶ層に生活面があると推定される。

器種別分布（第24図）の特徴は，集中地点から，ナイフ形石器が4点まとまって出土している。集中地点から南側に約6m離れた地点から彫器が単独で出土している。

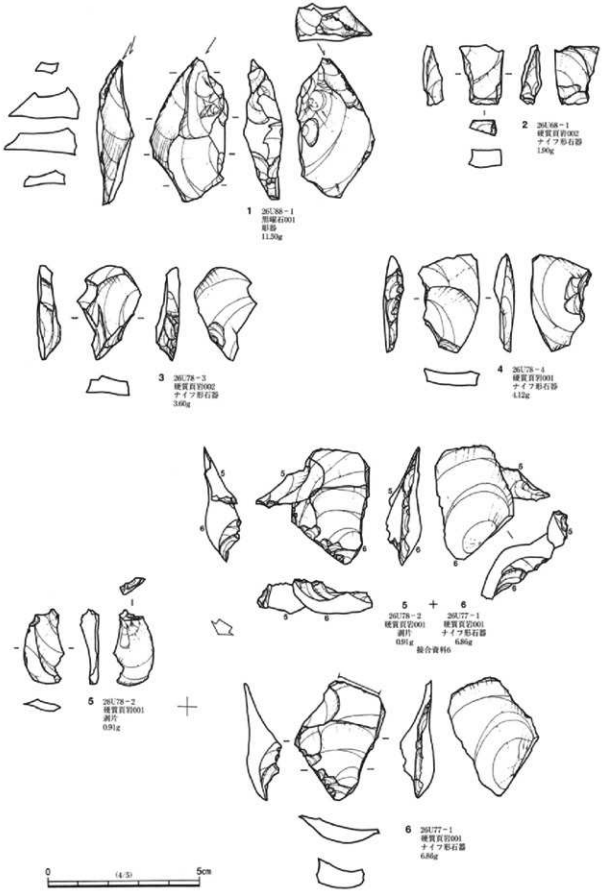
第8表　第Ⅲ文化層　第4ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	彫器	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅲ	4	黒曜石	001		1 11.5			1 11.5	11.11 26.67
		黒曜石 点数合計			1			1	11.11
		黒曜石 重量合計			11.5			11.5	26.67
		硬質頁岩	001	2 10.98		1 0.91		3 11.89	33.33 27.57
			002	2 5.5		2 8.61	1 5.62	5 19.73	55.56 45.76
		硬質頁岩 点数合計		4		3	1	8	88.89
		硬質頁岩 重量合計		16.48		9.52	5.62	31.62	73.33
全体の点数合計				4	1	3	1	9	100.00
全体の重量合計				16.48	11.5	9.52	5.62	43.12	100.00
点数組成比(%)				44.44	11.11	33.33	11.11	100.00	
重量組成比(%)				38.22	26.67	22.08	13.03	100.00	

〔上段：点数、下段：重量(g)〕



第24図　第Ⅲ文化層　第4ブロック遺物分布図



第25図　第Ⅲ文化層　第4ブロック出土石器

母岩別分布（第24図）の特徴は，集中地点からは硬質頁岩001が３点，硬質頁岩002が５点出土している。集中地点から南側に離れた地点からは，黒曜石001が単独出土している。

出土遺物　総計９点出土した。母岩器種組成は，第８表のとおりである。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器４点，彫器１点，剥片３点，砕片１点である。製品の占める割合がきわめて高い。

母岩組成の特徴は，集中地点が，硬質頁岩001･002で構成されている。集中地点の南側から，黒曜石001が単独で出土している。良質な石材である，硬質頁岩と黒曜石のみで構成されるという特徴があげられる。

１は彫器である。良質な黒曜石を用いている。肉眼観察ではあるが，おそらく信州産の黒曜石を用いていると思われる。打面の厚みのある横長剥片を素材としている。背面上端部から下端部まで及ぶ樋状剥離が行われている。この樋状剥離は，ウートラパッセ状の形状を呈し，器体の中間部から剥離方向が器体の内側にねじれている。その後，背面右上部から幅広の剥離を行った後に，裏面上端部から樋状剥離を行っている。樋状剥離は器体の1/3程度までしか及んでいない。樋状剥離で形成された縁辺部である右側縁上部の背腹両面には，微細剥離痕と刃部の縁辺に平行した顕著な線条痕がみられた。１の剥離順序をもう一度まとめると以下のとおりになる。

①背面上端部から，左側縁側に下端部まで及ぶ樋状剥離が行われている。

②背面右側縁上部に，幅広の剥片を剥離している。

③裏面上部から，右側縁側に器体の1/3まで及ぶ樋状剥離が行われている。

④裏面右側縁上部に，③で形成された縁辺に微細剥離痕と線条痕がみられる。

２～４はナイフ形石器である。いずれもチョコレート色した良質の硬質頁岩を用いている。両側縁を折断して成形している。その後，基部を腹面から折断した後に，腹面下部に奥にまで入る平坦剥離が行われている。３は素材の打面部にあたる右側縁を折断によって成形後に，右側縁下部に急角度のプランティング加工が施されている。基部の形状は，尖っている。４は幅広の剥片を素材として，素材末端部にあたる右側縁を背面から折断して成形している。打面部にあたる左側縁は，下部に腹面から調整加工を施した後に，上部に背面からプランティング加工を施している。

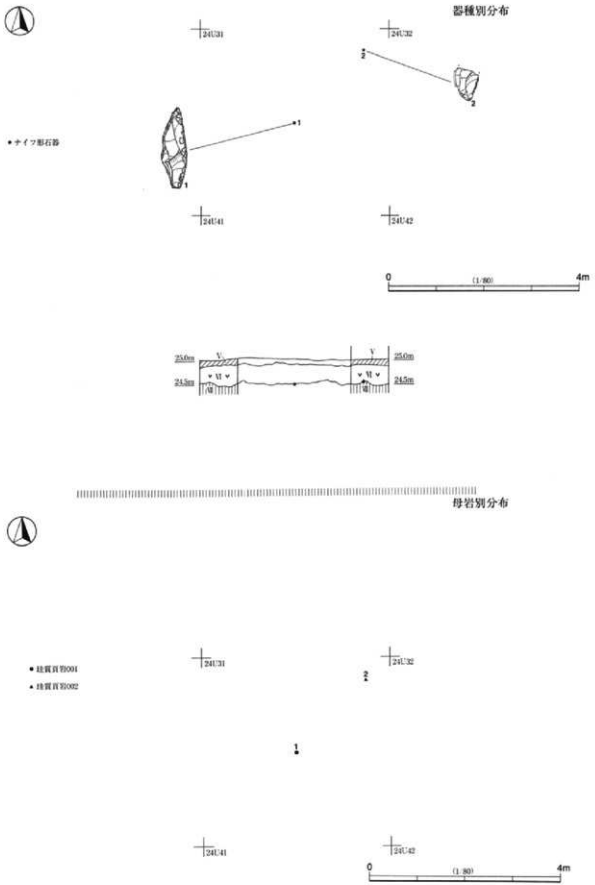
５＋６は接合資料６である。２～４と同様に，チョコレート色した良質の硬質頁岩を用いている。５＋６の接合した状態で，背面左側縁下部を打面として固定している。頭部調整を行って，５の剥片を剥離している。頭部調整を行いながら，右回りに打点を順次転移して５のような小型の剥片を剥離して，６のナイフ形石器を剥離している。６はナイフ形石器である。右側縁に腹面から急角度の調整加工が連続的に施されている。素材の末端部にあたる上部には，微細剥離痕がみられる。

③第５ブロック（第26・27図，第３・６・９・16表，図版５・15）

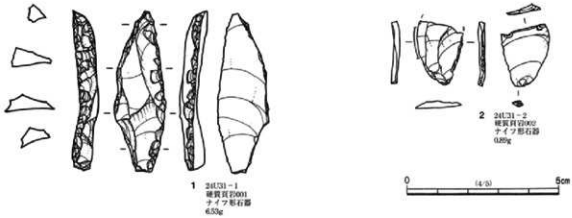
出土状況　平面分布は，約２ｍ×１ｍの楕円形の範囲から２点のみ分布している。出土層位は，Ⅶ層上部ら出土している。Ⅶ層上部に生活面があると推定される。

器種別分布（第26図）の特徴は，２点のみの出土ではあるが，どちらもナイフ形石器で，２ｍ離れて出土している。

母岩別分布（第26図）の特徴は，それぞれ単独母岩であり，チョコレート色した硬質頁岩の石材が用いられている。どちらも製品であることから，本ブロックに，搬入されたものと思われる。



第26図　第Ⅲ文化層　第５ブロック遺物分布図



第27図　第Ⅲ文化層　第５ブロック出土石器

第９表　第Ⅲ文化層　第５ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	総計	組成比（%）
Ⅲ	5	硬質頁岩	001	1 6.53	1 6.53	50.00 88.01
			002	1 0.89	1 0.89	50.00 11.99
		硬質頁岩 点数合計		2	2	100.00
		硬質頁岩 重量合計		7.42	7.42	100.00
全体の点数合計				2	2	100.00
全体の重量合計				7.42	7.42	100.00
点数組成比(%)				100.00	100.00	
重量組成比(%)				100.00	100.00	

［上段：点数、下段：重量(g)］

出土遺物　総計２点出土した。母岩器種組成は，第９表のとおりである。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器２点で構成されており，製品で占められる。

母岩組成の特徴は，すべて単独母岩である。石材は，チョコレート色した硬質頁岩で占められる。

１・２はチョコレート色した硬質頁岩を用いたナイフ形石器である。

１は石刃を素材として，基部を打面側に設定している。石刃の背面は末端部からの剥離があることから，両設打面の石刃石核から剥離されたものと思われる。調整加工は，左側縁と右側縁下部にプランティング加工が施されている。左側縁の調整加工は，下部には基部側からの粗い調整が施された後に，腹面から入念な調整加工が施されている。中間部には，腹面からのプランティング加工が施されている。上部には，腹面からプランティング加工をした後に，背面からさらに入念なプランティング加工が施されている。

右側縁上部には，面的に平坦な調整加工が施されており，左側縁の急角度の調整加工と対照的である。通常のナイフ形石器であれば，素材の縁辺が残されているが，この石器には残されていない。このことから，おそらく，最初のナイフ形石器の形状は，左側縁と右側縁下部にプランティング加工が施され，右側縁に素材の縁辺が残されていたナイフ形石器であったと推定される。素材の縁辺部が使用によって，刃こぼれ等によって，鋭利な縁辺でなくなったために，面的な平坦な剥離を行って，刃部を再生したものと推定される。

２は点状の打面から剥離された石刃を素材としたナイフ形石器である。素材の形状は，厚みがない。右

側縁と左側縁下部に腹面からプランティング加工が施されている。左側縁中間部は微細剥離痕がみられる。器体の中央部から大きく破損しており，基部が残存している。

④第６ブロック（第28・29図，第３・６・10・16表，図版５・15）

出土状況　平面分布は，約２ｍ×１ｍの楕円形の範囲から４点ほど散漫に分布している。出土層位は，Ⅶ層上部～Ⅵ層下部にかけて出土しており，Ⅵ層下部に集中する。Ⅵ層下部に生活面があると推定される。

器種別分布（第28図）の特徴は，西側から彫器が出土しており，東側から二次加工のある剥片が出土している。

母岩別分布（第28図）の特徴は，総計４点出土しているが，すべて黒曜石001である。本ブロックにおいて，接合資料や砕片が出土しておらず，製品が半数出土していることから，本ブロックに，搬入されたものと思われる。

出土遺物　総計４点出土した。母岩器種組成は，第10表のとおりである。

器種組成の特徴は，彫器１点，二次加工のある剥片１点，微細剥離痕のある剥片１点，剥片１点である。製品の占める割合が高い。

母岩組成の特徴は，すべて黒曜石001で構成されている。非常に良質な黒曜石が用いられている。

第10表　第Ⅲ文化層　第６ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	彫器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	総計	組成比（%）
Ⅲ	6	黒曜石	001	1 15.65	1 13.03	1 1.31	1 0.72	4 30.71	100.00 100.00
全体の点数合計				1	1	1	1	4	100.00
全体の重量合計				15.65	13.03	1.31	0.72	30.71	100.00
点数組成比(%)				25.00	25.00	25.00	25.00	100.00	
重量組成比(%)				50.96	42.43	4.27	2.34	100.00	

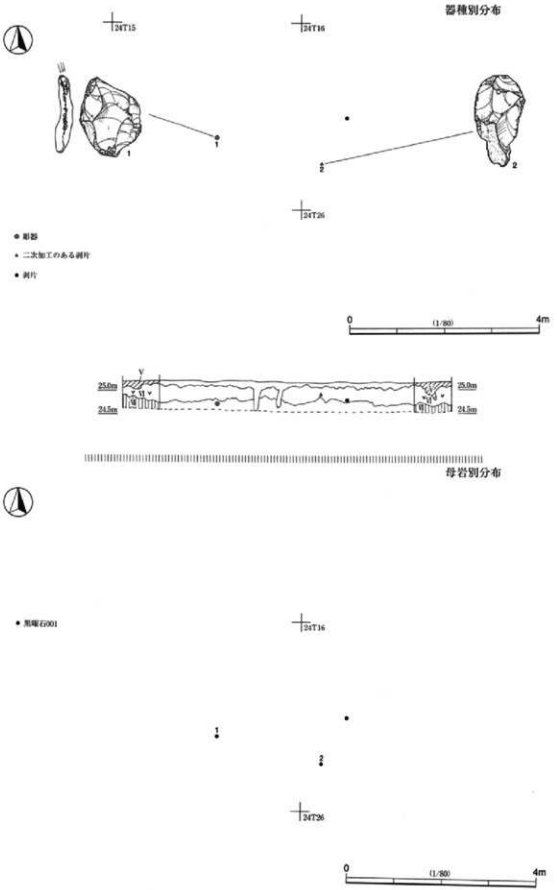
〔上段：点数、下段：重量(g)〕

１・２は良質の黒曜石を用いており，同一母岩の黒曜石001から製作されている。肉眼観察によると，信州産の黒曜石と推定される。

１は彫器である。頭部調整が頻繁に行われており，小さい打面から剥離された幅広の剥片を素材としている。右側縁下部と左側縁に微細剥離痕が連続的にみられる。素材末端部にあたる左側縁上部はやや尖った部位には，腹面に細かい調整加工を施した後に，上端部から樋状剥離が３回行われている。

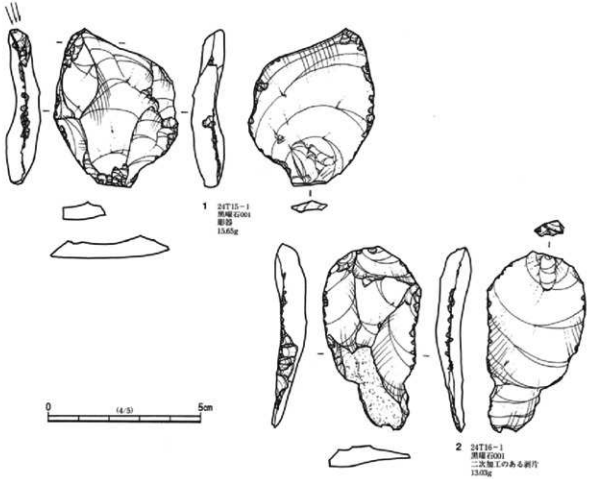
２は二次加工のある剥片である。頭部調整が行われており，幅の狭い複剥離面打面から剥離された縦長剥片を素材としている。背面構成は，主要剥離面と同一方向から剥離された面と自然面で構成されている。左側縁下部は，急角度の調整加工が連続的に施されている。右側縁には，背腹両面に微細剥離痕がみられる。二次加工のある剥片として識別したが，左側縁下部の調整加工がプランティング加工に近いことからナイフ形石器として識別することも可能である。

本ブロックは，良質な石材である黒曜石001のみで構成されている。１の彫器や２の二次加工のある剥片や微細剥離痕のある剥片と剥片の４点で構成されており，製品のかたちで本ブロックに搬入されたといえる。



第28図　第Ⅲ文化層　第６ブロック遺物分布図

第Ⅲ文化層においては，第6表でみられるように，黒曜石と硬質頁岩・頁岩で構成されている。黒曜石のみで構成されているブロックは，第6ブロックのみである。



第29図　第Ⅲ文化層　第6ブロック出土石器

⑤第7ブロック（第30・31図，第3・6・11・16表，図版6・15）

出土状況　平面分布は，約3m×2mの楕円形の範囲から4点ほど散漫に分布している。出土層位は，Ⅸa層～Ⅴ層にかけて出土しており，Ⅶ層～Ⅵ層に集中する。Ⅶ層～Ⅵ層に生活面があると推定される。

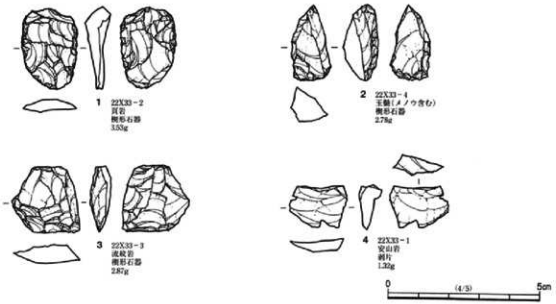
器種別分布（第31図）の特徴は，楔形石器が東部と南部にまとまって出土している。

出土遺物　総計4点出土した。母岩器種組成は，第11表のとおりである。

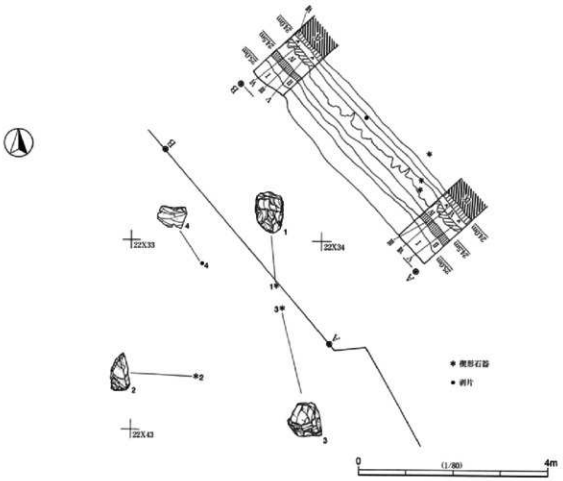
器種組成は，楔形石器3点，剥片1点彫器1点で，楔形石器の割合が高い。母岩組成は，すべて単独母岩である。

1～3は楔形石器である。素材は4～5cm前後の小型の剥片が用いられ，両極剥離によって器体の反対側まで及ぶ調整剥離が施されている。1は上下と左右の2対の両極剥離が施されている。2は上下1対の両極剥離によって先端部が尖った形状をしている。3は上下と左右の2対の両極剥離が施されれている。

4は剥片である。厚みのない剥片である。



第30図　第Ⅲ文化層　第７ブロック出土石器



第31図　第Ⅲ文化層　第７ブロック器種別分布図

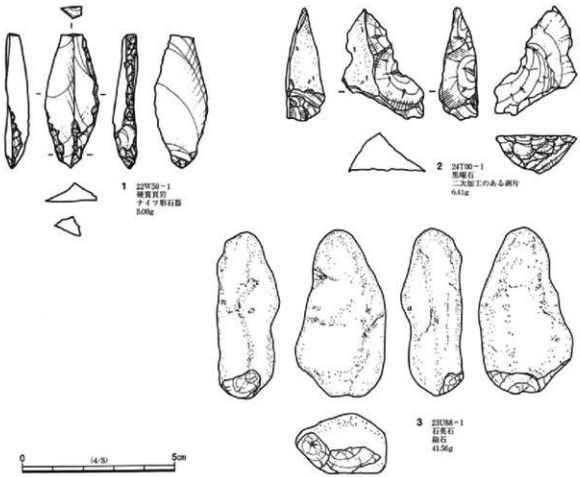
第11表　第Ⅲ文化層　第7ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	楔形石器	剥片	総計	組成比（%）
Ⅲ	7	流紋岩	1 2.87		1 2.87	25.00 27.33
		玉髄（メノウ含む）	1 2.78		1 2.78	25.00 26.48
		安山岩		1 1.32	1 1.32	25.00 12.57
		頁岩	1 3.53		1 3.53	25.00 33.62
全体の点数合計			3	1	4	100.00
全体の重量合計			9.18	1.32	10.50	100.00
点数組成比（%）			75.00	25.00	100.00	
重量組成比（%）			87.43	12.57	100.00	

［上段：点数、下段：重量（g）］

⑧ブロック外（第32図，第3・16表，図版5・15）

出土状況　平面分布は，ブロック外出土石器1～3は，第3・5・6ブロックの周辺に分布している。出土層位は，Ⅶ層とⅥ層から出土している。



第32図　第Ⅲ文化層　ブロック外出土石器

出土遺物　総計３点出土した。

１はナイフ形石器である。第３・５・６から約40m近く北側から単独出土している。出土層位はⅦ層である。チョコレート色した硬質頁岩を用いており，両設打面の石核から剥離された石刃を素材としてる。素材をやや斜めに用いている。右側縁と左側縁下部にプランティング加工が入念に施されている。右側縁と左側縁下部の調整加工は，最初の調整加工は，腹面から急角度の細かい調整加工が施されており，その後，素材の打面部にあたる右側縁下部は，背面側から，やや大きめの調整加工が施され，背面の稜線上に細かい調整加工が施されている。先端部は，腹面側から破損している。

２は二次加工のある剥片である。第６ブロックに西側約20mの地点から単独出土している。出土層位はⅦ～Ⅵ層から出土している。夾雑物を多く含む黒曜石を用いており，第４ブロックの１や第６ブロックの１・２は良質で夾雑物を含まない石材であるのと対照的である。厚みのある剥片を素材として，右側縁は鋸歯状の粗い調整加工が施されている。下端部は，折断した後に，腹面側から急角度の細かい調整加工が施されている。

３は敲石である。第３ブロックの北側約15mの地点から単独出土している。出土層位はⅦ層である。楕円形礫を素材としており，下端部に敲打によると思われる２枚程度の剥離面がみられ，比較的強い敲打が加えられたと想定できる。

（４）第Ⅳ文化層

Ⅲ層に生活面をもつ文化層と推定できる。調査区北側に分布しており，南西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第８ブロックが相当する。出土層位は，上層の調査時に継続して調査したときに，Ⅲ層から出土している。

第12表　第Ⅳ文化層　第８ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	二次加工のある剥片	石核	剥片	総計	組成比（%）
Ⅳ	8	黒曜石	001		1 4.61			1 4.61	16.67 6.19
		黒曜石 点数合計 黒曜石 重量合計			1 4.61			1 4.61	16.67 6.19
		ガラス質黒色安山岩	001				1 6.3	1 6.3	16.67 8.47
		ガラス質黒色安山岩 点数合計 ガラス質黒色安山岩 重量合計					1 6.3	1 6.3	16.67 8.47
		トロトロ石（安山岩）	001			1 45.74		1 45.74	16.67 61.46
		トロトロ石（安山岩）点数合計 トロトロ石（安山岩）重量合計				1 45.74		1 45.74	16.67 61.46
		頁岩	001	1 5.67				1 5.67	16.67 7.62
			002				2 12.1	2 12.1	33.33 16.26
		頁岩 点数合計 頁岩 重量合計		1 5.67			2 12.1	3 17.77	50.00 23.88
Ⅳ 点数合計				1	1	1	3	6	100.00
Ⅳ 重量合計				5.67	4.61	45.74	18.4	74.42	100.00
点数組成比（%）				16.67	16.67	16.67	50.00	100.00	
重量組成比（%）				7.62	6.19	61.46	24.72	100.00	

［上段：点数、下段：重量(g)］

①第８ブロック（第33・34図，第３・12・16表，図版15）

出土状況　平面分布は，約５ｍ×２ｍの楕円形の範囲から散漫に分布している。出土層位は，上層の調査時に継続して調査したときに，Ⅲ層から出土している。Ⅲ層に生活面をもつ文化層と推定できる。

器種別分布（第33図）の特徴は，集中地点からナイフ形石器が１点出土しており，北側から石核が出土している。集中地点から，西側に約３ｍ離れた地点から二次加工のある剥片が出土している。

母岩別分布（第33図）の特徴は，南東部から出土している頁岩002のみが２点で構成されているが，そのほかの母岩は単独出土である。珪質頁岩002は２点とも目的的な縦長剥片であり，そのほかの母岩も製品が多いことから，本ブロックに，搬入された石器である可能性が高い。

出土遺物　総計６点出土した。母岩器種組成は，第12表のとおりである。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器１点，二次加工のある剥片１点，石核１点，剥片３点である。

母岩組成の特徴は，頁岩002のみが２点で構成されているが，そのほかの母岩は単独出土である。

１はナイフ形石器である。両設打面の石核から剥離された縦長剥片（石刃の可能性もある）を素材としている。素材の打面部にあたる右側縁上部に急角度でやや粗い調整加工が施されている。先端部分の調整加工は，非常に細かい調整加工が入念に施されている。

２～４は剥片である。２は頭部調整が頻繁に行われ，線状の打面から剥離された縦長剥片である。比較的厚みのない剥片である。３は打面調整が非常に顕著に行われた縦長剥片である。背面構成から，主要剥離面と同一方向に縦長剥片が連続的に剥離されていることがうかがえる。４は頭部調整が顕著に行われ，幅の狭い打面から剥離された縦長剥片である。末端部は背面から折断されている。

５は二次加工のある剥片である。少量の夾雑物があるが，良質の黒曜石を用いている。幅広で厚みのある剥片を素材としており，左側縁には急角度でやや粗い調整加工が施されている。右側縁には中部には微細剥離痕がみられる。その後に，打面部にあたる上部が折断されている。

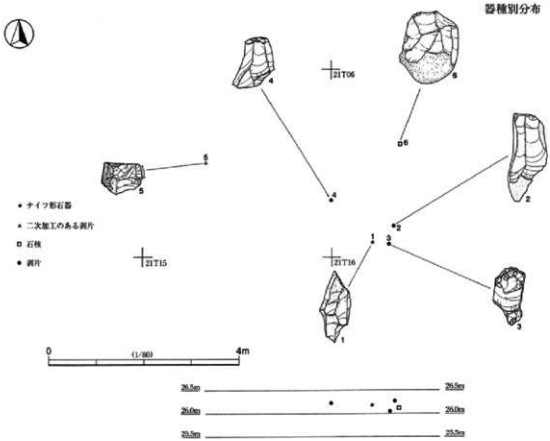
６は石核である。トロトロ石（安山岩）を用いている。楕円形礫を素材としており，裏面上端部から右側縁側に２回の剥離後に，打面を90度転移して，表面上端部から７回以上の剥離を行っている。剥離された剥片の形状は，比較的細長の剥片が剥離されていることが推定できる。

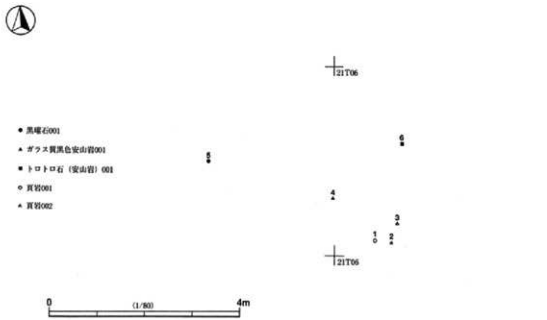
（５）単独出土石器（第35・36図，第３・13・16表，図版６・15）

第Ⅰ～Ⅳ文化層に帰属しないものを単独出土石器として取り扱った。出土点数は，6点出土しており，剥片５点，礫片１点である。

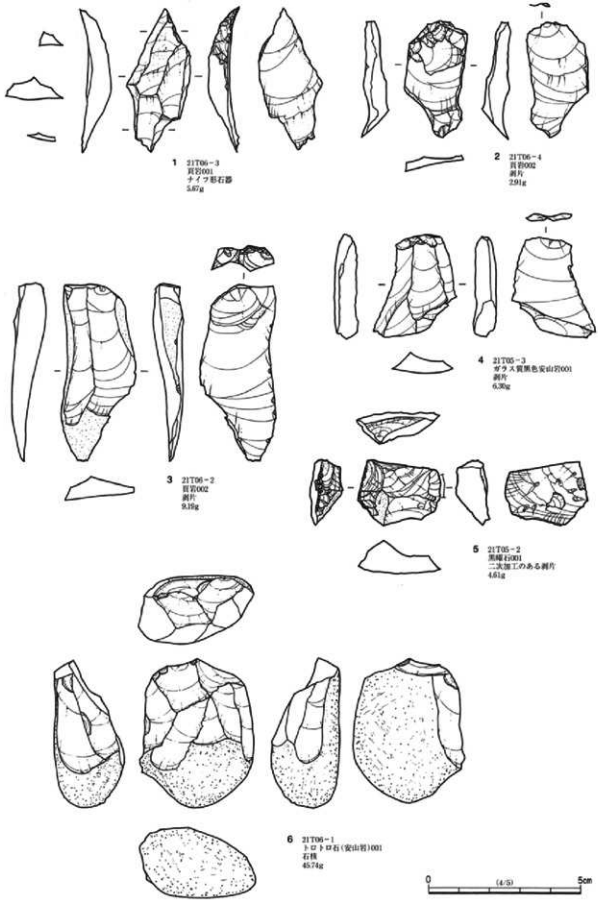
出土状況　確認調査時に拡張調査を行ったが，単独で出土している。22X11グリッドから剥片がⅨ層から出土している。21T45グリッドから１点出土しており，Ⅲ層から出土している。21T55グリッドからは２点出土しており，Ⅶ層から黒曜石製の剥片が出土している。

出土遺物　総計６点出土した。器種石材組成は，第13表のとおりである。定型的な石器が出土していない。１は末端部が幅広で，打面が平坦な剥片である。22X11グリッドから出土している。





第33図　第Ⅳ文化層　第８ブロック遺物分布図



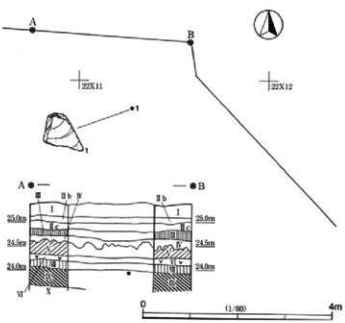
第34図　第Ⅳ文化層　第８ブロック出土石器

第13表　単独出土　石器器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	剥片	礫片	総計	組成比（%）
単	単	黒曜石	2 2.26		2 2.26	33.33 8.43
		ガラス質黒色安山岩	1 2.93		1 2.93	16.67 10.93
		流紋岩		1 12.53	1 12.53	16.67 46.75
		頁岩	2 9.08		2 9.08	33.33 33.88
単 点数合計			5	1	6	100.00
単 重量合計			14.27	12.53	26.80	100.00
点数組成比(%)			83.33	16.67	100.00	
重量組成比(%)			53.25	46.75	100.00	

［上段：点数、下段：重量(g)］

第35図　単独出土石器



第36図　単独出土石器器種別分布図

第14表　旧石器時代　石器属性表（1）

文化層	ブロック	接図番号	グリッド	遺物番号	住居番号	器種名	母岩名	母岩番号	接合	層位	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	打面・剥離形状	打角・剥離角	打面調整	周縁調整	背面H	背面T	背面K	背面L	背面D	背面V	背面C	背面J	背面ポジ面	末端形状	湾曲角	刃部角	使用痕・変色痕	遺存部位	欠損	標高（m）
I	I	I-01	241/27	7		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	35.55	32.17	12.21	13.81					○	○				○				S						23.896
I	I	I-02	241/26	6		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	6.43	5.23	1.41	0.03																				23.072
I	I	I-03	241/38	2		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	12.82	16.92	4.24	1.06					○	○		○										VM		23.996
I	I	I-04	241/27	8		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	36.31	33.97	5.92	16.82										○										24.000
I	I	I-05	241/27	5		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	14.18	22.06	3.98	0.93					○									F						23.744
I	I	I-06	241/27	1		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	34.88	22.77	13.42	11.28																50			+	24.145
I	I	I-07	241/27	2		局部磨製石斧再生剥片	砂岩	001	I	IXc	31.93	14.93	9.7	5.93																51			+	23.900
I	I	I-08	241/37	1		局部磨製石斧再生剥片	頁岩	001	2	IXc	35.73	38.25	17.51	20.59		68～76																		23.930
I	I	I-09	241/38	4		局部磨製石斧再生剥片	頁岩	001	2	IXc	24.49	24.36	10.28	5.65	I	119			○									F						23.880
I	I	I-10	241/38	3		二次加工のある剥片	玉髄(メノウ含む)	002		IXc	18.32	14.94	5.25	1.4					○									H				BL		24.130
I	I	I-11	241/36	8		農耕具類板のある剥片	玉髄(メノウ含む)	001		IXc	26.8	15.99	5.56	1.87	I	117						○												24.000
I	I	I-12	241/37	2		農耕具類板のある剥片	珪質頁岩	001		IXc	27.83	18.64	5.67	2.7	P	96			○		○							F						23.922
I	I	I-13	241/26	14		剥片	砂岩	002		IXc	26.37	41.08	11.11	10.332	2				○		○												H	23.964
I	I	I-14	241/29	1		石鏃	頁岩	002		IXc	21.11	36.94	14.58	13.91		100～107																		24.048
I	I	I-15	241/28	4		剥片	流紋岩	001	3	IXc	8.77	10.8	2.63	0.24																			VM	23.663
I	I	I-16	241/27	9		石鏃	流紋岩	001	3	IXc	22.76	29.45	17.79	10.89		96～99																		
I	I		241/26	1		砕片	トロトロ石(安山岩)	001		IXc	6.67	2.51	1.71	0.02																				24.012
I	I		241/26	2		剥片	砂岩	002		IXc	18.98	9.8	3.82	0.77					○															23.848
I	I		241/26	3		砕片	流紋岩	002		IXc	6.65	6.64	1.68	0.06																				23.856
I	I		241/26	4		砕片	砂岩	002		IXc	10.88	8.37	3.71	0.31																				23.878
I	I		241/26	5		剥片	砂岩	003		IXc	14.32	26.67	4.87	2.19								○			○								VM	24.074
I	I		241/26	7		砕片	トロトロ石(安山岩)	001		IXc	13.17	8.3	3.01	0.3																				23.966
I	I		241/26	8		砕片	トロトロ石(安山岩)	001		IXc	10.94	9.13	3.02	0.34																				24.024
I	I		241/26	9		剥片	砂岩	002		IXc	13.19	6.41	2.6	0.23					○	○								S						23.990
I	I		241/26	10		剥片	砂岩	002		IXc	27.23	22.76	7.51	4.29	I	108			○			○												24.004
I	I		241/26	11		剥片	砂岩	002		IXc	12.67	17.69	6.48	1.06						○				○										23.980
I	I		241/26	12		砕片	砂岩	002		IXc	6.95	5.78	1.54	0.07																				24.076
I	I		241/26	15		砕片	珪質頁岩	001		IXc	6.76	4.09	0.77	0.04																				23.944
I	I		241/27	3		礫	砂岩	004		IXc	102.69	68.53	40.27	339.34																				23.920
I	I		241/27	4		剥片	珪質頁岩	001		IXc	16.45	28.74	7.51	2.21																				23.793
I	I		241/27	6		砕片	砂岩	001		IXc	11.79	13.21	5.92	0.9																				24.168
I	I		241/28	1		剥片	珪質頁岩	003		IXc	13.1	21.17	5.03	0.73	J	111			○					○										23.722
I	I		241/28	2		砕片	流紋岩	002		IXc	10.87	7.98	5.26	0.37																				23.653
I	I		241/28	3		剥片	砂岩	001		IXc	19.88	22.76	5.04	2.15	P	117			○			○						F						23.527
I	I		241/28	5		剥片	流紋岩	002		IXc	27.8	14.37	8.22	2.15	I	117			○		○	○			○			F						23.754
I	I		241/28	6		剥片	珪質頁岩	001		IXc	7.81	16.85	2.95	0.38	P	106						○											H	23.738
I	I		241/36	2		剥片	玉髄(メノウ含む)	002		IXc	12.94	10.66	1.82	0.85	I	110			○	○								H						23.854
I	I		241/36	4		砕片	玉髄(メノウ含む)	002		IXc	1.65	3.89	0.84	0.1																				24.158
I	I		241/36	5		砕片	トロトロ石(安山岩)	001		IXc	4.11	4.17	2.32	0.04																				24.018
I	I		241/36	6		砕片	トロトロ石(安山岩)	001		IXc	4.06	10.72	13.81	0.12																				24.020
I	I		241/36	7		剥片	トロトロ石(安山岩)	001		IXc	14.13	8.42	2.21	0.26					○		○							F						24.188

第15表　旧石器時代　石器属性表（2）

文化層	ブロック	接図番号	グリッド	遺物番号	技法等	器種名	石質名	石質番号	接合	層位	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	打角・調整角	打面形状	打面調整	縁辺調整	背面H	背面T	背面R	背面L	背面D	背面V	背面C	背面J	背面ポジ面	本端形状	調整角	刃部角	使用痕・微細痕	遺存部位	欠損	標高（m）
I	1		24U36	9	砕片	砂岩	002		IXc	16.52	4.1	0.24																						23.796
I	1		24U36	10	剥片	玉髄(メノウ含む)	002		IXc	16.96	15.21	5.65	0.37						○									F						23.840
I	1		24U36	12	剥片	硅質頁岩	001		IXc	18.06	8.65	3.68	0.49	1	68				○			○						H						24.082
I	1		24U36	13	剥片	玉髄(メノウ含む)	002		IXc	8.93	11.53	4.27	0.37									○						H				B		23.812
I	1		24U38	5	剥片	砂岩	001		IXc	10.95	12.22	3.61	0.25	1	105				○															23.888
I	1		24U38	6	砕片	トロトロ石(宇山岩)	001		IXc	7.36	6.93	1.1	0.07																					23.910
II	2	2-01	24W24	6	台形様石器	ホルンフェルス	001		VI～VII	18.52	29.81	6.1	2.68						○									H						23.816
II	2	2-02	24W14	12	台形様石器	流紋岩	001		VI～VII	22.45	36.18	8.67	6.39	2	113			○				○										H		24.058
II	2	2-03	24W24	1	台形様石器	ガラス質黒色安山岩	002		VI～VII	28.19	31.07	10	8.31						○	○														23.945
II	2	2-04	24W14	15	台形様石器	流紋岩	001		VI～VII	17.55	32.14	9.84	5.63						○						○						N	B		24.090
II	2	2-05	24W36	1	台形様石器	ガラス質黒色安山岩	001		VI～VII	35.48	32.88	10.12	12.98												○			F				R		
II	2	2-06	24W14	13	剥片	砂岩	001		VI～VII	27.09	35.95	6.45	4.42	1	100				○						○							H		23.870
II	2	2-07	24W15	2	黒曜凝灰岩のある剥石	黒曜石	001		VI～VII	8.17	26.64	7.91	3.23	1				○	○			○						F			N			24.225
II	2	2-08	24W14	2	剥片	砂岩	001		VI～VII	31.79	46.36	11.7	13.14	1	116				○						○			H						23.750
II	2	2-09	24W16	1	台形様石器	ガラス質黒色安山岩	001	4	VI～VII	36.17	21.91	9.12	6.86						○							○		F				L		23.855
II	2	2-10	24W26	1	台形様石器	ガラス質黒色安山岩	001	4	VI～VII	35.3	49.99	12.77	21.82						○						○			F						23.870
II	2	2-11	24W14	8	剥片	砂岩	001	5	VI～VII	23.16	37.65	5.3	3.73	L					○	○								F						23.895
II	2	2-12	24W14	1	剥片	砂岩	001	5	VI～VII	48.04	47.9	24.6	56.16	1	109		○		○									F						23.850
II	2		24W14	3	剥片	砂岩	001		VI～VII	18.27	19.05	4.97	1.44	C	54					○				○										23.836
II	2		24W14	4	剥片	砂岩	001		VI～VII	16.01	23.03	3.45	1.06	2					○									S						24.315
II	2		24W14	5	剥片	砂岩	001		VI～VII	13.33	22.74	4.41	1.12	1	113				○	○								F						23.710
II	2		24W14	6	剥片	砂岩	001		VI～VII	12.51	16.69	2.6	0.36	L					○													H		24.180
II	2		24W14	7	剥片	砂岩	001		VI～VII	17.01	9.46	3.93	1.37						○			○												23.925
II	2		24W14	9	剥片	砂岩	001		VI～VII	18.31	15.19	4.68	0.91	1	103				○									F						23.745
II	2		24W14	11	剥片	砂岩	001		VI～VII	25.03	13.87	6.24	1.08	1	93						○				○			F						23.880
II	2		24W14	14	礫片	石英ハン岩	001		VI～VII	26.77	9.37	7.26	6.35																					23.910
II	2		24W14	16	剥片	砂岩	001		VI～VII	16.71	16.65	6.48	1.61	C	81				○															23.767
II	2		24W14	17	砕片	砂岩	001		VI～VII	11.25	9.15	2.26	0.21																					23.949
II	2		24W15	1	剥片	黒曜石	001		VI～VII	9.51	7.36	4.12	0.28	L					○				○					H						24.225
II	2		24W15	3	剥片	玉髄(メノウ含む)	001		VI～VII	12.09	7.45	5.07	0.29						○							○		F						23.978
II	2		24W24	2	剥片	砂岩	002		VI～VII	15.21	16.91	3.32	0.64	L					○													H		24.110
II	2		24W24	3	礫片	流紋岩	002		VI～VII	18.61	14.34	2.63	0.75															S						24.300
II	2		24W24	4	砕片	石英ハン岩	001		VI～VII	12.99	10.31	5.01	0.66																					24.009
II	2		24W24	5	砕片	石英ハン岩	001		VI～VII	11.46	9.9	2.28	0.22																					23.760
II	2		24W24	7	砕片	トロトロ石(宇山岩)	001		VI～VII	6.48	8.53	0.82	0.1																					23.795
II	2		24W25	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	003		VI～VII	15.45	20.8	4.34	1.37	1	80				○									F						23.710
II	2		24W25	2	砕片	トロトロ石(宇山岩)	002		VI～VII	6.71	6.33	1.5	0.05																					23.720
II	2		24W25	3	剥片	頁岩	001		VI～VII	14.45	17.5	3.71	0.83	L				○	○													H		23.988
II	2		24W25	4	剥片	頁岩	001		VI～VII	13.49	12.67	2.63	0.36	L						○								F						23.772
II	2		24W25	5	剥片	頁岩	001		VI～VII	11.19	9.39	1.58	0.17	L						○								F						23.712

第16表　旧石器時代　石器属性表（3）

文化層	ブロック	接図番号	グリッド	器種番号	接番号	器種名	母岩名	母岩番号	統合	層位	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	打面形状	打角・剥離角	打面調整	腹面調整	背面Ⅰ	背面Ⅱ	背面Ⅲ	背面Ⅳ	背面Ⅴ	背面Ⅵ	背面Ⅶ	背面Ⅷ	背面ポジ面	末端形状	調整角	刃部角	使用痕・変色痕	遺存度	欠損	図版（ページ）
Ⅲ	3	3-01	24U38	1		ナイフ形石器	硬質頁岩	001		Ⅶ	37.9	19.8	3.76	2.19						○				○					63～76	40～43				24.618
Ⅲ	3	3-02	24U18	8		剥片	硬質頁岩	003		Ⅶ	52.48	29.84	12.64	23.55	3	97	○			○	○								101		N			24.290
Ⅲ	3	3-03	24U18	6		微細剥離痕のある剥片	頁岩	001		Ⅶ	41.68	37.23	12.25	19.45	1	76	○				○			○								H		24.387
Ⅲ	3	3-04	24U18	7		微細剥離痕のある剥片	硬質頁岩	002		Ⅶ	69.98	27.58	5.17	9.51						○	○							F			N			24.392
Ⅲ	3		24U19	1	A	剥片	頁岩	002		Ⅶ	15.51	18.81	8.57	2.41	C					○	○											H		
Ⅲ	3		24U19	1	B	砕片	砂岩	001		Ⅶ	16.94	6.95	7.2	1.12																				
Ⅲ	3		24U36	1		微細剥離痕のある剥片	頁岩	003		Ⅶ	10.39	13.58	9.87	1.46						○			○											24.374
Ⅲ	4	4-01	26U88	1		掻器	黒曜石	001		Ⅶ	25.54	47.97	11.94	11.5	2	88				○		○						F			N			23.999
Ⅲ	4	4-02	26U86	1		ナイフ形石器	硬質頁岩	002		Ⅶ	20.41	15.8	6.3	1.9						○		○		○										24.089
Ⅲ	4	4-03	26U78	3		ナイフ形石器	硬質頁岩	002		Ⅶ	32.24	20.9	7.7	3.6								○		○			○	F						23.989
Ⅲ	4	4-04	26U78	4		ナイフ形石器	硬質頁岩	001		Ⅶ	32.39	19.16	5.66	4.12						○							○				N			24.096
Ⅲ	4	4-05	26U78	2		剥片	硬質頁岩	001	6	Ⅶ	24.29	13.02	4.02	0.91	1	112				○								H						24.121
Ⅲ	4	4-06	26U77	1		ナイフ形石器	硬質頁岩	001	6	Ⅶ	30.06	25.11	8.01	6.86	1	127		○		○				○			○	F						23.994
Ⅲ	4		26U67	1		砕片	硬質頁岩	002		Ⅶ	14.07	7.99	7.99	5.62											○									24.040
Ⅲ	4		26U77	2		剥片	硬質頁岩	002		Ⅶ	25.95	18.6	10.91	4.56						○					○							VM		24.050
Ⅲ	4		26U78	1		剥片	硬質頁岩	002		Ⅶ	18.21	27.54	13.28	4.05	C						○							F						23.960
Ⅲ	5	5-01	24U31	1		ナイフ形石器	硬質頁岩	001		Ⅶ	53.86	16.83	7.65	6.53																				24.521
Ⅲ	5	5-02	24U31	2		ナイフ形石器	硬質頁岩	002		Ⅶ	20.22	15.67	6.69	0.89	P	101	○			○												H		24.569
Ⅲ	6	6-01	24T15	1		掻器	黒曜石	001		Ⅳ～Ⅴ	54.94	40.64	8.72	15.65	1	97				○				○				H						24.785
Ⅲ	6	6-02	24T16	1		二次加工のある剥片	黒曜石	001		Ⅳ～Ⅴ	46.5	32.84	9.15	13.03	2	81				○														24.914
Ⅲ	6		24T16	2		微細剥離痕のある剥片	黒曜石	001		Ⅳ～Ⅴ	16.91	25.63	4.06	1.31						○								F				B		24.913
Ⅲ	6		24T16	3		剥片	黒曜石	001		Ⅳ～Ⅴ	19.15	11.91	3.79	0.72	L					○		○										H		24.775
Ⅲ	7	7-01	22X33	2		掻器	頁岩			Ⅸc	21.41	23.18	6.97	3.53																				23.700
Ⅲ	7	7-02	22X33	4		掻器	玉髄(メノウ含む)			Ⅶ	24.63	14.63	7.80	2.78																				24.200
Ⅲ	7	7-03	22X33	3		掻器	流紋岩			Ⅴ	26.38	18.35	8.12	2.87																				24.374
Ⅲ	7	7-04	22X33	1		剥片	安山岩			Ⅶ	13.82	19.29	7.16	1.32	1	63				○								F						24.130
Ⅲ	早	早-01	22W50	1		ナイフ形石器	硬質頁岩			Ⅶ	44.76	17.53	7.66	5						○									71～74	39～45			*	
Ⅲ	早	早-02	24T00	1		二次加工のある剥片	黒曜石			Ⅵ～Ⅶ	41.2	20.07	12.69	6.41										○					96					
Ⅲ	早	早-03	23U88	1		礫石	石英岩			Ⅶ	55.12	31.11	20	41.56																				
Ⅳ	8	8-01	21T06	3		ナイフ形石器	頁岩	001		Ⅲ	47.21	20.45	8.01	5.67						○	○													26.170
Ⅳ	8	8-02	21T06	4		剥片	頁岩	002		Ⅲ	38.87	20.17	6.14	2.91	2	91				○								F	76～96	76～84				26.044
Ⅳ	8	8-03	21T06	2		剥片	頁岩	002		Ⅲ	59.22	23.65	9.7	9.19	3	96	○			○								F						26.250
Ⅳ	8	8-04	21T05	3		剥片	ガラス質黒色安山岩	001		Ⅲ	32.12	24.88	7.79	6.3	2	61				○	○											H		26.210
Ⅳ	8	8-05	21T05	2		二次加工のある剥片	黒曜石	001		Ⅲ	26.99	22.34	10.32	4.61								○	○					F	63～71					26.134
Ⅳ	8	8-06	21T06	1		石核	hornfels(安山岩)	001		Ⅲ	49.25	38.96	22.48	45.74		70～81																		
早	早	早-01	22X11	1		剥片	ガラス質黒色安山岩				21.76	29.66	4.84	2.93	1	112		○	○					○				F						23.945
早	早		21T45	2		剥片	頁岩			Ⅲ	20.53	11.35	7.44	0.88							○		○					F						26.260
早	早		21T55	1	A	剥片	黒曜石			Ⅶ	22.92	14	9.97	1.84						○	○	○												25.660
早	早		21T55	1	B	剥片	黒曜石			Ⅶ	12.43	10.14	2.84	0.42						○												H		25.660
早	早		21T56	1		剥片	頁岩			Ⅲc	42.27	25.36	11.58	8.2	1					○	○		○					F						26.265
早	早		23U67	1		礫片	流紋岩			Ⅸ	36.78	18.81	14.81	12.53																				

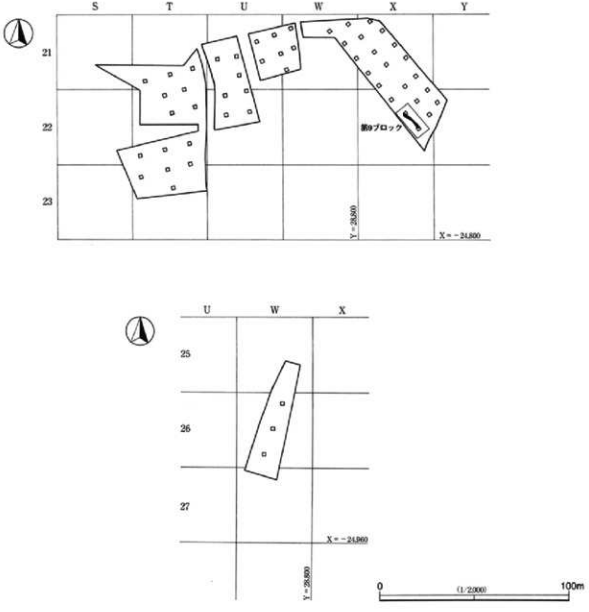
第２節　平成16年度の調査及び上層遺構出土の石器

1　平成16年度の調査

前節で，平成15年度までの旧石器時代の調査成果を扱ったが，整理作業の工程の関係で，平成16年度調査の成果を反映することができなかった。よって，平成16年度の旧石器時代の調査成果をここで別途扱う。

前節までで示した図表は，基本的に平成15年度までの成果で完結している。特に遺跡全体での総計は，平成16年度分の成果を加えると，当然変わってくることになる。本節で示す図表のデータを加えることで，遺跡全体の総数と考えて頂きたい。なお，石器属性表等の記号の用例は基本的には前節と同じである。

平成16年度の確認グリッド・本調査範囲とブロックの位置は第37図に示した。

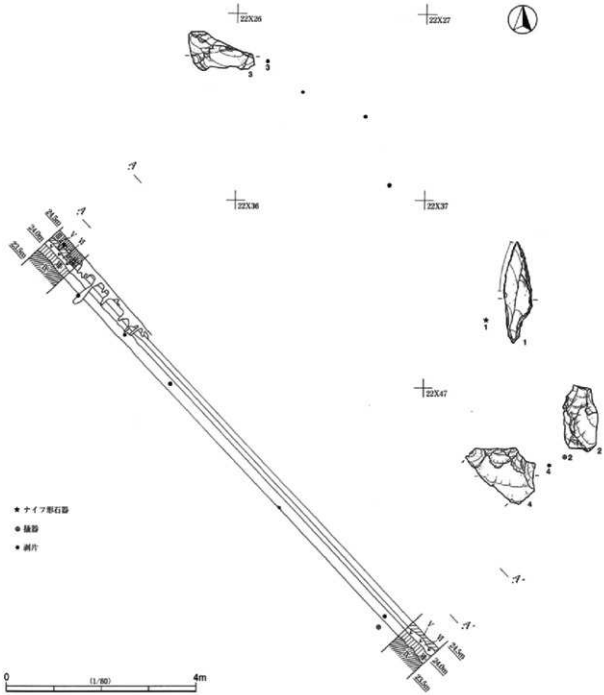


第37図　平成16年度　旧石器時代確認グリッド及び本調査範囲

（1）第Ⅲ文化層（追加）

平成16年度の調査では1か所のブロックが検出され，第9ブロックとして把握することとした。出土層位はⅨa層～Ⅳ層にかけてで，Ⅶ層出土のものが最も多い。石器群の様相からも，概ね平成16年度までの成果で認識された，第Ⅲ文化層に相当すると考え得るであろう。

第9ブロックは，位置的には第7ブロックに隣接する。第7ブロックとは，石器群の出土層位が概ね同じであるものの，使用する石材に若干の違いが認められる。また，ブロック間の距離は約8mの間隔が空く。同一ブロックと積極的に判断する根拠がないため，ここでは一応別のブロックとして扱った。



第38図　第Ⅲ文化層（追加）　第9ブロック器種別分布図

①第９ブロック（第38～40図，第17～19表，図版７・16）

出土状況　平面分布は，北西－南東軸で約10mの範囲に直線状に並ぶ。詳しく見ると，北西部分に４点集中し，中央部分で１点，南東部分で２点出土した。出土層位はⅨa層～Ⅳ層下部にかけて出土しており，概ねⅦ層に集中し，Ⅶ層中に生活面があると推測される。

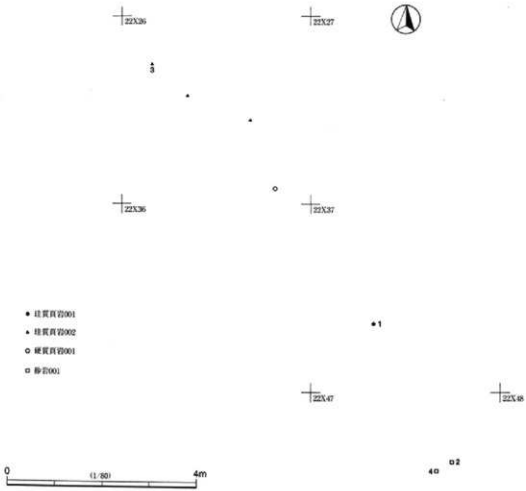
器種分布（第38図）の特徴は，中央部分でナイフ形石器１点，南東部分で掻器１点が出土した。

母岩別分布（第39図）の特徴は，北西部分では珪質頁岩002が４点，チョコレート色の硬質頁岩001が１点出土した。中央部分では，珪質頁岩001が１点出土し，南東部分では，砂岩001が２点出土した。

出土遺物　総計８点出土した。母岩器種組成は第18表のとおりである。

器種組成の特徴は，ナイフ形石器１点，掻器１点，剥片５点，砕片１点である。製品の占める割合が高い。

母岩組成の特徴は，北西部分が珪質頁岩002と硬質頁岩001で構成され，中央部分は珪質頁岩001が単独で出土し，南東部分は砂岩001で構成される。

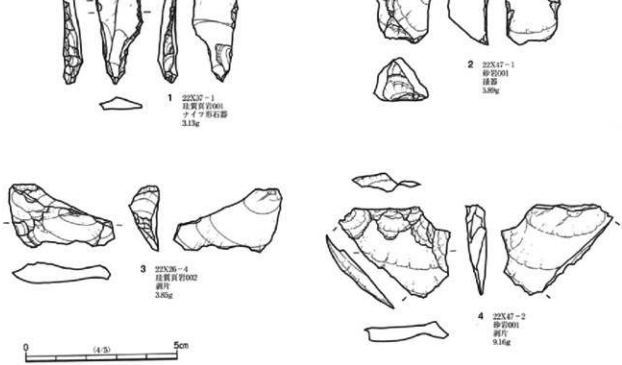


第39図　第Ⅲ文化層（追加）　第９ブロック母岩別分布図

1はナイフ形石器である。白濁した不純物を若干含む，灰色に近い珪質頁岩を用いる。縦長剥片の打点方向を基部として，左側縁下部と右側縁にブランティング加工を入念に施す。右側縁下部は背面側から大きめの調整加工が施され，抉れたような形状になっている。基部の腹面側にも，調整加工が施されている。左側縁上部の刃部には，刃こぼれ状の使用痕が認められる。

2は掻器である。あまり良質とは言えない，やや緑がかった砂岩を用いている。厚みのある縦長の素材を用いており，両側縁に若干の調整加工を施している。基部には腹面方向から剥離がおこなわれている。

3は珪質頁岩002の剥片である。青灰色を基本とし，黄土色の自然面が残る珪質頁岩で，おそらくは嶺岡産頁岩と思われるものである。不整形な横長剥片である。4は，2と同一母岩の砂岩001の剥片である。



第40図　第Ⅲ文化層（追加）第9ブロック出土石器

第17表　文化層別組成表（追加）

文化層	ブロック	母岩名	矢柴器	ナイフ形石器	台形様石器	楔形石器	彫器	掻器	敲石	局部磨製石斧再生剥片	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	石核	剥片	砕片	礫片	礫	総計
Ⅲ（追加）	9	硬質頁岩												1 0.15				1 0.15
		珪質頁岩		1 3.13										5 6.19	1 0.15			6 6.34
		砂岩						1 5.89						1 9.16				2 15.05
	9点数合計			1				1						7	1			10
	9重量合計			3.13				5.89						15.5	0.15			24.67
単	単	硬質頁岩										1 2.69						1 2.69
		珪質頁岩	1 4.3															1 4.3
	単点数合計		1									1						2
	単重量合計		4.3									2.69						7.99

（上段：点数，下段：重量（g））

第18表　第Ⅲ文化層（追加）第9ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	掻器	剥片	砕片	総計	組成比（%）
Ⅲ（追加）	9	硬質頁岩	001			1 0.15		1 0.15	12.50 0.59
		硬質頁岩点数合計				1		1	12.50
		硬質頁岩重量合計				0.15		0.15	0.59
		珪質頁岩	001	1 3.13				1 3.13	12.50 12.69
			002			3 6.19	1 0.15	4 6.34	50.00 25.70
		珪質頁岩点数合計		1		3	1	5	62.50
		珪質頁岩重量合計		3.13		6.19	0.15	9.47	38.39
		砂岩	001		1 5.89	1 9.16		2 15.05	25.00 61.01
		砂岩点数合計			1	1		2	25.00
		砂岩重量合計			5.89	9.16		15.05	61.01
全体の点数合計				1	1	5	1	8	100.00
全体の重量合計				3.13	5.89	15.5	0.15	24.67	99.99
点数組成比（%）				12.50	12.50	62.50	12.50	100.00	
重量組成比（%）				12.69	23.88	62.83	0.61	100.01	

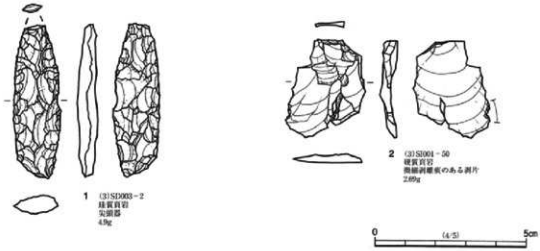
（上段：点数，下段：重量（g））

2　上層遺構出土の石器（第41図，第19表）

上層遺構の覆土中から出土した，旧石器時代の石器と考え得るものを便宜的にここで扱う。

1は槍先形尖頭器である。26Uグリッド北側に存在する溝の覆土中から出土した。残念ながら，覆土中一括で取り上げられたため，細かい出土位置は特定できない。黄白色に近い珪質頁岩を素材としており，基部を含めた側縁全体に，丁寧な調整加工が施されている。先端部は欠損する。

2は，微細剥離痕のある剥片である。弥生時代後期の住居跡覆土中で，26U56グリッドに相当する位置で出土した。チョコレート色の硬質頁岩を素材とした縦長剥片で，左側縁下部に若干の微細剥離痕が存在する。



第41図　上層遺構中出土の石器

第19表　旧石器時代　石器属性表（4）・追加

文化層	ブロック	検出番号	グリッド	遺物番号	枝番号	器種名	母岩名	母岩番号	接合	層位	最大長（一部）	最大幅（一部）	最大厚（一部）	重量（g）	打面形状	打角・背縁角	稜部調整	背面H	背面T	背面R	背面L	背面D	背面V	背面C	背面J	背面ポジ面	末端形状	側縁角	刃部角	使用痕・光沢痕	焼成	欠損	標高（m）
第	9	9-01	22837	1		ナイフ形石器	珪質頁岩	001		VII～IXa	13.2	15.3	6.4	3.13				○										46～56	23	N			23.886
第	9	9-02	22847	1		剥片	砂岩	001		IXa	35.5	19.6	12.9	5.89				○				○						73					23.72
第	9	9-03	22826	4		剥片	珪質頁岩	002		IV～V	21.5	35.4	9.8	5.95	C					○		○		○			F						24.131
第	9	9-04	22847	2		剥片	砂岩	001		VII	38.4	34.8	6.8	9.16	I		○	○									S						23.958
第	9		22826	1		剥片	頁岩	001		VII	7.9	16.7	1.4	0.15	L			○									S						24.068
第	9		22826	2	A	剥片	珪質頁岩	002		VII	16.2	24.5	6.4	1.65	J							○					H						24.006
第	9		22826	3	B	剥片	珪質頁岩	002		VII	7.1	9.7	2.6	0.15																			24.006
第	9		22826	3		剥片	珪質頁岩	002		VII～IXa	13.2	21.4	2.3	0.69	L									○			F						23.885
単	単	遺構中-1	240-北側	(D)50603-2		石核類	珪質頁岩				58.5	15.4	6.9	4.9																		○	—
単	単	遺構中-2	260-56	(D)51001-50		微細剥離痕のある剥片	硬質頁岩				32.3	25.8	5.8	2.69	J			○			○												24.518

第３章　縄文時代

第１節　遺構と出土遺物

縄文時代の遺構として，陥穴状遺構５基・土坑36基・ピット10基を検出した。陥穴状遺構は調査区内の広い範囲にわたって，散漫に分布する。いずれも出土遺物がなく，細別時期は不明である。土坑及びピットは，主に24W・25Wグリッドでまとまって検出した。

検出した遺構については，第20表に一覧表とあわせて，計測値を示した。覆土についての所見は，断面図に網掛けをおこない，模式的に示した。網掛けの凡例は第42図に示した。遺構から出土した遺物については，第47図にまとめた。

１　陥穴状遺構（第42図，第20表，図版７）

(2)SK011

調査区南端付近の27U13・14グリッドで検出した。最大長約1.7mで，溝状陥穴に近い細長い平面形態であるが，深さは約50cmとそれほど深くない。底面はやや凹凸を持つ。

(2)SK027

調査区南端付近の27T08グリッドで検出した。溝５により上部を攪乱されており，開口部の平面形はいびつだが，底面は長方形に近い形態である。いわゆる方形陥穴に近い形態のものであろう。溝に切られるため，残存した深さは約50cmである。

(3)SK001

調査区中央付近の23U33グリッドで検出した。最大長約1.7mで，平面形は長方形に近い形態を取る。深さは約1.4mあり，比較的良く残存していると考え得る。

(5)SK101

調査区中央東側の23W98・99・24W08・09グリッドで検出した。いわゆる溝状陥穴で，最大長3.2mと比較的規模が大きい。深さは1.2mでそれほど深くはない。長軸方向の壁は，底面付近で若干オーバーハング気味に広がる。底面は若干凹凸がある。

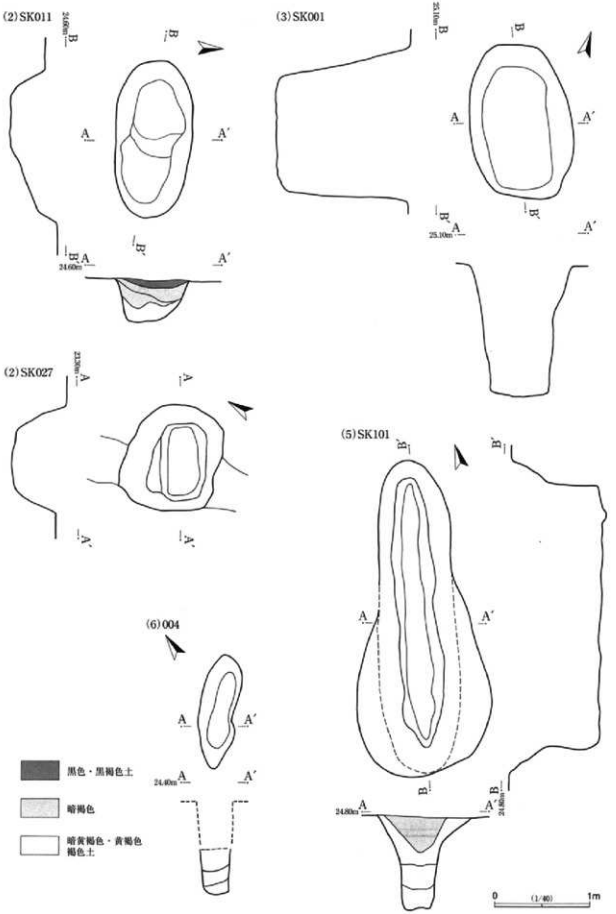
(6)004

調査区北東端の22X37・38・47グリッドで検出した。下層確認中に検出したもので，いわゆる溝状陥穴の底面付近のみが残存したものであろう。最大長は約1.2mとやや短い。

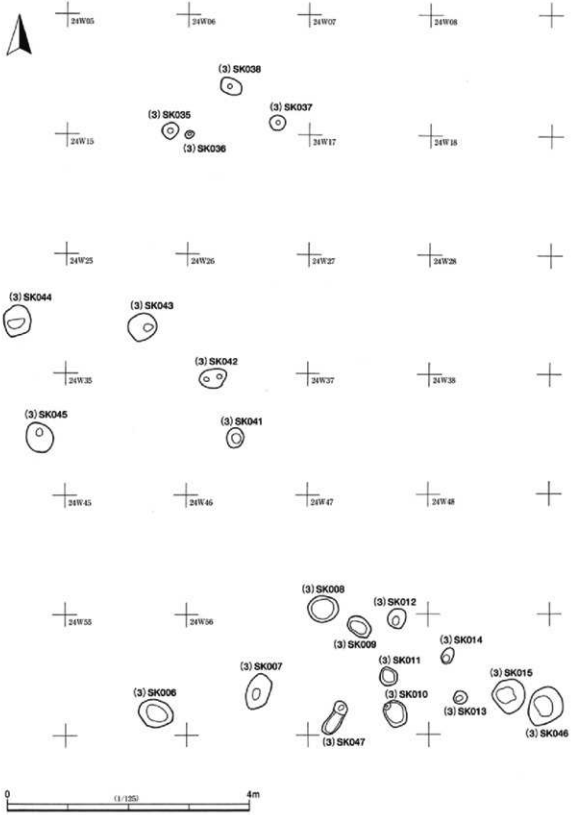
２　土坑・ピット（第43～47図，第20表，図版８・９・17）

ここでは，調査時に縄文時代の所産と判断された土坑及びピットを扱う。主に24W・25Wグリッドでまとまって検出され，第43図及び第44図にこの地点の遺構配置図を示した。土坑及びピットについては，比較的遺存状況の良いもののみを図化し，一部のものについては，この遺構配置図をもって平面図に換えた。検出した土坑及びピットの各々の位置や計測値については，第20表を参照して頂きたい。

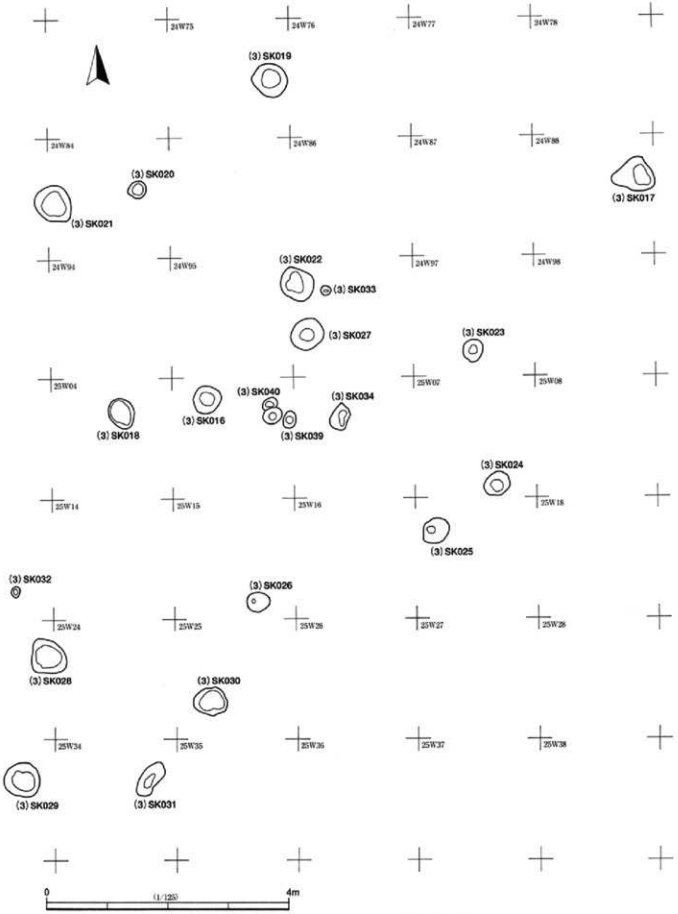
松崎Ⅳ遺跡で検出された土坑は，総体的に１m強の比較的小規模で浅いものが多い。形態的には，平面


(2)SK011
(3)SK001
(2)SK027
(5)SK101
(6)004
24.60m
25.10m
23.80m
24.40m
24.80m
A
A′
B
B′
黒色・黒褐色土
暗褐色
暗黄褐色・黄褐色
褐色土
0
(1/40)
1m

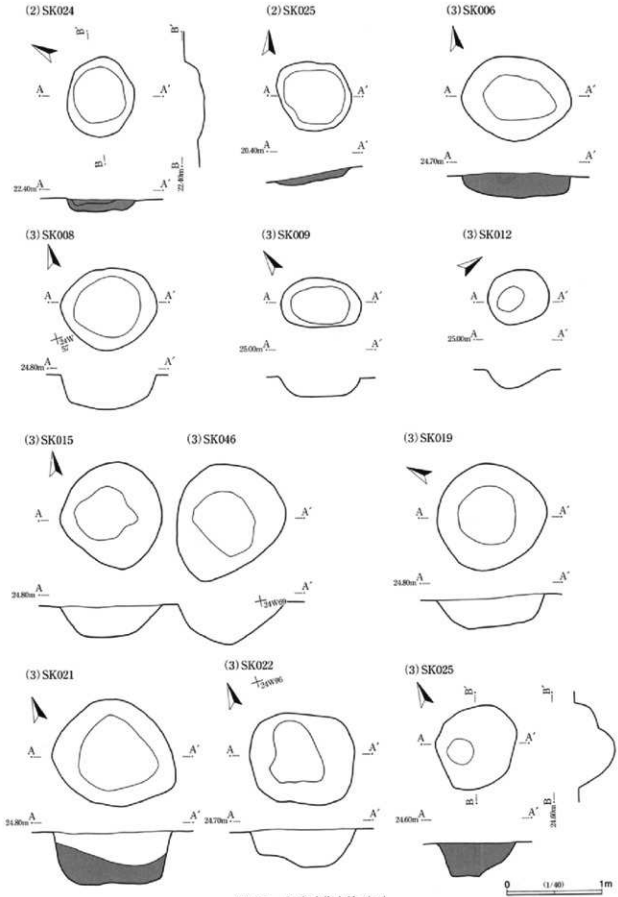
第42図　陥穴状遺構



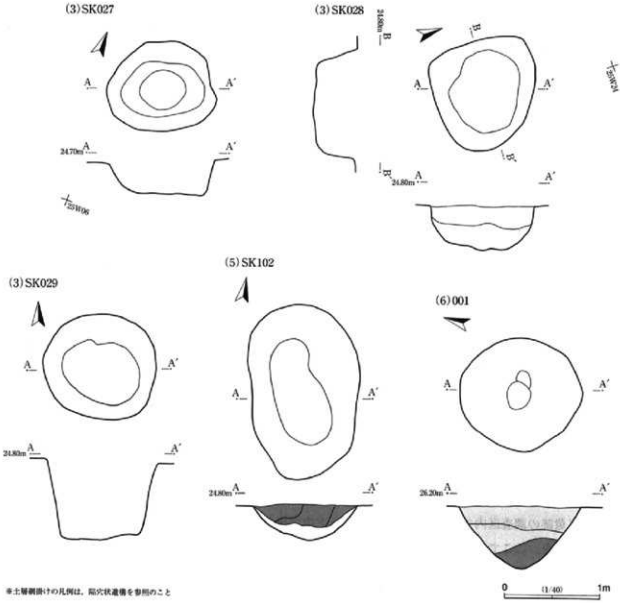
第43図　24Wグリッド北東　縄文時代土坑配置図



第44図　24W・25Wグリッド　縄文時代土坑配置図



第45図　縄文時代土坑（1）

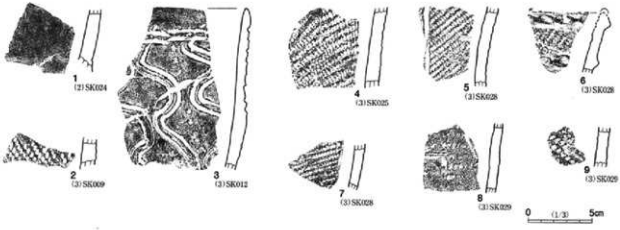


第46図　縄文時代土坑（２）

形が円形～楕円形で，皿状の断面形を呈するものが多い。一般に貯蔵穴と判断される，いわゆるタライ状やバケツ状の断面を呈するものは，(3)SK021や (3)SK029などごく少数である。

図化可能な遺物が出土した土坑としては，(2)SK024・(3)SK009・(3)SK012・(3)SK025・(3)SK028・(3)SK029がある。出土土器は第47図に示した。

(2)SK024はややいびつな楕円形の浅い土坑で，焼成･色調から縄文時代後期と判断し得る無文の土器が出土した（第47図１）。(3)SK009は楕円形の小規模な土坑で，単節縄文が施された中～後期の土器片が出土した(第47図２)。(3)SK012は楕円形の小規模な土坑で，後期前葉堀之内１式の口縁部破片が出土した(第47図３)。(3)SK025はいびつな楕円形の小規模な土坑で，おそらく後期前葉の縄文施文の土器が出土した（第47図４）。



第47図　土坑出土土器

(3)SK028は平面がややいびつであるが，断面形はタライ状に近く，比較的しっかりとした掘り込みの土坑である。第47図５～７の土器が出土した。５・７は後期前葉の縄文施文の土器か。６は後期中葉・加曽利Ｂ式の紐線文系粗製深鉢の口縁部破片である。口唇部に小突起が存在し，口縁部に２条の紐線文を配する。断面図では見にくいが，口縁部内面に２条の沈線を持つ。(3)SK029は平面形は楕円形，断面形はバケツ状のしっかりとした土坑である。第47図８・９の土器が出土した。節の粗い縄文の特徴から，後期中葉・加曽利Ｂ式の紐線文系粗製深鉢の胴部破片であろう。９も同様の破片か。

第２節　グリッド出土遺物

１　土器（第48～50図，図版17～19）

松崎Ⅳ遺跡の調査区内で，遺構に伴わずグリッド中で出土した縄文土器と，後世の遺構覆土中に混入した縄文土器を，ここで扱う。出土した土器は，早期から後期にわたるもので，時期比定が可能な文様のあるものを中心に図化した。

縄文土器全体の出土量に関する集計は実施しなかったが，土器は概ね調査区内から散漫に出土し，23Ｘ・23Ｙグリッド付近でやや出土数が多いようである。土器が出土した位置については，挿図中の番号の下に注記名を記入したので，これを参照して頂きたい。

記載は，概ね時期の古いものから順におこなった。観察表は作成しなかった。胎土中に繊維を含む土器の断面図には，●が落としてある。土器拓影図で内面の拓本を示す場合は，向かって左側に外面の拓本，中央に断面図，右側に内面の拓本を置いた。縄文の表記については，『日本先史土器の縄紋』[1]を参考として，１段右撚りの縄をＲ，左撚りの縄をＬ，２段正撚りの縄はRL，LR，３段正撚りの縄はRLR，LRLなどと，簡略化して表記することとしたい。

第20表　縄文時代土坑計測表

挿図	遺構名	種類	グリッド	平面形	規模(m)	深さ(m)	調査年度	備　考
第42図	(2)SK011	陥穴状遺構	27U13, 14	長楕円形	1.70×0.82	0.46	H10	
第42図	(2)SK027	陥穴状遺構	27T08	長方形	1.25×0.95	0.55	H10	
第42図	(3)SK001	陥穴状遺構	23U33	長方形	1.70×1.06	1.40	H11	
第42図	(5)SK101	陥穴状遺構	23W98, 99, 24W08, 09	溝状	3.20×1.04	1.02	H15	
第42図	(6)004	陥穴状遺構	22X37, 38, 47	溝状	1.20×0.36	0.50	H16	上部欠く
第45図	(2)SK024	土坑	27T16	楕円形	0.85×0.70	0.15	H10	
第45図	(2)SK025	土坑	27T16	円形	0.85×0.70	0.08	H10	
第45図	(3)SK006	土坑	24W55	楕円形	1.14×0.88	0.34	H11	
第43図	(3)SK007	土坑	24W56	楕円形	1.12×0.68	0.30	H11	
第45図	(3)SK008	土坑	24W47, 57	楕円形	1.00×0.88	0.34	H11	
第45図	(3)SK009	土坑	24W57	楕円形	0.80×0.54	0.20	H11	
第43図	(3)SK010	土坑	24W57	楕円形	0.90×0.74	0.42	H11	
第43図	(3)SK011	土坑	24W57	楕円形	0.70×0.58	0.28	H11	
第45図	(3)SK012	土坑	24W47, 57	楕円形	0.66×0.56	0.20	H11	
第43図	(3)SK013	ピット	24W58	円形	0.44×0.40	0.16	H11	
第43図	(3)SK014	ピット	24W58	楕円形	0.50×0.38	0.26	H11	
第45図	(3)SK015	土坑	24W58	楕円形	1.14×1.00	0.34	H11	
第44図	(3)SK016	土坑	25W05	楕円形	0.92×0.82	0.36	H11	
第44図	(3)SK017	土坑	24W88, 89	不整形	1.44×1.00	0.38	H11	
第44図	(3)SK018	土坑	25W04	楕円形	1.00×0.80	0.10	H11	
第45図	(3)SK019	土坑	24W75	楕円形	1.20×1.10	0.32	H11	
第44図	(3)SK020	土坑	24W84	楕円形	0.60×1.00	0.32	H11	
第45図	(3)SK021	土坑	24W83, 84	楕円形	1.30×0.66	0.60	H11	
第45図	(3)SK022	土坑	24W95, 96	隅丸方形	1.10×0.76	0.40	H11	
第44図	(3)SK023	土坑	24W97	楕円形	0.74×0.80	0.30	H11	
第44図	(3)SK024	土坑	25W07	楕円形	0.86×0.62	0.30	H11	
第45図	(3)SK025	土坑	25W17	楕円形	0.94×0.94	0.40	H11	
第44図	(3)SK026	土坑	25W15	楕円形	0.74×0.62	0.36	H11	
第46図	(3)SK027	土坑	24W96	楕円形	1.16×0.94	0.36	H11	
第46図	(3)SK028	土坑	25W23, 24	不整形	1.30×1.04	0.44	H11	
第46図	(3)SK029	土坑	25W33	楕円形	1.20×1.10	0.82	H11	
第44図	(3)SK030	土坑	25W25	楕円形	1.12×0.88	0.22	H11	
第44図	(3)SK031	土坑	25W34	長楕円形	1.24×0.56	0.30	H11	
第44図	(3)SK032	ピット	25W13	円形	0.28×0.24	0.20	H11	
第44図	(3)SK033	ピット	24W96	円形	0.30×0.26	0.40	H11	
第44図	(3)SK034	土坑	25W06	隅丸方形	0.86×0.56	0.26	H11	
第43図	(3)SK035	ピット	24W05, 15	円形	0.54×0.48	0.30	H11	
第43図	(3)SK036	ピット	24W05, 06, 15, 16	楕円形	0.24×0.20	0.10	H11	
第43図	(3)SK037	ピット	24W06	円形	0.50×0.46	0.20	H11	
第43図	(3)SK038	土坑	24W06	楕円形	0.70×0.50	0.22	H11	
第44図	(3)SK039	ピット	25W05, 06	楕円形	0.56×0.46	0.22	H11	
第44図	(3)SK040	ピット	25W05	楕円形	0.84×0.30	0.30	H11	2基切り合い
第43図	(3)SK041	土坑	24W36	円形	0.64×0.56	0.20	H11	
第43図	(3)SK042	土坑	24W26, 36	楕円形	0.90×0.60	0.22	H11	
第43図	(3)SK043	土坑	24W25	楕円形	0.94×0.86	0.26	H11	
第43図	(3)SK044	土坑	24W24	楕円形	1.06×0.90	0.42	H11	
第43図	(3)SK045	土坑	24W34	楕円形	1.06×0.82	0.70	H11	
第45図	(3)SK046	土坑	24W58, 59	楕円形	1.30×1.04	0.40	H11	
第43図	(3)SK047	ピット	24W57	長楕円形	1.20×0.40	0.20	H11	2基切り合い
第46図	(5)SK102	土坑	22X33, 34, 43, 44	楕円形	1.90×1.16	0.36	H15	
第46図	(6)001	土坑	22T92	円形	1.30×1.20	0.66	H16	

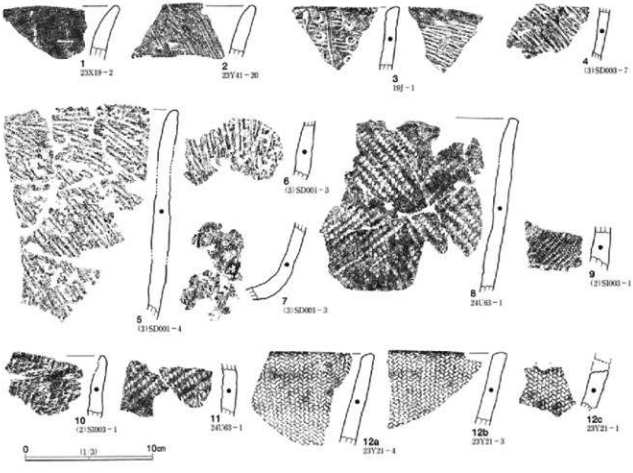
※規模は開口部での計測値，深さは最深部での計測値である。

早・前期の土器（第48図１～12）

１・２は早期中葉の沈線文系土器に伴う無文土器と判断したものである。１は若干外反する口縁部で，灰黄褐色を呈し，胎土に赤褐色粒子がやや目立つ。内外面にススが付着する。２は外面に斜方向の浅い条痕が観察できる。内面は横方向のナデの痕跡が顕著である。褐色で，胎土に白色粒子と赤褐色粒子が目立つ。

３～７は早期後葉の条痕文系土器である。３は円形竹管文と縦位沈線を組み合わせた文様を持つ。筆者が八千代市間見穴遺跡で「縄ヶ島台式と茅山下層式の中間的な様相を持つもの」と呼んだものに近い[2]。暗褐色を呈する。５は内外面に条痕を施した土器の大破片で，暗褐色を呈し，内外面にススが付着する。４・６は条痕を持つ胴部破片で，４は褐色，６は灰褐色を呈する。７は丸底の底部破片で，条痕ははっきりしない。色調は６によく似ており，出土位置もほぼ同じなので，同一個体の可能性がある。

８～12は前期前半のいわゆる繊維土器である。８は口縁部破片で，RLとLRの２種類の原体を交互に回転施文し，縄文が菱形に見えるようにしたものである。暗褐色で，外面に弱くススが付着する。10はやや尖り気味の口唇部断面を持つ土器で，やや摩滅し器面の状態が悪いため縄文ははっきりしない。灰黄色を呈する。９・11はLR単節縄文を施す胴部破片である。９は褐色，11は暗褐色である。12a～cは同一個体破片が若干出土したもので，図化したものの他に23Y20グリッドでも同一個体破片が出土した。角頭状の口唇部を持つ焼成堅緻な土器で，組紐文を施す。胎土中の繊維は少なく，暗褐色から黒褐色を呈する。12cの破片には，補修孔の一部が残る。



第48図　グリッド出土縄文土器（１）

中期の土器（第49図13～49）

13は中期中葉・阿玉台式後半の土器で，おそらく円孔を有する巨大な把手を持つ土器であろう。口縁部は縄文を施したタガ状の隆線で区画し，区画が接する部分は横状把手となっている。区画内は，沈線による梯子状の文様で再区画し，その内部に竹管をロッキング手法に近い方法で動かすことによる細かい横位の結節沈線を配する。頸部以下の縄文は，図で表現されたよりも整った，RL単節縄文の縦位施文で，帯状に施文された縄文間は無文の部分が若干残る。色調は褐色で，胎土中にやや大粒の白色粒と雲母が目立つ。

14～19は，中期中葉末から後葉にかけて存在する多様な土器の一部と考えられるものである。色調は概ね暗褐色を呈し，白色粒・砂粒を含むが，雲母は目立たない。14は胴部の隆線上に縄文を施すもので，阿玉台式末葉の土器であろう。15はおそらく波状口縁の土器で，口縁部内側に段を持つ。口唇部には１条の沈線を引き，肥厚する無文の口縁部下に沈線による文様を描く。16はLR単節縄文を地文とし，口縁部に２段の刻文帯のような文様を持つ。下段は交互刺突手法である。外面にススが付着する。17・18は円孔を持つ把手の一部であろう。18には大ぶりな三叉文が描かれる。19は，細かい爪形状のキザミを施した隆線による区画の一部が残る。以下には，おそらく０段多条のLR単節縄文を地文とし，３本一組の沈線を垂下させる。

20～36は中期後葉・加曽利Ｅ式である。色調は暗褐色から黒褐色のものが多く，21・27・28・31は褐色に近い。胎土中には，少量の砂粒や白色粒を含むものが多い。20は雲母が目立つ。24は大粒の白色粒を多量に含む。29はよく焼き締まっている感じで，胎土も緻密でやや異質に見える。少量の鮮やかな赤色粒を含む。

20～28は概ね加曽利Ｅ式・古い部分に相当する土器であろう。隆線脇の沈線が施されない21・22は最も古い部分に相当しよう。すべて口縁部の区画隆線が残るもので，多くは背割り状の隆線である。27には直線と波状の２種の懸垂文が見られる。28には口縁部区画内の渦巻き文が見えるが，全体に扁平な隆線で構成されている。古い部分から新しい部分にかけて存在するものであろう。

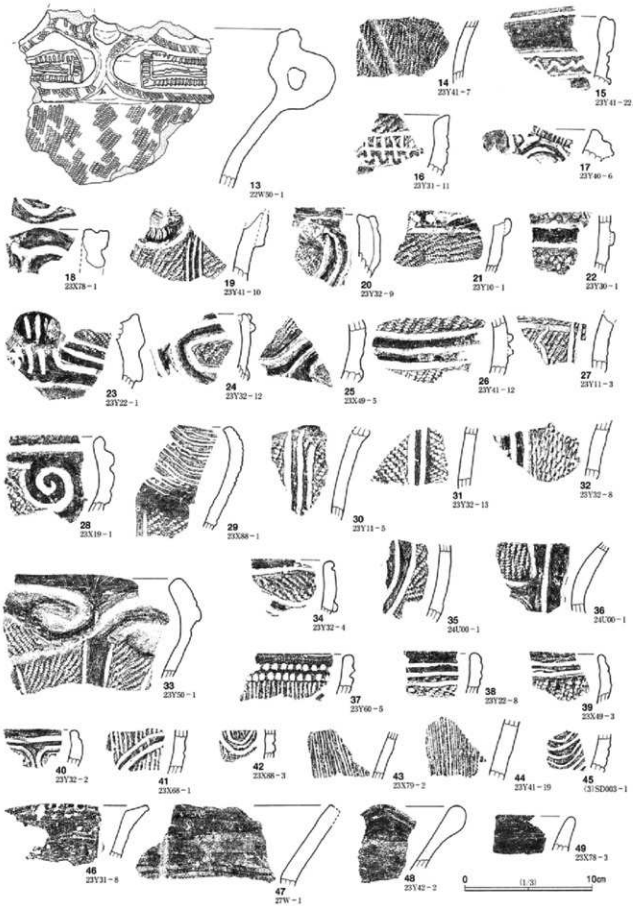
29は，地文のない口縁部に褶曲文状の雑な沈線を配し，以下にはRL単節縄文を地文にして，懸垂文を配する。30は３本一組の胴部懸垂文で，沈線間の磨り消しは明瞭でない。29・30は未だ古い部分の範疇でとどまるものであろう。

31～36は加曽利Ｅ式・新しい部分の土器である。31・32は懸垂文間の地文の磨り消しが明瞭である。33は口縁部の大破片で，口縁部下端区画は明瞭でなく，懸垂文間の磨り消しもやや広い。34もおそらく口縁部下端区画が明瞭でない土器であろう。外面にススが付着する。35・36は沈線で曲線的な文様を描くもので，沈線間の地文の磨り消しが明瞭である。

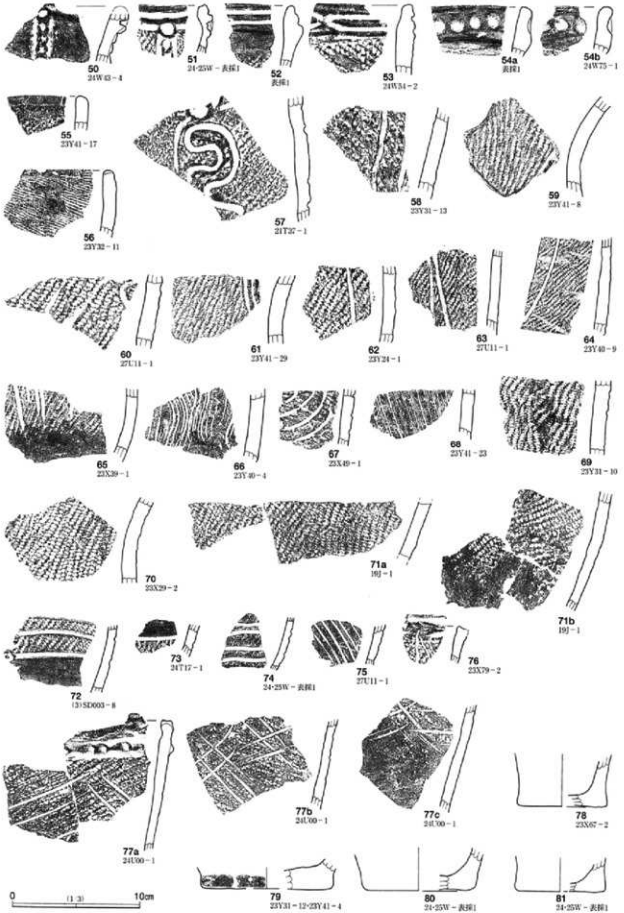
37～42は連弧文系土器である。37～39・42が暗褐色，40・41は褐色を呈する。胎土中に白色粒を少量含むものが多いが，混入物は全体的に少ない。地文は37・41がＬ撚糸文，42はＬ撚糸文か，38はRL単節縄文，LRL複節縄文か。

43～45はおそらく加曽利Ｅ式に伴う条線・沈線の土器である。いずれも少量の砂粒を含む。色調は43は黒褐色，44・45は暗褐色である。45は曽利式系の重弧文土器の可能性もあるが，小破片のため確定できない。

46～49は概ね中期後葉の浅鉢と考え得るものである。46・48・49は砂粒・白色粒を少量含み，47は砂粒をやや多く含む。色調は46が暗褐色，47がにぶい黄橙色，48・49はにぶい黄褐色に近い。



第49図　グリッド出土縄文土器（2）



第50図　グリッド出土縄文土器（3）

後期の土器（第50図50～77）

50～71は，概ね後期前葉の堀之内１式に相当するものである。色調は褐色から暗褐色のものが多く，55・59・62・71aは黒褐色に近い。少量の砂粒・白色粒を含むものが多いが，62・64・66・68・71は赤褐色粒をやや含む。

50～56は口縁部破片である。50は口縁部に無文帯を持つ土器で，口唇部の突起下から刺突を施した隆線が垂下する。51～53は口縁端部に沈線を配する土器である。51は円形刺突と，沈線間に連続刺突を施す文様を垂下させる。54は口縁端部に指頭状工具による円形刺突を連続させるものである。55・56は縄文のみの土器である。56は口唇部に１か所棒状工具によるキザミを持つ。

57～71は胴部破片である。57～65は地文縄文上に沈線で文様を描くものである。57は垂下する単位文が観察できる。67～68は地文を欠くものである。66は櫛歯状工具による条線文である。69～71は縄文のみのものである。69は外面に若干ススが付着する。70は内面に炭化物が少量付着する。

72～77は後期中葉・加曽利Ｂ式である。色調は72・73・76が灰黄褐色，74は暗褐色，75・77は褐色である。72～76は少量の砂粒・白色粒を含む。77は大粒の赤褐色粒が目立つ。

72・73はおそらく加曽利Ｂ１式精製の鉢で，胴部に帯状縄文が配される。72には区切り文の一部が残る。74は地文を欠いた横位の沈線を持つもので，帯状縄文と同様の文様構成を取るものかと思う。75は斜方向の多条沈線を持つもので，算盤玉形土器の体部下半か。

76は口縁部内面に浅い１条の沈線を持ち，粗製深鉢の１種かと思う。口唇部にも浅い沈線を持ち，地文縄文上に斜沈線を引くものである。77は紐線文系粗製深鉢で，図化した他にも同一個体片がある。口縁部内面には１条のしっかりとした沈線を持ち，口唇部には小突起がある。紐線上には，やや間延びした指頭状工具による押圧が施され，地文縄文上に斜沈線が引かれる。

底部（第50図78～81）

図化した底部は，焼成などの特徴から，すべて後期以降の土器かと思う。色調は，80が褐色，それ以外は暗褐色である。80は胎土中に大粒の白色粒を多量に含み，これ以外は少量の白色粒を含む。

78・81は底部外面が若干外に張り出す形態で，後期前葉後半の堀之内２式土器でよく見られるものである。81の底面には網代痕が残る。79はやや径が大きな底部であり，底面外縁部付近にわずかに網代痕が残る。

2　土製品（第51図・第21表・図版17）

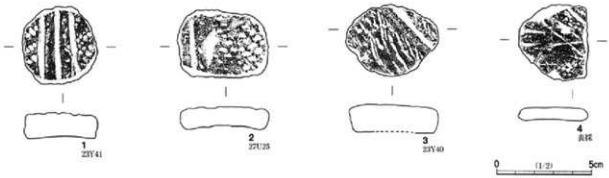
遺構に伴わずグリッド中で出土した縄文時代の土製品を一括する。すべて土器片を再利用した，いわゆる土製円板と土器片錘である。個々の計測値については，第21表にまとめた。

1は中期後葉・加曽利E式の古い部分の胴部破片を用いた土製円板である。周囲は打ち欠いて成形した後，若干研磨している。

2も中期後葉・加曽利E式の胴部破片を用いたもので，土器片の周囲を丁寧に研磨し，隅丸長方形になるよう成形している。糸掛け用の切り込みは観察できないが，形態から土器片錘に近いものと想像する。

3もおそらく中期後葉・加曽利E式の胴部片を用いた土器片錘である。土器片の周囲は研磨によって成形されているように見えるが，焼成があまり良くない土器であり摩耗している可能性もある。あまりはっきりしないが，両側縁に1対の糸掛け用の切り込みが存在する。

4は後期中葉・加曽利B式紐線文系粗製深鉢の胴部破片を用いた土製円板である。全体の2/3ほどが残存しているようである。土器片の周囲を打ち欠いて，楕円形に成形したものと思われる。



第51図　グリッド出土縄文時代土製品

第21表　縄文時代土製品計測表

図	番号	注記	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
第51図	1	23Y41－21	土製円板	4.1	4.0	1.2	24.56	
	2	25U25－1	土器片錘	3.5	4.8	1.1	26.22	
	3	23Y40－8	土器片錘	3.8	4.9	1.5	26.34	
	4	表採001	土製円板	4.0	3.7	0.6	11.61	

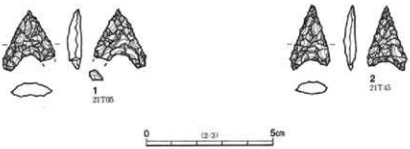
3　石器（第52図・第27表・図版19）

遺構に伴わずグリッド中から石鏃が２点出土した。各々の計測値については，第27表に示した。

１は黒曜石製の石鏃である。21T05グリッドで出土した。基部の抉りは深く，脚の一方の先端を欠損する。２も黒曜石製の石鏃である。21T45グリッドで出土した。やや細身の作りで，基部の抉りは弱い。

注１　山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会（1997再刊　示人社）

２　田中　裕・大内千年ほか　2005『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書４－八千代市間見穴遺跡（２）－』（財）千葉県文化財センター



第52図　グリッド出土縄文時代石器

第４章　弥生時代以降

第１節　遺構と出土遺物

弥生時代以降の遺構は，竪穴住居跡６軒（弥生時代後期），竪穴状遺構１基（弥生時代後期），土坑32基，溝状遺構11条である。遺構中から出土した石器の計測値については，第27表に記した。また，(3)SX001竪穴状遺構でまとまって出土した珪質頁岩製の剥片と，他の遺構・グリッドで出土したこれと同一母岩と考え得る剥片の計測値を，第22表にまとめた。

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（旧(1)SI001）（第53・54図，第27表，図版10・19・20）

出土した遺物から弥生時代後期の住居跡である。24U84・85・94・95グリッドに位置する。平面プランは楕円形に近く，長径約6.7m，短径約5.5mである。主軸方向は約N－40°－Wである。壁の立ち上がりはしっかりとしており，確認面からの深さは最大で約40cmである。覆土は黒褐色土主体で，断面図から見た堆積状況は，自然堆積のように見える。住居跡北東側の覆土中では，焼土が検出された。

床面はほぼ平坦で，炉の周囲から南西側を中心に硬化面が確認できた。炉は住居の長軸上の北寄りで検出した。長径約１mの楕円形プランの地床炉である。底面は焼け込んでおり，凹凸を持つ。

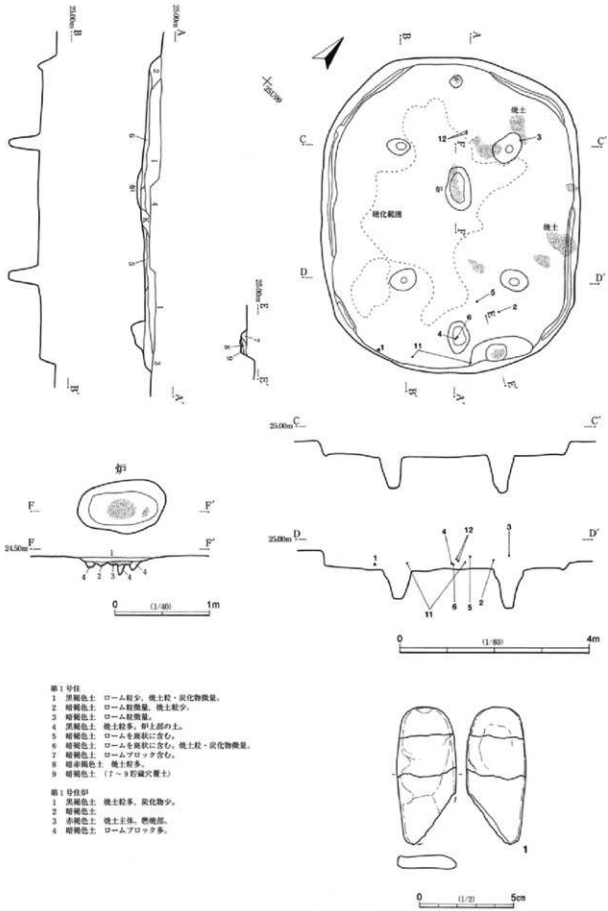
柱穴は，四本主柱穴構造と考えられる。いずれの主柱穴も80cm前後の深さで，しっかりとしている。住居主軸上の南側には，入口のハシゴ穴らしきピットが存在する。主軸上の反対側には，深さ約67cmのピットが存在する。ハシゴ穴に近い南東壁際には，長径1.3mほどの貯蔵穴とおぼしきピットが存在する。住居の壁際には浅い周溝が巡るが，住居の主軸方向の南北壁際では，とぎれるようである。

遺物は少量の土器と石器が出土した。遺物は，主に床面からやや浮いた覆土中で出土した。

１は砂岩製の砥石である。下部が一部欠損するが，ほぼ全形を窺える。板状の長楕円形の形態で，全体に磨った痕跡がある。表・裏面とも，使用に伴う部分的な凹凸が存在する。

本跡から出土した土器は，すべて破片であり総数100片を少し越える量であった。一括品は存在せず，数片の接合により概ね形状を推測できる甕形土器が１点確認された。器面は，大半が縄文で覆われ様々な原体の撚糸が使用されていた。

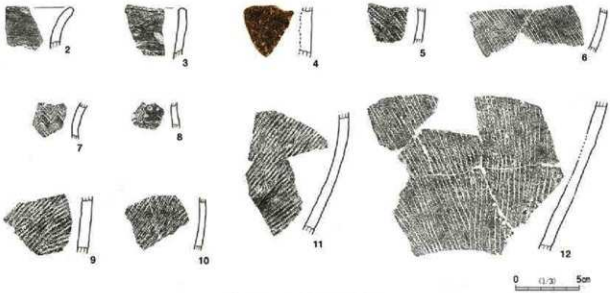
２は口縁部片で，口辺はナデ整形によりきれいに仕上げられている。下端には結節縄文らしき痕跡を残す。３も口縁部片であるが，無文地の上をヘラ状工具により整形している。４は，いわゆる南関東系の壺といえる。胴部片で器面には赤彩を施している。同一個体の小破片が数片出土しているが採拓は１点にとどめた。胎土には石英粒・小石を含有し，焼成は甘く脆い状態となっている。在地での製作によるものであろう。５は胴部片で，縄目の間隔は粗い。窪んだ縄跡には炭化物が付着しており，煮沸用の甕として使用されたものであろう。６も胴部片であり，撚りが密で細い原体を使用しているのが特徴的である。７は頸部片で，櫛歯状工具による波状文がみられる。８も頸部に近い破片で，縦方向の櫛描文が認められ，その下には結節縄文が施される。９～12は胴部片で，11・12は底部に近い。12の縄文の間隔は粗く，５・６に類似している。



第1号住
1　黒褐色土　ローム粒少、焼土粒・炭化物微量。
2　暗褐色土　ローム粒微量、焼土粒少。
3　暗褐色土　ローム粒微量。
4　黒褐色土　焼土粒多、炉上部の土。
5　暗褐色土　ロームを斑状に含む。
6　暗褐色土　ロームを斑状に含む。焼土粒・炭化物微量。
7　暗褐色土　ロームブロック含む。
8　暗赤褐色土　焼土粒多。
9　暗褐色土　（7～9貯蔵穴覆土）

第1号住炉
1　黒褐色土　焼土粒多、炭化物少。
2　暗褐色土
3　赤褐色土　焼土主体、燃焼部。
4　暗褐色土　ロームブロック多。

第53図　第1号住居跡（1）



第54図　第１号住居跡（２）

色調は２・６・９・10・11が黒褐色で，３・４・７・８が赤褐色，５は淡褐色を呈している。焼成は，４・９～11が甘く裏面では剥落が認められる。他は，概して良好といえる。

第２号住居跡（旧(1)SI002）（第55図，第22表，図版10・20）

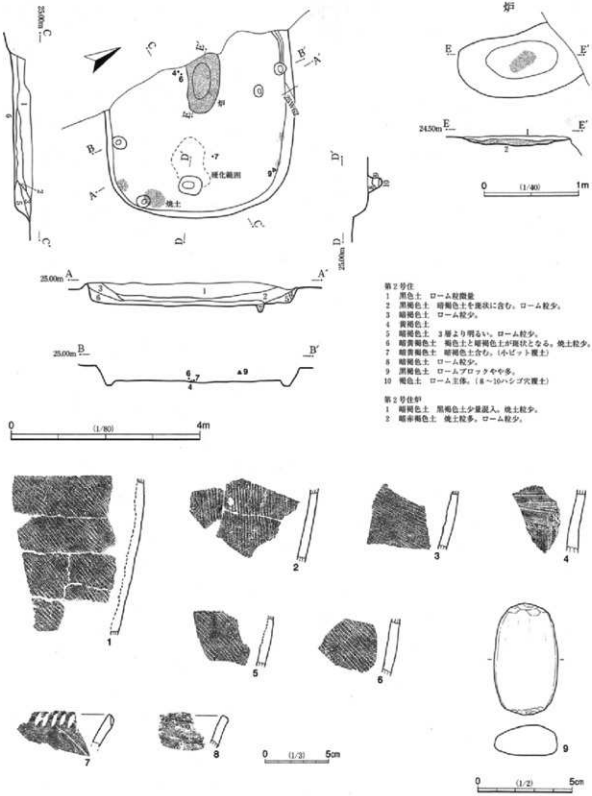
出土した遺物から弥生時代後期の住居跡である。25W51・61・62・グリッドに位置する。住居跡の中央付近を平成９年度に検出し，道路下に残されていた東側部分を平成17年度に調査した。西側は溝１によって壊されており，全体の約2/3が残存したようである。

平面プランは，検出された部分から見て，おそらく隅丸方形であろう。長軸方向では約４ｍ残存し，おそらく本来は７ｍ～８ｍあったであろう。短軸は約６ｍである。主軸方向は約Ｎ－60°－Ｗである。壁の立ち上がりは急で，確認面からの深さは最大で約50cmと深い。覆土は，上層に黒色系の土が厚く堆積し，自然堆積のように見えるが，床面直上に焼土粒を含む褐色系の明るい土（６層）が存在し，一部に埋め戻された可能性があろう。東側の壁際を中心に，床面からやや浮いた状態で，一部に焼土が検出された。

床面は緩やかな凹凸を持つもののほぼ平坦である。床面にはロームブロックが目立ち，軽く貼床されていたようである。ハシゴ穴と考えられるピット周辺で硬化面が確認できた。炉は部分的に溝に壊されるが，ややいびつな長楕円形プランの地床炉で，検出した範囲の最大長で約1.3ｍを測る。底面は凹凸が激しく，部分的に焼け込みが顕著であった。炉の覆土下層には焼土を多量に含んだ土が堆積している。

最終的に床面を剥がして確認したが，検出した範囲内では，主柱穴と考え得るピットは存在しなかった。東側の壁寄りで，最大長約50cmのハシゴ穴と考え得るピットを検出した。平面形は隅丸方形に近く，東側壁に向かって傾斜を付けて掘り込んであった。また，壁際を中心に小ピットが４基検出されたが，いずれも10cm～15cm程の深さで，浅い。北側の壁際では部分的に周溝が検出されたが，明瞭ではない。

本跡での出土遺物は概して少ない。土器は，採拓した８点の他に小破片が50片ほど検出された。床面付近では４及び６・７の土器が出土した。８は出土位置の厳密な記録を欠くが，ほぼ床面直上から出土したものである。石器としては，９の敲石が出土した。また，(3)SX001竪穴状遺構で多数検出した，灰白色～



第2号住

1 黒色土 ローム粒微量
2 黒褐色土 暗褐色土を斑状に含む。ローム粒少。
3 暗褐色土 ローム粒少。
4 黄褐色土
5 暗褐色土 3層より明るい。ローム粒少。
6 暗黄褐色土 褐色土と暗褐色土が斑状となる。焼土粒少。
7 暗黄褐色土 暗褐色土含む。(小ピット覆土)
8 暗褐色土 ローム粒少。
9 黒褐色土 ロームブロックやや多。
10 褐色土 ローム主体。(8～10ハシブ穴覆土)

第2号住炉

1 暗褐色土 黒褐色土少量混入。焼土粒少。
2 暗赤褐色土 焼土粒多。ローム粒少。

第55図 第2号住居跡

明緑灰色を呈する珪質頁岩製の剥片と同一母岩と考え得る剥片が，5点出土した（第22表）。

1は6点の破片が接合した胴部片であり，3・5・6とともに同一個体となる可能性が高い。図示しなかった小破片でも数点類似するものが存在する。器面には間隔の粗い撚糸状の縄文が斜行し，裏面は剥落が著しい。色調は淡褐色を呈する。2も胴部片で，1と同様な施文が認められる。焼成は良好であるが，胎土には雲母・石英粒の他に多量の小石を含む。色調は淡褐色となる。4は表裏に櫛歯状工具による整形痕が認められる。色調は赤褐色で，焼成も良好である。7・8はおそらく甕の口縁部であり，7は口唇部にキザミを施し，外面には調整痕が残る。色調は7が黒色，8が暗褐色である。9は砂岩製の敲石である。長軸方向の両端に，明瞭な敲打痕を残す。表面の磨った痕跡はあまり顕著でない。

第3号住居跡（旧(2)SI003・(3)SI001）（第56～58図，第22・27表，図版10・19～21）

出土した遺物から弥生時代後期の住居跡である。26U39・48・49・58・59・69・26W40・50グリッドにまたがって位置する。平成9年度と平成10年度の調査区境で検出されたため，2年度にわたって調査をおこなった。平成9年度に北側のコーナー付近を調査し，平成10年度にそれ以外の部分の調査を実施した。

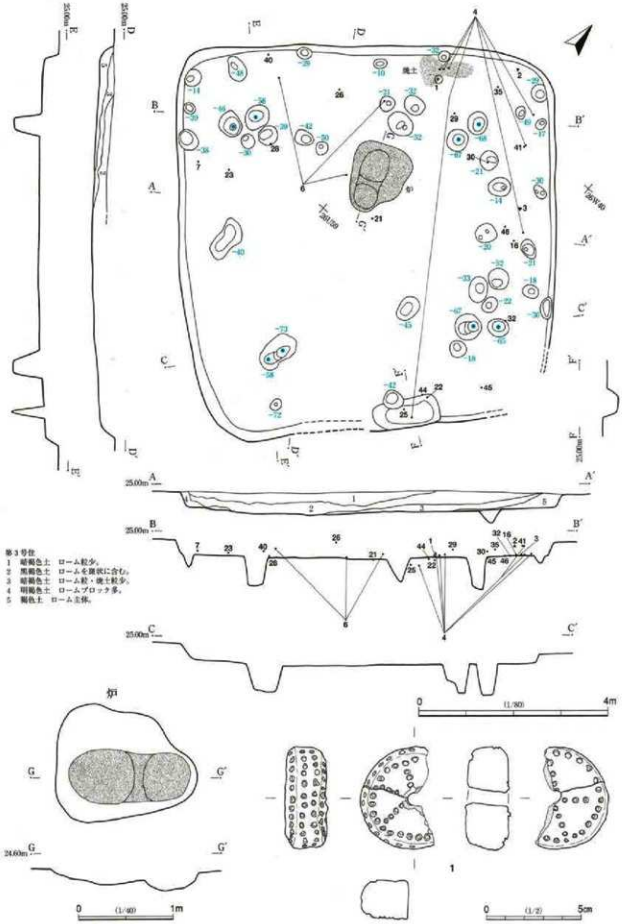
住居跡のほぼ全体を調査したと考え得るが，遺存状況の関係から，東側のコーナー付近は明瞭に検出できなかった。平面プランは方形に近く，長軸方向の最大長で約8.3m，短軸約8mとかなり規模が大きい。主軸は北西側の壁を基準とすれば，約N－40°－Wとなろう。住居跡東側は遺存状況が悪く，壁の立ち上がりも明瞭でなかったが，その他の部分では壁の立ち上がりがしっかりとしており，確認面からの深さは最大で約50cmとなる。覆土は黒褐色～暗褐色土が主体で，断面図を見る限り自然堆積のようである。壁際にはロームを多く含む色調の明るい土が，かなりしっかりと存在する。住居跡北西側の壁際で，部分的に焼土の堆積が認められた。

床面は住居の中央付近に向かって，若干傾斜をもつ。炉は，北西壁寄りで検出した。最大長約1.5mの不整形プランの地床炉である。断面の形状から見ると，2基の炉が重複しているように見え，炉の改修がおこなわれた可能性が高い。南東壁際では，長軸約1.4mの長方形に近いプランのピットを検出し，貯蔵穴かと思われる。

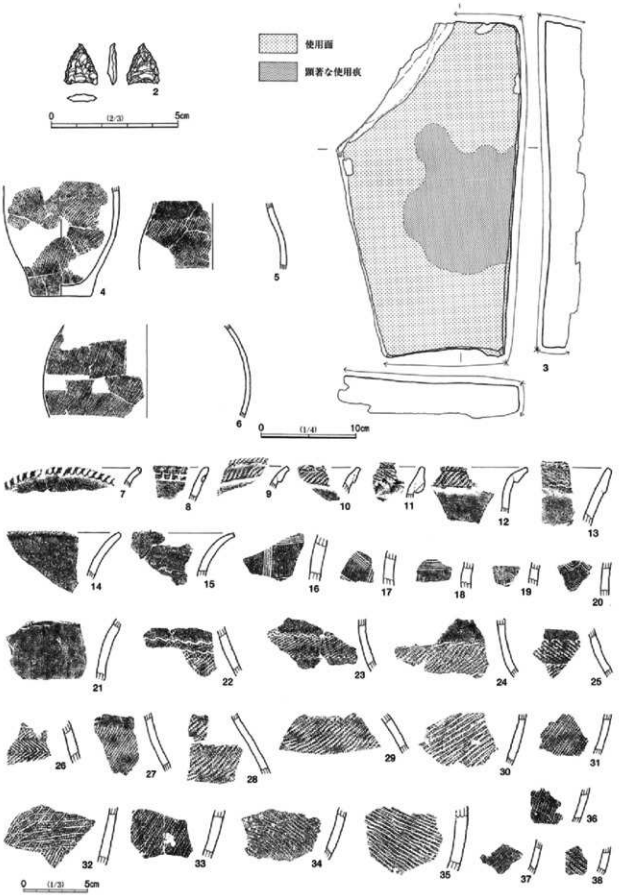
柱穴は，住居の北側を中心に多数検出した。断面図だけでは全てのピットの深さを表現できないため，やや煩雑ではあるが，平面図中に床面からの深さを記入した。－○と表記した数字が，床面からのピットの深さを表し，単位はcmである。ある程度の深さを持ち，配置から見て主柱穴の可能性があるピットにはドットを落とした。概ねコーナーに対応する位置に2本ずつ主柱穴とおぼしきピットが存在し，主柱穴配置は4本主柱穴構造と推定できよう。おそらく主柱穴の造り替えがおこなわれており，炉の所見とともに，1度以上の住居の改修がおこなわれた可能性が高い。

多数検出された小ピットは，主柱穴の補助柱としても役割をもつものも存在したであろうが，後世の攪乱も含まれるようである。ただし，厳密に識別することが難しいため，検出したピットについてはすべて図示した。

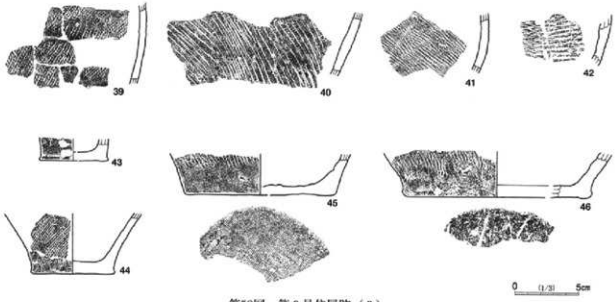
遺物は土器・土製品・石器が出土した。遺物は床面付近及び覆土下層を中心に出土した。小型の不明鉄製品1点が覆土上層から出土したが，出土レベルを検討したところ，ほぼ確認面での出土であることが判明したため，混入と判断し，図化しなかった。また，(3)SX001竪穴状遺構で多数検出した灰白色～明緑灰色を呈する珪質頁岩製の剥片と，同一母岩と考え得る剥片が2点出土した（第22表）。



第56図 第3号住居跡（1）



第57図　第３号住居跡（２）



第58図　第３号住居跡（３）

１は土製紡錘車である。全体の約1/2が残存する。器面全体に，小ぶりな竹管により円形竹管文を施す。表・裏面では，中央の孔から放射状に円形竹管文を連続して施す。最大長5.4cm，最大厚2.4cm，重量44.93ｇである。２はチャート製の石鏃である。基部の抉りが弱い形態である。

３は砂岩製の大型砥石状石製品である。最大長が約36cm，重量約3.9kgと極めて大型である。表面は全体に平滑に磨られており，中央部付近は特に顕著に使用された痕跡が認められる。側縁部も，欠損部と左側縁部以外，全体に磨られている。裏面は，節理によって板状に剥離した状態のまま残されている。砥石的な用途で用いられたことは間違いないと思われるが，極めて大型であり，弥生時代の遺物として一般的な小型の砥石とは異質である。大型砥石状石製品と仮に呼称しておく。最終的には小型の砥石の素材となったようで，第６号住居跡出土の砥石（第63図10）と接合した。

本跡では図示しなかった小破片も含めると総数　200点を超える土器片が出土している。土器だけに限っても後述する第４号住居跡とともに豊富な出土量といえる。

４は底部まで遺存する甕であり，器面は底部付近まで附加状の縄文が施文される。底部での圧痕は認められない。５も同様な原体を用いている。上部では無文帯がみられる。６は甕の胴中央部にあたり，遺存部のみでは球形に近い形状となる。器面には附加状の縄文が密に施されている。これら３点の焼成は良好であり，色調は褐色ないし暗褐色を呈し，５の上部では炭化物の付着が若干認められる。７～15は，甕形土器の口縁部片であり，口唇部に縄文が施されるタイプ（９～14）が多い。８はヘラ状工具により口縁直下に帯状の文様を施す。あまり類例のみられない施文法である。11の口縁部は，折り返しというよりも粘土紐を貼り付けており，縄文を施文後，その下部を指頭により押し上げている。これらは概して良好な焼成を示し，色調は８・９・12が黒褐色，10・13が褐色，11は赤褐色を呈している。７・15の口唇部には刻目が認められる。南関東系に属する可能性の高い甕であり，7の頸部には輪積痕が想定できる。いずれも器面はナデ整形によりきれいに仕上げられており，15では炭化物の付着も認められる。色調は褐色ないし暗褐色で，15は粗い砂粒を含む。16～20は頸部の破片で，４～５本の櫛歯状工具で縦横・波状に文様を施す。焼成も良好で，色調は褐色ないし暗褐色となっている。21は頸部の無文帯部の破片で赤褐色を呈しており，

その弯曲度から小型品であることが窺える。22～24は胴上半部にあたり結節縄文の痕跡を残す。25・26は羽状の細縄文と僅かに沈線を上部に残す。25は上部に結節も認められる。胎土・縄文原体から26とは異なるようである。26は，7・15に対応する壷となろうが赤彩は認められない。その他27～42までは甕形土器の胴部片で，様々な縄文原体を使用しており，いわゆる北関東系土器群として把握できる一群である。焼成については概して良好であるが，33～35・42の内面では剥落が認められる。43～46は底部片であり，底面に圧痕を残すものについては採拓した。45では布目，46では大型の木葉痕を残す。また45・46の内面は剥落が著しい。

第4号住居跡（旧(2)SI004）（第59・60図，第27表，図版11・19・22）

出土した遺物から弥生時代後期の住居跡である。26U87・88・97・98グリッドに位置する。上部を溝9に切られる。平面プランはややいびつな隅丸方形で，長軸約5.5m，短軸約4.9mである。主軸方向は約N－75°－Wである。壁の立ち上がりはしっかりしており，確認面からの深さは最大で約60cmである。覆土は，住居跡中央付近に黒褐色～暗褐色の土が堆積しているが，壁際にはロームブロック主体の明るい色調の土が厚く堆積する。最上層の1層は，溝9の覆土である可能性が高い。

床面は断面図から見る限り，ほぼ平坦である。炉は，比較的規模の大きな炉を，北側壁寄りで検出し，これを炉1とした。炉1は最大径約1.2mの不整楕円形プランの地床炉で，底面は焼け込んでいる。また，住居跡中央やや東寄りで，小規模な炉を検出し，炉2とした。炉2は，最大径約50cmの楕円形プランの地床炉で，焼土主体の赤褐色土を覆土としていた。

柱穴は，住居跡中央寄りのコーナーに対応する位置で，深さ約70cm～80cmのしっかりとした柱穴を4本検出した。4本主柱穴構造と考え得る。また，北西コーナー付近で，深さ約20cmの小ピットを検出した。北壁際では，最大長約90cmの不整形のピットを検出し，貯蔵穴かと思われる。

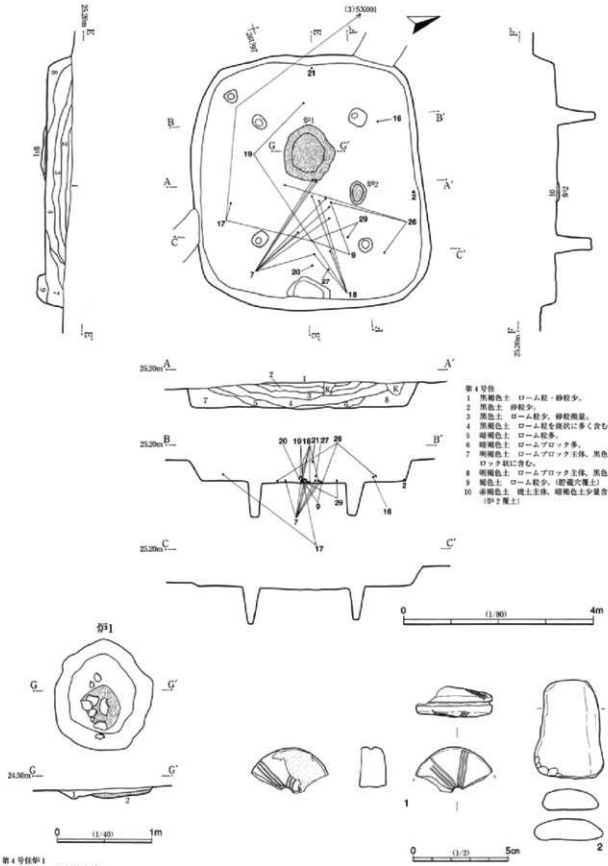
遺物は，床面付近を中心に，土器・土製品・石器が出土した。

1は土製紡錘車である。全体の約1/3が残存している。側面にやや深い沈線を巡らし，表裏面には櫛歯状工具により放射状の文様を描く。最大長4.1cm，最大厚1.6cm，重量11.14gである。2は砂岩製の小型の砥石である。

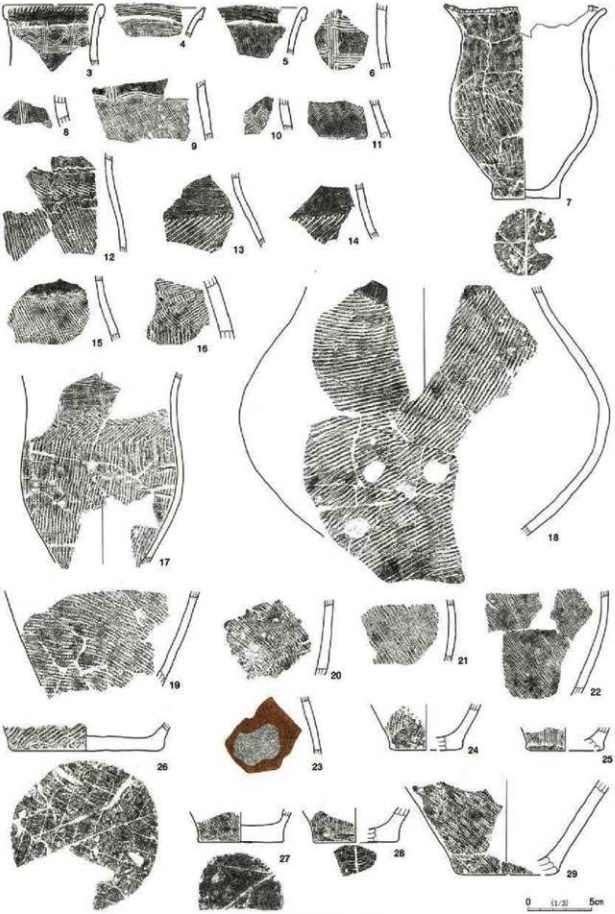
本跡も豊富な土器の出土量を示す。唯一，計測可能な一括品と形状が推測できる大型破片（7・17・18）が検出されている。ここでも若干の櫛描文が認められたため小片でも採拓し，図示したところである。

3～5は口縁部片である。3は，その弯曲から推定すると，口縁部径が約8cmと小さい。口唇部にはヘラによる刻目がみられ，口縁は折り返しにより肥厚する。頸部の櫛描文は3本一組の工具により，縦，横，波状の順に施文されている。焼成は良好で淡赤褐色を呈する。4は折り返した口縁に撚糸文を横走させる。5は無文で，ヘラによる簡単な仕上げにとどまる。これらの焼成は概して良好で，3・5は赤褐色，4は淡褐色で表面に炭化物の付着がみられた。6・8～11は頸部片となる。6は，おそらく半截竹管を2本一組にして用いて，櫛描文として表現したものであろう。7は3本一組の工具による。9は胴部に細い撚糸文を密に施文後，縦方向から横へと櫛描文で飾る。10は数本の櫛歯による波状文を描く。11でも同様な文様がみれら，下部に縄文の結節部が僅かに認められる。

これらの色調は6・10・11が黒褐色，9が褐色，8が赤褐色を呈する。焼成は，9に限り極めて良好で堅固な作りである。12～16は頸部から胴上半部にかけての破片で，12では結節縄文下に羽状縄文が巡る。



第59図 第4号住居跡（1）



第60図　第４号住居跡（２）

16も異方向に原体を回転させ羽状の効果を現出させており，直下に細い撚糸文を縦方向に回転させている。赤彩は認められないが，南関東系の壺形土器の肩部にあたると考えられる。さらに23は無文ではあるが，器面には赤彩が残り明らかに南関東系の壺の一部であり，同一個体の破片が他に４片出土している。以上の土器群は，いずれも焼成は良好であり，12・14・15が黒褐色，13が赤褐色，16が淡褐色を呈する。

７は唯一完形に近い甕で，口唇部には櫛歯状工具による刻目が巡る。頸部は無文で，胴部には間隔が疎らな撚糸文が無造作に付されている。底部には木葉痕が認められ，胎土には石英・雲母・小石等を多く含む。色調は黒褐色ないし暗褐色を呈する。口径は12.5cm，器高は15.3cmを計測する小型甕である。17は口縁部と底部が欠損し，ここでも頸部に羽状縄文が認められる。原体には附加状縄文を使用している。胎土は精選され微細な白色鉱物が若干混入する。色調は黒褐色，内面は赤褐色を呈する。18は胴部の張りから壺形に近い形状を有するものであろう。頸部は無文で，縄文は器面の乾燥が十分でなかったためか，明確でなく中央部に横走する結節痕は拓本でも僅かな拓影を残すのみである。焼成は良好とはいえず器内外面では剥落が認められる。色調は暗褐色ないし淡褐色，内面は赤褐色となっている。なお，17は12片の小破片が接合したものであるが，その内の５点は（3）SX001（竪穴状遺構）から出土したもので遺構間接合という珍しい例を提供してくれた。

19～22・24～29は底部及びそれに近い破片で，大型片を中心に図示した。とりわけ26の底部径は12cmと大きく，にも関わらず一葉の痕跡が残るだけであり，かなり大きな木の葉を敷いて土器を製作していたことが理解できる。胎土には白色鉱物・小石等を多く含み，内面は剥落が著しい。色調は概して褐色ないし暗褐色となる。

第５号住居跡（旧(3)SI002）（第61図，第27表，図版11・19・23）

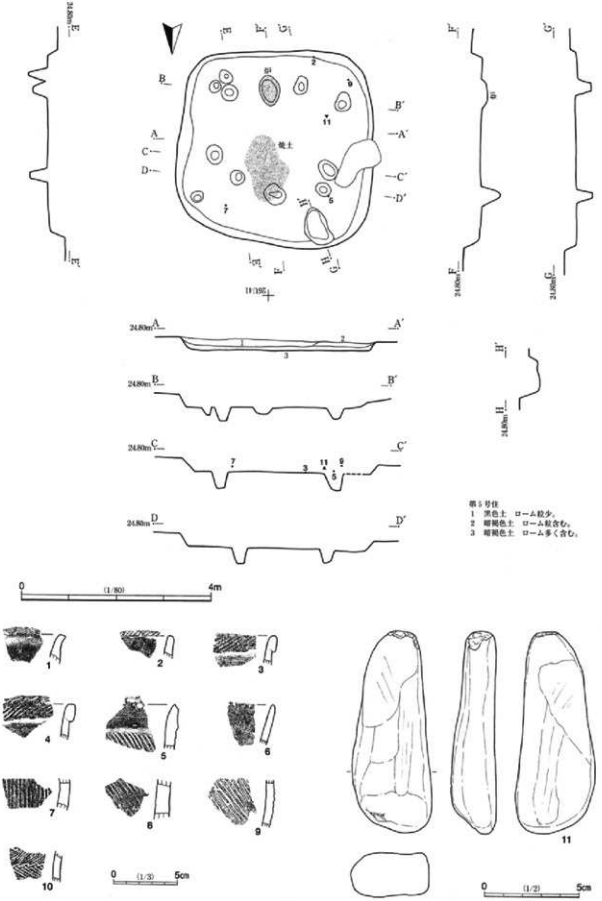
出土した遺物から弥生時代後期の住居跡である。26U40・41・50・51グリッドに位置する。平面プランはいびつな隅丸方形で，北西のコーナー部分が若干張り出すような格好である。長軸方向の最大長で約4.2m，短軸も約4.2mである。主軸方向は，南側の壁を基準とすると，約N－85°－Eで，ほぼ真南を向く。壁は，南側はしっかりと立ち上がるが，他の部分はやや緩やかな立ち上がりである。確認面からの深さは最大で約30cmである。覆土は黒褐色～暗褐色土主体で，壁際堆積などははっきりしない。住居跡中央付近では，焼土の堆積を確認した。

床面は緩やかな傾斜をもつようである。炉は南側の壁寄りで検出した。最大径約65cmの楕円形プランの地床炉である。柱穴は11基検出した。いずれも40cm未満のもので，主柱穴は特定し難い。概ねコーナーに対応する位置に柱穴がまとまっているように見える。おそらく４本主柱穴構造で，柱穴の造り替えがあったものと思う。F－F′断面図にかかる，炉の対称となる位置にあるピットは，ハシゴ穴であろうか。

断面図にかかっていないピットとして，北東コーナー付近の小ピットがあり，深さ約21cmである。北西コーナー付近では，最大径約80cmの不整楕円形のピットを検出し，貯蔵穴の可能性がある。

遺物は，覆土中から少量の土器片と石器を検出した。

本跡で出土した土器類は，すべて小破片で10点を数えるにすぎない。１～６は口縁部片で，１～４は折り返した口唇部にも縄文を施文している。４の下部には波状の櫛描文が僅かに痕跡をとどめる。５の器厚は９mmと厚く，頑強な作りといえよう。口唇部は指頭によりハの字状に折られている。また胴部にみられる施文は，細い原体を２本一組とし，撚糸文のごとく回転させて整然とした文様を作り出している。７・


第5号住
1 黒色土 ローム粒少。
2 暗褐色土 ローム粒含む。
3 暗褐色土 ローム多く含む。
0 (1/80) 4m
0 (1/3) 5cm
0 (1/2) 5cm

第61図 第5号住居跡

8は同一個体となる。6は無文で，口唇部にヘラ状工具により刻み目を付しており，器面の反り具合から小型品となろう。色調は，1・3が淡褐色，2・5が黒褐色，4・6が橙褐色となり，4・5は胎土に砂粒を多く含む。焼成では5が堅く良好な感を呈す。以下は胴部片であり，10は胴上部にあたり結節を用い羽状縄文を形作る。このタイプは南関東系の壺形となろう。色調は7・9が暗褐色，8・10が褐色となり，9の器面では剥落が認められる。

11は砂岩製の砥石である。最大長10cmを越えるやや大きな棒状の砥石で，上部には敲打痕が存在する。

第6号住居跡（旧(6)003）（第62・63図，第22・27表，図版11・19・23）

出土した遺物から弥生時代後期の住居跡である。25W75・76・85・86グリッドに位置する。平面プランは方形に近く，西側のコーナーのみ隅丸に近い。長軸約5.0m，短軸約4.9mである。主軸方向はN－60°－Wである。壁は北西～南西の壁がしっかりとしており，北東～南東の壁はやや緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは最大で約40cmである。覆土は黒褐色～暗褐色土主体で，自然堆積か。やや色調の明るい5層が，壁際から住居跡中央付近に向かって堆積している。覆土中の壁際を中心に，焼土の堆積を確認した。

床面は，断面図で見る限りほぼ平坦である。炉は住居跡中央付近のやや北西寄りで検出した。最大径約1.0mの，不整な長楕円形プランの地床炉である。底面は焼け込んで凹凸を持つ。

柱穴は，コーナーに対応する位置に，深さ70cm～80cmのしっかりとした柱穴を4本検出し，4本主柱穴構造と考え得る。南東の壁寄りには，ハシゴ穴と考え得る小ピットが存在する。西側コーナー付近には，深さ約33cmの小ピットが存在する。

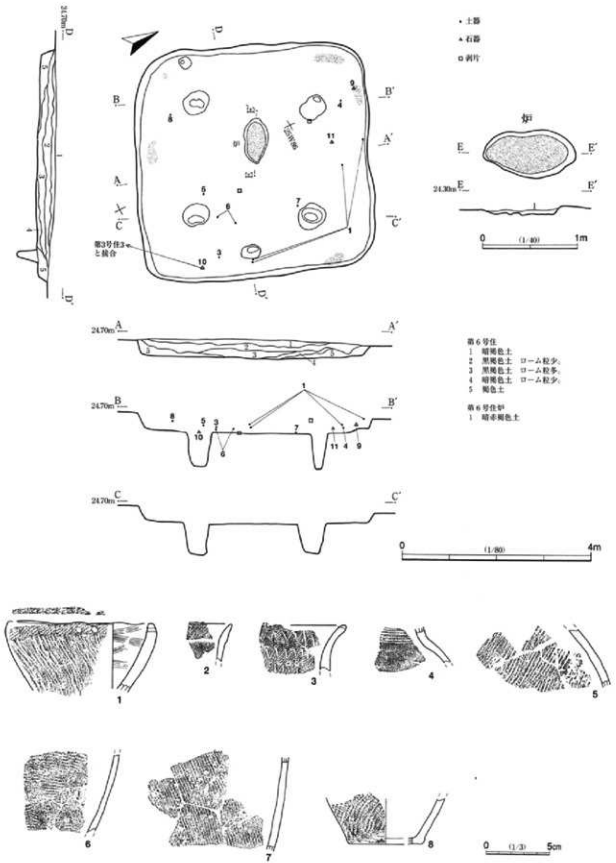
遺物は，覆土中から土器及び石器を検出した。また，覆土上層と床面付近から，(3)SX001竪穴状遺構で多数検出した灰白色～明緑灰色を呈する珪質頁岩製の剥片と，同一母岩と考え得る剥片が2点出土した（第22表）。剥片の出土位置は□で示した。

本跡出土の土器は60～70片と比較的多い。だが一括品といえるものはなく，小破片が大半を占めていた。

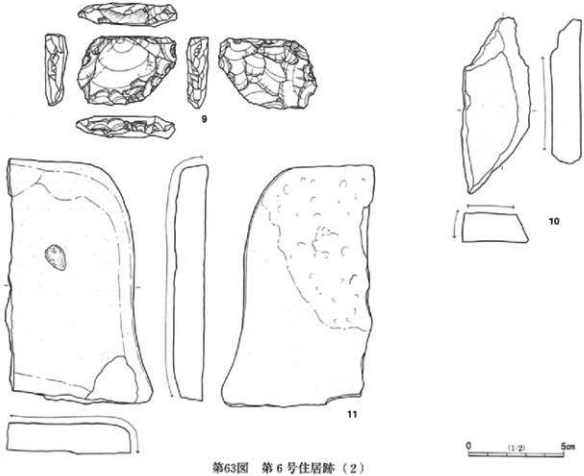
1～3は口縁部であり，1は欠損が少なく口縁の形状は把握できる。その遺存部から壺に近いものと推測できる。口唇部には縄文を施文するが小さな凹凸が目立つ。その直下には2孔一組の焼成前穿孔が対で認められ，そこに施文されている縄文は，口唇部同様単節左撚りの原体であるが，それ以下の部位では附加状の縄文を施文してる。内面はナデにより簡単に整形しているのみで作りとしてはやや粗雑さを感じさせる。色調は内外面黒褐色を呈し，焼成は良好である。2の口唇部は磨耗により縄文の有無は確認できない。器面では炭化物の付着が認められる。3は大きく外反する口縁で，口唇部では櫛状工具での押圧が認められ，口唇直下では4本一組の櫛描文を横方向に施文している。色調は，2が灰褐色を，3が暗赤褐色となる。4は頸部から胴上半にかけての破片で，頸部では櫛描文，下部には細縄文が認められる。赤褐色を呈し，焼成は良好である。5～7は胴部片で，5・7は撚糸文，6は原体の短い単節左撚りの縄文で施文している。色調は5が赤褐色，6が黒褐色，7が灰褐色となる。また7の胎土には雲母の他に小石が多く含まれている。8は底部片で原体の短い単節右撚りの縄文で施文される。色調は暗褐色で焼成は良好である。

以上が本跡出土の採拓資料であるが，ここでも小破片で図示できなかった南関東系の壺形土器がみられることを付記しておきたい。

9は緑灰色～暗緑灰色の色調を呈する珪質頁岩製の，両面調整石器である。外縁部付近に流紋岩質の灰



第62図　第6号住居跡（1）



第63図　第６号住居跡（２）

白色に近い部分が存在する。本住居跡でも２点出土している，(3)SX001で多量に出土した，灰白色～明緑灰色を呈する流紋岩質の珪質頁岩の剥片の残核である可能性がある。

10は砂岩製の砥石である。表面と側面に使用の痕跡が認められる。第３号住居跡出土の大型砥石状石製品（第57図３）と遺構間接合した。

11も砂岩製の砥石である。やや大きな板状の砥石で，表面と側面に使用の痕跡が認められる。裏面も上半の1/2程に，敲いた後に磨った痕跡が認められる。接合関係はないものの，石質や扁平な形態などから，やはり第３号住居跡出土の大型砥石状石製品との関連が疑われる。

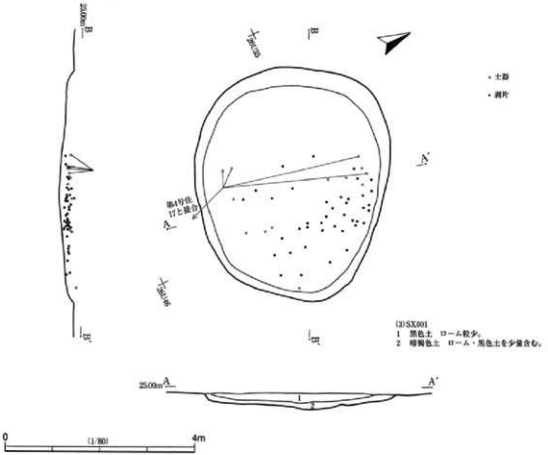
２　竪穴状遺構

(3)SX001（第64図，第22表，図版12・24）

出土した遺物から弥生時代後期の遺構である。規模は住居跡と遜色ないが，炉や柱穴などが検出できなかったため竪穴状遺構とした。

26U35・36・45・46グリッドに位置する。平面形はややいびつな楕円形で，長径約5.0m，短径約4.2mである。壁の立ち上がりはややだらしなく，確認面からの深さは最大で約35cmである。覆土は２層に分層され，自然堆積のようである。床面は擂り鉢状に中央部付近に向かって傾斜する。

遺物は多量の剥片と，少量の土器片が，覆土上層から出土した。剥片は色調などの特徴から，すべて同



第64図　(3)SX001竪穴状遺構

一母岩と考えられ，総数で39点である。その他，弥生土器の小片が16点，砂岩の小礫片が2点出土した。

出土した土器のうち5点は，第4号住居跡17の土器（第60図17）と遺構間接合した。

39点出土した剥片は，全体に白色がかった，灰白色～明緑灰色を呈する流紋岩質の珪質頁岩を素材とし，すべて同一母岩と判断できる。すべて不整形な小型の剥片であり，個々の計測値を第22表に記し，一部を図版24に示した。剥片の接合を試みたものの，接合するものは無かった。また，同一母岩と考え得る剥片が，第2号住居跡・第3号住居跡・第6号住居跡で検出された。

出土状況を見ると，遺構埋没途上の浅い窪地で石器製作をおこなった痕跡か，別の地点で石器製作をおこなった際に出た剥片をまとめて捨てたものかの，どちらかであろう。剥片同士の接合がなく，多数の遺構で同一母岩と考え得る剥片が出土していることなどからすると，後者の解釈が妥当のように思われる。

この剥片製作の目的は判然としないが，第6号住居跡で，この剥片を取った残核のように見える，珪質頁岩製の両面調整石器が出土した。この石器は，外縁部に流紋岩質の灰白色に近い部分が存在する，緑灰色～暗緑灰色の色調の珪質頁岩である。この石器をさらに何らかの素材として得るために，外側の白色に近い流紋岩質の部分を剥離したようにも思える。

いずれにしろ本遺構が，弥生時代の石器製作に関わる遺構であることは間違いない。

第22表　(3)SX001関連石器計測表

遺構名	注記番号		器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備　考
(3)SX001	SX001	1	剥片	22.7	14.4	14.2	5.25	
(3)SX001	SX001	2	剥片	15.9	11.3	5.2	0.86	
(3)SX001	SX001	3	剥片	23.7	11.2	9.6	1.57	
(3)SX001	SX001	4	剥片	20.1	21.6	7.4	2.52	
(3)SX001	SX001	5	剥片	17.1	11.4	4.1	0.81	
(3)SX001	SX001	6	剥片	21.8	29.6	9.4	5.37	
(3)SX001	SX001	7	剥片	16.7	22.7	5.0	2.21	
(3)SX001	SX001	8	剥片	12.8	25.8	8.2	1.79	
(3)SX001	SX001	9	剥片	16.2	21.0	5.7	1.66	
(3)SX001	SX001	10	剥片	16.1	18.2	4.1	1.08	
(3)SX001	SX001	11	砕片	7.2	5.2	3.1	0.12	
(3)SX001	SX001	12	剥片	18.5	9.1	3.1	0.46	
(3)SX001	SX001	13	剥片	22.9	12.0	8.8	2.69	
(3)SX001	SX001	14	剥片	21.1	17.6	7.1	2.81	
(3)SX001	SX001	15	剥片	12.9	5.5	5.1	0.33	
(3)SX001	SX001	16	剥片	17.4	13.6	4.8	1.29	
(3)SX001	SX001	17	剥片	22.4	19.4	12.7	3.21	
(3)SX001	SX001	18	剥片	29.2	20.7	10.6	4.92	
(3)SX001	SX001	19	剥片	12.1	9.8	5.0	0.6	
(3)SX001	SX001	20	砕片	8.8	6.0	2.0	0.08	
(3)SX001	SX001	21	剥片	16.5	7.1	5.6	0.47	
(3)SX001	SX001	22	砕片	7.9	3.6	2.9	0.07	
(3)SX001	SX001	23	剥片	17.5	16.2	4.8	1.03	
(3)SX001	SX001	24	剥片	11.9	7.4	7.3	0.34	
(3)SX001	SX001	27	剥片	13.3	6.6	5.2	0.32	
(3)SX001	SX001	28	剥片	30.5	15.6	13.1	3.36	
(3)SX001	SX001	29	剥片	14.0	11.1	2.7	0.35	
(3)SX001	SX001	30	剥片	19.3	18.1	6.0	2.20	
(3)SX001	SX001	31	剥片	19.2	15.0	5.7	1.08	
(3)SX001	SX001	32	剥片	25.0	14.6	4.8	1.24	
(3)SX001	SX001	33	剥片	10.7	13.4	2.6	0.26	
(3)SX001	SX001	45	剥片	13.5	8.8	2.9	0.27	
(3)SX001	SX001	47	剥片	16.4	11.8	7.9	1.57	
(3)SX001	SX001	48	剥片	28.8	14.7	9.5	2.99	
(3)SX001	SX001	49	砕片	7.6	6.4	0.6	0.02	
(3)SX001	SX001	50	剥片	23.4	9.9	7.4	1.21	
(3)SX001	SX001	51	剥片	12.9	12.0	9.4	1.77	
(3)SX001	SX001	53	砕片	6.8	3.4	1.1	0.03	
(3)SX001	SX001	54	剥片	20.1	18.5	5.5	1.33	
第2号住居跡	(1)SI002	1a	剥片	22.5	20.4	9.6	4.32	
第2号住居跡	(1)SI002	1b	剥片	20.7	14.3	7.0	2.13	
第2号住居跡	(1)SI002	1c	剥片	20.5	19.3	5.3	1.98	
第2号住居跡	(1)SI002	1d	剥片	20.9	7.7	8.0	1.31	
第2号住居跡	(1)SI002	1e	剥片	11.4	8.0	2.0	0.15	
第3号住居跡	(3)SI001	11	剥片	36.9	20.9	15.7	7.85	
第3号住居跡	(3)SI001	47	剥片	22.8	18.2	10.3	2.54	
第6号住居跡	(6)003	21	剥片	19.2	18.1	5.7	2.07	
第6号住居跡	(6)003	45	剥片	37.2	24.2	7.3	5.72	
グリッド	26U25	1	剥片	10.1	14.0	4.5	0.38	
グリッド	26U26	1	剥片	13.7	16.0	7.1	1.28	

3　土坑（第65～70図，第23・27表，図版12・19）

弥生時代以降の所産と判断した土坑を，32基検出した。出土遺物が少なく，時期を決定しがたいが，弥生時代以降，中・近世までの土坑を含むと考え得る。

土坑は調査区全体から検出されているが，26Uグリッドの南側から，27Tグリッドと27Uグリッドが接するあたりで，ややまとまって検出された。この地点については第65・66図に土坑配置図を示した。土坑については，第23表の一覧表を作成し，各土坑の位置や計測値については，ここに記載した。

図化に際しては，比較的残存の良いものを中心とし，一部の土坑については，第65・66図の土坑配置図をもって平面図に換えた。図化した土坑の覆土の所見は，断面図に網掛けをすることで模式的に示した。網掛けの凡例は第69図に示した。

土坑の形態は様々であるが，いくつかの形態に分類できる。

①開口部の最大径が1m前後の円形から楕円形の平面形で，断面形が皿状に近いものである。最も数が多く，(2)SK003～(2)SK007・(2)SK010～(2)SK015などが挙げられる。

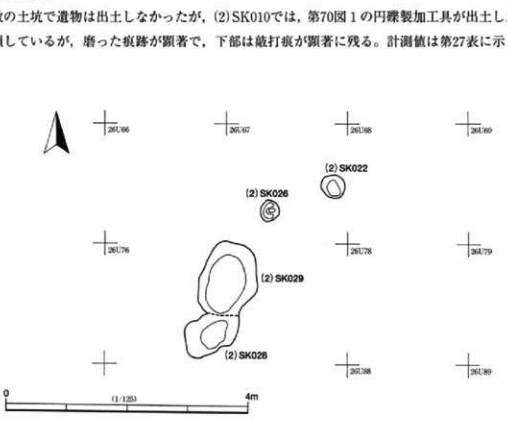
②細長い形態で，浅いものである。(2)SK008・(2)SK020・(2)SK023・(3)SK005などが挙げられよう。

③最大径が2m前後のやや規模が大きなものである。(2)SK021・(2)SK028～(2)SK031が挙げられる。

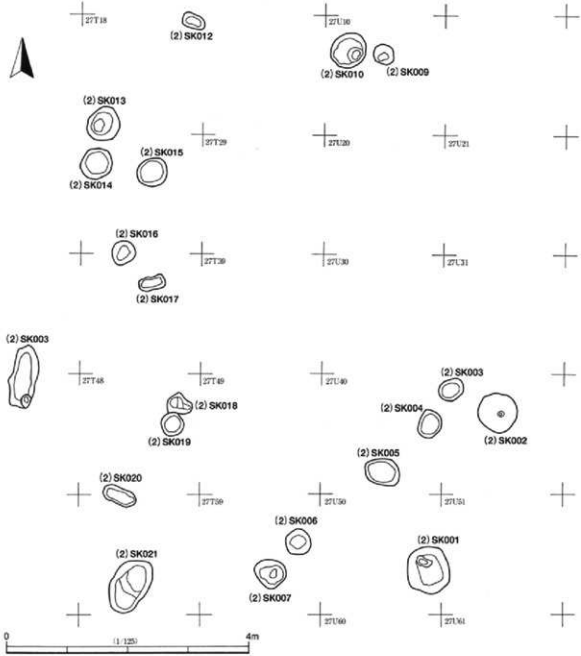
④最大長が1.2m～1.5mほどで，底面形態が方形に近いものである。(2)SK001・(3)SK004・(4)SK001がある。

この他，土坑配置図をもって平面図に換えたものでは，(2)SK022のようなピット状のものが多い。④の底面が方形に近い土坑のうち，(4)SK001は底面に炭化物が存在し，調査時には中・近世の土坑墓の可能性があるとされた。

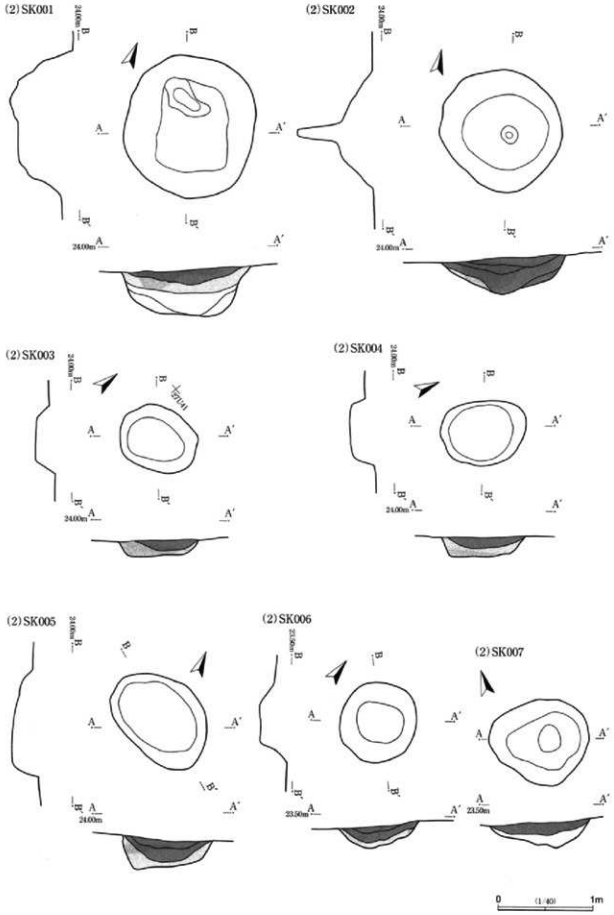
大多数の土坑で遺物は出土しなかったが，(2)SK010では，第70図1の円礫製加工具が出土した。砂岩製で，破損しているが，磨った痕跡が顕著で，下部は敲打痕が顕著に残る。計測値は第27表に示した。



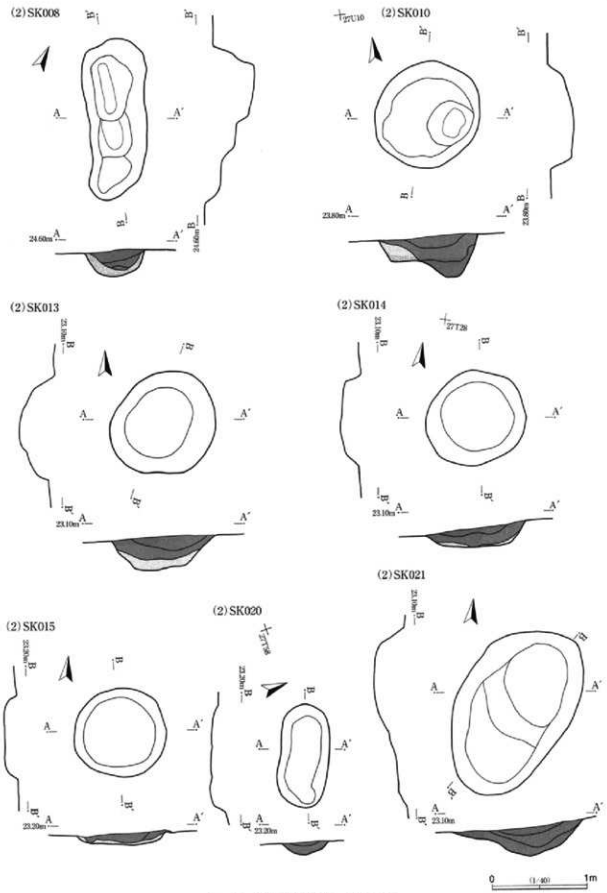
第65図　26Uグリッド南東　弥生時代以降土坑配置図



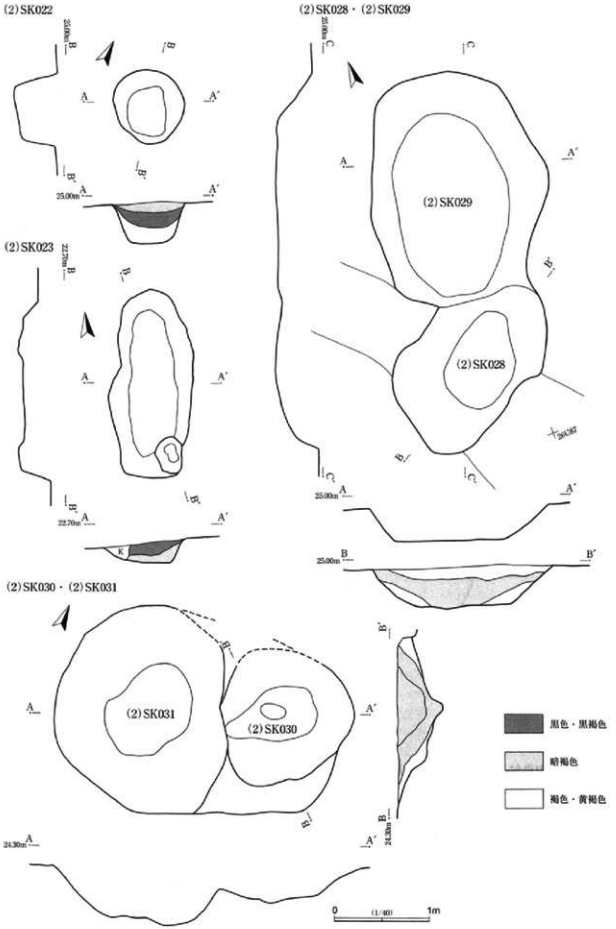
第66図　27T・27Uグリッド　弥生時代以降土坑配置図



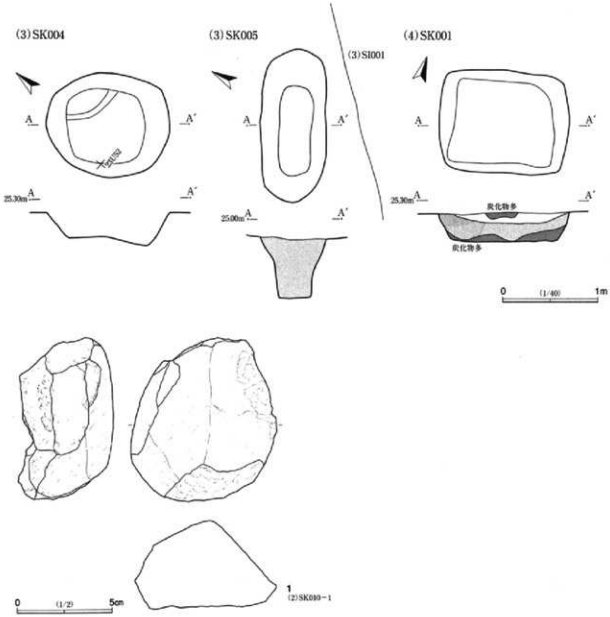
第67図　弥生時代以降の土坑（1）



第68図　弥生時代以降の土坑（2）



第69図　弥生時代以降の土坑（3）



第70図　弥生時代以降の土坑（4）及び出土遺物

4　溝状遺構

調査区の中央付近と南側を中心に溝状遺構が検出された。虫食い状の調査区であったことにより，同一と考えられる溝についても，別の遺構名が付けられていたため，遺構名を新たに付け直し，溝１～11とした。新旧の遺構名の対照は，第24表の溝一覧表を参照して頂きたい。

覆土の所見は，断面図に網掛けをすることで模式的に示した。凡例は第72図に示した。

第23表　弥生時代以降の土坑計測表

掲図	遺構名	グリッド	平面形	規模（m）	深さ（m）	調査年度	備　　考
第67図	(2)SK001	27U50，51	隅丸方形	1.55×1.45	0.62	H10	
第67図	(2)SK002	27U41	円形	1.33×1.20	0.80	H10	小ピットあり
第67図	(2)SK003	27U40，41	隅丸方形	0.85×0.68	0.20	H10	
第67図	(2)SK004	27U40	楕円形	0.81×0.70	0.22	H10	
第67図	(2)SK005	27U40	楕円形	1.18×0.72	0.36	H10	
第67図	(2)SK006	27T59	円形	0.86×0.80	0.27	H10	
第67図	(2)SK007	27T59	不整形	1.05×0.89	0.26	H10	
第68図	(2)SK008	26U82，83，92，93	長楕円形	1.73×0.63	0.46	H10	
第66図	(2)SK009	27U10	隅丸方形	0.72×0.65	0.15	H10	
第68図	(2)SK010	27U10	円形	1.15×1.07	0.47	H10	石器出土，小ピットあり
第66図	(2)SK012	27T08，18，19	隅丸方形	0.82×0.45	0.25	H10	
第68図	(2)SK013	27T18，28	円形	1.20×1.05	0.36	H10	
第68図	(2)SK014	27T27，28	円形	1.10×1.00	0.22	H10	
第68図	(2)SK015	27T28	円形	1.00×0.95	0.15	H10	
第66図	(2)SK016	27T28，38	円形	0.80×0.70	0.50	H10	小ピットあり
第66図	(2)SK017	27T38	長方形	0.90×0.43	0.25	H10	
第66図	(2)SK018	27T48	不整形	0.85×0.55	0.21	H10	
第66図	(2)SK019	27T48	円形	0.80×0.70	0.10	H10	
第68図	(2)SK020	27T48，58	長楕円形	1.10×0.50	0.16	H10	
第68図	(2)SK021	27T58	楕円形	1.92×1.16	0.33	H10	
第69図	(2)SK022	26U67	楕円形	0.81×0.73	0.47	H10	
第69図	(2)SK023	27T37，47	長楕円形	2.03×0.83	0.31	H10	
第65図	(2)SK026	26U67	楕円形	0.70×0.63	0.31	H10	
第69図	(2)SK028	26U76，77	不整形	2.00×1.15	0.45	H10	
第69図	(2)SK029	26U66，67，76，77	楕円形	2.50×1.85	0.40	H10	
第69図	(2) SK030	27U33，34	楕円形	1.50×1.33	0.40	H10	
第69図	(2)SK031	27U33，34	楕円形	2.28×1.27	0.64	H10	
－	(3)SK002	－	円形	1.46×1.33	0.38	H11	位置不明
－	(3)SK003	－	円形	1.71×1.46	0.19	H11	位置不明
第70図	(3)SK004	23U41，42，51，52	隅丸方形	1.30×1.10	0.33	H11	
第70図	(3)SK005	26U38，48	長楕円形	1.64×0.70	0.60	H11	
第70図	(4)SK001	24T06	方形	1.40×1.10	0.30	H12	土坑墓の可能性あり

※規模は開口部での計測値，深さは最深部での計測値である。

溝１（第71・72図，図版13）

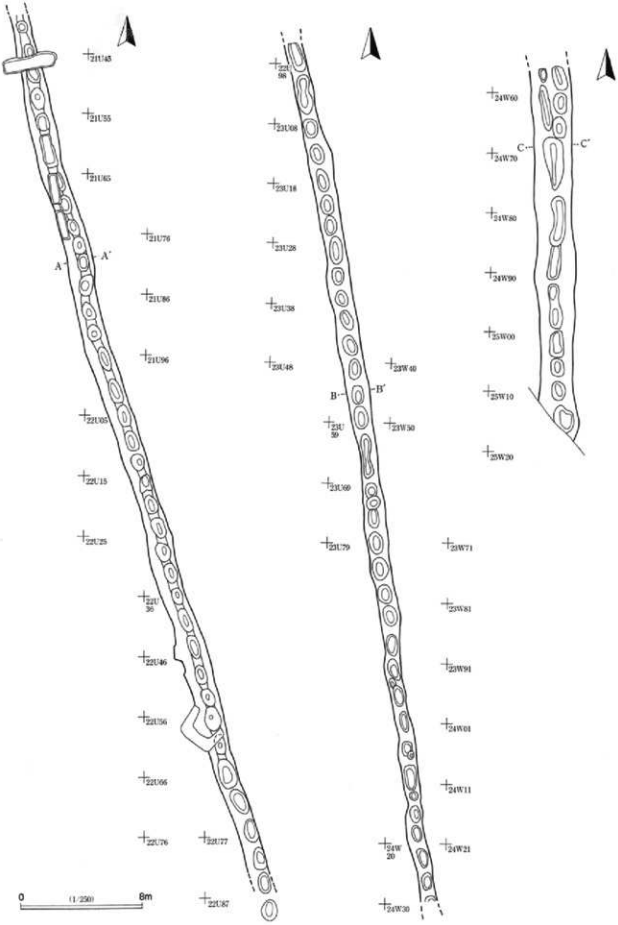
調査区中央を南北に縦断するように走る溝状遺構である。検出した部分の全長で約220mある。26W30グリッドで，溝６・７と接する。切り合い関係は不明である。確認面での幅は，概ね1.5m～２mほどで，深さは概ね50cm～60cmと比較的深い。底面に小ピットが連続する形態が特徴的である。こうした形態の溝は，印旛郡内においては野馬土手の両側に伴う野馬堀の特徴と一致する。規模から見ても，野馬堀の可能性が高いと思われる。

遺物は，ごく少量の縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土した。

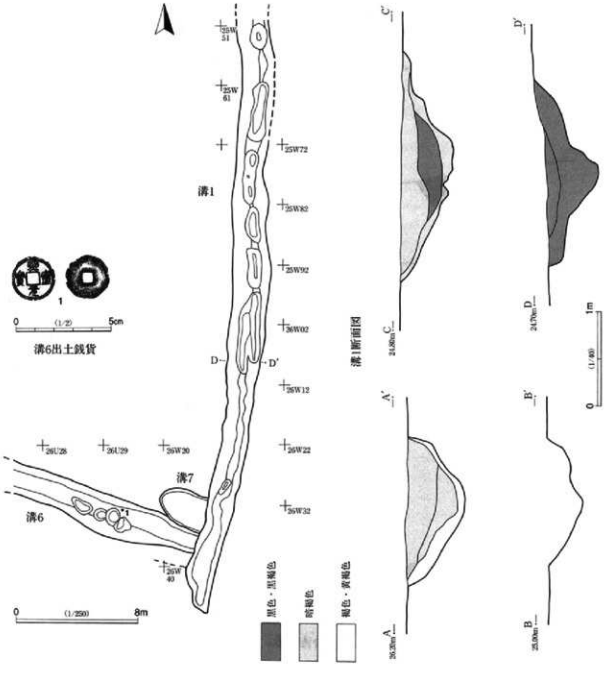
溝２・溝３・溝４（第73図，図版13）

調査区中央西側の24Sグリッド付近でまとまる，3条の溝である。24Tグリッドで３条の溝が交差するが，切り合い関係は不明である。

溝２は，概ね東西方向～北西－南東方向に走る溝で，確認面での溝幅約１m～1.2m，深さ約30cm～40cmである。遺物は出土しなかった。


21U45
21U55
21U65
21U76
21U86
21U96
22U05
22U15
22U25
22U36
22U46
22U56
22U66
22U76
22U77
22U87
A
A'
23U58
23U68
23U18
23U28
23U38
23U48
23W40
B
B'
23U59
23W50
23U69
23U79
23W71
23W81
23W91
24W01
24W11
24W21
24W30
24W60
24W70
C
C'
24W80
24W90
25W00
25W10
25W20
0
(1/250)
8m

第71図　溝1（1）



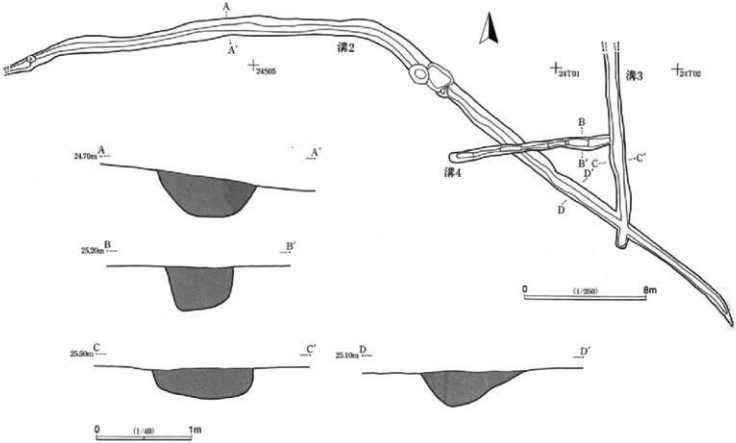
第72図　溝１（２）・溝６（１）・溝７

溝３は南北方向に走る溝で，確認面での幅約1.1m，深さ約30cmである。少量の縄文土器片が出土した。

溝４は東西方向に走る溝で，確認面での幅約50cm～70cm，深さ約40cmである。遺物は出土しなかった。

溝５（第74図，図版13）

調査区南西の25T・26T・27Tにまたがって，概ね南北方向に走る溝である。25T65グリッド付近でクランク状に曲がる。25T75グリッド付近で溝６とほぼ直交する。26T05付近で溝８が合流する。いずれも切り合い関係は不明である。確認面での幅は約50cm～70cmである。深さは約40cmで，浅いところは約25cmで



第73図　溝２・溝３・溝４

ある。南側ではごく浅くなる。遺物は出土しなかった。

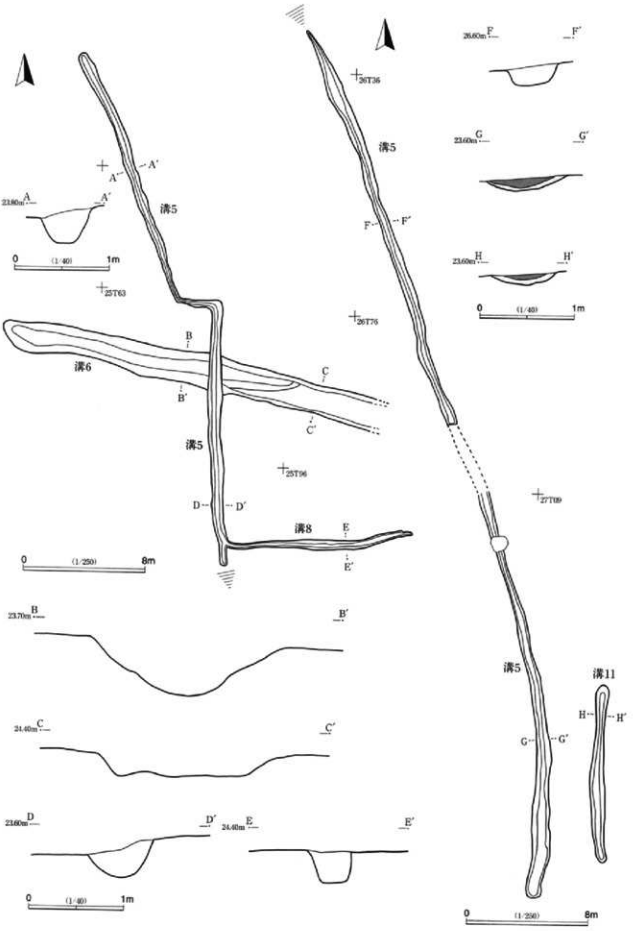
溝６（第72・74・75図，第25表，図版13・24）

調査区の南側の25T・25U・26U・26Wにまたがって，北西－南東方向に走る溝である。27T75グリッド付近で溝５と直交する。26W30グリッドで溝１と合流する。また同じグリッドで溝７と接する。いずれも切り合い関係は不明である。確認面での幅は約1.8m～２mで，深さは約50cmである。幅広く，掘り込みもしっかりとした溝である。部分的に底面に小ピットが存在するが，溝１のように小ピットが連続することはない。

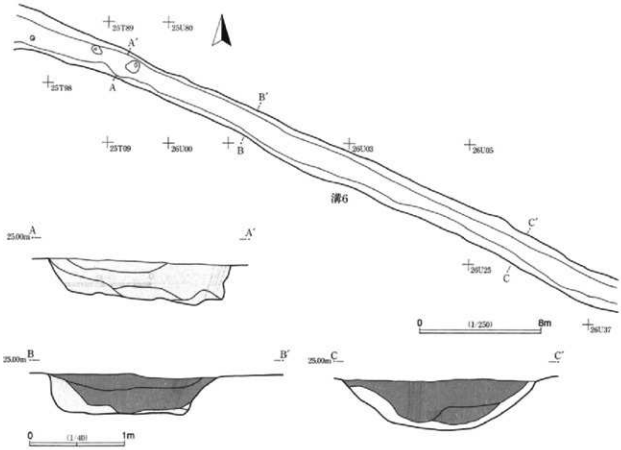
第72図１は溝６から出土した熙寧元宝である。1068年初鋳の北宋銭である。計測値は第25表に示した。その他の遺物として少量の縄文土器片，弥生土器片が出土した。

溝７（第72図）

調査区南側の26W30グリッドに位置し，溝１・溝６と接する。ごく短い溝で，浅い。確認面での幅は約2.2mである。少量の縄文土器片が出土した。



第74図　溝５・溝６（２）・溝８・溝11



第75図　溝６（３）

溝８（第74図）

調査区南側の26Tグリッド北側に位置する，東西方向に走る溝である。26T05付近で溝５に合流する。確認面での幅は約40cm，深さ約30cmである。遺物は出土しなかった。

溝９（第76図，図版23）

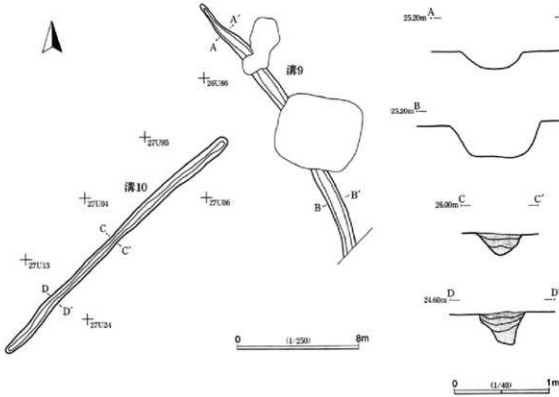
調査区南側の26U・27Uグリッドに位置し，北西－南東方向に走る溝である。確認面での幅は約90cm，深さは約30cmである。少量の弥生土器片が出土した。また，鉄滓が１点覆土中から出土し，写真図版に示した（図版23右下１）。

溝10（第76図，図版13）

調査区南側の26U・27Uグリッドに位置し，北東－南西方向に走る溝である。確認面での幅は約50cm，深さは約20cm～30cmである。遺物は出土しなかった。

溝11（第74図）

調査区南側の26U・27Uグリッドに位置し，南北方向に走る溝である。溝５の南側に平行して走る。確認面での幅は約70cm，深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。



第76図　溝 9 ・溝10

第24表　溝状遺構一覧表

挿　図	新名称	調査時遺構名（北→南）	位　置	方　向	備　考
第71・72図	溝 1	(6)002・(3)SD012・(4)SD001・(1)SD003・(3)SD002	21U・22U・23U・23W・24W・25W・26W	北－南	野馬堀か
第73図	溝 2	(3)SD006	23S・24S・24T	東－西・北西－南東	
	溝 3	(3)SD004	23T・24T	北－南	
	溝 4	(3)SD005	24S・24T	東－西	
第74図	溝 5	(3)SD007・(3)SD008・(3)SD010・(2)SD007	25T・26T・27T	北－南	
第72・74・75図	溝 6	(3)SD003・(1)SD002・(3)SD003	25T・25U・26U・26W	北西－南東	
第72図	溝 7	(3)SD001	26W	北西－南東	短い
第74図	溝 8	(3)SD009	25T・26T	東－西	
第76図	溝 9	(2)SD004	26U・27U	北西－南東	
	溝10	(2)SD005	26U・27U	北東－南西	
第74図	溝11	(2)SD006	26U・27U	北－南	

第２節　グリッド出土遺物

１　土師器・陶器（第77図，図版23）

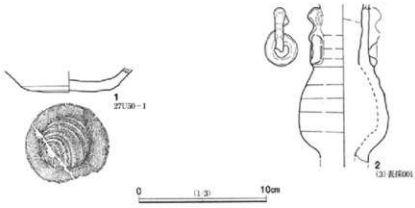
１は27U50グリッド出土の土師器杯である。底面付近のみ残存している。残存高1.7cm，底径6.4cmである。褐色を呈し，胎土中に赤褐色粒子・砂粒を含む。底面の調整は回転糸切り後，周縁ヘラケズリである。

２は平成11年度調査区内で出土した，瀬戸産陶器の花瓶である。残存高12.6cm，最大径8.1cmである。古瀬戸中期様式Ⅲ期（14世紀前半）の花瓶Ⅰb類に相当しよう。口縁部と底部を欠損するが，頸部から胴部については全周する。頸部に一対の環耳を有する。全面灰釉で，淡緑色を呈する。

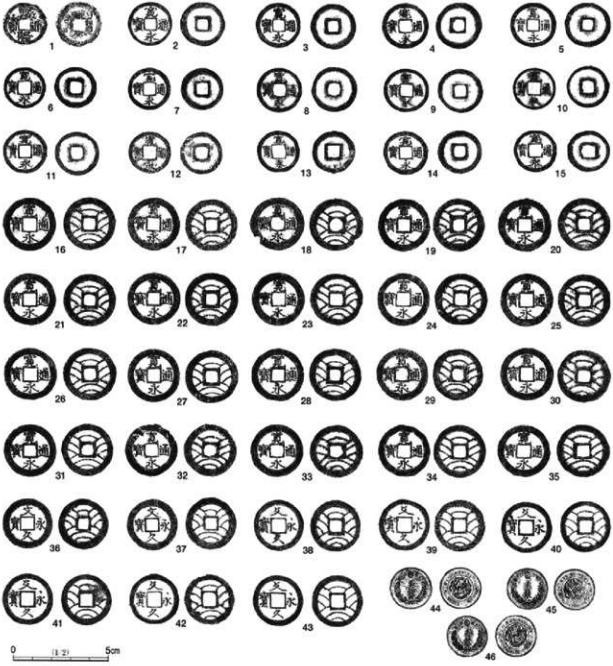
２　銭貨（第78図，第25表，図版24）

第78図は平成11年度調査区内で出土した銭貨である。検出状況の詳細な記録を欠くが，第78図右下の写真で確認できるように，立木の根に近い部分のいわゆる「木の股」に納められていたものである。銭貨のほかに，第78図47の瀬戸産磁器と，鉄片のような金属が一緒に納められていたことが写真から確認できる。すべてが一括して納められたのか，順次納められたものか定かではないが，銭貨の組み合わせから，最終的な埋納時期は19世紀末頃と考え得る。こうした出土事例のについての解釈は難しいが，民俗事例としても重要と考える。

出土した銭貨は合計で46点で，注記や写真との照らし合わせなどから，すべてまとまって出土したことが確認できた。銭種の詳細と計測値は第25表に示した。銭貨の組み合わせは渡来銭として乾隆通宝１点，寛永通宝は古寛永が２点，新寛永12点，波銭が20点，文久永宝が８点，明治時代初頭の半銭銅貨が３点である。



第77図　グリッド出土遺物



第78図　グリッド出土銭貨及び磁器

第25表　銭貨計測表

挿図	番号	遺物番号	銭種名	分類	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	外縁厚(mm)	文字面厚(mm)	重量(g)	備考
第72図	1	(3)SD003－3	熙寧元宝	北宋銭	23.61	19.39	8.00	5.66	1.27	0.90	2.26	溝6覆土中出土，1068年初鋳，内郭外径・内径1点計測
第78図	1	(3)表採27	乾隆通宝	清銭	24.17	－	－	5.44	1.25	0.97	2.71	1736年初鋳，文字面厚3点計測
	2	(3)表採31	寛永通宝	古寛永	23.45	20.14	7.74	5.91	0.87	0.42	2.18	
	3	(3)表採35	寛永通宝	古寛永	24.02	18.11	7.04	5.78	1.12	0.69	2.89	
	4	(3)表採21	寛永通宝	新寛永	24.87	20.23	7.85	6.54	1.31	0.80	3.82	
	5	(3)表採22	寛永通宝	新寛永	24.30	19.69	7.44	5.85	1.24	0.80	3.35	
	6	(3)表採23	寛永通宝	新寛永	22.31	18.98	8.21	6.55	1.02	0.76	2.40	
	7	(3)表採24	寛永通宝	新寛永	22.93	19.10	7.71	6.23	0.87	0.56	2.02	
	8	(3)表採25	寛永通宝	新寛永	24.13	20.28	8.77	6.68	0.84	0.61	2.23	内郭外径1点計測
	9	(3)表採26	寛永通宝	新寛永	23.86	19.78	7.63	6.24	1.13	0.76	2.88	
	10	(3)表採28	寛永通宝	新寛永	22.37	19.86	8.07	6.56	0.76	0.53	1.78	
	11	(3)表採29	寛永通宝	新寛永	23.39	19.80	8.20	6.20	1.03	0.56	2.36	
	12	(3)表採30	寛永通宝	新寛永	22.69	18.55	7.97	6.47	1.15	0.83	2.68	内郭外径1点計測
	13	(3)表採32	寛永通宝	新寛永	22.94	18.76	8.15	6.48	1.34	1.13	3.31	
	14	(3)表採34	寛永通宝	新寛永	23.45	18.96	7.71	6.10	0.97	0.66	2.21	
	15	(3)表採33	寛永通宝	新寛永	22.89	18.83	8.43	6.95	1.01	0.71	2.41	
	16	(3)表採1	寛永通宝	波銭	28.14	20.89	8.74	6.59	1.06	0.76	4.06	
	17	(3)表採2	寛永通宝	波銭	28.34	21.18	8.34	6.25	1.27	0.94	4.73	
	18	(3)表採3	寛永通宝	波銭	28.17	20.52	9.13	6.88	1.00	0.62	3.96	
	19	(3)表採4	寛永通宝	波銭	27.97	21.05	8.91	6.26	1.06	0.67	4.09	
	20	(3)表採5	寛永通宝	波銭	28.13	21.00	8.57	6.31	1.22	0.88	4.82	
	21	(3)表採6	寛永通宝	波銭	28.15	21.34	8.48	6.19	1.30	0.92	5.12	
	22	(3)表採7	寛永通宝	波銭	28.18	21.30	8.71	6.19	1.15	0.79	4.72	
	23	(3)表採8	寛永通宝	波銭	28.08	20.76	8.69	6.62	1.02	0.76	4.16	
	24	(3)表採9	寛永通宝	波銭	28.00	21.37	8.52	6.70	1.04	0.75	3.93	
	25	(3)表採10	寛永通宝	波銭	28.20	21.32	8.77	6.45	1.18	0.75	4.64	
	26	(3)表採11	寛永通宝	波銭	28.07	21.12	8.62	6.42	1.25	0.92	5.02	
	27	(3)表採12	寛永通宝	波銭	28.30	21.73	8.56	6.48	1.19	0.83	4.44	
	28	(3)表採13	寛永通宝	波銭	28.12	21.46	8.76	6.02	1.21	0.90	5.01	
	29	(3)表採14	寛永通宝	波銭	27.40	20.39	8.71	6.31	1.28	0.95	5.24	
	30	(3)表採15	寛永通宝	波銭	28.05	21.30	8.62	6.31	1.27	0.92	4.98	
	31	(3)表採16	寛永通宝	波銭	28.13	21.48	8.59	6.19	1.23	0.84	4.77	
	32	(3)表採17	寛永通宝	波銭	28.16	20.42	8.79	6.61	1.15	0.73	4.73	
	33	(3)表採18	寛永通宝	波銭	28.15	20.84	8.33	6.56	1.14	0.83	4.97	
	34	(3)表採19	寛永通宝	波銭	28.10	21.46	8.39	6.72	1.12	0.77	4.32	
	35	(3)表採20	寛永通宝	波銭	28.14	21.44	8.37	6.46	1.36	0.91	5.07	
	36	(3)表採36	文久永宝		26.41	19.40	8.15	5.86	1.12	0.82	4.10	
	37	(3)表採42	文久永宝		27.05	20.12	8.30	6.12	1.06	0.62	3.66	
	38	(3)表採38	文久永宝		26.64	21.50	8.94	6.36	1.26	0.90	4.37	
	39	(3)表採39	文久永宝		27.10	21.36	8.86	6.64	1.26	0.80	3.56	
	40	(3)表採40	文久永宝		26.62	21.70	8.94	6.32	1.24	0.88	4.26	文字面厚3点計測
	41	(3)表採41	文久永宝		26.74	21.75	9.09	6.66	1.06	0.57	3.44	文字面厚3点計測
	42	(3)表採37	文久永宝		26.71	21.61	9.12	7.05	1.06	0.62	3.21	
	43	(3)表採43	文久永宝		26.88	21.06	8.57	6.98	1.20	0.83	3.95	
	44	(3)表採44	半銭銅貨		22.29	20.00	－	－	1.29	1.05	3.46	明治9年発行
	45	(3)表採45	半銭銅貨		22.02	19.90	－	－	1.37	1.03	3.51	明治9年発行
	46	(3)表採46	半銭銅貨		22.28	19.93	－	－	1.33	1.05	3.51	明治14年発行

＊銭貨の各部測点については下のとおりである。

外縁外径 $G = \frac{Ga+Gb}{2}$，外縁内径 $N = \frac{Na+Nb}{2}$，内郭外径 $g = \frac{ga+gb}{2}$

内郭内径 $n = \frac{na+nb}{2}$

外縁厚 $T = \frac{A+B+C+D}{4}$，文字面厚 $t = \frac{a+b+c+d}{4}$

1の乾隆通宝は，1736年初鋳の清銭である。近世において，地方でもこうした中国銭が流通していたことを如実に物語る資料である。出土数が最も多いのは，寛永通宝の波銭である。波銭はすべて11波のものである。これに新寛永，文久永宝が続く。古寛永は少ない。また，半銭銅貨が3点含まれ，最も新しいものは明治14年発行のものである。木の根元に納められたのが，最終的には，これ以降の時期であること示す資料である。

47は，銭貨と一緒に出土した，瀬戸産の磁器端反椀である。口径11.4cm，底径3.6cm，高さ6.0cmである。概ね19世紀前葉～中葉のものであろう。銭貨の組み合わせで推定される埋納時期と，概ね矛盾しないと考え得る。

3　鉄滓（第26表，図版23）

調査区内で，鉄滓が少数出土した。写真図版でのみ示した。個々の計測値を第26表に示した。

第26表　鉄滓計測表

図	番号	注記	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
図版23	1	(2)SD004－1	5.56	4.11	2.24	66.64	
	2	(2)3トレンチ－2	4.91	3.99	2.26	59.04	
		22W－36	3.34	2.38	2.33	20.76	写真無し

第27表　縄文時代以降石器属性表

図	No.	遺　構	器　種	注記	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺存度	備　考
第52図	1	グリッド	石鏃	21T05－1	2.39	2.04	0.53	1.77	黒曜石	基部一部欠	
	2	グリッド	石鏃	21T45－1	2.56	1.58	0.47	1.2	黒曜石	完形	
第53図	1	第1号住居跡	砥石	(1)SI001－33	7.27	3.22	0.81	24.7	砂岩	4/5	
第55図	9	第2号住居跡	敲石	(7)2住－9	5.92	3.42	1.61	47.94	砂岩	完形	
第57図	2	第3号住居跡	石鏃	(3)SI001－28	1.71	1.32	0.32	0.64	チャート	完形	
	3	第3号住居跡	大型砥石状石製品	(3)SI001－39	35.60	19.30	4.50	3870.00	砂岩		第63図10と接合
第59図	2	第4号住居跡	砥石	(2)SI004－26	5.28	3.67	1.14	34.20	砂岩	完形	
第61図	11	第5号住居跡	砥石	(3)SI002－11	10.74	4.12	2.42	133.50	砂岩	完形	
第63図	9	第6号住居跡	両面調整石器	(6)003－13	3.84	5.24	1.18	27.40	珪質頁岩	完形	(3)SX001と関連
	10	第6号住居跡	砥石	(6)003－1	9.44	3.69	1.65	65.73	砂岩		第57図3と接合
	11	第6号住居跡	砥石	(6)003－22	12.95	7.85	1.61	258.94	砂岩		
第70図	1	(2)SK010	円礫製加工具	(2)SK010－1	8.74	7.69	5.03	474.10	砂岩	1/2	

第5章　まとめ

第1節　旧石器時代

文化層の概要については，第2表の文化層別石器群概要一覧表のとおりである。文化層は第Ⅰ文化層～第Ⅳ文化層の4文化層に分離できた。このなかで，第Ⅰ文化層と第Ⅲ文化層が，質・量ともに充実している。文化層別の主要石器は，第79・80図のとおりである。各文化層の石器群の特徴をまとめながら，石器群の位置づけを行うことにする。

（1）第Ⅰ文化層（第79図1～13）

Ⅸc層下部に生活面を持つと推定される。1ブロックのみの出土で，局部磨製石斧の再生剥離と分割が集中的に行われている。局部磨製石斧が2個体（1～7，8＋9）出土している。再生加工を行った後に，小型の剥片を分割に近い剥離を行っている。1～7の接合資料1は，7点が接合した状態で，ほぼ完形に近い状態まで復元できる資料であり，おそらく，局部磨製石斧の刃部の一部が残る剥片を目的的に剥離したと思われる。また，剥片剥離技術は，10･11のような小型の貝殻状の剥片を剥離する技術が主体を占め，12･13のような不定形な形状をした石器が作出されている。台形様石器と認定できる製品は出土していない。この石器群と類似するものとしては，松崎Ⅱ遺跡第1文化層，成田市南三里塚宮原第1遺跡第1環状ブロック群・第3環状ブロック群，成田市東峰御幸畑西遺跡第1文化層があげられる。このうち南三里塚宮原第1遺跡第3環状ブロック群からは局部磨製石斧が20個体出土しており，製作・刃部再生・分割過程が復元できる。特に，分割過程の復元できる接合資料は，本文化層と類似点がみられる。1ブロックのみの出土であることから，位置づけは困難であるが，出土層位から印旛編年（酒井・宇井2004）の印旛Ⅲa期に位置づけておくが，Ⅲb期的な特徴もみられる。

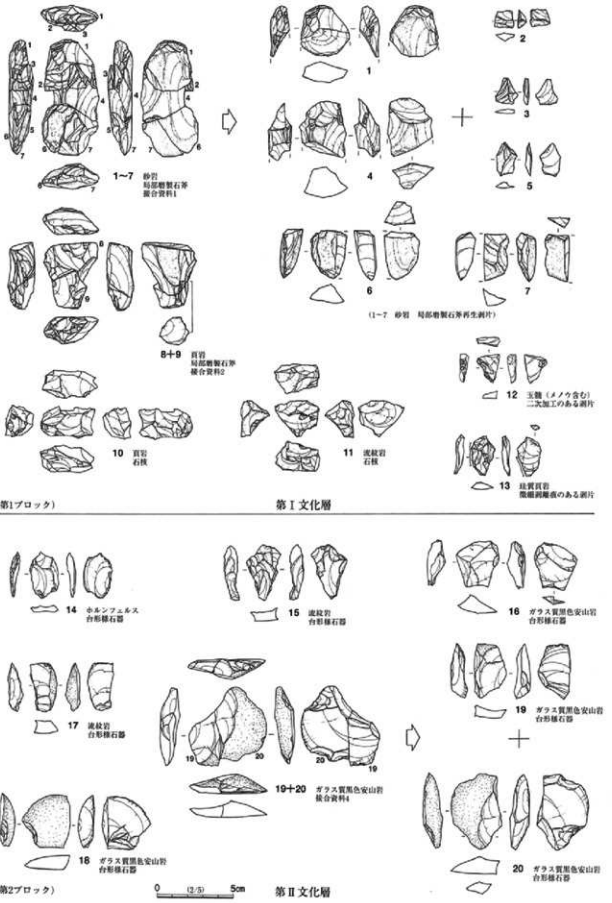
（2）第Ⅱ文化層（第79図14～20）

Ⅸc層上部に生活面を持つと推定される。台形様石器の割合が非常に高いことが特徴である。14～20の台形様石器は，幅広の剥片を素材として，折断剥離により成形した後に，調整加工が施され，台形・菱形・撥形の形状を呈する。19＋20はその製作過程が復元できる良好な資料である。平面分布は，1ブロックのみの単独出土であり，環状ブロック群は呈していない。類似する石器群としては，成田市天神峰奥之台遺跡第1文化層，富里市獅子穴Ⅱ遺跡，四街道市池花南遺跡第1文化層，酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡第Ⅰ文化層があげられる。印旛編年の印旛Ⅲb期に位置づけられる。

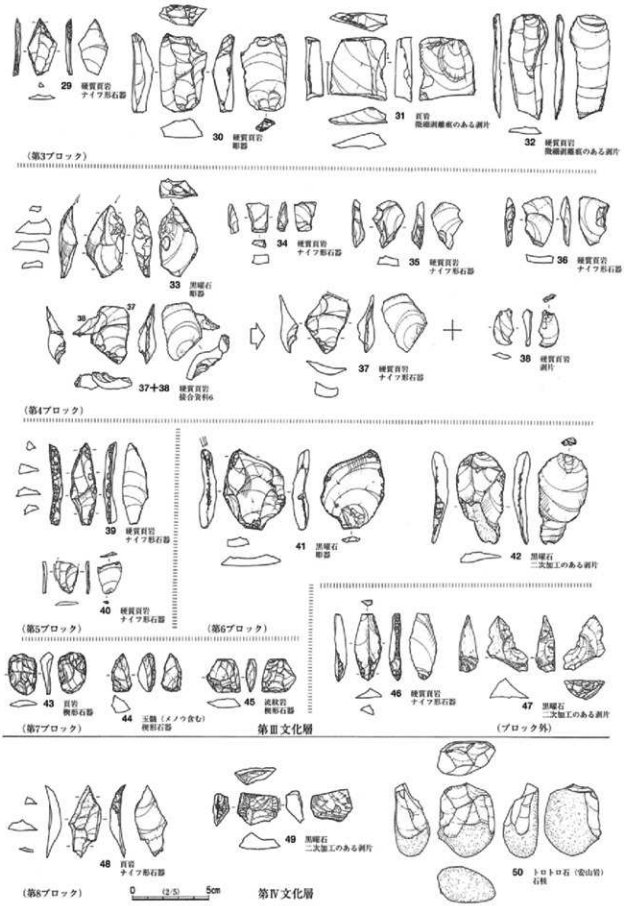
（3）第Ⅲ文化層（第80図29～47）

Ⅶ層～Ⅵ層に生活面を持つと推定される石器群を第Ⅲ文化層としてまとめた。第3～7ブロックの5ブロックとブロック外出土の3点が相当する。ブロック間接合はみられないことから，同時期に形成された石器群ではないものと思われるが，同一段階の石器群と捉えられる。

第3～6ブロックとブロック外の石器群は，硬質頁岩（チョコレート色）と黒曜石を主体に用いており，ナイフ形石器と彫器を製作している。ナイフ形石器（29・34～37・39・40）の特徴は，すべて硬質頁岩（チョコレート色）が用いられており，石刃を素材としたもの（29・39・40・46）と幅広の剥片を素材としたもの（34～37）がみられる。彫器（30・33・41）は，硬質頁岩を用いて大型の石刃を素材として小口から



第79図　文化層別主要石器（1）



第80図　文化層別主要石器（2）

樋状の剥離をするもの（30）と黒曜石を用いて剥片の先端部に数条の樋状剥離を施すもの（33・41）がみられる。これらは，「下総型石刃再生技法」（新田1995）による石器群の特徴であり，隣接した遺跡の松崎Ⅰ遺跡第２・３文化層，松崎Ⅱ遺跡第Ⅳ文化層が最も類似する。印旛編年の印旛Ⅳ期２類に位置づけられる。

第７ブロックは，楔形石器（43～45）の割合が非常に高いことが特徴である。石材構成も多様である。この石器群の特徴は，「遠山技法」（田村1989）による石器群の特徴であり，印旛編年の印旛Ⅳ期３類に位置づけられる。

（４）第Ⅳ文化層（第80図48～50）

Ⅲ層に生活面を持つと推定される。ただし，明確な出土層位は不明である。剥片剥離技術は，50の縦長剥片を連続的に剥離された石核や48の縦長剥片を素材としたナイフ形石器が出土していることから，主に縦長剥片が剥離されたものと思われる。48のナイフ形石器は，素材の打面部を調整加工している。出土層位と出土点数が少ないことから，明確な位置づけを行うことは困難であるが，印旛編年の印旛Ⅶ期に位置づけられる。

引用・参考文献

宇井義典　2004「南三里塚宮原第１遺跡」『（仮）南三里塚物流基地建設予定地内埋蔵文化財調査』（財）印旛郡市文化財センター
酒井弘志・宇井義典　2004『印旛の原始・古代　－旧石器時代編－』（財）印旛郡市文化財センター
篠原　正　1988『獅子穴Ⅱ遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
田村　隆　1989「収東」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書１』（財）千葉県文化財センター
田村　隆ほか　1987「佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡」『佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター
永塚俊司　2000「東峰御幸畑西遺跡（空港№61遺跡）」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書XⅢ』（財）千葉県文化財センター
新田浩三　1988「遠山天ノ作遺跡の再検討」『竹筒』第５号　北総たけべらの会
新田浩三　1995「下総型石刃再生技法の提唱」『千葉県文化財センター研究紀要16』（財）千葉県文化財センター
新田浩三　2005「酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡　旧石器時代編」『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書１』（財）千葉県文化財センター
橋本勝雄　1984「八千代市権現後遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書１』（財）千葉県文化財センター
古内　茂ほか　2003「印西市松崎Ⅱ遺跡」『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書１』（財）千葉県文化財センター
山岡磨由子　2004「印西市松崎Ⅰ遺跡」『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書２』（財）千葉県文化財センター
矢本節朗　1998「天神峰奥之台遺跡（空港№65遺跡）」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』（財）千葉県文化財センター
渡辺修一　1991『四街道市内黒田遺跡群　－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書－』（財）千葉県文化財センター

※編注

本節は，第２章第１節の平成15年度までの調査成果に基づいて書かれている。よって，平成16年度調査の成果については，反映されていない。整理作業の工程上の問題によるもので，著者に責はないことをお断りしておきたい。

第２節　縄文時代以降

１　松崎Ⅳ遺跡検出の遺構と遺物

松崎Ⅳ遺跡で検出した，縄文時代以降の遺構と遺物について簡単にまとめておきたい。

縄文時代の遺構は，陥穴状遺構５基・土坑36基・ピット10基である。陥穴状遺構は調査区の広い範囲で散漫に検出された。土坑・ピットは24W・25Wグリッドでまとまって検出された。遺物は少なく，細別時期など不明な点が多い。グリッドで出土した縄文土器は，早期から後期にわたり，調査区全体で散漫に出土した。相対的には，中期後葉の加曽利Ｅ式と，後期前葉の堀之内１式が多い。

弥生時代以降では，竪穴住居跡６軒（弥生時代後期）・竪穴状遺構１基（弥生時代後期）・土坑32基・溝状遺構11基を検出した。弥生時代後期の，比較的短期的な集落を検出したと考えられる。遺構間接合資料など興味深い資料も多く，これについては後述したい。竪穴住居跡は，住居同士の重複はなく遺存状態の良い住居が多い。住居の形態は楕円形と方形の２種がある。(3)SX001と呼称した竪穴状遺構からは，珪質頁岩製の剥片が多数出土し，弥生時代後期の石器製作の一端を窺わせる。弥生時代に続く時期は，遺物がほとんど無く，平安時代の土師器杯が１点出土したのみである。

中・近世については，溝状遺構が概ね中・近世の所産と思われる。溝６の覆土中からは北宋銭が出土し，中世まで遡りうる可能性を示している。グリッド出土遺物として，いわゆる古瀬戸の花瓶が出土しており，中世における人の往来が裏付けられる。溝１は，規模・形態などから近世の野馬堀である可能性が高い。近世の遺物としては，銭貨・瀬戸産磁器が検出された。立木の根元の部分から一括して出土したものである。一度に納められたか，継続的に納められたのかは定かではないが，銭貨のセットから見ると，最終的な埋納時期は近代初頭に至るものであった。

２　弥生時代遺構の遺構間接合関係等について

弥生時代後期の遺構間接合資料及びこれに準ずるものについて触れておきたい。松崎Ⅳ遺跡で検出した弥生時代後期の遺構は，第１号住居跡～第６号住居跡の竪穴住居跡６軒，(3)SX001とした竪穴状遺構１基の総計７基である。このうちの５基に，接合関係があるか，同一母岩と考えられる剥片が出土しており，概要を第81図に示した。

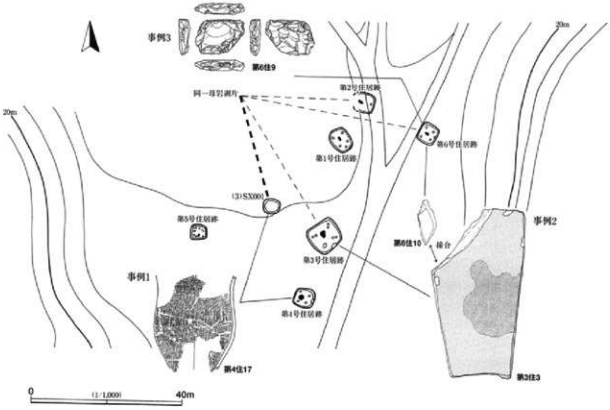
事例１は遺構間接合資料で，第４号住居跡17とした口縁部を欠く小型の甕である。12点接合した内の７点が第４号住居跡の覆土下層から出土し，５点の小破片が(3)SX001の覆土上層から出土した。

事例２も遺構間接合資料で，第３号住居跡３とした大型砥石状石製品と，第６号住居跡10とした砥石が接合した。大型砥石状石製品は，ほぼ床面直上で出土し，砥石も床面付近で出土している。砥石は，大型砥石状石製品を素材として用いたか，欠損した部分を再利用したと考えられる。

事例３は，同一母岩と考えられる剥片と，両面調整石器の事例である。(3)SX001では覆土上層から，珪質頁岩製の不整形な剥片が39点出土した。灰白色～明緑灰色を呈する特徴的な石材で，すべて同一母岩と判断した。同じ特徴を持つ剥片が，第２号住居跡で５点，第３号住居跡で２点，第６号住居跡で２点，26Uグリッドで２点出土した。第２号住居跡・第３号住居跡の剥片は，覆土中一括遺物として取り上げられており，細かい出土位置は不明である。第６号住居跡で出土したものは，床面付近と覆土上層で出土した。第６号住居跡９として図化した両面調整石器は，これらの剥片の残核である可能性がある。全体に緑灰色～暗緑灰色の珪質頁岩製の石器であるが，外縁部付近に灰白色に近い部分が残る。良質な石材の部分を得る

ために，外側の灰白色に近い部分を剥離したように思える。覆土中での出土である。

事例１～３は，直接的に遺構の同時存在等を示すものではないが，弥生人の廃棄活動の一端を窺わせる。弥生時代の一般的な廃棄活動に関して具体的な分析例を知らないが，松崎Ⅳ遺跡においては，弥生時代遺物の大半は住居跡から出土しており，概ね住居廃絶後の埋没途上の窪地を利用して遺物を廃棄したか，住居廃絶後に遺物が周囲から流入した可能性が高いように思われる。事例１～３は概ね廃棄時の同時性を捉え得る可能性がある資料であろう。ただ，事例２は大型砥石状石製品の再利用を示す可能性があり，また事例３が剥片と残核の関係であれば，石器製作の工程として，遺物に細かい時間差が存在する可能性がある。ここでは詳細な分析をする余裕がないが，事例１～３に関わる出土状況から，遺構の細かい時間差を推定できる可能性があると指摘しておきたい。改修の痕跡が認められない住居がある一方で，第３号・第５号住居跡に改修の痕跡が認められることからも，検出された遺構全てが全くの同時併存という訳ではない可能性を暗示していよう。松崎Ⅳ遺跡の弥生時代集落は，比較的短期的な集落ではあるものの，弥生時代後期という時間幅の中で遺構の消長が存在するものと思う。集落の一時的な景観については，より詳細な分析が必要と考える。



第81図　弥生時代後期遺構　遺構間接合関係等模式図

第　3　部

松 崎 V 遺 跡

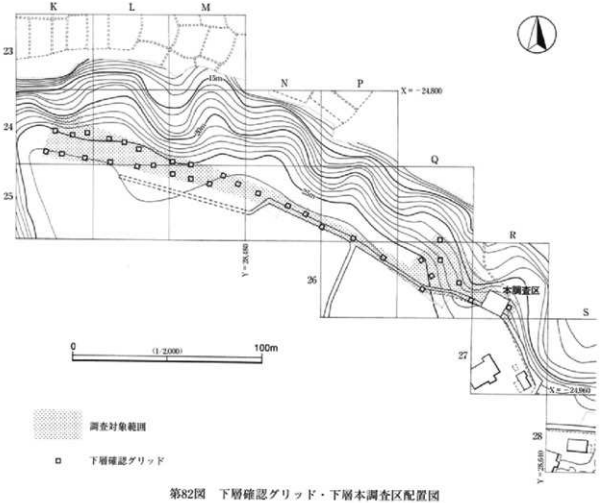
第１章　松崎Ｖ遺跡の概要

松崎Ｖ遺跡は，平成14年度に発掘調査を実施した。調査面積は3,290㎡で，遺跡の北端部の台地斜面際の東西に細長い範囲が，調査対象地となった。遺跡周辺の地形は第１図を参照して頂きたい。調査担当者等については第１部で記したので，ここでは割愛する。

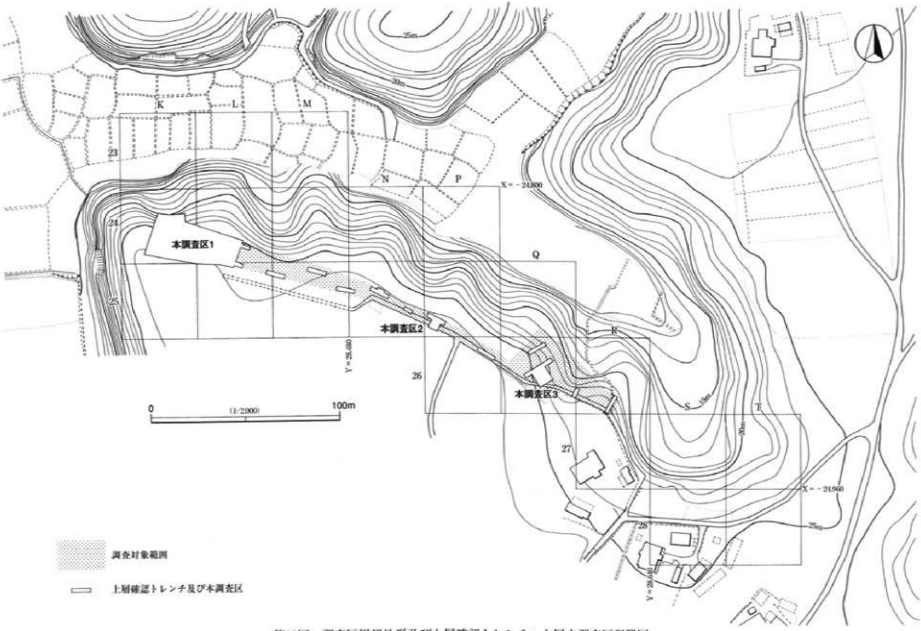
下層（旧石器時代）確認グリッドの配置と下層本調査範囲は，第82図に示した。上層（縄文時代以降）遺構確認トレンチの配置と，上層本調査範囲は，第83図に示した。

下層の旧石器時代については，１か所の遺物集中地点を検出した。検出した地点が斜面部にかかるため，層序があまり明瞭には認識できなかったものの，石器群の様相などから，Ｘ層上部からⅨ層下部にかけて生活面を持つ文化層と考えられる。

上層遺構については，縄文時代の遺構として，炉穴12基，陥穴状遺構１基を検出した。炉穴は調査区西側でまとまって検出した。古墳時代以降の遺構としては，古墳時代前期の竪穴住居跡１軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡２軒，土坑２基，溝状遺構１基を検出した。古墳時代以降の遺構は調査区全体で散漫に検出した。検出した遺構については，第28表に一覧表を示し，第84図に遺構配置図を示した。

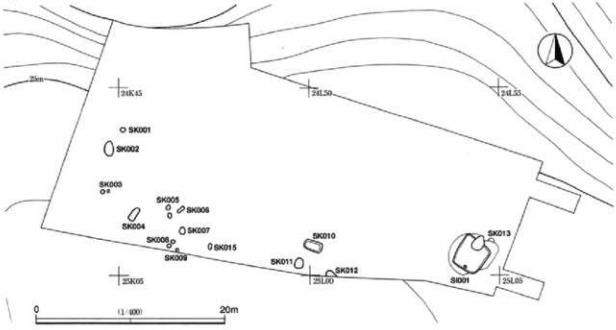


第82図　下層確認グリッド・下層本調査区配置図

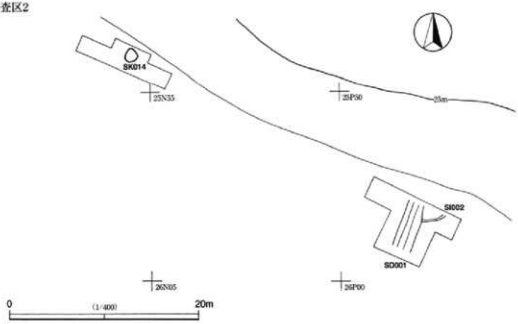


第83図　調査区周辺地形及び上層確認トレンチ・上層本調査区配置図

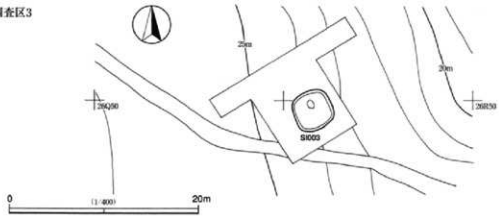
本調査区1



本調査区2



本調査区3



第84図　松崎Ⅴ遺跡　遺構配置図

縄文時代については，調査区西側の炉穴を検出した地点と重なる位置で，縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層を検出した。これに関連して，24K・25K・24L・25Lグリッドについては，4m×4mの小グリッドを4分割して遺物を取り上げた。4分割した北西の区画を（1）区，北東を（2）区，南西を（3）区，南東を（4）区とした。上記のグリッドで出土した遺物の，グリッドの注記の後ろにある括弧内の数字は，この4分割の区画を意味する。

遺構の名称は，調査時に遺構種別を示す略号であるSIやSKを頭に付けた，001からの番号を付した。遺構名称については，基本的に，調査時に付されたものを踏襲し，整理時に遺構名称の変更などはおこなわなかった。報告に際しては，概ね古い時期の遺構から順に記載したため，遺構の番号が前後する場合がある。

第28表　松崎V遺跡遺構一覧表

遺構名	種　類	時　期	グリッド	備　考
SI001	竪穴住居跡	奈良・平安時代	24L93・94	SK013と重複
SI002	竪穴住居跡	奈良・平安時代	25P82	SD001と重複
SI003	竪穴住居跡	古墳時代前期	26Q45・46・55・56	
SK001	炉穴	縄文時代早期	24K66	
SK003	炉穴	縄文時代早期	24K74	焼土2ヶ所
SK004	炉穴	縄文時代早期	24K85	
SK005	炉穴	縄文時代早期	24K86	焼土2ヶ所
SK006	炉穴	縄文時代早期	24K76・86	
SK007	炉穴	縄文時代早期	24K86	
SK008	炉穴	縄文時代早期	24K96	焼土2ヶ所
SK009	炉穴	縄文時代早期	24K96	
SK011	炉穴	縄文時代早期	24K89	
SK012	炉穴	縄文時代早期	24L90	
SK013	炉穴	縄文時代早期	24L95	SI001と重複
SK015	炉穴	縄文時代早期	24K95	
SK002	陥穴状遺構	縄文時代早期	24K64	
SK010	土坑	古墳時代以降	24K89・24L80	
SK014	土坑	古墳時代以降	25N34・44	
SD001	溝状遺構	中・近世	25P81・82・91	SI002と重複

第２章　　旧石器時代

第１節　概要（第82・86図，図版25）

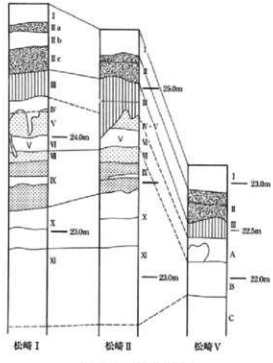
旧石器時代の松崎遺跡群については，既報告分[1]でも知られているとおり数十か所にわたる検出地点が確認されており，それぞれ着実な成果を上げてきたところである。本報告で扱った松崎Ｖ遺跡の調査でも１か所ではあるが，中規模程度の旧石器検出地点が確認された（第82図）。松崎Ｖ遺跡と呼称した地点は，印旛沼に注ぐ新川の支谷に面しており，大きく扇状に西に向かって張り出す台地上に形成されていた。そこでの調査は台地の北側斜面部に近い部分のみを実施したわけであるが，調査区東よりの一部斜面にかかる場所から合計87点の石器群が発見された。

調査は，まず試掘から始めたが，調査区域そのものが曲線状に設定を余儀なくされたため，台地部の縁にあたる平坦面に沿って任意に試掘区設定して調査を開始した。その結果26R93グリッドから数点の旧石器群が検出され，調査可能地区に限って拡張区を設定し石器の分布範囲の把握に努めた。ただ調査は限られた区域内であり，遺物の取り上げ方法については小範囲と推定されたためグリッドを越えても継続するようなかたちで遺物番号を付していった。結果的にみると，集中部は26R73・83グリッドとなり約10m×13mの範囲で楕円形を呈したような分布状況となった。石器の分布は第86図に示したとおりであるが，調査区域外にあたる南側部分では，その出土状況からまだ若干の石器群が包蔵されているものと考えられた。

第２節　層序（第85図）

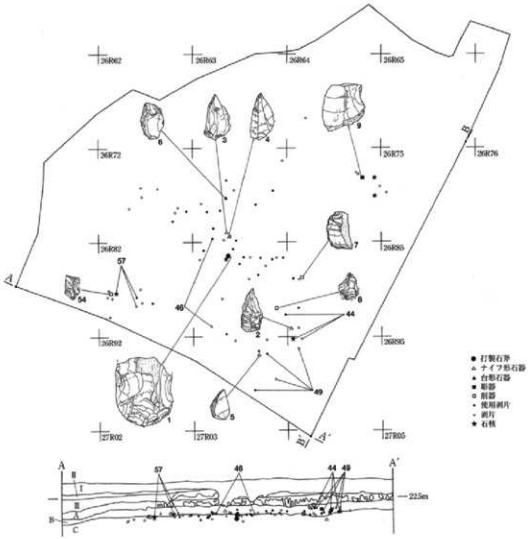
松崎遺跡群にみられる一般的な層序は，既報告分（第85図）で触れているとおり下総台地でみられる層序と大差はない。大きくは，表土下にソフトローム（第Ⅲ層），ハードローム（第Ⅳ～Ⅵ層），第２暗色帯（第Ⅸ層）といったような堆積順序を示す。

だが本遺跡の場合，斜面部という立地条件の中にあって一般的な堆積と明確に異なる層順を示していた。石器検出層の標高もまた低く，22m前後に集中して検出された。これらの石器群を分布図に示すと，斜面部での出土ということもあり投影図の一部では白色粘土層に含まれるようになるが，すべてＢ層と呼称した褐色土で，白色粘土層に包含されることはなかった。しかも検出層下の堆積土は，下末吉ロームと考えられたため石器群の出土層位については明確に断定することができなかった。このため本報告に限り，層序についても調査時の所見に沿ったかたちで記載することとした。なお，堆積土についてはＡ－Ａ′，Ｂ－Ｂ′の２か所を記録したが，遺物の投影には傾斜の少ないＡ－Ａ′を採用した。



第85図　基本土層図

第Ⅰ層	表土	
第Ⅱb層	黄褐色土	既刊の報告でみられる堆積土であり，新期テフラを含む。
第Ⅱc層	暗褐色土	b層ともに縄文期の包含層となる。
第Ⅲ層	褐色土	いわゆる風化したソフトロームと表現できる層である。しかし，一般的にみられる第Ⅳ層以下の堆積が認められないため，甚だしく流動している堆積土と推測される。
A層	褐色土	本層は大きなロームブロックの混入が認められるため，通常堆積の第Ⅳ層から第Ⅵ層にあたるものと考えられた。
B層	褐色土	本層が石器包含層となっており，従来堆積していた立川ローム層下部，武蔵野ローム層上部が二次堆積したものと推測した。
C層	白色粘土層	本層は，色彩・土質の上から下末吉ローム層と判断した。本層以下は確認していないが，標高などを考えれば妥当となろう。



第86図　石器出土状況図

第3節　出土石器（第86～91図，第29表，図版28～31）

本遺跡において検出された石器群は1か所のみであったが，26R73・83において集中的に出土し，それを囲むように周辺グリッドからも検出された。その結果，石器群の分布は東北方向へ傾くような楕円形を呈した分布状況となったが，台地斜面という自然条件の中でもよく遺存していたというべきであろう。

出土層位については，記録はしたものの斜面部という条件もあり，層序が集約されていたため一般的な層序区分の中での把握はなし得なかった。このため包含層としては，図示したような層序と考えられるため，概ね第2暗色帯から立川ローム層最下部にあたると判断することができた。

出土した石器群の総数は87点におよび，器種としては打製石斧・ナイフ形石器・台形石器・削器・彫器等が存在した。出土点数からみると器種も豊富で整った石器組成と見做すことができよう。また石材についても，チャートを主体に嶺岡頁岩の二種で構成されているといってもよいほど他の石材が採用されていないところが大きな特徴となろう。また石器製作という点からみると，概して簡単な作りとなっている。

打製石斧（1）　唯一出土した石斧で，川原石を素材としたものであろう。他に同一石材は認められておらず，完成品を搬入したものと思われる。上部が約1/2から2/3程度欠損しており，遺存部からみると背面を高くするタイプ（円鑿型）となろう。一部に自然面が認められるため，素材の厚みは3㎝程度と考えられた。周囲は大きな剥離によって整形されており，刃部では使用によるためか小剥離がみられる。裏面は研磨しているような滑らかさを保ち，周辺は反るように弯曲しており原石の形状をうまく利用して製作したものである。石材には砂岩を利用しており，この時期の石斧にはしばしば使用される石材である。

ナイフ形石器（2～5）　計4点が出土した。2は横長の剥片を素材とし，一端を折断・整形し基部としている。背面の加工は粗雑で，左右からの剥離で簡単に整形しただけで，先端までには及んでいない。右側面での加工は比較的丁寧であるが，裏面での加工は認められない。3も横に長い剥片を素材としており，先端部の左側面を数回の小さな剥離により仕上げている。他の部分での整形は認められず，簡単な作りとなっている。表面右中央部の弯曲は調査時のものである。4は形状を整えた作りで，先端部は僅かな剥離により鋭利な先端を作出している。また裏面での整形剥離が施された唯一のナイフ形石器となる。5は節理面のため小型化した剥片を用いたもので，先端部のみ背面加工を丁寧に施している。石質は半透明に近く良好といえよう。石材はいずれもチャートである。

台形石器（6）　横長剥片を採用し，打点部の整形とともに左下半部と右中央の一部を調整し台形石器としている。先端の刃部では使用によるものか，微細な刃こぼれが観察できる。石材はチャートである。

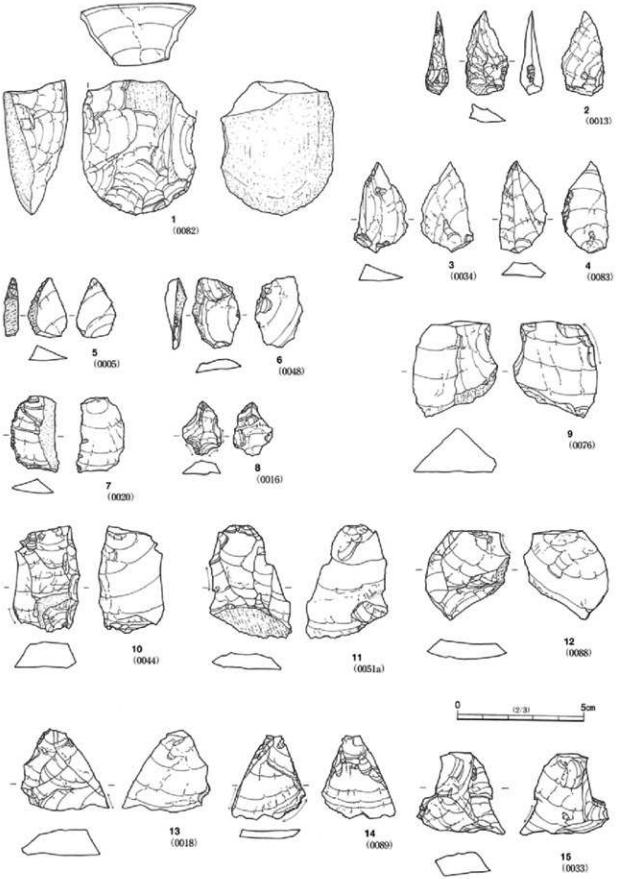
削器（7・8・54）　7は縦長剥片の左側縁全面に小さな二次剥離が認められるため削器とした。下端は整形のため折断している。表面右は自然面のような節理が認められ，この側縁にも使用痕らしき僅かな欠損が認められる。8は小型品であるが，下端部左右の弯曲した部分を顕著に使用している。このため抉り入りのスクレイパーとして削器に含めた。裏面での整形も認められ，周囲に数回の剥離痕を残す。石材はチャートである。54も同様な作りで，右側縁に半円状の弯曲を作出している。棒状の素材の表面を円形に整えるための石器と考えたい。形状から推察するに残核とは考えられず，意識的に作り出したものであろう。石材には嶺岡頁岩を利用している。

彫器（9）　断面三角の分厚い剥片を素材としたもので，右側面は弯曲するように整形されている。裏面では左上にきれいな横からの剥離が認められることから彫器とした。さらにその側縁では使用を目的としたものか微細な調整が観察できる。石材はチャートであるが，気泡を含有する不純物層が多重にもみられる。

使用剥片（10～34・47・51・52，53・59）　ここでは若干の二次剥離を有するものや微細な調整が加えられたもの，使用痕の認められるものを一括して掲載した。このため合計で30点と多量になったが，何らかの形で石器として使用されていたものと考えられる。10・11はともに縦長剥片を素材としており，定形石器に十分加工できる形状を有している。10は左下端に小さな二次剥離が，11は左側縁中央に使用痕が認められる。12も大型剥片で右上の弯曲部に微細な調整痕が施されている。13は表面右下部に僅かな二次剥離を認めることができる。鋭利な突起部を作出しており，錐としての機能をもたせたものであろう。14は黒褐色を呈した薄いチャートの剥片を素材としており，右下端に顕著な調整痕がみられる。おそらく削器のような使われ方をしたものであろう。15は使用に際し，剥離後に左部分を上部から加撃し整形している。右下半を刃部として使用したものであろうか刃こぼれによる使用痕が観察できる。16も素材としては十分な形状を有している。左側縁中央に若干の刃こぼれ痕が観察できる。石質は節理面等が多くみられ良質とはいえない。17は剥離時の打点を左上に置き，横長に近い剥片を素材としている。右側縁に作出された鋭いエッジを刃部として使用しており，刃こぼれ痕が顕著に認められる。18は，表面には節理面が観察されるものの，石材としては概して良質である。右側縁に小さな二次剥離が施されており，石器として使用されていたことは確実であろう。19も良質なチャートを用いており，右側面に僅かな二次剥離が認められる。20は表面中央に節理痕がはしる。左側縁に刃こぼれを観察できる。21は裏面に明確な剥離を残す。下端は折断によるものである。おそらく削器のように使用されたものであろう。22は縦長の剥片を素材とし，下端部に刃こぼれ痕がみられる。23は半透明に近い淡青灰色で器面には不純物が認められる。右側縁には整形を兼ねた剥離が施されており，これも削器のような使われ方をしたものであろう。24は断面三角のような背面を形作っており，先端部は欠損する。左側縁には若干の剥離痕がみられる。下部は自然面で，厚さ約5㎜の淡褐色を呈した風化が認められる。25は右上部に微細な剥離痕が認められる。下端は鋭く尖っており，錐のような使用は十分考えられるが加工の痕跡は認められない。26は下端左に刃こぼれと，二次剥離が認められる。27・28は僅かながら二次剥離痕を残す。29は石刃状の剥片で，左側縁下部に顕著な使用痕を残す。30は下端左に数回の剥離を施している。31も下端右に調整剥離が認められ使用の痕跡が窺われる。32は右下部に小さな二次剥離が施され，左側縁に使用痕が認められる。角度を変えて，左側縁の使用痕を先端部としてみれば台形石器と見做すこともできよう。33は若干の刃こぼれ，34は上部左右に二次剥離が施されており，形はどうあれ石器として使用された可能性が強い。51・52は接合剥片のうち使用されたと思われる剥片である。51は大型剥片で左右の側縁を使用しているようであるが，左側縁では顕著な刃こぼれ痕が観察できた。52は折断剥片の上部にあたる。右下端の欠損は整形によるものであろう。これも左側縁に顕著な刃こぼれが生じていた。以上，37点の使用石材はすべてチャートである。

チャート以外の石材を用いた使用剥片は2点みられた。53の表面はほぼ自然面となっており，この部分から推定すると母岩はかなりの大きさであったものと思われる。左上部に若干の二次剥離が施されており，掻器のような使用法が想定される。また下端の背面には整形のための剥離が数回施されている。59は裏面右上に3～4回の小剥離が認められる。接合剥片の一部であり，石器製作を目的としたものであることは間違いあるまい。いずれも嶺岡頁岩を採用している。

剥片（35～40・45・48・50・52・55・56・60）　接合剥片を含めて13点を図示した。35は，石器素材としては十分な形状を有するが，上半部では不純物の含有が多いため素材としては不適だったのかもしれない。36も縦長の剥片ではあるが，不純物の層が縦横に入り込んでいる。37も形状の整った剥片であり，縦方向



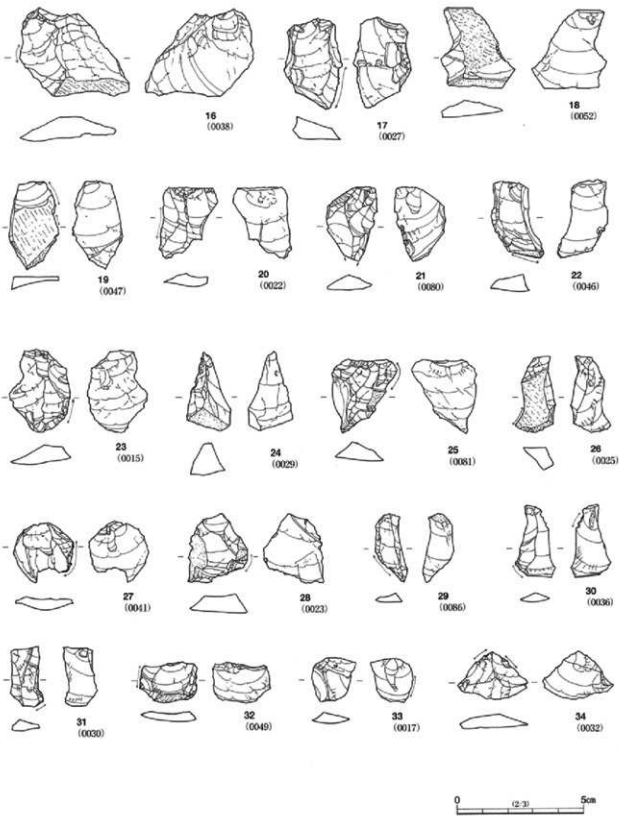
第87図　出土石器実測図（1）

の剥離面が数条観察できる。しかし裏面では不純物の付着した節理に覆われており石器の製作には適さなかったものであろう。38は赤褐色を呈しており，チョコレート色に近い。石材はチャートである。39にも取りたてて加工は認められないが，35・37・39は淡い青灰色の色調を示す。一方，36・40は黒みの強いチャートである。

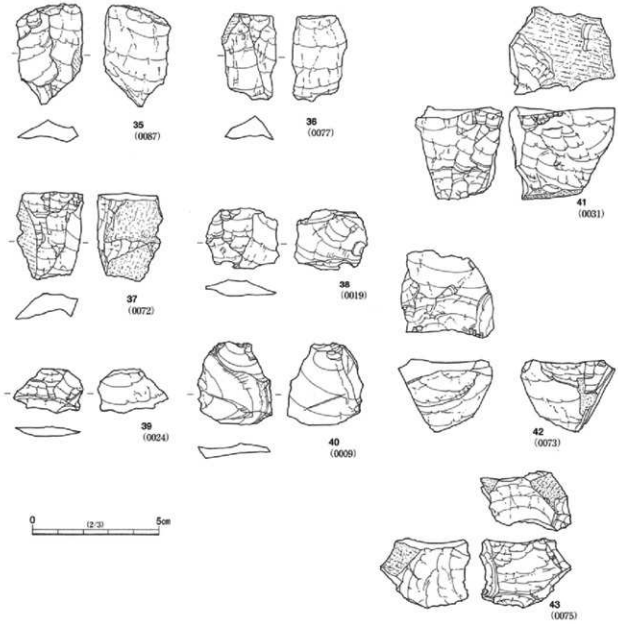
55・56・60の3点は嶺岡頁岩製の剥片であり，接合した資料と石器の素材に加工できるような剥片について図示した。55は使用可能な剥片となろうが，調整等の加工は認められない。56も分厚い剥片で素材としては十分となろう。下半部は折断されており，石器として使用されている可能性が強い。60は接合資料であり，剥片というよりも砕片に近い形状を示す。

石核（41～44・58）　ここでは石核・残核と考えられるものが5点検出されている。41は35mmほどの厚みをもつ石塊を母岩とし，二つの面から剥片を剥離している。そのうちの一面では上下方向から加撃されている。打面は平坦となっている節理面を利用しており，特に打面調整は加えられていない。だが残された残核には節理面・不純物が多く含有されているところから良質な部分だけ剥取して放棄されたものと考えられた。42は表裏両面から剥片が剥離されている。母岩の厚みは25mm程度を計測できる。打面は，ここでも平坦な節理面を利用しているが，2～3回の打面調整剥離が施されている。石質という点では，若干不純物層を含むものの41よりも良質といえる。43は多面からの剥離が認められるため，母岩はかなり大きかったものと考えられた。打面は大きな剥片を剥取した後の平坦面を利用し，順次回転させていくように設定されたものと思われ，本資料からは少なくとも4面から剥片剥取が認められる。また図示した表面では打点部に，さらに小さな剥離を施し弯曲部を作出しているため，この部分は石器とし削器のような形で使用されていたものと想定される。44の打面には不純物の薄い層がみられ，良質部を選択しつつ剥片を剥離している。その形状から残核となろう。周囲での剥離状況から母岩はかなり大きく拳大ほどはあったものと想定された。良質部の色調は淡青灰色で，濃青灰色の筋がはしる。この色調の剥片は接合資料以外にも数点で認められた。さらに接合剥片から観察すると，打面調整は認められず，打面再生を繰り返しながら剥片を剥取していることが理解できる。その点からみると高度な石刃技法とはいえないが，打面再生と連続剥離という点では石刃技法に近い剥離技術は習得していたものと考えられる。概ね円錐形となって廃棄された残核と接合剥片よりその技術を窺い知ることができる。このことは接合剥片（51・52）の形状からも剥離作業の内容を知ることができる。以上の4点はチャートである。58は一応残核となろうが節理面が多く，良好な石核とはなっていない。石材は嶺岡頁岩である。

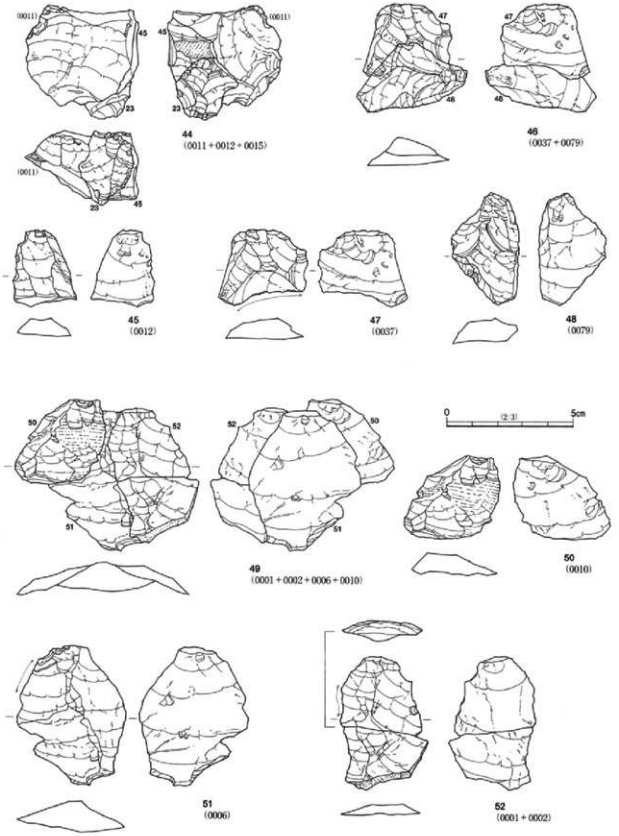
接合資料（44・46・49・57）　残核44と接合した剥片は23・45であり，調査区南端で検出されている。色調の類似する剥片には13・35・37・39などがあり，接合関係は認められなかったものの同一母岩から剥離された可能性が高いと思われた。46・49は剥片の接合であり，図示したように接合関係は南端を中心に確認された。グリッドでいえば，おそらく26R93・94あたりで石器製作の作業が行われていたものと推定できる。49は4点の接合が確認された例であり，縦長の剥片を折断した52の上半部は石器として使用されていた。折断部では若干加工されているところから意識的に折断されたことが理解できる。接合結果から母岩となる原石は，剥片の形状あるいは僅かな自然面の状況からかなり大きなもので拳大以上の原石が想定される。以上はチャートである。57は26R82グリッドで検出されたもので，ここでの出土数11点はすべて嶺岡頁岩によって構成されており，明らかに石材別に石器製作が行われていたようである。ただ，層序の混乱から同時期に製作活動があったかどうか断定できないが，時期的にはそれほどかけ離れたものとは考えにくい。



第88図　出土石器実測図（2）



第89図　出土石器実測図（3）



第90図　出土石器実測図（4）

第4節　石器群の位置と石材

これまで松崎Ⅴ遺跡と命名した地区から出土した石器群について，その概要を述べてきた。出土層序では，台地斜面部ということもあり若干の問題を残すことになったが，出土石器群にはみるべきものがあった。前述したように，打製石斧をはじめナイフ形石器・台形石器・削器・彫器の他に多数の石器として使用されたと考えられる剥片を検出できた。このため，本稿では石器群や剥片，使用石材などについて若干の所見を述べておきたい。

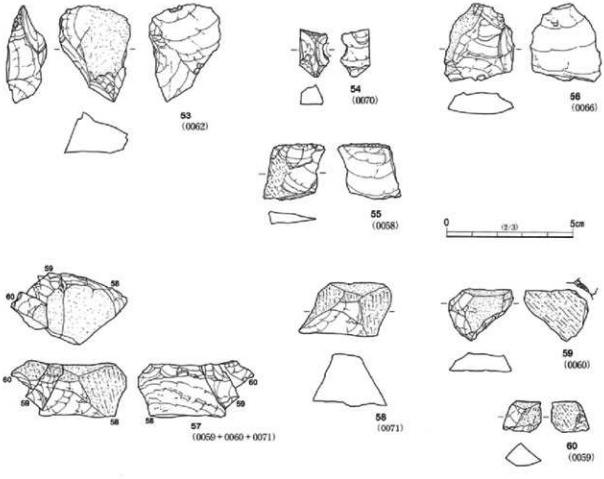
石器　本遺跡での定形石器の出土は出土総数からみると，その量及び器種ともに豊富なものといえよう。4点出土したナイフ形石器を除けば，少ないながらも一応の器種は揃えていた。ただ，これらの石器群の製作という点からみると，稚拙さは否定できない。とりわけナイフ形石器についていえば，先端部の背面加工は数回の粗雑な剥離で整形し，基部の加工はほとんど認められない。1点のみ整形のため若干の剥離を施しているだけである。他の器種についても，製作面からみてそれほどの差は認められない。このように本遺跡で出土した石器群については，後出するような精緻な加工を施す石器群とは質的に異なるような製作技術であるという点を指摘できよう。

剥片　次に剥片について取り上げると，その一部を加工して石器として使用したと考えられるものが30点と多数検出されている。これらの剥片類について，全点が石器として用いられたものとは断定しがたいが，多くの剥片は何らかの形で道具として使用されたものと考えて間違いあるまい。この剥片多用の傾向は，本遺跡群について既に刊行されている別地点の報告でも類例が無く，松崎Ⅴ遺跡の特徴として捉えることができる。そこで出土地点を観察すると，接合剥片が検出された地点を中心に石器製作以外の活動をここに垣間見ることができよう。それらの作業内容については，特定することは難しいものの簡単な作りの石器でも可能となるような作業ということになろう。おそらく剥片の一端を簡単に加工した程度の石器は，スクレイパー類として使われていたものと推測できる。

一方，剥片でも使用痕等が認められない剥片も36点出土しており，これらの剥片を観察すると，いわゆる砕片・屑片といった小剥片が意外と少ない。その重量でみると，1g以下の剥片は10点を数えるに過ぎず，石器製作という観点からみると明らかに少ないことが理解できる。このような廃棄剥片の形状と少なさは，おそらく石器製作の技術に起因するものと推定される。前述したように本遺跡出土の成品は極めて簡単な加工により仕上げており，このように安易な加工では廃棄される小剥片の出現数が少ないことは言うまでもなかろう。この事実はまた石器製作の典型的な技術である「石刃技法」の未発達な段階での産物として理解したい。

石材　次に石材と出土地点についてみると，総出土数87点のうち打製石斧を除くとチャート75点，嶺岡頁岩11点の構成となる。なかでもチャートは卓越した出土量を示し，本遺跡での使用石材という点で大きな特色となっている。これらチャートの産出地は栃木県の足尾一帯が考えられるという[21]。このことは石材供給という点で非常に興味深い事実を提供してくれたものといえる。これらのチャートは，分布図（第86図）で示したように26R93・94の地点から扇状に北側斜面に向かって流れるように分布しているが，集中出土地点としてより小さく捉えると3か所に分離（26R93・94，26R73・83，26R74・75）することも可能であり，小集団が一定期間石器製作に従事しつつ居住していたことは明白である。

しかし26R82グリッドにみられる石材は，県内産とされる「嶺岡頁岩」を母岩として使用しており，このグループだけは小範囲で単独母岩，定形石器が存在しないという決め手を欠く出土状況にあった。しか



第91図　出土石器実測図（5）

しチャートのグループと同一集団との断言はできないまでもその出土層位から時期的には近似したものと推測できよう。この嶺岡頁岩とした石材は，最近認識された石材で県南に産する[7]といわれており，本遺跡周辺でも確認されてきている。印西市馬込遺跡[8]では第Ⅲ層のソフトローム層から第Ⅳ～Ⅵ層のハードローム層にかけて数点が出土し，本埜村瀧水寺裏遺跡[9]では第Ⅸ層となる第2暗色帯から少なからず出土している。この他，四街道市出口・鐘塚遺跡[10]でも第2暗色帯下部から出土した頁岩製石器群の一部に嶺岡頁岩が採用されている。このような検出例をみると，本県産石材は主要石材とは成り得ないものの，かなり古い段階から主要石材を補完すべく広範な地域で導入されてきた石材と位置付けられよう。

以上のように本遺跡ではチャートを主要石材とし，少数ではあるが嶺岡頁岩・砂岩を加えた単純な石材構成となっていた。一般的には，石器集中地点として認識できる石器群では少なくとも5～6種の石材を採用している。このような状況から推測すると，遺跡を残した当時の集団が，他の石材を使用していなかったということではなく，石器製作時に用いた原石がチャートであったものと理解したい。

石器群の位置　最後に，以上のような所見をもとに，松崎Ⅴ遺跡の石器群の位置について触れておきたい。

房総北部域における旧石器時代の調査例は年々増加し，本遺跡の所在する印旛郡内だけをみても330遺跡

の調査報告[7]が知られている。このうち出土層位から立川ローム層下部出土の類例をみると四街道市御山遺跡[8]，同池花南遺跡[9]，佐倉市向山谷津遺跡[10]，成田市天神峰奥之台遺跡[11]等の遺跡をあげることができる。これらの遺跡群で検出されている石器群のうち刺突具となるナイフ形石器・尖頭器類について，製作技術という点で比較すると，御山遺跡，向山谷津遺跡出土石器に共通性を見出せる。両遺跡で出土した石器も細部の加工が未熟で，完成品としての粗雑さは否定できない。御山遺跡第Ⅱ文化層では，剥片の先端部を僅かに加工しただけの尖頭器や先端部が錐状の石器等，定形石器とは言い難い石器群が検出されている。さらに，このような事例は向山谷津遺跡にも尖頭石器として報告されている。このように石器製作が簡単かつ未熟な段階を「印旛の原始・古代」[1]では第Ⅱ期として捉えており，本遺跡の石器群もこの時期に相当するものと考えられる。また最近報告された，袖ヶ浦市関畑遺跡[12]第Ⅰa文化層の石器群についても，出土層位・石器製作面から類似性を見出せる。使用された石材についても嶺岡頁岩の使用頻度は高く，チャートも採用されている点でも本遺跡出土の石器群との共通性を指摘できよう。

このように周辺遺跡での出土例をみてくると，本遺跡出土の石器群を使用していた当時の人びとは，層序でいえば第Ⅸ層として捉えている第2暗色帯下部から第Ⅹ層である立川ローム最下層の上部を生活面としていたものと推測できる。

注1　既に報告された松崎Ⅰ（9地点）・Ⅱ（16地点）・Ⅲ（5地点）・Ⅵ（6地点）の各遺跡でそれぞれ出土しており，合計36地点にも及んでいる。大規模な集中地点としては松崎Ⅰ遺跡の第2・3地点，松崎Ⅱ遺跡の第4～6地点があり，第2暗色帯（第Ⅷ・Ⅸ層）から100点を超える石器群が検出されている。

2　柴田徹氏（考古石材研究所）のご教示による。

3　加納実・国武貞克・青野真如　2003「房総の石器石材2」「千葉県史料研究財団だより」第14号　千葉県史料研究財団

4　古内　茂ほか　2004『印西市馬込遺跡』（財）千葉県文化財センター

5　酒井弘志ほか　2004『瀧水寺裏跡』（財）印旛郡市文化財センター

6　岡田誠造　2004『四街道市出口・鉢塚遺跡』（財）千葉県文化財センター

7　酒井弘志・宇井義典　2004『印旛の原始・古代』－旧石器時代編－　（財）印旛郡市文化財センター

8　矢本節朗ほか　1994『四街道市御山遺跡（1）』（財）千葉県文化財センター

9　渡辺修一ほか　1991『四街道市内黒田遺跡群』（財）千葉県文化財センター

10　矢戸三男ほか　1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』（財）千葉県文化財センター

11　矢本節朗ほか　1997『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』－天神峰奥之台遺跡－　（財）千葉県文化財センター

12　新田浩三ほか　2004『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書13』－袖ヶ浦市関畑遺跡－（財）千葉県文化財センター

第29表　旧石器時代石器属性表

遺物番号	器種	石材	母岩番号	挿図番号	接合番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
0001	使用剥片	チャート		第90図52	3	30.04	33.09	6.24	6.41	
0002	剥片	チャート		第90図52	3	26.53	33.94	8.83	7.04	
0004	剥片	チャート				18.54	12.04	1.74	0.41	
0005	ナイフ形石器	チャート		第87図5		14.60	22.70	5.91	1.78	
0006	使用剥片	チャート		第90図51	3	54.33	43.60	13.18	25.03	
0007	剥片	チャート				39.35	23.53	7.64	5.35	
0009	剥片	チャート		第89図40		34.64	32.71	13.75	7.16	
0010	剥片	チャート		第90図50	3	32.25	41.20	13.50	12.19	
0011	石核	チャート		第90図44	1	28.29	46.83	41.28	43.95	
0012	剥片	チャート		第90図45	1	30.01	24.40	9.07	5.81	
0013	ナイフ形石器	チャート		第87図2		34.08	17.69	8.83	3.86	
0014	剥片	チャート				23.83	28.84	8.33	4.45	
0015	使用剥片	チャート		第88図23		30.59	24.01	8.41	5.55	
0016	削器	チャート		第87図8		21.90	16.78	8.02	2.39	
0017	使用剥片	チャート		第88図33		17.34	16.44	4.54	1.14	
0018	使用剥片	チャート		第87図13		31.32	35.09	12.67	10.54	
0019	剥片	チャート		第89図38		22.08	30.11	8.44	6.42	
0020	削器	チャート		第87図7		29.32	18.67	5.46	3.39	
0021	剥片	チャート				35.96	32.46	9.71	11.99	
0022	使用剥片	チャート		第88図20		28.88	24.37	5.40	2.66	
0023	使用剥片	チャート		第88図28		30.32	24.23	7.36	5.12	
0024	剥片	チャート		第89図39		17.39	27.96	4.29	1.79	
0025	使用剥片	チャート		第88図26		29.05	13.43	9.56	3.30	
0026	砕片	チャート				10.95	15.17	2.24	0.34	剥離は発掘時のキズ
0027	使用剥片	チャート		第88図17		23.49	36.45	9.68	7.18	
0028	砕片	チャート				12.04	9.30	1.95	0.17	
0029	使用剥片	チャート		第88図24		31.84	18.26	12.50	5.25	
0030	使用剥片	チャート		第88図31		23.33	12.65	4.88	1.36	
0031	石核	チャート		第89図41		34.12	40.92	30.07	65.53	
0032	使用剥片	チャート		第88図34		16.51	27.41	7.31	2.43	
0033	使用剥片	チャート		第87図15		32.74	35.62	9.97	10.22	
0034	ナイフ形石器	チャート		第87図3		35.07	20.99	6.87	3.62	
0035	剥片	チャート				27.86	27.93	11.15	8.11	
0036	使用剥片	チャート		第88図30		28.78	15.29	4.94	1.89	
0037	使用剥片	チャート		第90図47	2	31.32	36.72	8.95	8.38	
0038	使用剥片	チャート		第88図16		49.58	31.20	1.96	14.41	
0039	剥片	チャート				21.41	13.55	8.62	2.50	
0041	使用剥片	チャート		第88図27		24.26	23.92	4.95	2.17	
0042	剥片	チャート				36.84	17.83	14.58	6.69	
0043	剥片	チャート				22.58	19.60	6.35	2.13	
0044	使用剥片	チャート		第87図10		42.26	27.77	11.89	15.44	
0045	剥片	チャート				24.58	18.07	6.29	2.62	
0046	使用剥片	チャート		第88図22		29.26	18.72	8.80	4.27	
0047	使用剥片	チャート		第88図19		34.70	19.69	5.82	4.10	
0048	台形石器	チャート		第87図6		18.09	28.89	6.29	3.14	
0049	使用剥片	チャート		第88図32		15.49	23.39	5.57	2.29	
0050	砕片	チャート				8.33	4.36	0.90	0.05	
0051a	使用剥片	チャート		第87図11		46.93	32.13	1.35	11.44	
0051b	砕片	チャート				22.56	8.85	2.08	0.28	

遺物番号	器種	石材	母岩番号	挿図番号	接合番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
0051c	砕片	チャート				11.37	5.36	1.80	0.12	
0052	使用剥片	チャート		第88図18		32.02	28.79	7.31	5.78	
0053	砕片	チャート				8.72	5.90	1.12	0.05	
0054	砕片	チャート				7.66	11.90	6.68	0.45	
0055	剥片	チャート				25.27	32.25	8.91	6.33	
0056	砕片	チャート				8.45	14.25	3.58	0.42	
0057	剥片	チャート				15.17	13.28	3.86	0.70	
0058	剥片	嶺岡産珪質頁岩		第91図55		22.18	25.50	8.72	3.88	
0059	使用剥片	嶺岡産珪質頁岩		第91図60		18.64	13.30	10.12	1.66	
0060	剥片	嶺岡産珪質頁岩		第91図59	4	26.78	19.78	9.46	4.66	
0061	剥片	嶺岡産珪質頁岩			4	36.42	23.05	6.12	3.96	
0062	使用剥片	嶺岡産珪質頁岩		第91図53		33.94	29.17	15.34	13.91	
0066	剥片	嶺岡産珪質頁岩		第91図56		32.67	27.10	11.66	10.37	
0067	剥片	嶺岡産珪質頁岩				10.94	21.06	5.67	0.93	
0068	剥片	嶺岡産珪質頁岩				19.28	26.30	10.93	3.38	
0069	剥片	嶺岡産珪質頁岩				17.05	29.21	10.49	4.17	
0070	削器	嶺岡産珪質頁岩		第91図54		18.54	13.84	8.41	1.93	
0071	石核	嶺岡産珪質頁岩		第91図58	4	28.99	31.73	21.32	17.04	
0072	剥片	チャート		第89図37		32.98	26.30	10.37	10.21	
0073	石核	チャート		第89図42		27.01	45.29	36.19	38.46	
0074	剥片	チャート				28.62	68.20	26.49	32.90	
0075	石核	チャート		第89図43		27.46	41.70	20.20	25.29	
0076	彫器	チャート		第87図9		35.42	34.80	17.61	21.75	
0077	剥片	チャート		第89図36		34.10	21.77	10.89	6.67	
0078	砕片	チャート				9.85	14.17	2.42	0.30	
0079	剥片	チャート		第90図48	2	39.44	34.44	9.85	11.34	
0080	使用剥片	チャート		第88図21		28.97	24.86	6.39	3.62	
0081	使用剥片	チャート		第88図25		28.13	25.83	8.91	5.70	
0082	打製石斧	砂岩		第87図1		56.95	45.17	27.81	70.48	
0083	ナイフ形石器	チャート		第87図4		35.30	18.44	6.08	4.27	
0084	剥片	チャート				21.53	33.96	5.68	3.56	
0085	剥片	チャート				23.74	19.68	5.32	1.78	流土中から出土
0086	使用剥片	チャート		第88図29		20.29	23.10	4.55	2.16	流土中から出土
0087	剥片	チャート		第89図35		39.57	26.37	14.44	11.81	
0088	使用剥片	チャート		第87図12		36.36	32.99	7.95	9.94	流土中から出土
0089	使用剥片	チャート		第87図14		34.10	27.41	6.67	4.70	流土中から出土
0090	剥片	チャート				24.70	20.24	5.12	1.80	流土中から出土
0091	剥片	チャート				18.87	22.95	5.95	2.23	流土中から出土

※遺物番号0003・0008・0040・0063・0064・0065は欠番

第3章　縄文時代

第1節　遺構と出土遺物

縄文時代の遺構は，調査区西端の24Kグリッド南東部を中心とした東西約30m，南北約10mの範囲で，集中して検出した。検出した遺構は，炉穴12基，陥穴状遺構1基である。同じ24Kグリッドを中心に早期後葉主体の遺物包含層を検出した。また，調査区全体で中期から後期の土器を検出した。

縄文時代の遺構・遺物は，調査区の位置する台地北側縁辺に分布している。調査区外の南側台地上面にも，縄文時代の遺構が広範囲にひろがると思われる。台地上に広がる縄文時代遺跡の北端の一部分を，今回の調査で発掘したものであろう。

遺構から出土した遺物は，第95図にまとめた。土器拓影図に内面の拓本を示す場合，向かって左側に外面の拓本，中央に断面図，右側に内面の拓本を置いた。土器胎土に繊維を含む土器の断面図には，●を落とした。石器の計測値については第31表にまとめて示した。

1　炉穴

炉穴は，調査区西端の拡張区に集中して12基検出された。縄文時代早期後葉の土器を多く含む遺物包含層と，ほぼ重複して分布していた。炉穴の遺存状態はさほど良くなく，ソフトローム層上面の遺構確認面で，かろうじて炉穴底面の赤色焼土が確認されたものが多い。覆土をほとんど検出できなかったため，遺構にともなう遺物はほとんどなかった。

標高26mの等高線より高い台地上面に位置する炉穴が多く，標高25mより低い台地斜面には存在しなかった。調査区外南側には，標高約26mの平坦な台地が広がっている。おそらく縄文時代の炉穴，遺物包含層などの遺構が台地全面に広範囲に分布すると考えられる。

SK001（第92図，図版26）

24K66グリッドに位置し，台地平坦面から斜面部へと傾斜変換地点にある。ソフトローム層上面の遺構確認面で，長径51cm，短径44cmの楕円形をした赤色焼土が検出された。焼土中には炭化物片も見られた。炉穴底面がかろうじて検出された状態で，ソフトローム層への掘り込みはなかった。

SK003（第92図，図版26）

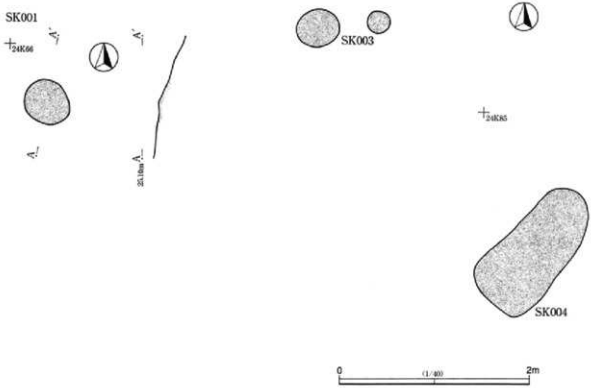
24K74グリッドに位置する。ソフトローム層上面に，長径約40cmと約25cmの2個の円形の焼土が並び，本来つながっていた可能性が強い。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。

SK004（第92図，図版26）

24K85グリッドに位置する。ソフトローム層上面に，最大長約150cm，幅約70cmの赤化した焼土範囲が検出された。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。

SK005（第93図，図版26）

24K86グリッドに位置する。東側約50cmの近接した地点にSK006がある。ソフトローム層上面に長径約65cm，短径約50cmの楕円形の焼土と，径約50cmの円形の焼土が並んでいた。本来つながっていた可能性が強い。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。



第92図　炉穴（1）

SK006（第93図，図版26）

24K76・86グリッドに位置する。西側50cmの近接した地点にSK005がある。ソフトローム層上面に最大長92cm，幅35cmの長楕円形の焼土が検出された。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。

ＳK007（第93図，図版26）

24K86グリッドに位置する。ソフトローム層上面に径約65cmの円形の焼土が検出された。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。西南約30cmの所で炭化材が検出され，SK007と関連性が考えられる。

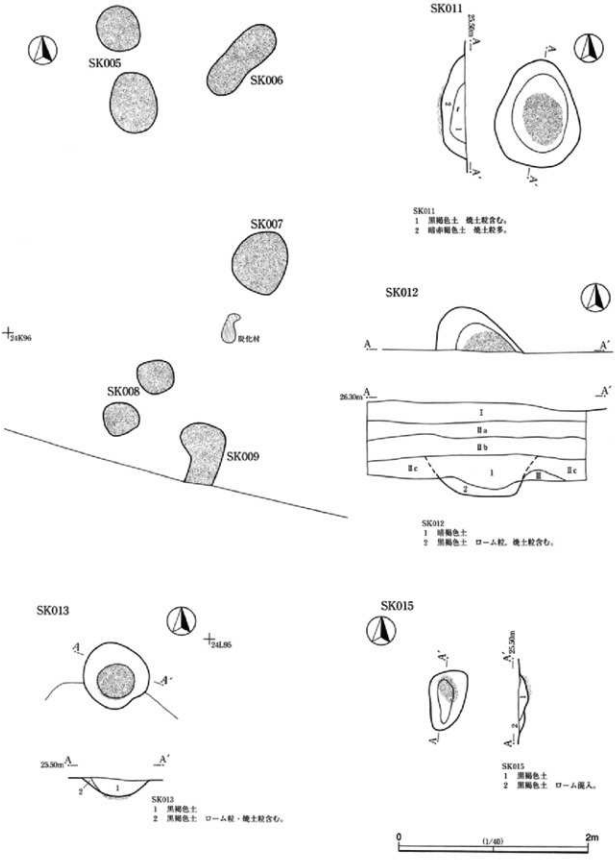
SK008（第93図，図版26）

24K96グリッドに位置する。東南約50cmの近接した地点に，SK009がある。ソフトローム層上面に，径約40cmの２個の円形の焼土が並び，本来つながっていた可能性が強い。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。

SK009（第93図，図版26）

24K96グリッドに位置する。SK008の東側に隣接している。ソフトローム層上面に，最大長約60cm，幅約30cmの範囲で焼土が検出された。南側は調査区外となり，全体の形状は確認できなかった。炉穴底面の焼土のみが検出された状態であろう。

SK008と隣接しているので，SK009とSK008は同一の遺構（炉穴）であった可能性も考えられる。


SK005
SK006
SK011
25.50m
A
A'
1
2
SK011
1　黒褐色土　焼土粒含む。
2　暗赤褐色土　焼土粒多。
SK007
24K96
炭化材
SK008
SK009
SK012
26.30m
I
IIa
IIb
IIc
III
1
2
SK012
1　暗褐色土
2　黒褐色土　ローム粒、焼土粒含む。
SK013
24L86
25.50m
SK013
1　黒褐色土
2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒含む。
SK015
25.50m
SK015
1　黒褐色土
2　黒褐色土　ローム流入。
0
(1/40)
2m

第93図　炉穴（2）

SK011（第93図，図版26）

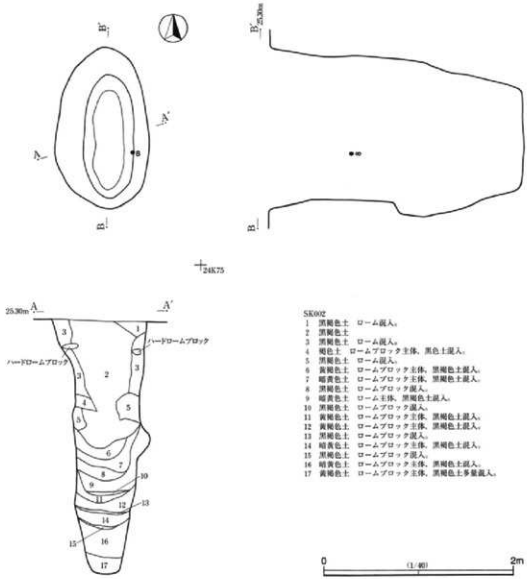
24K89グリッドに位置する。最大長114cm，幅91cmの三角形に近いいびつな楕円形であった。確認面からの深さは25cmで，底面が焼けて赤くなっていた。縄文土器が数点出土した。

第95図1・2はSK011から出土した土器である。いずれも早期後葉・条痕文系土器の破片である。1は内外面に縦位の条痕が施されるものである。2は繊維を含む無文の土器である。

SK012（第93図，図版26）

24L90グリッドに位置する。炉穴の一部のみが検出され，南側は調査区外であった。検出された炉穴の大きさは，幅約60cmであった。深さは15cmで，底部が焼けて赤くなっていた。

遺構確認面はソフトローム上面であったが，土層断面で確認したところ，Ⅱc層上面から掘り込まれており，Ⅱb層のいわゆる新期テフラ層に覆われていた。



第94図　陥穴状遺構（SK002）

SK013（第93図，図版26）

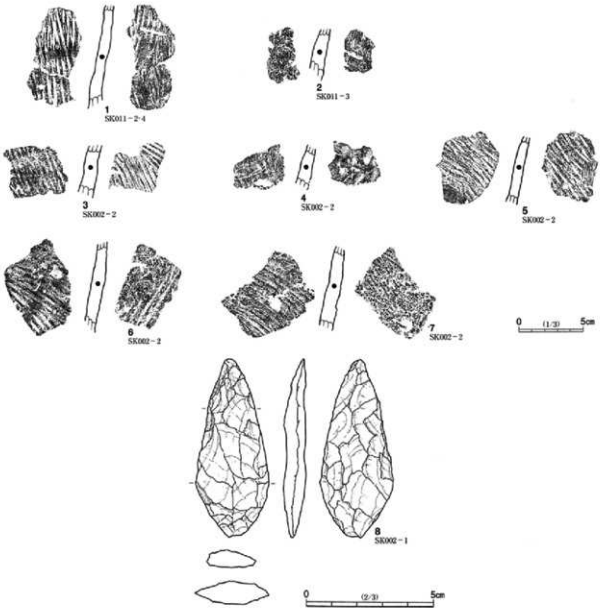
24K94グリッドに位置する。炉穴の南側を，奈良・平安時代のSI001住居跡が壊していた。炉穴の大きさは，径約70cmの円形であった。深さは18cmで，底部が焼けて赤くなっていた。早期後葉の土器片が1点出土したが，細片のため図示しなかった。

SK015（第93図，図版26）

24K97グリッドに位置する。最大長約65cm，幅40cmの，不整な三角形に似た形状であった。深さは10cmで，底部が焼けて赤くなっていた。

2　陥穴状遺構

陥穴状遺構は1基のみ，炉穴群が検出された地点で検出された。通常，炉穴は食料の調理加工を行なう場所と考えられている。また陥穴は大型動物を捕獲するための装置である。したがって，食料の調理加工



第95図　炉穴（SK011）・陥穴状遺構（SK002）出土遺物

する場所で，大型動物の捕獲をしたとは考えられないので，炉穴と陥穴は同じ時期に共存していたとは考えられない。両者の遺構には，若干の時間差があったと思われる。炉穴と同様に，陥穴も調査区外南側の台地上面に分布していると可能性が強い。

SK002（第94図，図版26）

24K64グリッドに位置する。長さ約170cm，幅約100cmの楕円形で，深さは268cmあった。底面は平担で長さ約104cm，幅約40cmの楕円形である。

シカやクマなどの大型動物を捕獲するには，陥穴の形状がやや狭小で，また底面まで必要以上に深すぎるように見受けられる。ウサギやタヌキなどの小型動物を捕獲するには，深い穴を掘る必要性がなく，地上にしかける罠などで充分捕獲できたであろう。この遺構で小型動物を捕獲する必然性も考えられない。大型動物の捕獲に最適な形状，深さを備えた捕獲用の陥穴とすることはできないが，大型動物の捕獲以外に他の用途を想定できないので，この遺構を陥穴と判断してよかろう。

この遺構から縄文土器と石器が出土した。土器は早期後葉の条痕文系土器である（第95図３～７）。３・５・７・６は土器の内外面に条痕を施すものである。４は外面にわずかに条痕が残る。

石器は，縄文時代草創期の特徴を示す安山岩製の尖頭器であった（第95図８）。縄文時代草創期に，深さ２m以上も深い陥穴を掘るほどの技術があったとは考えられない。したがって，この石器は陥穴の覆土に偶然混入したものであって，陥穴が狩猟用に機能していた時代の遺物ではないだろう。

第２節　グリッド出土遺物

１　土器

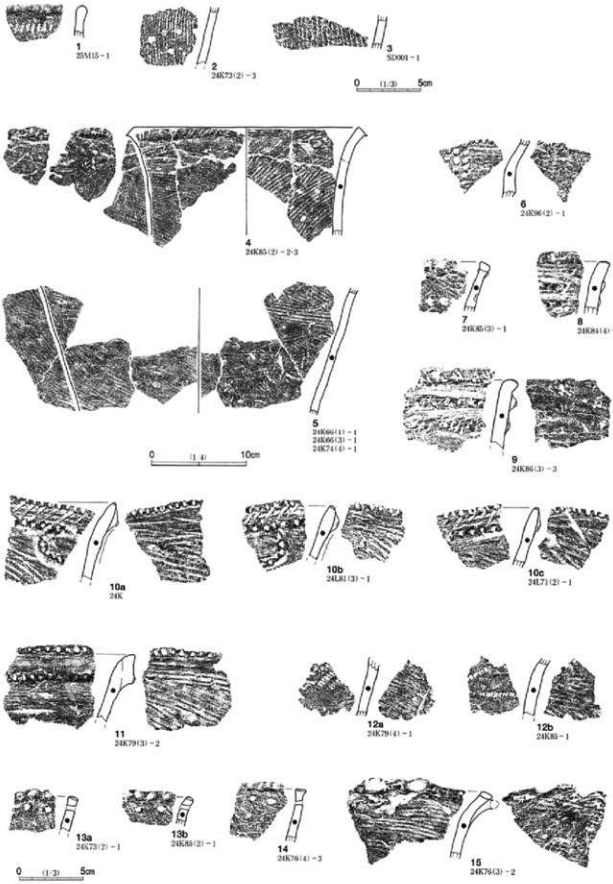
松崎Ⅴ遺跡の調査区内で，遺構に伴わずグリッド中で出土した縄文土器と，後世の遺構覆土中に混入した縄文土器を，ここで扱う。出土した土器は，早期から後期にわたるもので，時期比定が可能な文様のあるものを中心に図化した。

土器の出土状況としては，調査時に，調査区西側で縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層を検出したとの認識であった。調査後の大まかな集計のためそれほど正確ではないが，早期後葉・条痕文系土器は24Kグリッドで重量にして約10kg出土し，24Lグリッドでは約3.4kg出土した。24K・24Lグリッドより東側のグリッドでは，条痕文系土器はほとんど出土していない。24Kグリッドを中心とした調査区東側で，早期後葉の濃密な遺物包含層が存在したことが分かる。

その他の時期では，中期の土器が24Lグリッドで約2.4kgとややまとまり，調査区全体で散漫に出土している。後期の土器は24Lグリッドで約0.5kg，25Mグリッドで約0.5kgと少量まとまるだけで調査区全体で散漫に出土した。

図化した土器の出土位置については，挿図中の土器番号の下に注記名を記したので，これを参照して頂きたい。

記載は，概ね古い時期のものから順におこなうが，挿図の順序がそれほど厳密でないため前後する場合もある。観察表については作成しなかった。胎土中に繊維を含む土器の断面図には，●が落としてある。土器拓影図で内面の拓本を示す場合は，向かって左側に外面の拓本，中央に断面図，右側に内面の拓本を置いた。縄文の表記については，『日本先史土器の縄紋』[1]を参考として，１段右撚りの縄をR，左撚りの縄をL，２段正撚りの縄はRL，LR，３段正撚りの縄はRLR，LRLなどと，簡略化して表記することとした



第96図　グリッド出土縄文土器（1）

い。

（1）早・前期の土器（第96～99図1～55，図版32・33・35）

1～3は撚糸文系土器である。1は若干肥厚する口縁部がごく狭い無文帯となり，直下に絡条体圧痕が施される。暗赤褐色で，胎土中に白色粒をやや多く含む。器面はやや剥落する。稲荷台式末葉から花輪台式の土器かと思う。2はRL単節縄文を施文する土器で，色調は鈍い黄褐色，白色粒をやや多く含む。3は密にR撚糸文を施す土器で，色調は鈍い黄褐色，白色粒・砂粒を含む。

4～46は早期後葉から末葉の条痕文系土器である。すべて胎土中に繊維を含む。24Kグリッドを中心とする遺物包含層で主体を占める土器である。文様などから広義の茅山式と明瞭に判断できる土器は少なく，全体的には茅山上層式以降の早期末葉の土器が多いのではないかと思われる。

4・5は図上で径を復元した土器である。4は，やや外反する口縁部で，口唇部が外側に鍔状に張りだす。口唇部上面には雑なキザミを施す。外面は擦痕，内面は明瞭な条痕が残る。色調は黒褐色～黄灰色で，少量の白色粒・砂粒・赤褐色粒を含む。5は胴部の大破片で，内外面とも弱い条痕が残る。暗褐色で白色粒をやや多く含む。

6～14は何らかの文様を持つ土器である。6・7は連続刺突による文様を持つもので，両者とも色調は暗褐色で，胎土中に少量の白色粒を含む。6はくびれの部分の破片で，縦位の刺突列が複数施されるものである。茅山下層式と思うが，明らかに茅山下層式と判断できた破片はこれ1点のみである。7は口唇部に刺突を施し，口縁部にも半裁竹管による連続刺突を施すものである。

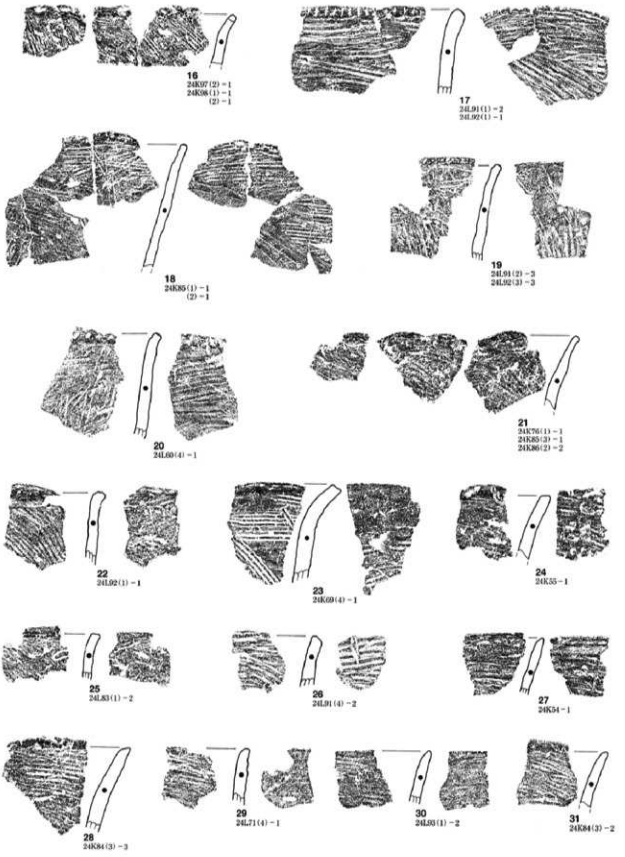
8・9は口縁部に横位の隆線を貼り付けるものである。8は黄白色，9はにぶい黄褐色で，両者とも白色粒が目立つ。8は器面が摩滅しはっきりしないが，2条の隆線を持つ。9は雑なキザミを持つ2条の隆線を持ち，やや外には張り出す口唇部にも雑なキザミを施す。文様構成的には神之木台式に類するが，比較的厚手で焼成もそれほど良くなく，神之木台式のイメージとはやや異なる。

10・11は口唇部と一体化するように粘土紐を貼り付け，肥厚した狭い口縁部を形づくるものである。10は暗褐色～褐色，11は暗赤褐色で，10は白色粒をやや含み，11はごく少量含む。10は24K88グリッドでも同一個体の小破片が出土している。波状口縁を呈するようで，狭い口縁部文様帯に斜線を連続させる。口唇部にはキザミを施す。口縁部文様帯下には，張り出した部分に接するように，鉤状に屈曲する隆線が配される。張り出した部分と隆線上には棒状工具により連続刺突が施される。11もよく似た土器であるが，口縁部の斜線と鉤状の隆線を欠くものである。

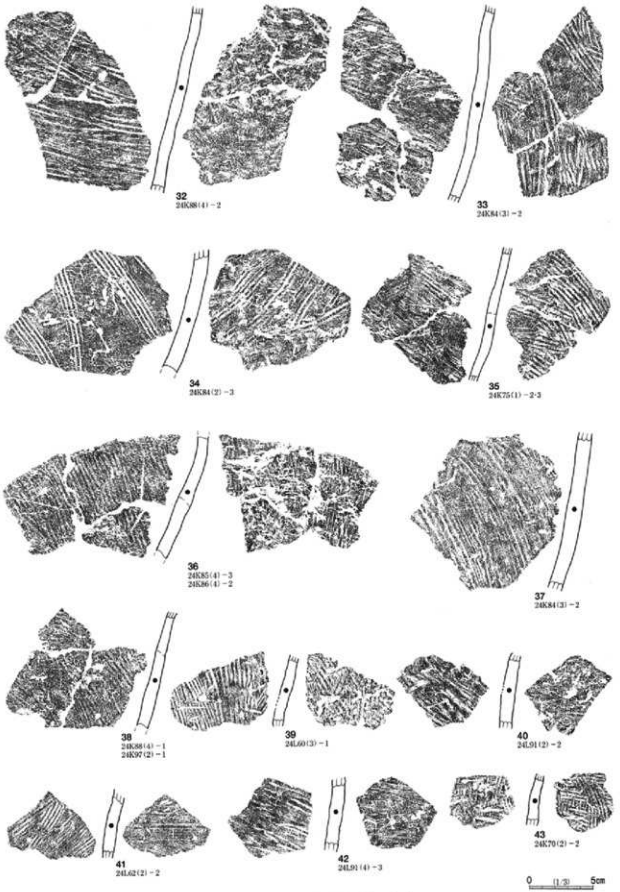
12は絡条体圧痕文により文様を構成するものである。にぶい黄褐色で，白色粒を少量含む。繊維は少ない。13・14は口縁部に，焼成前に穿孔したいわゆる円孔文を連続させる土器である。13は黒褐色～暗褐色，13は赤褐色で，13は白色粒を少量，14は砂粒をやや含む。絡条体圧痕文は子母口式と早期末葉の土器の両者に見られる文様である。円孔文も子母口式のイメージが強いが，印旛沼周辺地域では茅山下層式以降にも一定程度存在するものである[31]。

15～21は口唇部にのみ装飾をおこなう土器である。色調は15・16・20・21が灰黄褐色～にぶい黄褐色で，17が褐色，18が暗褐色，19が黒褐色である。胎土中には白色粒をやや含むものが多い。17・21は少量の赤褐色粒を含む。

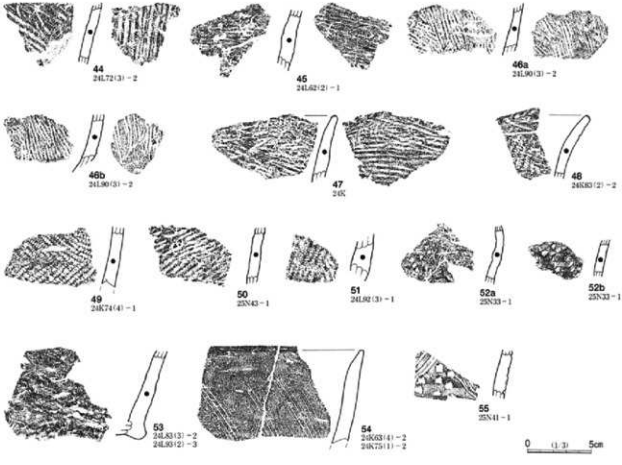
15は指頭状工具による押圧を施し，雑なキザミをが併用するものである。16は半裁竹管かと思われる工具で，斜方向からのまばらな刺突を施す。17・18はヘラ状工具によるキザミ，19・20は棒状工具によるキ



第97図　グリッド出土縄文土器（2）



第98図　グリッド出土縄文土器（3）



第99図　グリッド出土縄文土器（4）

ザミを持つものである。21は小波状口縁である。

22～31は条痕のみを有する口縁部破片である。色調は22・31が暗褐色，23・24・29が灰黄褐色，25がにぶい黄褐色，26～28・30が黒褐色である。胎土中には白色粒を少量含む。22は口唇部が若干外に張り出す。23は口縁部がやや強く屈曲し，口唇部断面は明瞭な角頭状である。外面の条痕は深く明瞭で，文様的な効果を狙ったものかもしれない。27・30は尖頭状の口唇部断面で，28も尖頭状に近い整った断面である。

32～46は条痕のみを有する胴部破片である。色調は32・33・38・42・45が黒褐色，34は黒褐色～灰黄褐色，35・36・39・41・43・46は褐色，37・40・44は暗褐色である。胎土中に白色粒を含むものが多く，35・36・44は少量の赤褐色粒を含む。23・43は内面に炭化物が付着する。外面の条痕が明瞭で内面の条痕がはっきりしないものとして，32・37・38・41があり，逆に内面の条痕だけはっきりしているものとして33がある。34は条痕が間隔を空けて施されており，文様的な効果を狙ったものかもしれない。

47は内外面に条痕を施し，口縁部付近に横方向の貝殻腹縁文を連続して施すものである。黒褐色を呈し，胎土中の繊維はやや多く，白色粒がやや目立つ。貝殻腹縁文は早期末葉・打越式に多用され，前期初頭にも見られることから，早期末葉から前期初頭にかけての土器と考えられる。

48～52は，胎土中に繊維を含んだ前期前半のいわゆる繊維土器である。48は黒浜式で，波状口縁の土器で，口唇部に浅いキザミを持ち，口縁端部には２条の細い沈線を引く。地文の縄文は０段多条のLR単節縄

文か。暗褐色～褐色で，ごく少量の白色粒を含む。49～52は縄文施文の土器で，色調は49が暗褐色～褐色，50・51は暗褐色，52は黒色である。胎土中には繊維の他に白色粒を含むが，49・52は砂粒も目立つ。49はRLとLRの２種の原体を用いた羽状縄文を施すものである。50はＬ無節か。51は摩滅して判然としない。52は節の粗いRL単節縄文であろう。

53は胎土中に繊維を含む上げ底状の底部で，早期後葉～前期に見られる形態である。褐色を呈し，胎土には繊維の他，少量の白色粒・赤褐色粒を含む。

54・55は前期後半の土器であろう。54は，器形や焼成から浮島式系の土器と判断した。内削ぎ状で尖り気味の口唇部断面を呈し，口唇部上面は平坦に調整されている。口縁部には無文の部分を設け，櫛歯状工具による斜線文を施している。黒褐色～暗褐色を呈し，胎土中に白色粒やや多，赤褐色粒をやや含む。55は前期後半の諸磯式系の土器か。黒褐色で，白色粒・砂粒を含む。

（２）中期の土器（第100・101図56～82，図版33・35）

56・57は中期初頭の五領ヶ台式と，これに伴う縄文施文の土器と判断した。56は刺突を施した隆線を垂下させる土器で，胎土中に多量の白色粒をを含む。57は口唇部が若干肥厚した口縁部破片で，胎土中に赤褐色粒がやや目立つ。色調は56が灰黄褐色，57が褐色である。

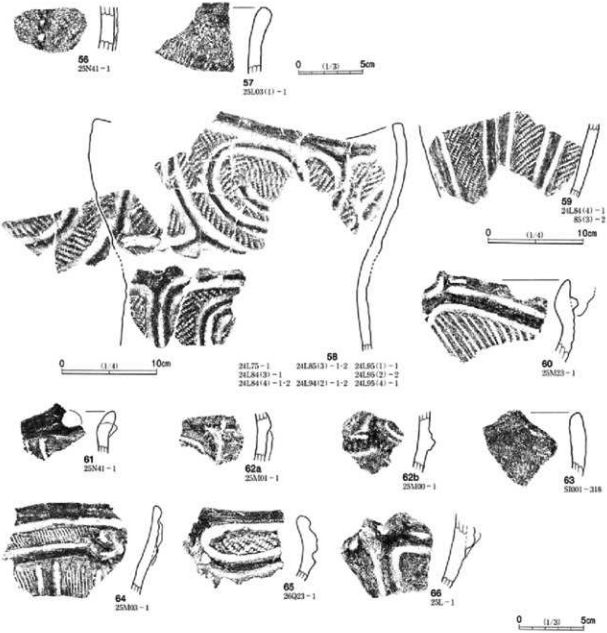
58・59は中期後葉・加曽利Ｅ式新しい部分[2]以降の土器で，図上で径を復元し得たものである。58は，加納実の言う加曽利ＥⅢ式古段階の意匠充填文系土器である[6]。おそらく波状口縁で，胴部半ばが緩くくびれる器形である。背の低い太い隆線によって，口頸部と胴部に渦巻文を描き，隆線の両脇のナゾリは，しっかりとした部分と，あまり丁寧でない部分が存在する。焼成はあまり良くなく，軟質である。色調は暗褐色で，胎土中に赤褐色粒がかなり目立つ。59は加曽利Ｅ式・新しい部分の胴部破片で，懸垂文間の地文の磨り消しが明瞭である。褐色で，胎土中に少量の砂粒と赤褐色粒が目立つ。

60～63は，64以降の土器よりも古いと考えられるものである。色調は60が暗褐色，61が灰黄色，62が褐色，63が黒褐色である。60は加曽利Ｅ式古い部分[2]の土器と思う。欠損部から見ると口唇部に円環状の把手を持つようである。口縁部には斜行する沈線を引く。胎土中にやや大粒の白色粒を多量に含み，雲母を少量含む。61は中期中葉末の勝坂式系の土器かと思われるが，小破片のためはっきりしない。砂粒を少量含む。62は中期前葉の阿玉台Ｉb式であろう。胎土中に白色粒をごく多量に含み，雲母を少量含む。63は阿玉台式前半期の土器に伴う粗製的な土器であろう。白色粒を少量含む。

64～82は概ね加曽利Ｅ式新しい部分以降の土器と考え得るものである。色調は概ね褐色～暗褐色を呈し，胎土中に少量の白色粒・砂粒を含むものが多い。赤褐色粒が目立つものが，65・66・70・72・75・78～81とやや多い。64・65はキャリパー形土器の口縁部破片である。64はやや小型の土器で，比較的薄手の作りである。色調も黒褐色に近く，他の土器とはやや異質である。口縁部の区画内と，胴部の懸垂文間に細かい沈線を充填しており，当地域ではあまり見ない文様である。65は口縁部楕円区画の土器で，区画間は小突起が存在したようである。

66・67・69・70は隆線による区画文を持つ体部の破片である。70はキャリパー形土器の胴部に大振りな渦巻文を描く土器か。68は縦位の沈線を持つ土器である。

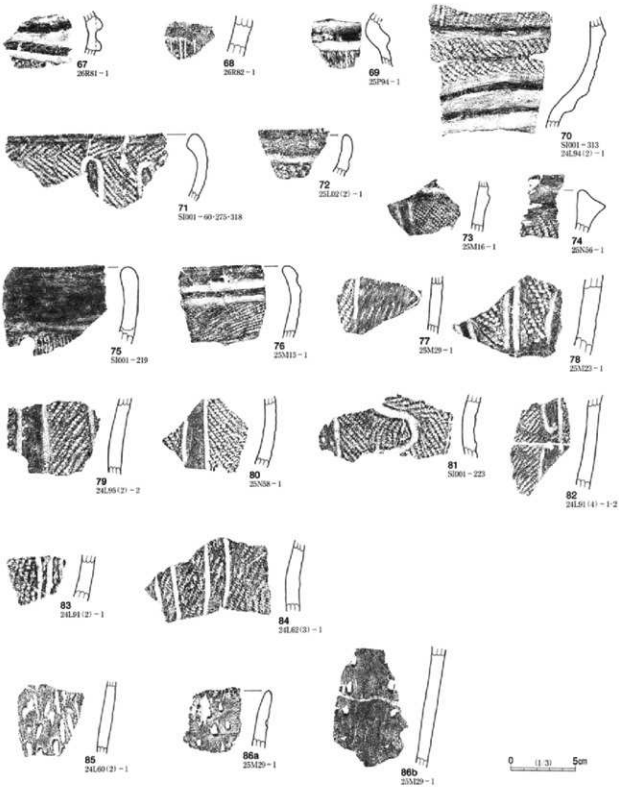
71・72・74・75・76は，キャリパー形土器以外の口縁部破片である。71は，LR単節縄文を口縁端部のみ横方向に施し，以下は縦位に施す。文様は欠損部が多く判然としないが，細長い楕円区画内を磨り消すものか。口縁端部の内外面にススが付着する。72は口縁部に下端を沈線で画した狭い無文帯を持ち，以下に



第100図　グリッド出土縄文土器（5）

縄文を施す。焼成があまり良くなく，摩滅する。74は，口縁端部に鍔状にやや突出した隆線を配するもので，以下に縄文を施す。75はやや広い口縁部無文帯下を浅い沈線で画し，以下に縦位の条線文を施す。大型の鉢かもしれない。補修孔が残存する。76は狭い口縁部無文帯下に，2条の沈線によって区画を施し，以下に節の細かい縄文を施す。焼成があまり良くないため判然としないが，LR単節縄文か。

73・77～82は胴部懸垂文のある破片である。77以外は，懸垂文間の縄文の磨り消しが明瞭である。77は磨り消しが丁寧でなく，地文が残っている。77・81には蛇行して垂下する沈線があり，82には対向する蕨手状の文様が見出せる。



第101図　グリッド出土縄文土器（6）

（3）後期の土器（第101～103図83～121，図版33・34）

83～110は後期初頭・称名寺式から後期前葉・堀之内１式土器に相当するものである。

83・84は縄文地に沈線が垂下するもので，堀之内１式であろう。両者とも色調は褐色で，胎土中に砂粒・赤褐色粒を多く含む。

85・86はいわゆる称名寺Ⅱ式に見られる刺突文を持つものである。85は色調が暗褐色で，外面に炭化物が付着する。胎土中に白色粒を少量含む。86は色調が暗赤褐色で，胎土中に赤褐色粒を多く含む。

87は口縁端部に指頭状工具による押捺を連続させ，この下部を細い沈線により画する。色調が87aは灰黄褐色，87bは褐色で，砂粒・白色粒・赤褐色粒を少量含む。88は口縁端部に１条の沈線を引き，以下に２本一組の沈線による，斜線及び蛇行沈線を描くものである。灰黄褐色～褐色を呈し，白色粒を少量含む。

89～97・104は，櫛歯状工具による文様を持つものである。色調は89が暗赤褐色，90・91・96が黒褐色，92・95・104が暗褐色，93・94はにぶい黄褐色，97が黒褐色～暗褐色である。全体に白色粒・砂粒を含むが，赤褐色粒が目立つものとして，89・91・93がある。97は口縁部破片で，口縁部無文帯を沈線で画し，以下に櫛歯状工具による縦位の蛇行線文を配する。

98は口縁付近の破片と考えられ，口縁部無文帯に縦位に配される隆線と，口縁部下端を画する隆線が残る。隆線はタガ状で，指頭状工具による連続押捺が施される。色調は暗褐色で，砂粒・赤褐色粒を含む。99は波状口縁の波頂部に，中央に竹管による刺突を施したボタン状の貼付を持つ。波頂部下に蛇行沈線を配するようである。暗褐色で，少量の白色粒と赤褐色粒をやや含む。100は小波状あるいは小突起状の口縁部に円孔を有する土器である。褐色で，砂粒・赤褐色粒を含む。

101～103は，地文縄文上に細い沈線で煩雑な文様を描くものである。堀之内１式の中でも新しい様相のものである。色調は101が黒褐色～褐色，102が黒褐色，103が褐色で，すべて白色粒を少量含み，101は赤褐色粒を少量含む。

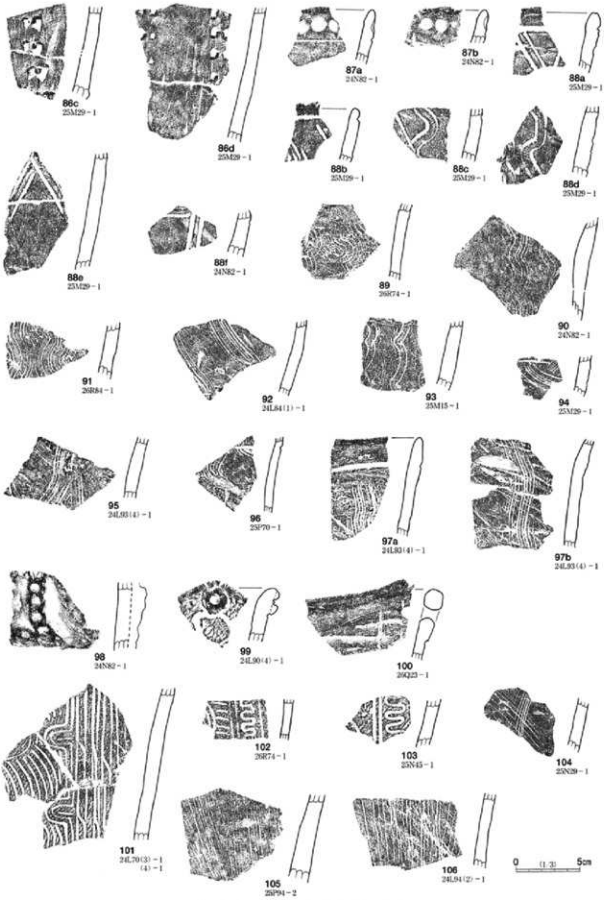
105・106は粗雑な条線を施すものである。中期の土器である可能性もあろう。両者とも暗褐色で，105は砂粒・白色粒，106は砂粒・赤褐色粒を含む。

107～110は縄文施文の土器で，焼成等から概ね後期前葉と判断した。色調は107・109が暗褐色，108・110は黒褐色である。107・109は赤褐色粒を多く含み，108・110は砂粒・白色を含む。

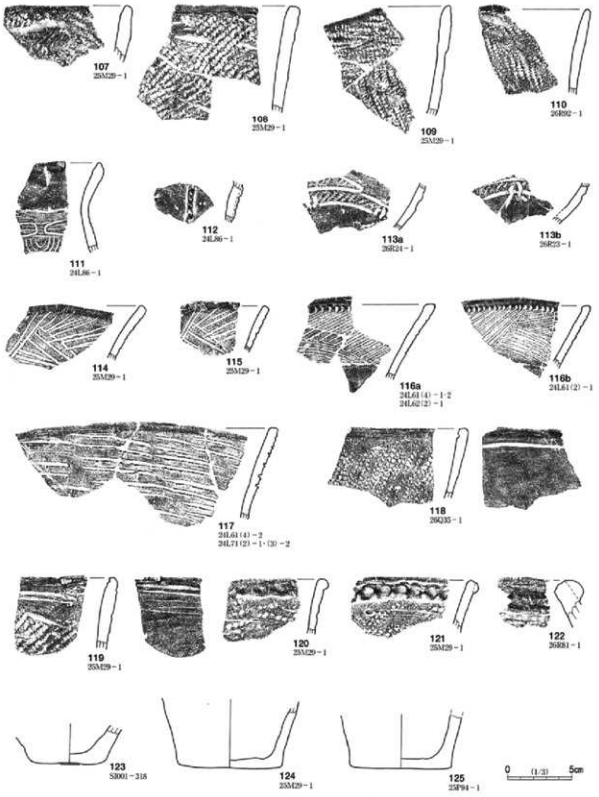
111は頸部がくびれる小型で薄手の土器である。口縁部は無文で，頸部以下に細く浅い沈線による文様を描く。地文は欠くようである。堀之内１式からの伝統的な器形であるが，やや後出の印象を受ける。堀之内２式期に至る土器と思う。黒褐色で，白色粒をやや含む。112は，堀之内２式の口縁部が朝顔形に開く鉢形土器の口縁部付近と思う。キザミを施した縦位の隆線が残る。黒褐色で，白色粒をやや含む。

113～117は後期中葉の加曽利Ｂ式精製土器である。113は加曽利Ｂ１式精製の鉢で，帯状縄文間に三角形の単位文を配する。区切り文は対弧文である。黒褐色～灰黄褐色で，白色粒を少量含む。114～117は加曽利Ｂ２式斜線文土器である。色調は114が灰黄褐色，115が黒褐色，116が黒褐色～灰黄褐色，117が褐色である。すべて少量の砂粒・白色粒を含むが，117は赤褐色粒をやや含む。114～116は菅谷通保が「パッチワーク状の施紋技法」[8]と呼んだ手法を採るものである。116は口唇部外側にキザミを施し，口縁部文様帯の下端を沈線により画する。図示したほかにも，24L62グリッドや24L71グリッドで，やや多くの同一個体片が出土した。117は同じ方向の単沈線を連続させるものである。

118～121は後期中葉の粗製土器である。118・119は縄文施紋の土器で，118は口縁部内面に細い１条の沈



第102図　グリッド出土縄文土器（7）



第103図　グリッド出土縄文土器（8）

線を持ち，119は口縁内面の口唇部にかかるような部分に2条の沈線を持つ。典型的な加曽利B式の粗製土器に比べると，内面の沈線の様相は古相を示しているように見え，この2点は堀之内2式まで遡る可能性がある。118は褐色で口縁端部にススが付着し，砂粒・白色粒・赤褐色粒を少量含む。119は暗褐色で，砂粒を含む。120・121は加曽利B式の紐線文系粗製深鉢である。両者とも口縁端部に紐線を持ち，斜線文を施すようである。120は褐色で，白色粒をやや多く含む。121はにぶい黄褐色で，砂粒・白色粒を含む。

122は摩滅してはっきりしないが，後期後葉以降の紐線文系粗製土器の可能性を持つ土器である。褐色で，白色粒を少量含む。

（4）底部（第103図123～125，図版34）

底部を便宜的にまとめた。形態や焼成等から見て，いずれも中期以降のものであろう。123は暗赤褐色を呈し，白色粒と，ごく少量の海綿体骨針を含む。124は黒褐色～暗褐色で，砂粒・白色粒・赤褐色粒を含む。125は褐色で，白色粒をやや多く含む。

2　土製品（第104図，第30表，図版35）

遺構に伴わずグリッド中で出土した縄文時代の土製品を一括する。土器片再利用の土器片錘，及びこれに類したものが9点出土した。個々の計測値については，第30表にまとめた。

1は，細別時期不明の無文の土器片を用いる。図の向かって右側面に，切り込みかと思われる部分があるが，判然としない。

2～3はおそらく中期～後期前葉の土器片を用いるものである。両者とも長軸上に，糸掛けようの切り込みがわずかに残る。土器片の周囲は，2は摩滅しておりはっきりしない。3は土器片周囲を打ち欠いた後，若干研磨している。

4は，中期後葉・加曽利E式の土器片を用いるもので，土器片を打ち欠いた後，若干研磨して成形する。土器片の長軸上に2か所，切り込みが存在する。

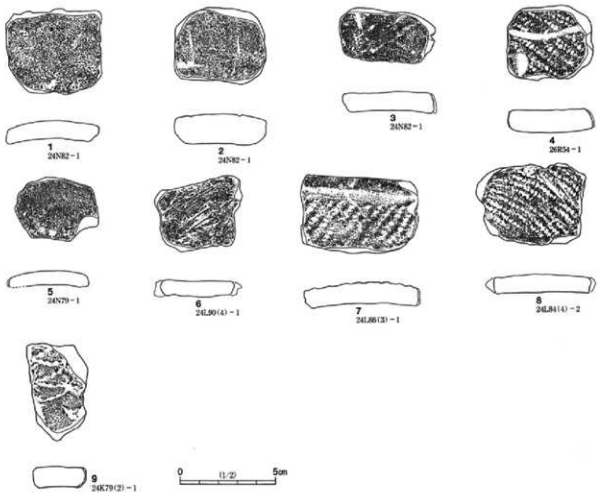
5はおそらく薄手の後期の土器片で，土器片の周囲を若干研磨する。わずかに切り込みのように見える部分があるが，土製円板とした方が良いかもしれない。

6は早期後葉・条痕文系土器の破片を用いるものである。胎土中に繊維を含む。土器片周囲の調整は顕著ではなく，不整形である。概ね長軸上に2か所，切り込みを持つ。

7は中期後葉・加曽利E式の口縁部破片を用いるものである。口縁部を除いた土器片周囲が，研磨されるようである。土器片長軸上に2か所切り込みを持つ。土器片外面には炭化物が付着する。

8はおそらく中期の土器片で，土器片周囲の調整は顕著でない。切り込みは，図の左側と上側に位置するものがはっきりしている。

9は肋脈のある貝殻による波状貝殻文を持つ，前期後半の浮島式系の土器片を用いるものである。図の右側面に糸掛け用の切り込みを持つ。土器片の周囲にはあまり丁寧な研磨を施さない。左側面については，全体の形状から見て，おそらく一度欠損した後，若干研磨しいる。再利用を意図したのかもしれない。



第104図　グリッド出土縄文時代土製品

第30表　縄文時代土製品計測表

図	番号	注記	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
第104図	1	24N82－1	土器片錘	4.5	4.9	0.9	30.69	
	2	24N82－1	土器片錘	4.1	4.9	1.6	38.40	
	3	24N82－1	土器片錘	2.9	5.0	1.1	18.66	
	4	26R54－1	土器片錘	4.0	4.6	1.3	28.85	
	5	25N79－1	土器片錘	3.4	4.4	0.7	12.24	
	6	24L90(4)－1	土器片錘	4.1	4.6	0.8	15.70	
	7	24L86(3)－1	土器片錘	4.2	6.2	1.1	42.01	
	8	24L84(4)－2	土器片錘	4.3	5.8	0.9	29.29	
	9	24K79(2)－1	土器片錘	5.2	3.1	1.1	21.32	

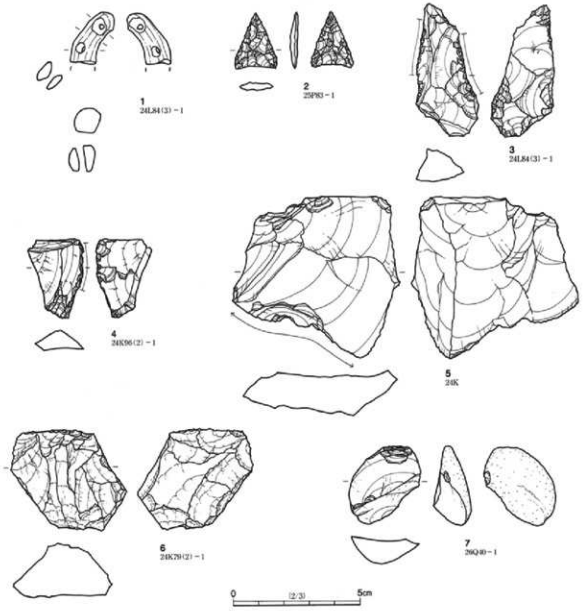
3　石器（第105図，第31表，図版36）

遺構に伴わず出土した，縄文時代の石器をここで扱う。18点を図化した。個々の石器の計測値や石材等は，第31表に示した。

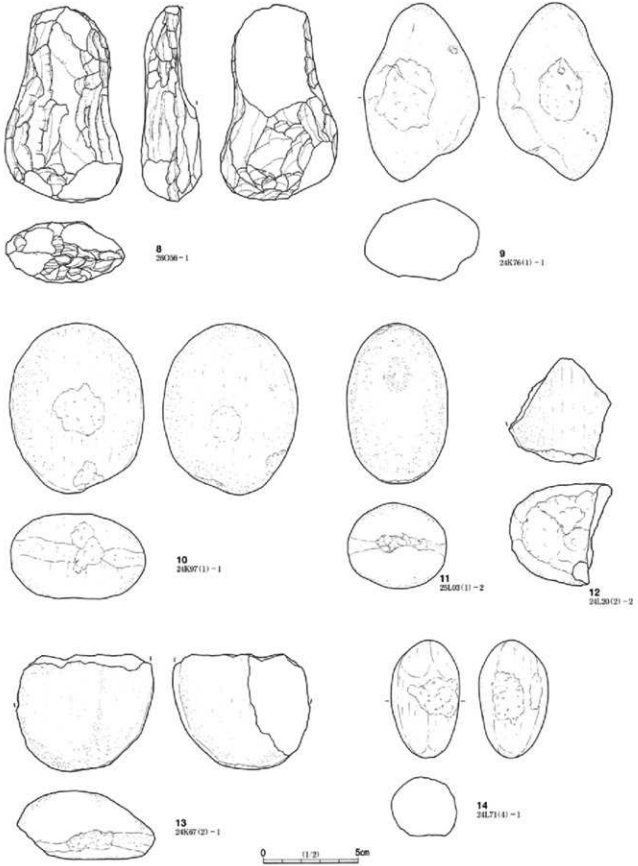
1は，玦状耳飾を再利用した垂飾と考えた。若干湾曲した棒状の素材に，2か所穿孔を施す。図上部の孔は，左右から漏斗状になるように穿たれている。下部の孔は，上部の孔に比べ，精緻に穿たれている。

2～7は剥片素材の石器である。2はチャート製の石鏃である。基部の抉りが弱い形態である。3・4はいずれも黒曜石製の削器である。3は両側縁に細かい調整が施され，基部付近にも細かい調整が加えられる。4は右側縁に細かい調整が施される。

5は安山岩製の使用痕のある剥片である。大型の不整形な剥片で，下部に使用に伴うと考え得る微細な剥離痕が存在する。



第105図　縄文時代石器（1）



第106図　縄文時代石器（2）

6・7は楔形石器である。6は安山岩製で，表・裏面とも多方向からの剥離面が観察できる。7はチャート製で，裏面は礫表となる。上部に複数の剥離痕が存在する。下部の約1/2は折損したものと思う。

8は粘板岩製の打製石斧である。全体に摩滅，遺存状況が悪い。本来は分銅形に近い形態であったと思うが，おそらく裏面から上部にかけて大きく欠損しているのであろう。

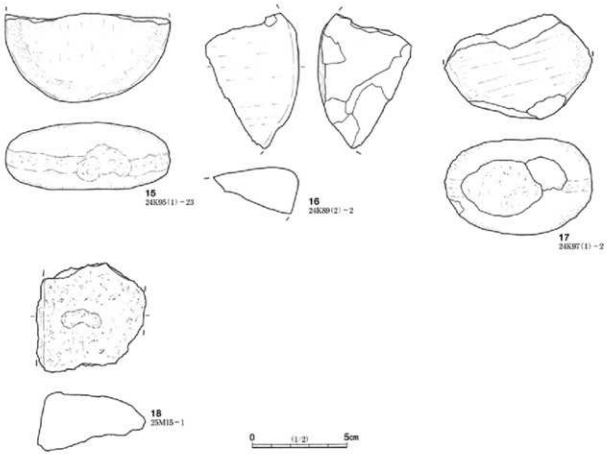
9～17は円礫製加工具で，磨り・敲きの痕跡が認められるものである。10～14は，二次焼成を受け若干赤化している。17は赤化の度合いが著しい。

9は礫の形状をそのまま残し，表・裏面の中央付近に敲打痕を持つ。10・11もほぼ完形のもので，10は全体に磨られ，表・裏面中央付近と下部に敲打痕を持つ。11は磨った痕跡はあまり顕著でなく，表面の中央上部と下部に敲打痕を持つ。

12は小破片であるが，表面はかなり顕著に磨られており，下部の破損面は，破損後に敲かれ，つぶれている。13は全体の1/2程が残存し，表・裏面とも若干磨った痕跡があり，側縁部に磨り・敲き痕がある。14は小型の楕円形の礫で，表・裏面中央付近に敲打痕を持つ。

15は全体の1/2程が残存し，表面は磨られてかなり滑らかになっており，側縁の磨り・敲き痕が顕著である。16は表面が磨られ，滑らかになっている。17は下部の破損面を敲いた痕跡が顕著である。全体に赤化し，部分的にスス・タール状の物質が付着する。

18は，小破片であるが，形状から石皿の破片の可能性があるものである。



第107図　縄文時代石器（3）

注1　山内清男　1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会 （1997再刊　示人社）

2　田中裕・大内千年ほか　2005 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4－八千代市間見穴遺跡(2)－』（財）千葉県文化財センター

SB009C住居跡出土土器中の茅山下層式的文様を持つ土器に，焼成前穿孔が施されたものが複数存在した。

3　山内清男　1940 「第Ⅰ類　加曽利E式」『日本先史土器図譜』（1997再刊　示人社）

4　加納　実　1994 「加曽利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析－配列・編年の前提作業として－」『貝塚博物館紀要』第21号　千葉市立加曽利貝塚博物館

5　菅谷通保　1996 「南関東東部後期中葉土器群の様相」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸問題』 縄文セミナーの会

第31表　縄文時代以降石器属性表

図	No	器種	注記	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺存度	備考
第95図	8	尖頭器	SK002－1	7.14	2.92	0.91	17.01	安山岩	完形	SK002覆土中
第105図	1	垂飾	24L84(3)－1	2.08	1.76	0.97	3.68	絶紋岩か	1/2	玦状耳飾を再利用か
	2	石鏃	25P83－1	2.27	1.69	0.32	0.96	チャート	完形	
	3	削器	24L84(3)－1	5.32	2.47	1.30	13.17	黒曜石	完形	
	4	削器	24K96(2)－1	3.15	2.20	0.85	4.49	黒曜石	完形	
	5	使用痕のある剥片	24K	6.45	6.58	1.80	65.01	ホルンフェルス	完形	
	6	楔形石器	24K79(2)－1	3.99	4.53	2.11	37.45	安山岩	完形	
	7	楔形石器	26Q40－1	3.05	2.86	1.55	11.52	チャート	1/2	
第106図	8	打製石斧	26O56－1	10.32	6.21	3.23	215.6	粘板岩	完形	
	9	円礫製加工具	24K76(1)－1	9.52	6.09	4.5	298.7	玉髄	完形	
	10	円礫製加工具	24K97(1)－1	9.09	7.12	4.5	425.37	安山岩	完形	若干赤化
	11	円礫製加工具	25L03(1)－2	8.55	5.34	4.49	273.51	砂岩	完形	若干赤化
	12	円礫製加工具	24L20(2)－2	5.66	5.44	5.32	164.10	安山岩	1/4	若干赤化
	13	円礫製加工具	24K67(2)－1	6.13	7.22	3.58	199.11	流紋岩	1/2	若干赤化
	14	円礫製加工具	24L71(4)－1	6.31	3.61	3.14	103.5	砂岩	完形	若干赤化
第107図	15	円礫製加工具	24K95(1)－23	4.68	8.73	3.59	224.62	安山岩	1/2	若干赤化
	16	円礫製加工具	24K89(2)－2	7.20	4.92	2.48	75.53	泥岩	1/4	若干赤化
	17	円礫製加工具	24K97(1)－2	5.60	7.78	5.13	257.51	流紋岩	1/3	赤化・スス・タール状物質付着
	18	石皿片	25M15－1	5.70	5.79	3.30	81.45	安山岩	1/6以下	
第108図	3	砥石	26Q55－1	8.09	6.69	2.31	155.2	砂岩	2/3	SI003覆土中か
第115図	16	砥石	26Q99－1	8.89	4.98	3.13	157.6	流紋岩	1/6以下	

第４章　古墳時代以降

第１節　遺構と出土遺物

古墳時代以降の遺構は，竪穴住居跡が３軒，土坑２基，溝状遺構１条が検出された。住居跡は古墳時代前期が１軒，奈良・平安時代が２軒である。古墳時代前期の住居跡は調査区の東端付近で検出し，奈良・平安時代の住居跡は，調査区の西端付近と中央付近で検出した。いずれの遺構も調査区の位置する台地北端部の縁辺に位置しており，調査区外南側の標高約26mの台地平坦面一帯に，さらに遺構が分布すると想定される。なお，遺構中から出土した石器の計測値については，第31表に示した。

１　竪穴住居跡（古墳時代）

SI003（第108図，第31表，図版27・36・37）

床面付近で出土した土器から，古墳時代前期の竪穴住居跡である。調査区中央やや東寄りの26Q45・46・55・56グリッドに位置する。台地縁辺部の斜面部にかかっており，確認面は東西方向で約60cm傾斜する。

住居跡の平面プランはいびつな隅丸方形である。傾斜のためか，東西の壁の上部はゆがんで外側に張り出す。また，特に西側壁の下端は，主軸に対して極端に曲がっているように見える。住居跡の主軸方向での最大長は約4.0m，主軸と直交方向の最大長は約4.2mである。主軸方向は約N－20°－Wである。

壁の立ち上がりは，北壁がややしっかりと立ち上がるものの，概ね緩やで，特に西壁はだらしがない。確認面からの深さは，最大で約30cmである。覆土は黒色土主体で，自然堆積のように見える。

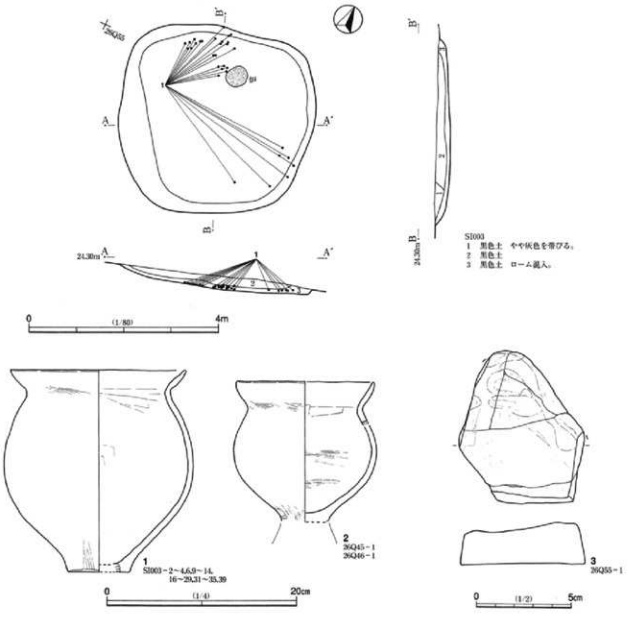
床面は斜面の傾斜に合わせるように，東西方向に傾斜し，床面の硬化は認められなかった。一般的に，床面がこれほど傾いていたら，住居としての機能は果たし得ないと考える。貼床状のものが存在したのか，あるいは住居跡西側の床面が若干掘り足りない可能性があろう。西壁下端の極端なゆがみは，後者の要因によるものではなかろうか。炉は，主軸方向の北側壁寄りで検出した。ごく浅い掘り込みで，床面が火を受けて赤化していたが，硬化はしておらず，調査時の所見では長期にわたる使用は想定できないとされた。柱穴や周溝は存在しなかった。

遺物は，１の古墳時代前期の土器が，床面および覆土下層から破片で出土した。また，本住居跡が検出されたグリッドと同じグリッド中で，２の古墳時代前期の土器と，３の石器が検出された。他のグリッドでは，古墳時代前期の遺物が全く出土しなかったことも考慮して，これらも本来は本住居跡の覆土中に遺存したものと考え，ここで図示した。

１は甕で，全体の3/4が遺存している。口径18.6cm，高さ21.4cm，底径6.6cmで，最大径は胴部にあり20.0cmである。頸部のくびれ部と底部付近の刷毛目が痕跡的に確認できる。口縁部は横方向にナデが施される。外面下部を中心とした範囲と，内面の底部付近にススが付着している。

２は台付甕で，脚部を欠損する。推定口径14.4cm，残存した高さ15.0cmで，最大径は胴部にあり15.0cmである。外面の頸部と底部付近，及び内面に刷毛目が残る。

３は砂岩製の砥石である。表面は，中央付近が磨り減って，若干窪んでいる。表面上部には短い溝状の磨った痕跡が存在する。



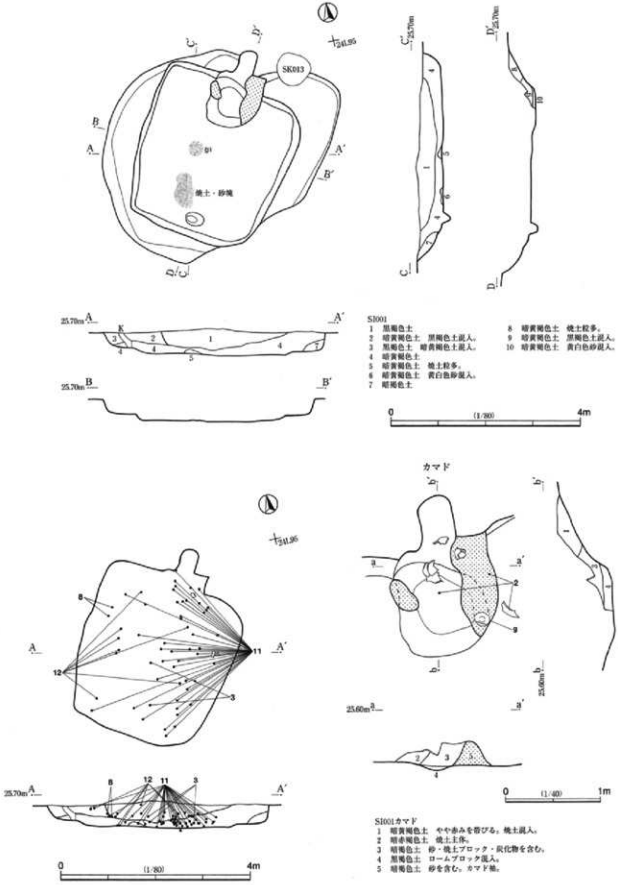
第108図　SI003

2　竪穴住居跡（奈良・平安時代）

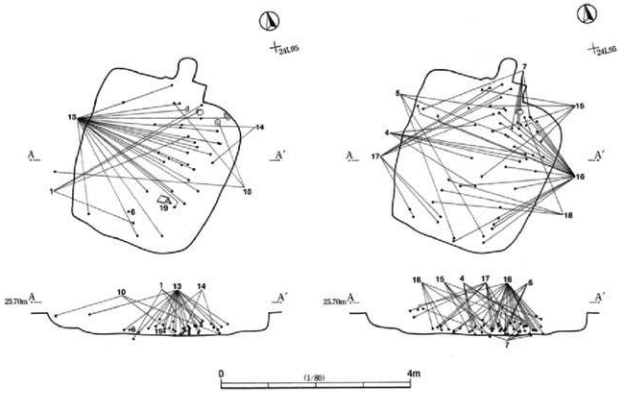
SI001（第109～112図，図版27・37・38）

出土した遺物から９世紀後半以降の竪穴住居跡であろう。

調査区西側，台地北端の24L93・94グリッドに位置する。ほぼ正方形をした住居跡で，北側にカマドがある。主軸方位はＮ－33°－Ｅであった。炉穴SK013が北東壁面のカマド付近で重複していた。住居跡の壁が不明瞭で，住居跡外側周囲に段差となった掘り込みがあった。この段差が，本来の住居に付随するものなのか，発掘時にソフトロームを掘り過ぎてできたものなのか，明瞭に区別することが不可能である。外側の掘り込み部分の大きさは，１辺約4.5mの不整正方形をしている。壁面立ち上がりがわずかに残る内側の住居は，長さ3.5m，幅3.2mの台形に近い方形を呈している。壁の周溝は検出されなかった。



第109図 SI001（1）



第110図　SI001（2）

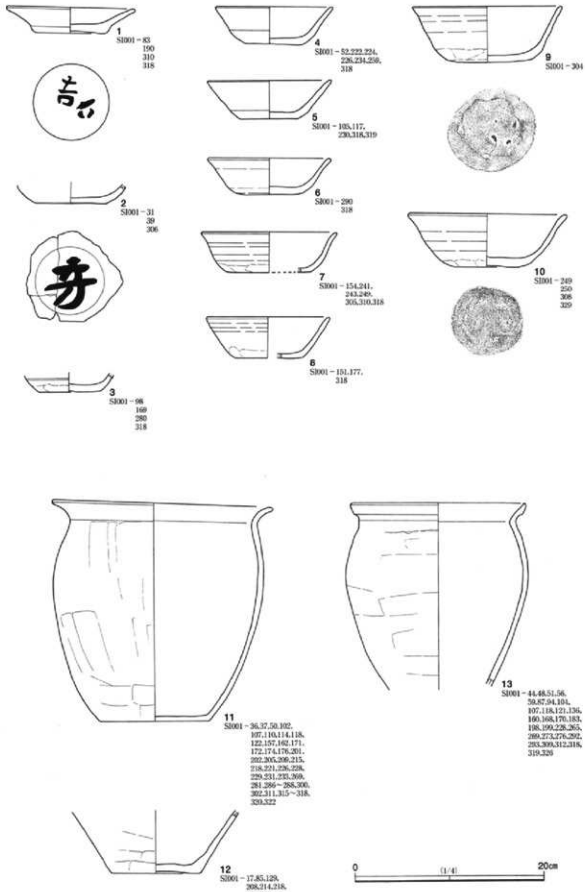
南側壁中央のやや内側に長径39cm，短径26cmの小さい柱穴が検出された。この柱穴は住居南壁中央に，出入り用に設けられた足場板，梯子などを埋める穴である。

床面上で踏み固められた範囲は，さほど明瞭に判明しなかった。住居中央で，床面が焼けて赤くなり，きわめて硬化した範囲が検出された。検出された範囲は径約30cmの円形で，火を使用した炉である。この住居には北壁中央に通常のカマドがある。暖をとったり，調理などを行なう一般的な火の使用には，このカマドを利用したと考えられる。住居中央の赤化した部分は，カマドでの火の使用とは異なる目的で，火を活用した空間と考えられる。

住居内中央南側，赤化した炉と出入り口用の柱穴との間で，長さ約80cm，幅約40cmの範囲に粘土塊，砂塊が床に貼り付いていた。床に粘土塊，砂塊が貼り付いていたので，住居内で暮らす人が何らかの目的で粘土，砂を床上においたと考えられる。住居内中央の炉と床に貼り付いた粘土塊，砂塊は，空間的に隣接しているので関連性があるのかもしれない。しかし，住居中央で火を使用した目的，また粘土，砂を床に置いた理由は判然としない。

住居内覆土中から土器が多量に出土した。ほとんどの土器が土師器で，須恵器が少量混じっていた。

カマドは北壁中央に位置していた。残存状態はさほど良好でなかった。砂，粘土を少量まじえたカマド構築材が東側袖部に残っていた。西側袖部は，木の根による攪乱などによって遺存状態が悪かった。火床面は不明瞭であった。赤色焼土塊が見受けられたが，まばらに散って混入していた。甕の掛け口，煙道部分から甕の口縁が出土した。



第111図　SI001（3）

（出土遺物）

図化できた遺物は全部で19点あった。ほとんどの遺物は住居跡の覆土中から出土している。図示できた遺物で床面から検出されたものはない。したがって，住居廃絶後すぐさま埋まった遺物で図化できたものはなく，住居跡の年代を確定できる資料は乏しかった。

1はほぼ完形の土師器杯で，口径13.6cm，高さ2.7cm，底径7.4cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面はヘラ調整している。底部外面に「吉六」と記された墨書があった。杯の器形から，この土器は10世紀前半の遺物の可能性もある。2は土師器杯底部で，約1/3が遺存していた。底径7.4cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，雑なヘラ調整が施されている。底部外面に「大万」と記された墨書があった。3は土師器杯底部で，約1/3が遺存していた。底径7.4cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底径6.4cmであった。底部外面には，回転ヘラ調整が施されている。

4はほぼ完形の土師器杯で，口径12.4cm，高さ4.0cm，底径5.8cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面は，回転糸切り後に周囲をヘラ調整している。5は土師器杯で，約2/3が遺存していた。口径13.1cm，高さ4.0cm，底径5.8cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，雑なヘラ調整が施されている。6は土師器杯で，約1/2が遺存していた。口径13.0cm，高さ3.9cm，底径7.0cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。7は土師器杯で，約1/5が遺存していた。口径14.3cm，高さ4.2cm，底径8.8cmであった。色調は明褐色で，一部暗褐色であった。焼成は良好であった。8は土師器杯で，約1/2が遺存していた。口径13.0cm，高さ4.4cm，底径7.0cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。

9は土師器杯で，約3/4が遺存していた。口径15.8cm，高さ5.9cm，底径8.9cmであった。色調は外面が褐色で，内面が明褐色であった。焼成は良好であった。底部外面は，回転糸切り離し後に，周囲をヘラ調整している。10は土師器杯で，約1/4が遺存していた。口径16.8cm，高さ5.6cm，底径6.6cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面は，回転糸切り離し後に，底面周囲をヘラ調整している。9と10の器形および底部の調整痕から，これらの土器は9世紀後半の遺物と考えられる。

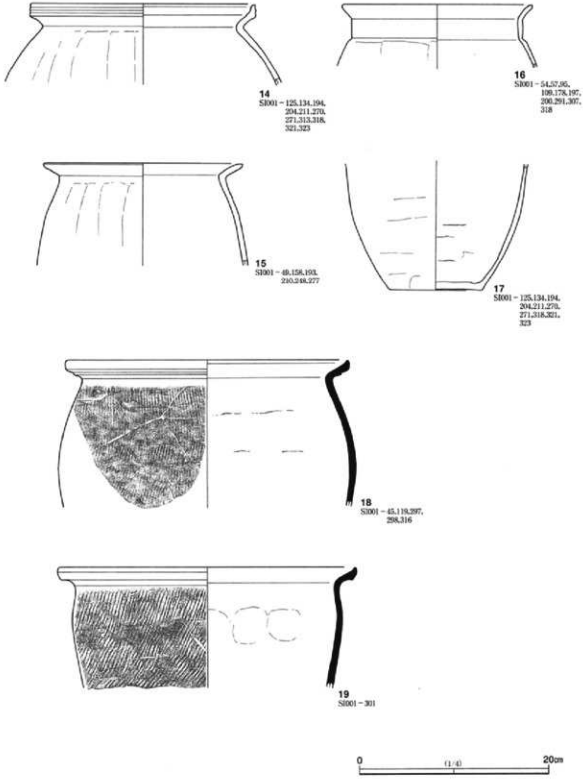
11は土師器甕で，約5/6が遺存していた。口径23.2cm，高さ23.0cm，底径11.2cmであった。色調は明褐色で，一部暗褐色であった。焼成は良好であった。12は土師器甕底部で，約1/8が遺存していた。底径9.3cmであった。色調は明褐色であった。焼成は良好であった。13は土師器甕で，約5/6が遺存していた。口径18.5cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。14は土師器甕口縁で，約1/8が遺存していた。口径23.5cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。15は土師器甕口縁で，約1/6が遺存していた。口径21.0cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。16は土師器甕口縁で，約1/8が遺存していた。口径19.8cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。17は土師器甕底部で，約1/3が遺存していた。口径9.5cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。

18は須恵器甕口縁で，約1/8が遺存していた。口径29.5cmであった。色調は明褐色で，口縁部は暗赤褐色であった。焼成は良好であった。胴部に叩き目痕がある。19は須恵器甕口縁で，約1/6が遺存していた。口径31.1cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。胴部に叩き目痕がある。

SI002（第113図，図版27）

出土した遺物から奈良・平安時代の竪穴住居跡の可能性が高い。

調査区中央の台地北端の25P82グリッドに位置する。標高は約26.3mであった。遺構の北側は調査区外と



第112図　SI001（4）

なり，南側のみ調査で検出された。また遺構の西側がSD001溝によって破壊されていたため，きわめて限られた部分しか調査で確認できなかった。住居の壁の一端，長さ約3.0mを確認した。深さ約30cmであった。柱穴，周溝，カマドなどは検出されなかった。また床面には踏み固められて硬化した範囲がなかった。

この遺構とSD001溝の覆土から土師器と須恵器の小片が出土しているので，歴史時代の住居跡と判断した。

3　土坑

SK010（第114図，図版26）

調査区西側に分布する炉穴群の近辺，24K89・24L80グリッドに位置する。台地縁辺にあり，標高は約25mであった。隅丸長方形をしていて，長さ約2m，幅約1.8m，深さ約30cmであった。出土遺物はなかった。縄文時代の炉穴群に隣接して位置しているので，縄文時代の遺構である可能性も考えられる。

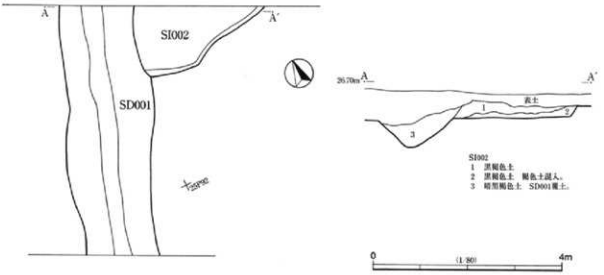
SK014（第114図，図版26）

調査区中央の台地北端，25N34・44グリッドに位置している。形状は，径約1.4mの不整な円形をしている。深さは約50cmであった。

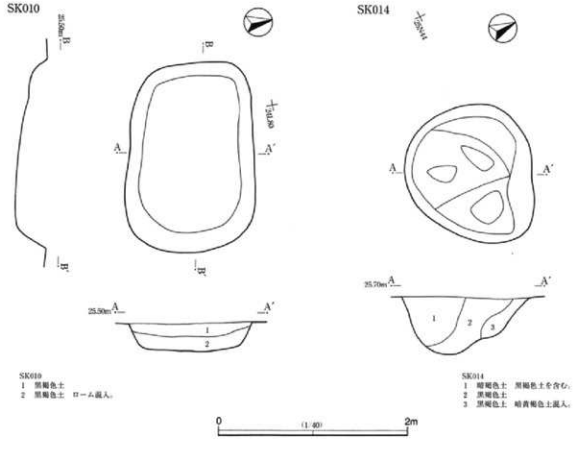
4　溝状遺構

SD001（第113図，図版27）

調査区中央の台地北端，25P81・82・91グリッドに位置し，南北に伸びている。幅約1.8m，深さ約0.6mであった。住居跡SI002の西側を破壊している。出土遺物はなかった。



第113図　SI002・SD001



第114図　SK010・SK014

第２節　グリッド出土遺物

1　土師器（第115図１～８，図版38，39）

遺構にともなわない土師器が多数出土した。図化できたのは全部で８点あり，おもに調査区西側24Ｋグリッドから出土した。

１は土師器杯で，1/3が遺存していた。口径12.1cm，高さ4.7cm，底径6.2cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，ヘラ調整が施されていた。内面口縁の一部に油煙が付着していた。　２は土師器杯で，3/4が遺存していた。口径12.2cm，高さ4.0cm，底径7.5cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，ヘラ調整が施されていた。

３は土師器杯で，1/2が遺存していた。口径12.0cm，高さ4.0cm，底径6.5cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，回転糸切り離し後周囲にヘラ調整が施されていた。内外面口縁の一部に油煙が付着していた。

４は土師器杯で，1/3が遺存していた。口径12.4cm，高さ4.5cm，底径6.0cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。

５は土師器杯で，1/3が遺存していた。口径12.0cm，高さ4.0cm，底径6.4cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，ヘラ調整が施されていた。

6は土師器杯の底部で，1/3が遺存していた。底径6.7cmであった。色調は褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，回転糸切り離し痕があった。

7は土師器杯の底部で，1/4が遺存していた。底径6.3cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，回転糸切り離し後，回転ヘラ調整が施されていた。

8は土師器小壺か杯の底部で，1/8が遺存していた。底径5.6cmであった。色調は明褐色で，焼成は良好であった。底部外面には，回転ヘラ調整痕があった。

2　須恵器（第115図9・10，図版39）

9は杯で，全体の約1/3が残存する。24L62グリッド出土で，灰色～灰黄色を呈し，胎土中に砂粒を少量含む。推定口径14.0cm，底径9.6cm，高さ3.2cmである。外面はロクロナデの痕跡が顕著で，底面及び底部外面の調整は手持ちヘラケズリである。

10はおそらく長頸壺の底部破片で，底面の約1/4が残存する。24L95グリッド出土で，暗灰黄色を呈し，胎土中に白色粒を微量含む。推定底径12.6cm，残存高3.5cmである。高台貼付前の底面の調整は回転ヘラケズリか。高台の接合部分は，接着が弱く，器面と隙間が空く。内面の底部には自然釉が掛かる。底面の高台で囲まれた部分は，磨った痕跡が顕著で，転用硯として使用されたものであろう。

3　中世陶器（第115図11～15，図版39）

常滑産の中世陶器が少数出土した。5点を図化したが，細片を除いて出土した中世陶器は全てと考える。いずれも26Rグリッドで出土しており，地点的にはまとまっている。松崎Ⅴ遺跡の今回の調査区内では，中世の遺構は検出されなかったが，小谷を挟んだ対岸の松崎Ⅲ遺跡では，中世の居館跡が検出されている。少数ではあるが，これらグリッド出土遺物の存在は，松崎Ⅴ遺跡においても調査区外に何らかの中世の遺構が存在している可能性を示すものであろう。

11は常滑産片口鉢の口縁部付近の破片である。26Rグリッド中で出土した。黄灰色を呈し，胎土中に長石片かと思われる大粒の白色粒を多く含む。推定口径32.6cm，残存高5.9cmである。片口鉢Ⅰ類で，5型式に相当する。13世紀前半の所産であろう。

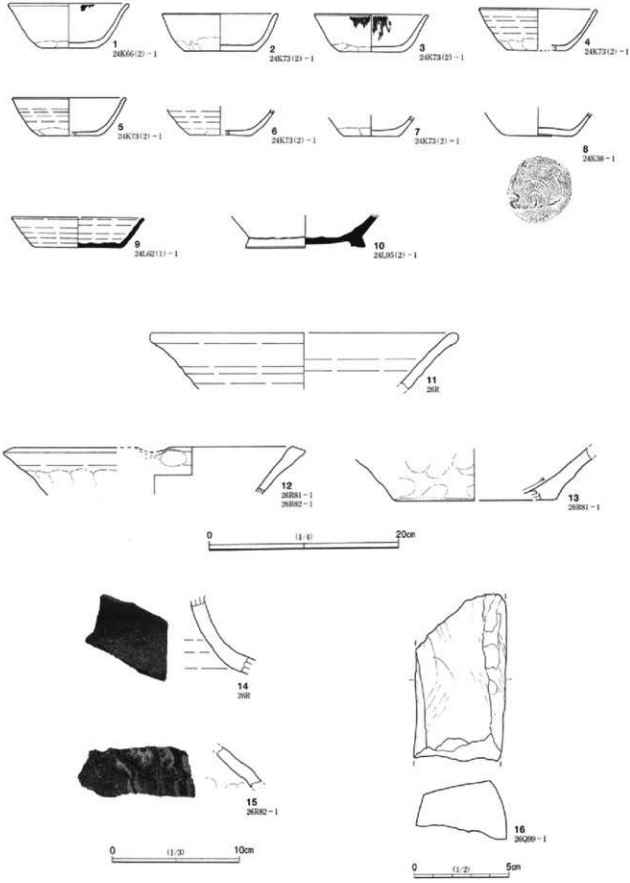
12はやはり常滑産片口鉢の口縁部付近の破片で，片口の一部が残存する。26R81グリッドと26R82グリッドで出土した破片が接合した。暗黄灰色を呈し，胎土中に長石片かと思われる大粒の白色粒を多く含む。推定口径32.0cm，残存高5.0cmである。片口鉢Ⅱ類で，8～9型式に相当しよう。概ね14世紀後半～15世紀前半という年代観となろう。

13は常滑産片口鉢の底部付近の破片である。26R81グリッド出土で，赤灰色～にぶい橙色を呈し，胎土中に長石片かと思われる大粒の白色粒と砂粒を含む。推定底径17.0cm，残存高5.5cmである。片口鉢Ⅱ類で，8～9型式の可能性が高い。

14は常滑産広口壺あるいは甕の頸部付近の破片である。26Rグリッド中出土で，灰赤褐色～にぶい黄色を呈する。外面には自然釉が掛かる。15は常滑産の甕の破片である。外面全面に自然釉が掛かる。

4　石器（第115図16，第31表，図版36）

16は流紋岩製の砥石である。やや大型の柱状の砥石である。表面には部分的に線状痕が認められる。



第115図　グリッド出土遺物

5　その他（図版39）

その他のものとして，図版のみで示した遺物がある。

図版39の中央右側に，26R82グリッドで出土した鉄滓を示した。最大長4.71cm，最大幅3.12cm，厚さ1.41cm，重量22.96gである。

図版39の中央には，26R82グリッド出土の近世の土人形を示した。頭部の破片とともに胴部片も少数ある。総計の重量10.07gである。

第5章　まとめ

松崎Ⅴ遺跡の今回の調査は，遺跡範囲と目される台地の，南側縁辺部の細長い範囲が調査対象となった。よって遺跡に関する情報は断片的にならざるを得ないが，松崎Ⅴ遺跡に関する発掘調査がおこなわれたのは今回が初めてであり，貴重な考古学的情報をもたらすこととなった。松崎Ⅴ遺跡で検出した遺構と遺物について，簡単にまとめておきたい。

旧石器時代

1か所の石器集中地点を検出した。検出した位置が台地斜面部にかかっており，大まかには千葉県内における基本層序に則った堆積状況であるものの，基本層序通りの土層細分が不可能であった。よって，検出層位が明瞭でない部分はあるが，石器群の様相からみると，立川ローム層最下層である第Ⅹ層上部～第2暗色帯の下部に相当する第Ⅸ層中に生活面を持つ石器集中であると判断された。

石器群は，ナイフ形石器を初めとした豊富な器種を揃えるが，石器製作という観点からすると稚拙さが感じられるもので，ごく簡単な加工を施したものばかりであった。また，使用の痕跡が認められる剥片が多数あることが特徴的である。使用痕跡を持たない剥片については，砕片などの小剥片が少なく，石器製作技術と関係するものと考えられる。

石材の面では，チャートが石器群の大部分を占め，少数の「嶺岡頁岩」が含まれ，さらに1点のみ砂岩製の打製石斧が含まれている。単純な石材構成と言えよう。

縄文時代

遺構として炉穴12基・陥穴状遺構1基を検出した。炉穴はあまり遺存状態の良くない，燃焼部のみが残存したものが多い。台地の先端付近で集中して検出した。早期後葉～末葉の土器も台地先端部を中心に多数出土しており，この地点を中心に早期後葉の集落が存在したと判断できよう。小支谷の対岸にあたる松崎Ⅲ遺跡では，早期後葉の住居と炉穴がセットとなる集落が検出されており[1]，関連が窺える。

陥穴状遺構はいわゆる溝状陥穴で，単独で検出した。覆土中からは尖頭器が出土したが，覆土中に混入したものと判断された。

遺構に伴わず出土したいわゆるグリッド出土の縄文土器は，前述の早期後葉～末葉の土器の他，前期以降後期までの土器を検出した。早期後葉～末葉・中期後葉・後期前葉の土器がやや多く出土した。

古墳時代以降

遺構としては，古墳時代前期の竪穴住居跡1軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒，土坑2基，溝状遺構1条を検出した。

古墳時代前期の住居跡は，台地の基部に近い位置で検出した。今回の調査区内では単独で検出したものの，台地の基部付近を中心に古墳時代前期の集落が広がる可能性は高いであろう。松崎Ⅴ遺跡の存在する台地が，一度くびれて馬の背状になる位置に松崎Ⅳ遺跡が位置するが，この住居跡が検出された位置から谷の最奥部を挟んで対峙するあたりに松崎Ⅳ遺跡の弥生時代後期の集落が展開する（本書に所収）。松崎Ⅳ遺跡の集落は概ね弥生時代後期の時間幅で収まってしまうことから，ここから松崎Ⅴ遺跡に集落が移動し

た可能性もあろう。

奈良・平安時代の住居跡は台地先端部付近と，台地中央の北側縁辺で検出した。調査区内の広い範囲で住居跡を確認したと言えよう。細長い調査区に制約されて検出軒数が少ないだけで，台地の広い範囲にわたって該期の集落が存在する可能性が高い。台地の南側から地続きの部分は，松崎Ⅵ遺跡として一部調査がなされており，奈良・平安時代の住居跡が11軒検出されており，関連が窺われる[2]。

また，グリッド出土遺物として，台地先端部付近で器形が復元しうる土師器杯が多数検出された。その多くは口縁部付近を中心に油煙が付着していた。出土位置がまとまっていることから，掘り込みを伴わない何らかの遺構が存在した可能性が高かろう。

中世では，台地中央部付近のグリッドで，常滑産陶器がややまとまって検出された。遺構は検出されなかったものの，未調査区に中世の遺構が存在する可能性は高いであろう。小谷の対岸の松崎Ⅲ遺跡は中世の居館跡と見られ[1]，また，地続きの松崎Ⅵ遺跡では地下式坑や井戸が検出されている[2]。中世における，松崎Ⅴ遺跡周辺での人々の活発な活動が窺われる。

注1　岡田誠造ほか　2005『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書４－松崎Ⅲ遺跡－』（財）千葉県文化財センター

2　小笠原永隆ほか　2004『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書３－松崎Ⅵ遺跡・松崎Ⅶ遺跡－』（財）千葉県文化財センター

第　4　部

松崎遺跡群・調査の総括

松崎遺跡群・調査の総括

松崎遺跡群の整理作業もこの「松崎Ⅳ・Ⅴ遺跡」の刊行をもって，全て終了する。この間，整理作業は平成13年度から平成17年度まで５年間に及び，報告書の冊数も５冊目を数えることができた。この整理作業をとおして，松崎地区における旧石器時代から近世に至る地域史の一端を明らかにすることができた。その内容は多岐に渡り，簡単にまとめることは困難であるが，各時代ごとにトピックをまとめておきたい。なお，各遺跡で検出された遺構等については，第32表にまとめ一覧できるようにした。

旧石器時代では，立川ローム層最下部付近のⅨ層下部～Ⅹ層上部に生活面を持つと考え得る文化層の石器群を，多くの遺跡で検出したことが特筆されよう。Ⅸ層下部からⅩ層にかけて生活面がある文化層が検出されたのは松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡である。出土地点を見ると，台地内の平坦部よりは台地縁辺部に分布城が偏ることが看取され，支谷の最奥部に近く，支谷が入り込んで湾入した谷頭に面した立地と，舌状に飛び出した台地の先端部近くからの出土が多い。このことは，いずれにしても現在の地形では台地上からの比高差が15mほどの，低地を意識した場所に石器が残されていると言えよう。

Ⅶ層段階になると台地縁辺部から50m以上も内側に入った台地平坦部に石器群が残されるようになる。その痕跡は松崎ⅡとⅢ遺跡に見られる。Ⅳ～Ⅵ層で検出された石器群の出土地点は，再び台地先端部に集中する傾向がみられ，この状況はⅢ層段階まで継続する。

縄文時代の活動痕跡は，早期・撚糸文期以降，後期に至るまで認められるが，遺構が多く検出されたのは早期後葉・条痕文期である。条痕文期には松崎Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ遺跡で炉穴や竪穴住居が構築される。立地的には，３遺跡とも同じ台地上に所在するが，松崎Ⅰ遺跡はⅢ・Ⅴ遺跡とは異なる支谷に面して立地する。松崎Ⅰ遺跡は南西から入り込んで東西に分岐する，幅100mほどの支谷を望む台地縁辺部に帯状に炉穴16基等を展開している。松崎Ⅲ・Ⅴ遺跡は松崎Ⅰ遺跡の面する支谷とは１つ印旛沼に近い，南から侵入する支谷に面し，同じ支谷を取り囲むように展開する。松崎Ⅲ遺跡では，南の印旛沼側に開口した支谷が望める台地上に条痕文期の竪穴住居跡５軒，炉穴56基等が集中して展開している。条痕文期の集落の好資料となった。縄文時代中期（加曽利Ｅ式期）には松崎Ⅲで１軒，Ⅵ遺跡で１軒，住居が営まれる。後期には遺構は確認できないが土器は残されている。堀之内式や加曽利Ｂ式の時期である。晩期の遺物は見あたらない。

弥生時代に至ると，弥生時代後期～古墳時代前期に松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ遺跡で住居が営まれるようになる。松崎Ⅰ遺跡では弥生時代後期に37軒からなる集落が短期間に営まれている。最初は台地縁辺部に営まれた住居が次第に台地中央へ拡大してゆく。その後，松崎Ⅱ遺跡へ生活の中心が移動し，松崎Ⅰ遺跡には７基で構成される方墳群が構築される。松崎Ⅱ遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居が48軒，掘立柱建物跡２棟などが構築された。また，鍛冶窓，スサいりの焼成粘土塊，椀形窓，小鉄塊等が出土した土坑２基も検出され，この時期に遺跡の西南端では村鍛冶を行ったと考えられる。松崎Ⅳ遺跡では，弥生時代後期の竪穴住居跡が６基検出され，石器製作の痕跡などが検出された。松崎Ⅴ遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡が１軒検出された。

奈良・平安時代の８世紀末から９世紀の前半頃になると，松崎Ⅰ遺跡で１軒，松崎Ⅲ遺跡で５軒，松崎Ⅵ遺跡で11軒と言うように住居跡は散漫な分布をするようになる。松崎Ⅱ遺跡には方形周溝状遺構（終末

期古墳）が１基が残され，袋状鉄斧・馬の頭骨を埋納した土坑が１基構築された。松崎Ⅲ遺跡では，９世紀前葉の蔵骨器を埋納した土坑が１基検出されている。これらの遺構を松崎遺跡群中での在り方でみると，遺跡が営まれる立地が支谷の奥部から印旛沼に近い南へと移動し，樹枝状に開析された支谷の最奥部から印旛沼へ流入する河川を直接的に見渡せる台地上に集落が展開するようにも見ることができよう。印旛沼へ流入する河川を直接見渡せる台地上に集落が展開するという傾向は，同じ神崎川流域に展開する船尾白幡遺跡や鳴神山遺跡でも同様である。また，松崎Ⅵ遺跡は住居跡の集中する位置が事業地のはずれということもあり，南側の事業範囲外の台地上に大規模な集落が展開することも考えられる。さらに時期が下った９世紀後半の住居跡が，松崎Ⅴ遺跡で１軒検出されている。松崎Ⅴ遺跡は台地北端部のみが調査範囲で，残された未調査区に同時期の集落が存在する可能性が高い。

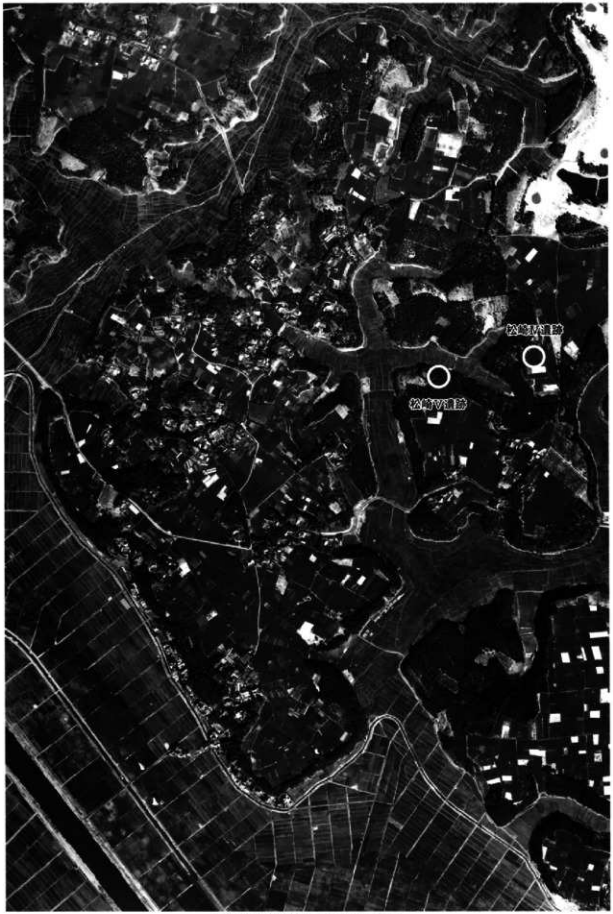
中世になると，松崎Ⅲ遺跡に居館が築かれる。居館は出土した陶磁器の製作年代から13世紀初頭から15世紀末までのおよそ300年間にわたって営まれたと考えられる。居館跡は３条の土塁と２条の溝で区画されており，中ほどをほぼ南北に走る土塁・溝を境にして東西の２区に分かれる。このうち，遺構が集中する東側の区画では，掘立柱建物跡，柵列，竪穴状遺構を含む土坑，地下式坑，墓坑等が検出された。また，居館跡の東南には小さな谷を挟んで墓城も検出された。松崎Ⅱ遺跡でも溝による方形の区画を検出しているが土塁を伴わず，区画内には掘立柱建物跡がまばらに見られるだけであり，松崎Ⅲ遺跡で検出された居館跡とは性格を異にするようである。

近世以降では，溝状遺構が検出されている他に，松崎Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡で野馬掘や野馬土手が構築されている。

第32表　松崎遺跡群で検出した遺構

遺跡名	時　代	文化層・遺構	数量	トピック
松崎Ⅰ遺跡	旧石器時代	1　Ⅸc～Ⅹ層	1か所	頁岩の接合資料が出土。
		2　Ⅶ～Ⅸa層	2か所	接合資料多く、石材による器種の選別がおこなわれている。
		3　Ⅵ～Ⅸa層	2か所	点数少ないが、多様な器種が出土。
		4　Ⅴ～Ⅵ層	3か所	最大長約10cmの大型の安山岩製角錐状石器が出土。
	縄文時代	炉穴	16基	炉穴の分布は台地北側の縁辺部。然弟文、条痕文土器の包含層と同様。
		土坑	17基	縄文早期。
	弥生～古墳時代	竪穴住居跡	37軒	台地縁辺部から台地中央へ進出。その後松崎Ⅱ遺跡の台地へ。
		方墳	7基	方墳が構築される時期には生活の中心は松崎Ⅱに移動。
		土坑	1基	中期。
	奈良・平安時代	竪穴住居跡	1軒	8世紀後半。
	中・近世	掘立柱建物跡	2棟	
		土坑	7基	土坑内から人骨片出土。
		溝	2条	
松崎Ⅱ遺跡	旧石器時代	1　Ⅸ層	7か所	尖頭器類なく、局部磨製石斧とスクレイパー主体。
		2　Ⅷ層	1か所	
		3　Ⅵ～Ⅶ層	4か所	いずれも小規模なブロックを形成。
		4　Ⅲ～Ⅴ層	4か所	出土量の約半数は礫群。
	縄文時代	土坑	3基	
		陥穴	1基	
	古墳時代	竪穴住居跡	49軒	前期48軒、弥生末～古墳時代初頭の短期間に構築。後期1軒。
		竪穴状遺構	4基	前期4軒。
		円墳	1基	
		土坑墓	1基	古墳～平安時代。
		掘立柱建物跡	2棟	主軸が住居跡と同一方向。
		土坑	3基	前期2基、製鉄関連遺構。中期1基。
	奈良・平安時代	竪穴状遺構	1基	
		方形周溝	1基	終末期古墳。
		土坑	1基	袋状鉄斧、ウマ歯骨等出土。
		土坑墓	1基	古代～中世。
	中・近世	掘立柱建物跡	4棟	
		地下式坑	1基	
		溝	21条	
		野馬土手	1条	
松崎Ⅲ遺跡	旧石器時代	1　Ⅸa～Ⅹ層	1か所	折断調整と両極剥離を用いることを一つの特徴とする。
		2　Ⅸc層	1か所	縦型の台形様石器が出土。
		3　Ⅸa層	1か所	
		4　Ⅶ層	1か所	基部加工のナイフ形石器と接質頁岩を多用する。
		5　Ⅵ層	1か所	石材は全て黒曜石。
	縄文時代	竪穴住居跡	6軒	早期・条痕文期5軒。中期1軒。
		炉穴	56基	早期・条痕文期。
		陥穴	15基	
		土坑	156基	
	古墳時代	円墳	1基	周溝のみ検出。
	奈良・平安時代	竪穴住居跡	5軒	8～9世紀。
		土坑墓	1基	9世紀前葉、鐵骨器を埋納する。
	中・近世	居館跡	1か所	土塁・溝状遺構。
		掘立柱建物跡	5棟	居館内4棟、単独1棟。
		柵列	10基	居館内9基、単独1基。
		地下式坑	2基	
		火葬施設	2基	焼成部＋火床部1基、人骨あり1基。
		方形竪穴状遺構	18基	
		墓域	1か所	鐵骨器、骨粉等出土。
		台地整形区画	3か所	
		土塁	57基	台地整形区画内35基、台地整形区画外22基。
		野馬土手	1条	
		土塁	1条	
		溝	15条	
松崎Ⅳ遺跡	旧石器時代	1　Ⅸa～Ⅹb層	1か所	局部磨製石斧の再生剥離と分割が集中的におこなわれていることが特徴。
		2　Ⅶ～Ⅸc層	1か所	台形様石器の製合が高い。
		3　Ⅵ～Ⅶ層	6か所	ブロック外の単独出土3点あり。
		4　Ⅲ層	1か所	
	縄文時代	陥穴状遺構	5基	
		土坑	36基	
		ピット	10基	
	弥生時代	竪穴住居跡	6軒	後期。比較的短期的な集落。遺構間接合関係あり。
		竪穴状遺構	1基	剥片を多量出土。
	弥生時代以降	土坑	32基	
	中・近世	溝状遺構	11条	1条は野馬堀か。
松崎Ⅴ遺跡	旧石器時代	1　Ⅸ～Ⅹ層上部	1か所	石材はチャートが大半で、細粒頁岩を少量含む。
	縄文時代	炉穴	12基	
		陥穴状遺構	1基	
	古墳時代	竪穴住居跡	1軒	前期。
	奈良・平安時代	竪穴住居跡	2軒	1軒は9世紀後半以降。
	古墳時代以降	土坑	2基	
	中・近世	溝状遺構	1条	
松崎Ⅵ遺跡	旧石器時代	1　Ⅳ～Ⅴ層	5か所	黒色緻密質安山岩が80%を占め、この石材の集中的消費が特徴。
		2　Ⅲc～Ⅲ層	1か所	接質頁岩を主要石材とした荒屋型彫器・細石刃石核を検出。
	縄文時代	竪穴住居跡	1軒	中期。
		陥穴状遺構	2基	
	奈良・平安時代	竪穴住居跡	11軒	
	中・近世	土坑	5基	
		井戸	1基	中世以降。
		地下式坑	2基	1基は井戸を転用したもの。
松崎Ⅶ遺跡	縄文時代	土坑	5基	遺物の主体は縄文時代のもので、他の時期の遺物は少ない。

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真（S=約1/10,000）

図版 2

遺跡遠景

松崎Ⅳ遺跡遠景（北から）

松崎Ⅳ・Ⅴ遺跡遠景（東から）

松崎Ⅴ遺跡遠景（北東から）

調査前状況（平成９年度）

上層確認状況（平成11年度）

調査状況（平成16年度）

図版4　松崎IV遺跡

旧石器時代
遺物出土状況（1）

第Ⅰ文化層
第1・3ブロック
遺物出土状況（北から）

第Ⅱ文化層
第2ブロック
遺物出土状況（西から）

第Ⅲ文化層
第4ブロック
遺物出土状況（南から）

旧石器時代
遺物出土状況（2）

第Ⅲ文化層
第5ブロック
遺物出土状況（西から）

第Ⅲ文化層
単独出土3
遺物出土状況（東から）

第Ⅲ文化層
第6ブロック
遺物出土状況（南から）

旧石器時代
遺物出土状況（3）

第Ⅲ文化層
第7ブロック
遺物出土状況（南から）

第Ⅲ文化層
第7ブロック
遺物出土状況
（南東から）

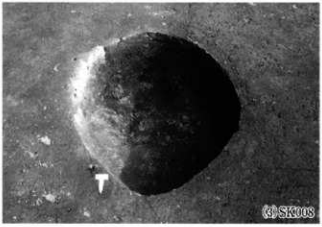
単独出土1
22×11グリッド
遺物出土状況（南から）

陥穴状土坑

(2) SK025

(3) SK006

24W57付近


(3) SK008

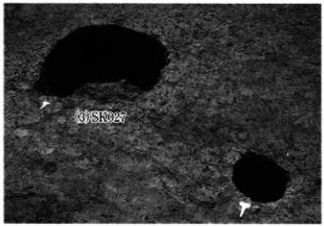
(3) SK012

(3) SK046
(3) SK015

(3) SK019

(4) SK021

縄文時代土坑（1）



縄文時代土坑（2）

図版10　松菊IV遺跡

弥生時代竪穴住居跡（1）

第1号住居跡

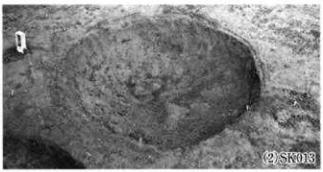
第2号住居跡

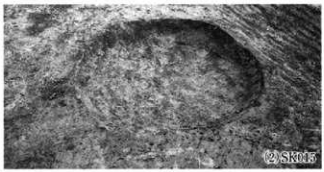
第3号住居跡

第4号住居跡

第5号住居跡

第6号住居跡





竪穴状遺構・弥生時代以降の土坑

溝1（G1S0003）

溝1（G3S0002）

溝1（G1S0001）

溝2
溝4
溝3

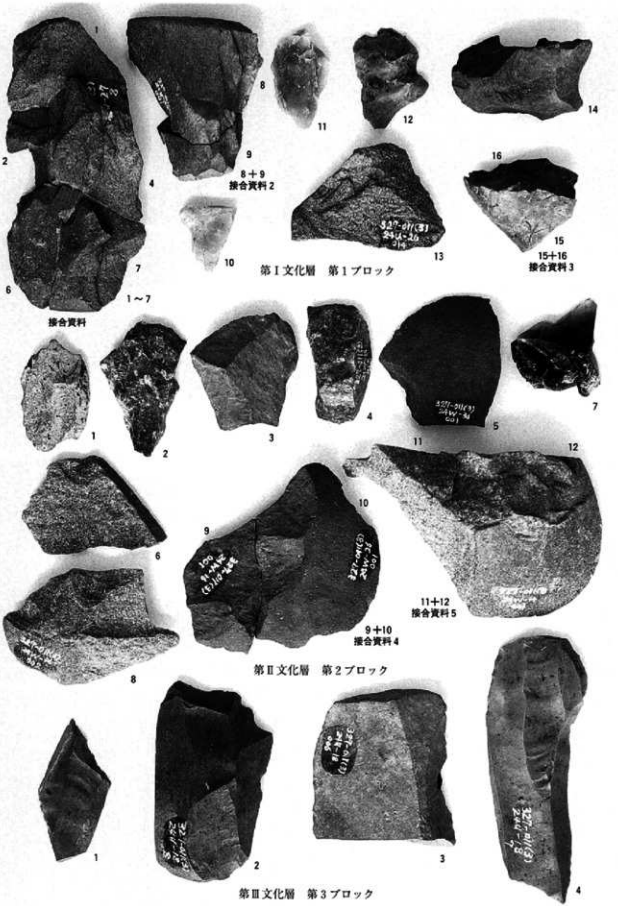
溝5

溝6

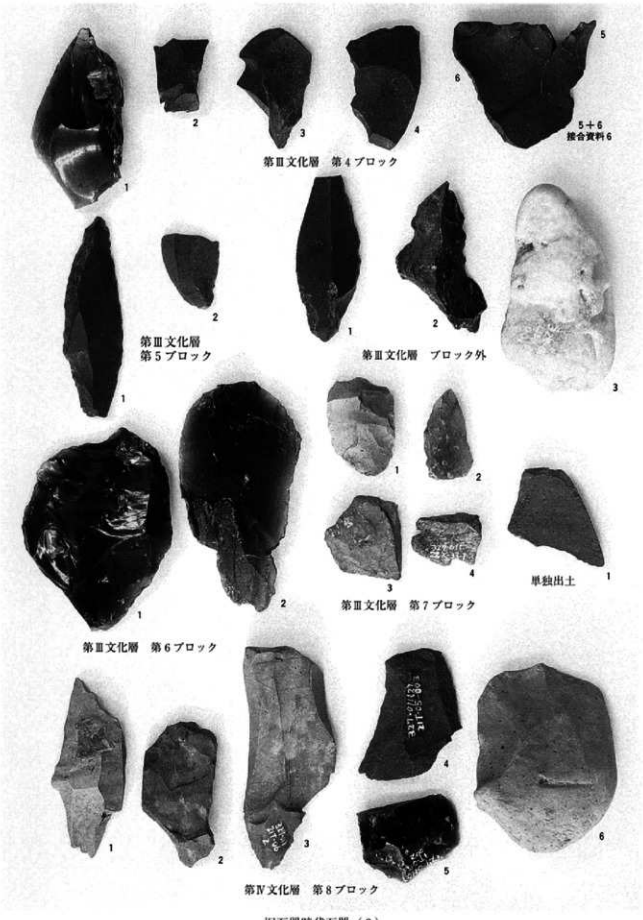
溝6

溝10

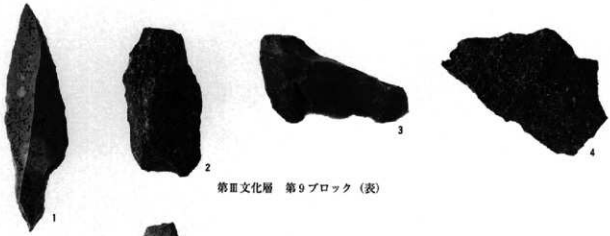
溝状遺構


1
2
4
6
7
1～7
接合資料
8
9
8＋9
接合資料2
10
11
12
13
14
15
16
15+16
接合資料3
第Ⅰ文化層　第1ブロック
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
11+12
接合資料5
9＋10
接合資料4
第Ⅱ文化層　第2ブロック
1
2
3
4
第Ⅲ文化層　第3ブロック

旧石器時代石器（1）


1
2
3
4
5
6
5＋6
接合資料6
第Ⅲ文化層　第4ブロック
第Ⅲ文化層
第5ブロック
第Ⅲ文化層　ブロック外
第Ⅲ文化層　第6ブロック
第Ⅲ文化層　第7ブロック
単独出土
第Ⅳ文化層　第8ブロック

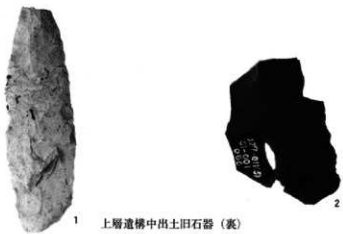
旧石器時代石器（2）



第Ⅲ文化層　第9ブロック（表）

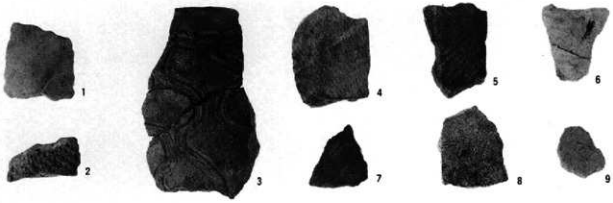
上層遺構中出土旧石器（表）

第Ⅲ文化層　第9ブロック（裏）



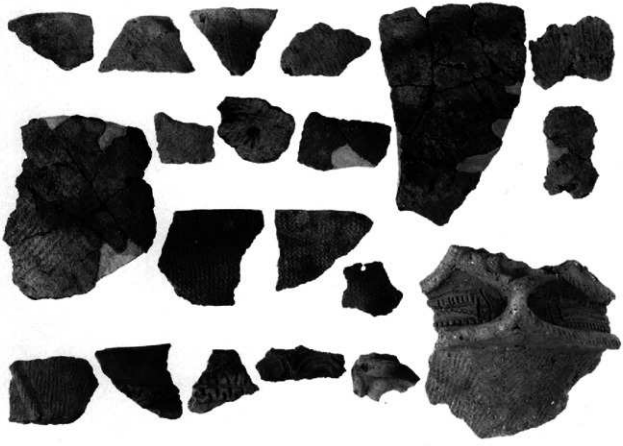
上層遺構中出土旧石器（裏）

旧石器時代石器（3）

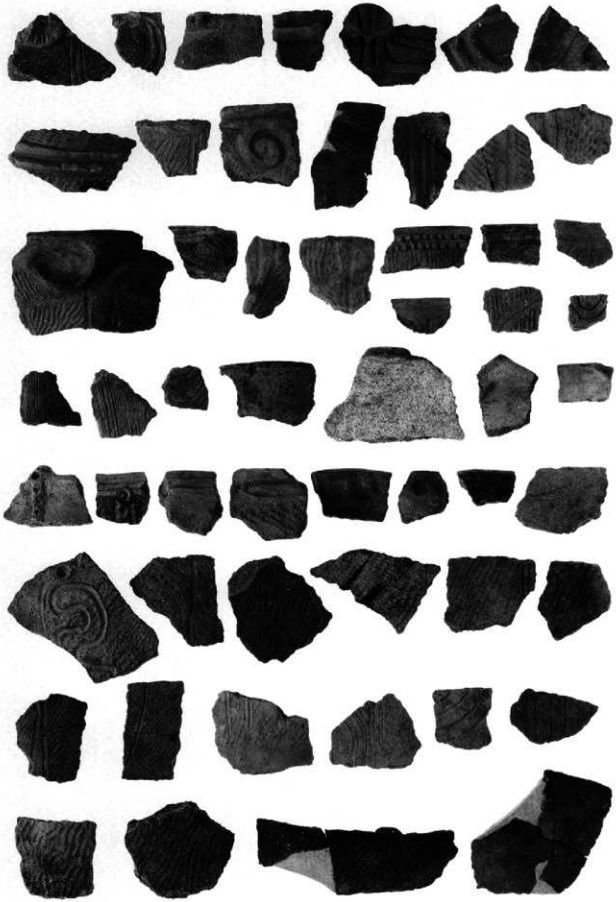


縄文時代土坑出土土器

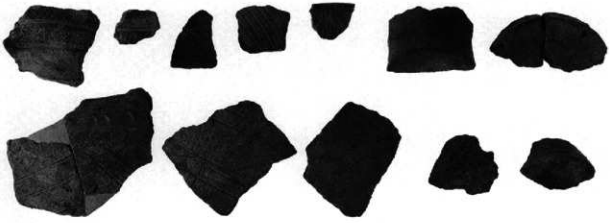
縄文時代土製品



グリッド出土縄文土器（1）



グリッド出土縄文土器（2）



グリッド出土縄文土器（3）

79

81

グリッド1

グリッド2

3住2

6住9

1住1

4住2

5住11

6住10

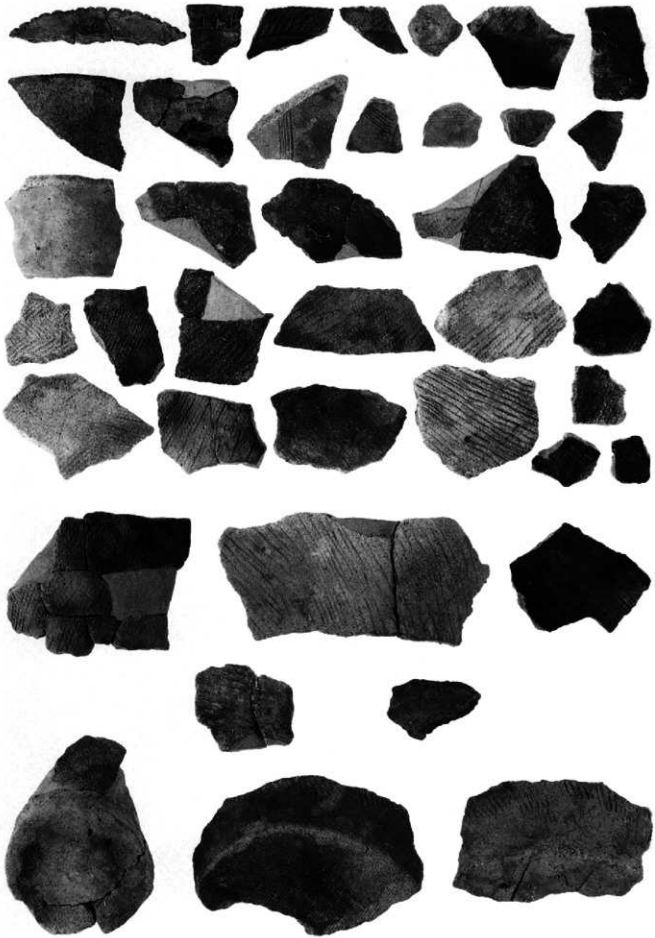
6住11

(2)SK010－1

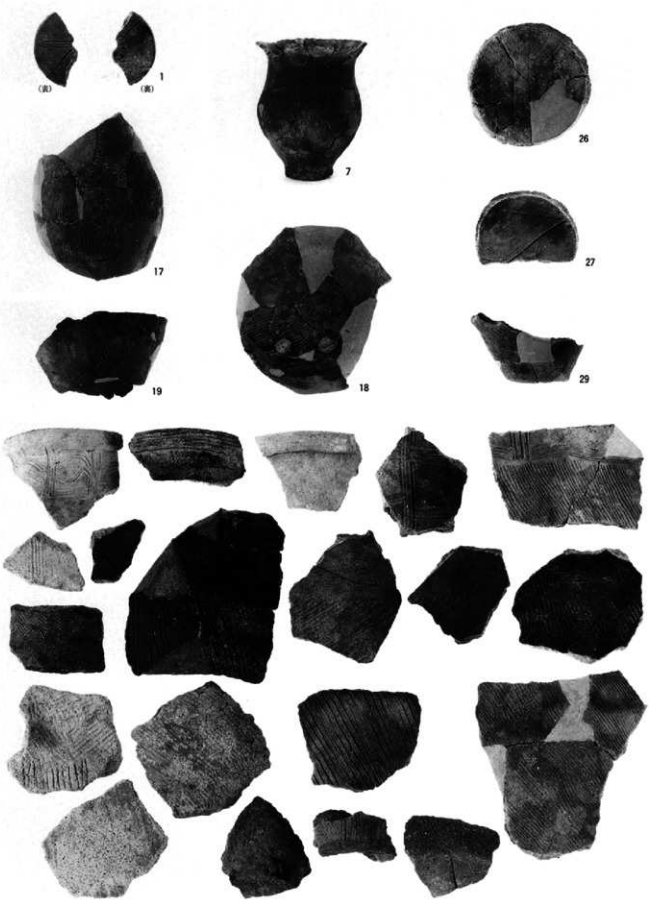
縄文時代以降の石器

第１号・第２号住居跡出土土器

第３号住居跡出土土製品・土器（１）



第３号住居跡出土土器（２）



第４号住居跡出土土製品・土器

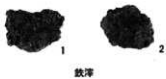
第5号住居跡出土土器

第6号住居跡出土土器

グリッド1

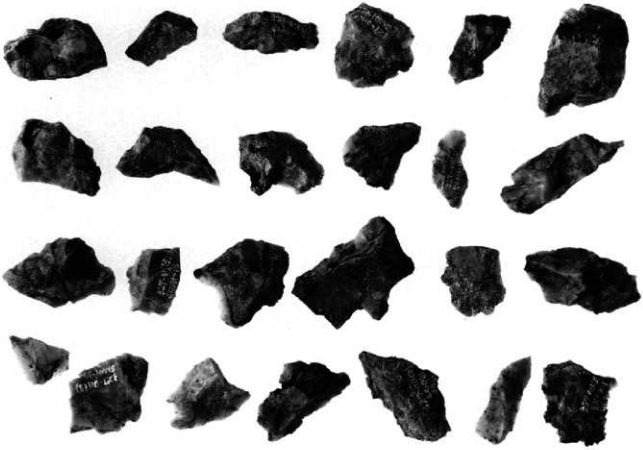
第6号住居跡出土土器

グリッド2

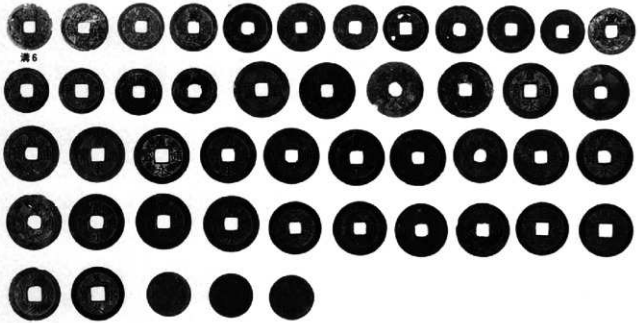


鉄滓

グリッド出土遺物



(3)SX001出土剥片



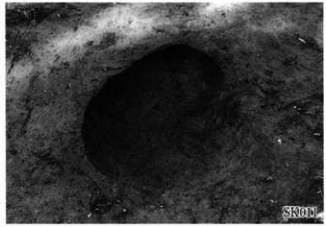
銭貨

調査状況

調査前状況（西から）

旧石器時代
石器集中地点調査状況

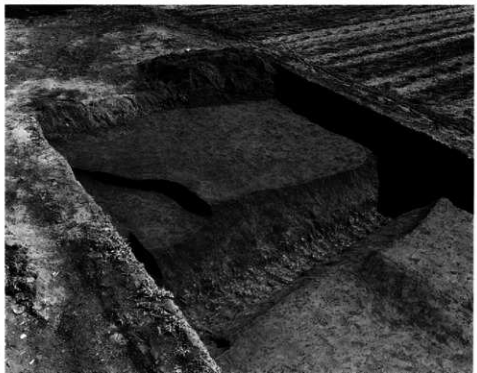
調査区西部
縄文時代遺物出土状況



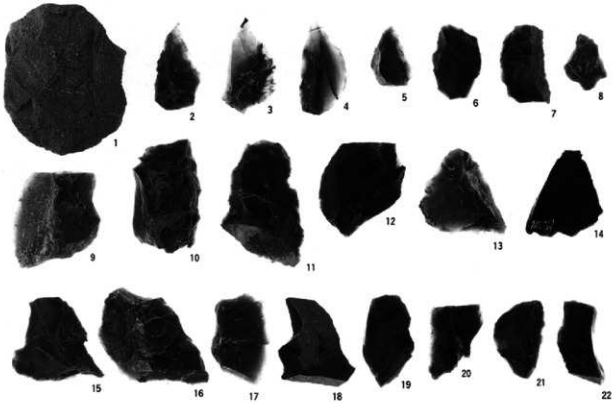
炉穴・陥穴状遺構・土坑

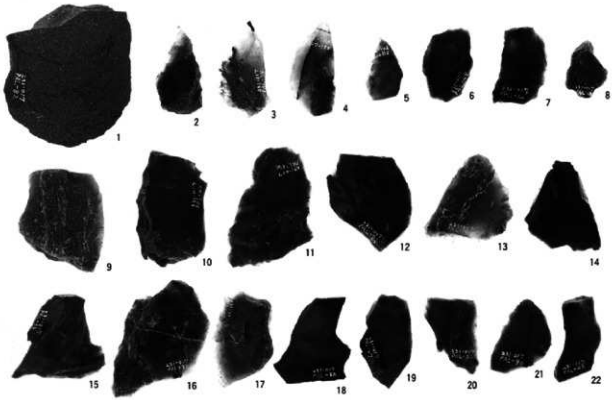
SI003

SI001



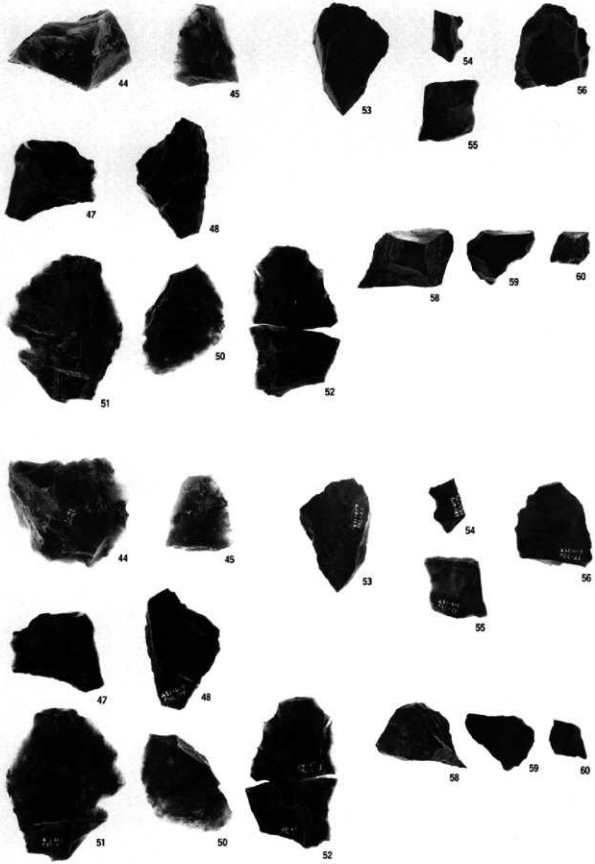
SI002
SD001



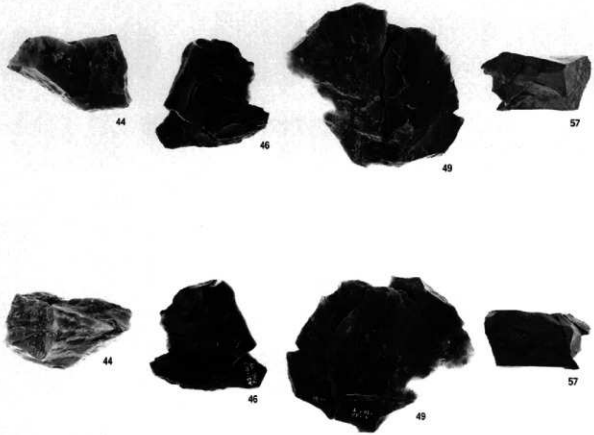


旧石器時代石器（1）（上段表，下段裏）

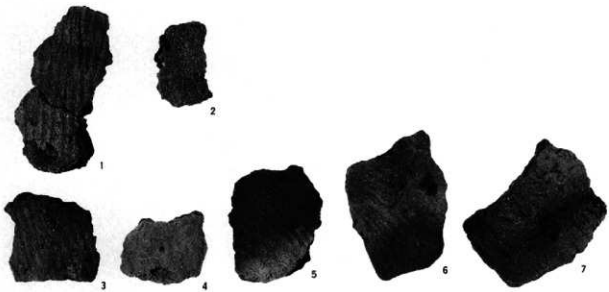
旧石器時代石器（2）（上段表，下段裏）



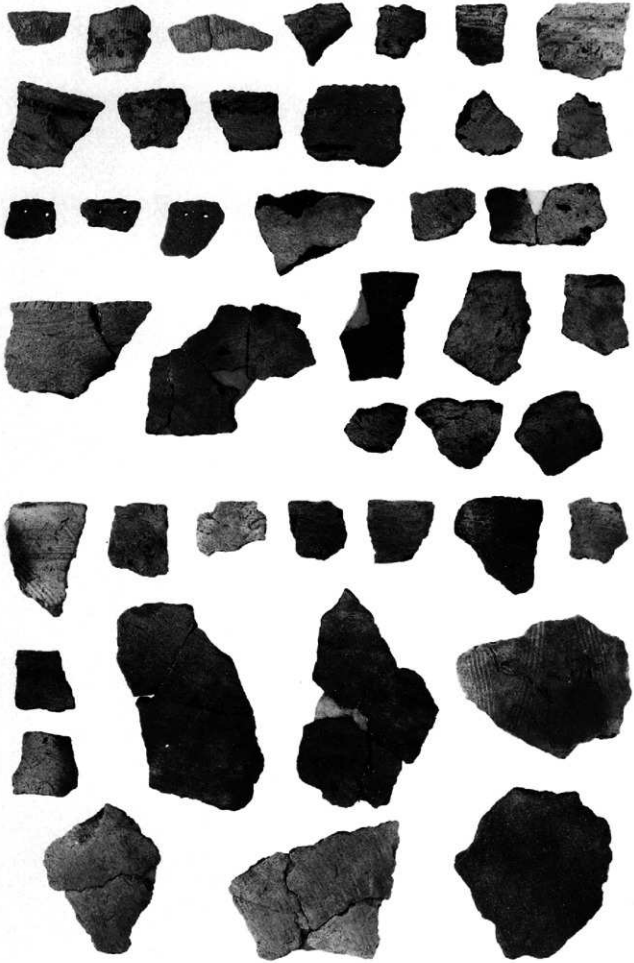
旧石器時代石器（3）（上段表，下段裏）



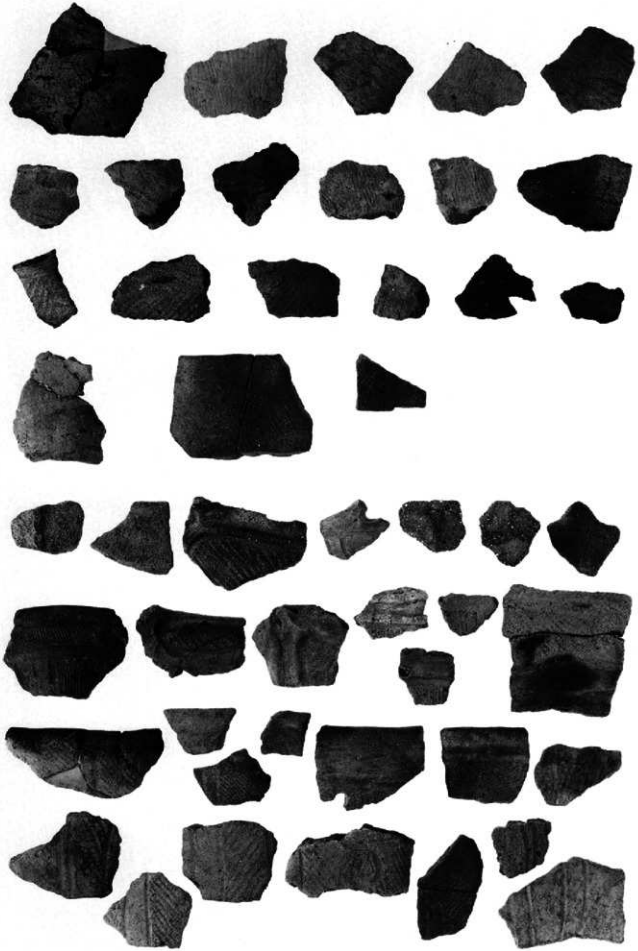
旧石器時代石器（4）接合資料（上段表，下段裏）



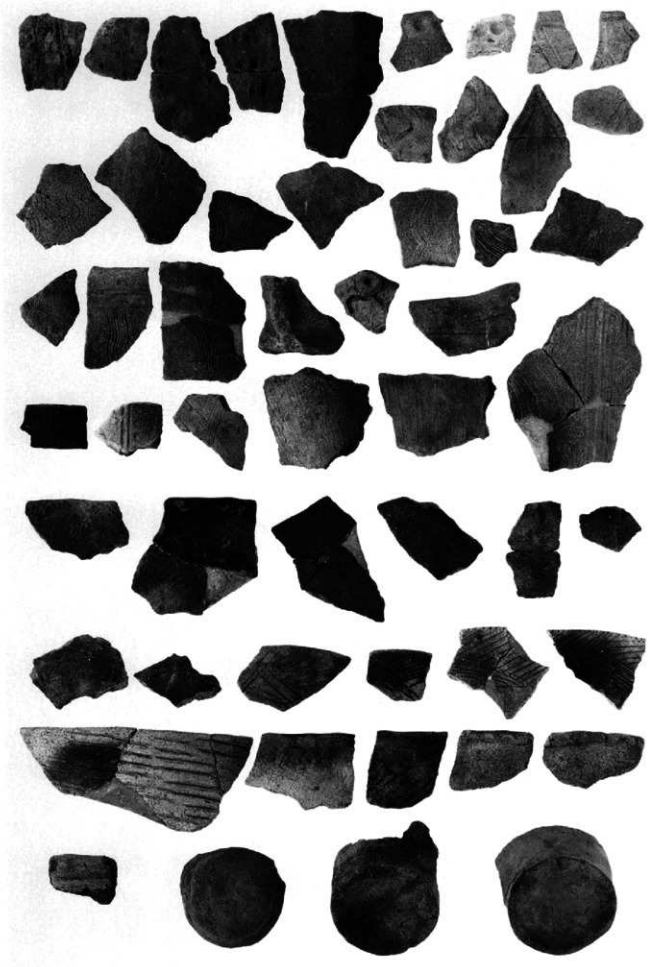
炉穴・陥穴状遺構出土土器



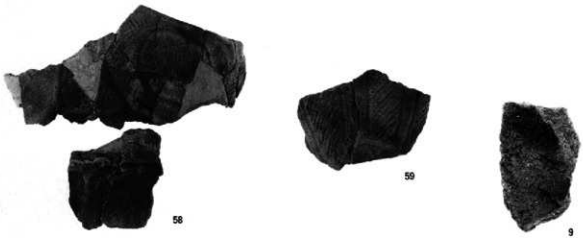
グリッド出土縄文土器（1）



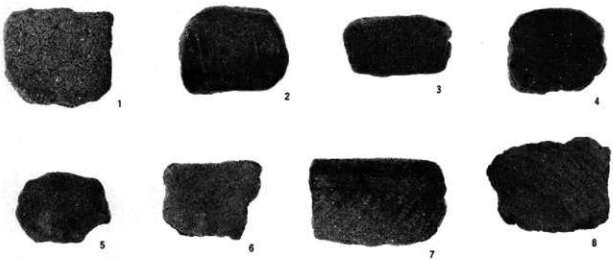
グリッド出土縄文土器（2）



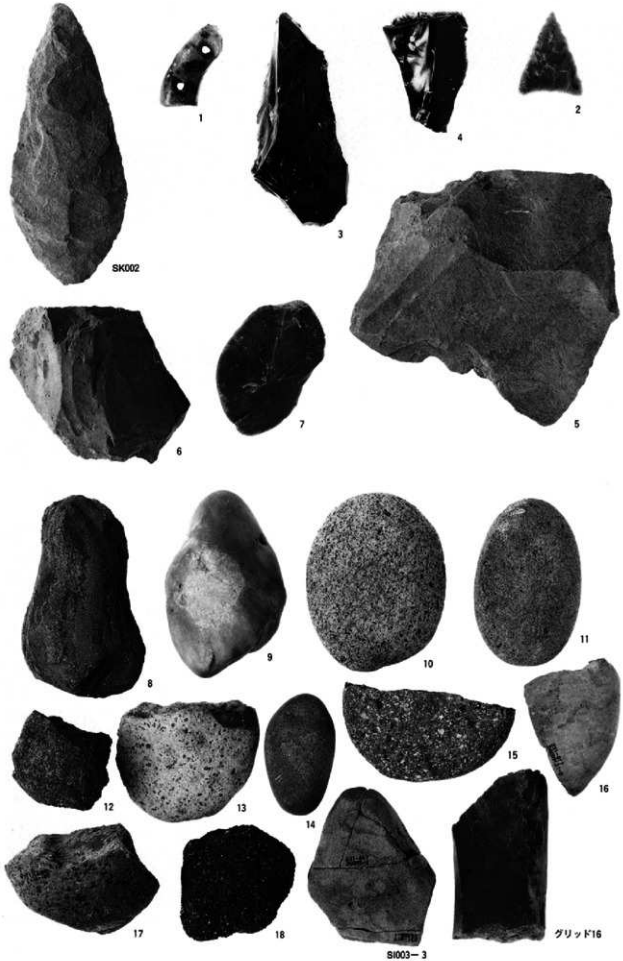
グリッド出土縄文土器（3）



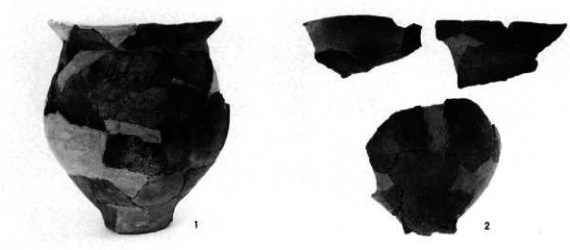
グリッド出土縄文土器（4）



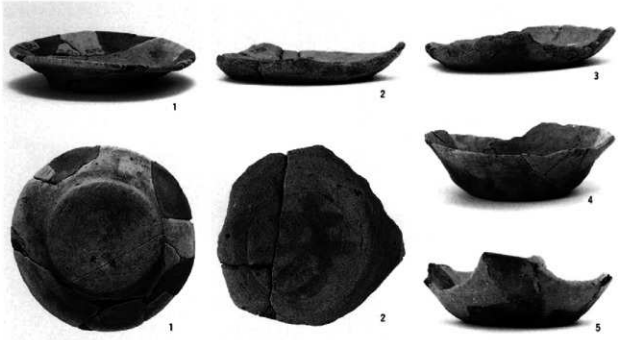
縄文時代土製品



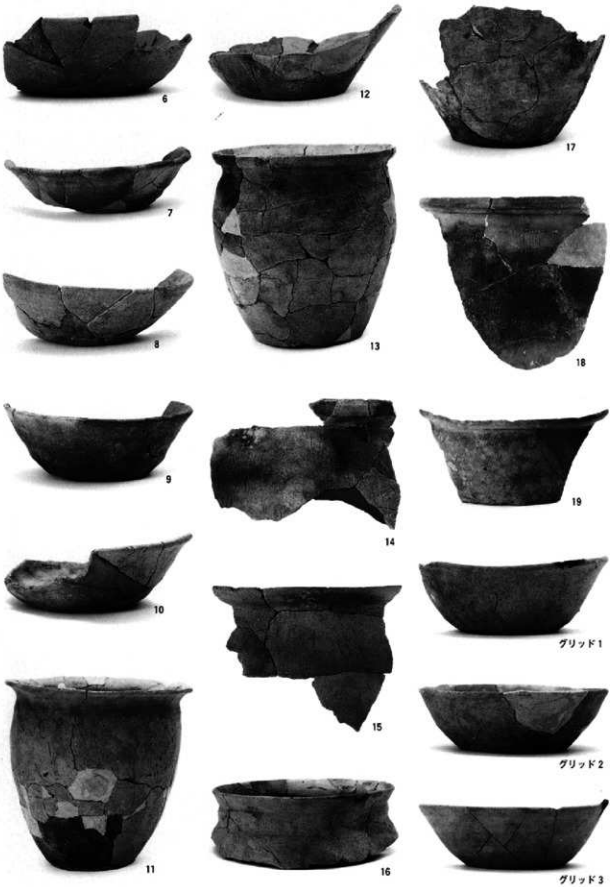
縄文時代以降の石器



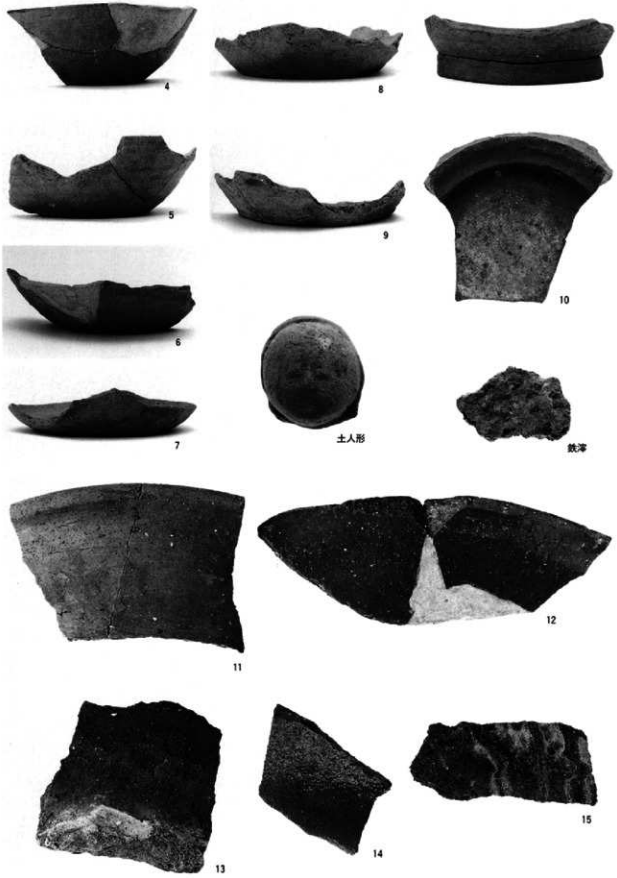
SI003出土土器



SI001出土土器（1）



SI001出土土器（2）・グリッド出土遺物（1）



グリッド出土遺物（2）

報告書抄録

ふ り が な	まつざきちくないりくこうぎょうようちぞうせいせいびじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書５
副 書 名	－印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡－
巻　　次	５
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第548集
編 著 者 名	大内千年・岡田誠造・新田浩三・古内　茂・森本和男
編 集 機 関	財団法人　千葉県教育振興財団
所　在　地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809番地２
発行年月日	2006年３月24日

所収遺跡名（よりがな）	所在地（よりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
松崎Ⅳ（まつざき）	印西市松崎字高野（いんざいし まつざきあざこうや）1189－３ほか	12327	011	35度46分34秒（日本測地系による）	140度9分3秒	19980212～19980327, 19981001～19990326, 19990601～19990630, 19991101～20000329, 20000701～20000823, 20020501～20020630, 20030905～20030930, 20040701～20040827, 20050925～20050927	43,563	松崎地区整備事業に伴う埋蔵文化財調査
松崎Ⅴ（まつざき）	印西市松崎字高野台（いんざいし まつざきあざこうやだい）1259－１ほか	12231	017	35度46分33秒（日本測地系による）	140度8分52秒	20030107～20030326	3,290	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松崎Ⅳ	包蔵地・集落跡	旧石器時代	石器集中地点９か所	局部磨製石斧・ナイフ形石器・台形様石器・彫器等	旧石器時代は４つの文化層で、Ⅶ層～Ⅵ層の文化層が充実。弥生時代後期は比較的短期的な集落。遺構間で接合した大型砥石状製品が出土。弥生時代の石器製作跡が存在。
		縄文時代	陥穴状遺構５基・土坑36基・ピット10基	縄文土器（早・前・中・後期）・石鏃	
		弥生時代以降	竪穴住居跡６軒・竪穴状遺構１軒（弥生後期）・土坑32基・溝状遺構11条	弥生土器（後期）・土製紡錘車・砥石・古瀬戸花瓶・銭貨	
松崎Ⅴ	包蔵地・集落跡	旧石器時代	石器集中地点１か所	打製石斧・ナイフ形石器・台形石器・削器・彫器等	旧石器時代は，石器群の様相からⅩ層上部～Ⅸ層下部と推測される集中地点である。石材はチャートが主体で，嶺岡産珪質頁岩を含む。印旛沼北岸では希少な資料である。
		縄文時代	炉穴12基・陥穴状遺構１基	縄文土器（早・前・中・後期）・土器片錘・石器	
		古墳時代以降	竪穴住居跡３軒（古墳時代前期１・奈良平安時代２）・土坑２基・溝状遺構１条	土師器・須恵器・常滑産陶器・砥石	

千葉県教育振興財団調査報告第548集

松崎地区内陸工業用地造成整備事業
埋蔵文化財調査報告書5

―印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡―

平成18年3月24日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団

発　行　千葉県企業庁
千葉市美浜区中瀬1丁目3番地

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2

印　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町1-10-6